

史跡

大御堂廃寺跡発掘調査報告書



0050294586

平成12年度

倉吉市教育委員会



僧房 S B01・02 (東から)



炉跡 4 (東から)



炉跡 5 (東から)



東溝 S D01出土
銅製匙



西面回廊 S C01出土
銅製獸頭



溜柵 S E01
木柵 S X01
(西から)



序

この報告書は、平成8年度から12年度にかけて、工場跡地再開発計画に伴う試掘・確認調査として、倉吉市駄経寺町2丁目において実施した埋蔵文化財の調査の記録であります。

調査中の数々の発見から全体の伽藍配置が推定され、山陰を代表する初期の本格的寺院であったことが明らかとなり、平成13年1月29日官報告示をもって史跡に指定されました。出土した遺物には、鬼瓦・銅製匙・銅製歎頭など、仏教関係の優れたものがあります。

鳥取県の中央部に位置する倉吉市は、豊かな自然と風土の中で育まれた数多くの優れた文化財を今日に伝えています。史跡伯耆国府跡・伯耆国分寺跡と共に、奈良～平安時代の政治・経済・文化的中心的役割を担っていた地域として、この貴重なる遺跡を大切に保存し整備・活用していきたいと考えております。

本書が、文化財愛護の理解・普及に、あるいは教育・研究の一資料としてお役に立てば幸いに存じます。

最後に、調査にご指導いただきました文化庁文化財部記念物課・鳥取県教育委員会文化課の皆様をはじめ、倉吉市土地開発公社ならびに関係各位に対し、深く感謝の意を表するものであります。

平成13年3月

倉吉市教育委員会
教育長 足羽一昭



例　　言

1 本報告書は、平成8～12年度に倉吉市教育委員会が、大御堂宝寺跡第1～5次試掘・確認調査として実施した発掘調査の記録である。報告をまとめるにあたり、過去の周辺の調査である昭和48・49年度松ヶ坪遺跡、平成6・7年度倉吉市内遺跡(住吉町・駄経寺町地区)等の調査結果を再検討し、本書に収録した。

2 第1～5次調査の発掘調査班は次のような組織・編成である。

団　　長 足羽一昭(倉吉市教育委員会教育長)

調査委員 名越 勉(倉吉市文化財保護審議会会長) 手嶋義之(倉吉市文化財保護審議会委員 9年度まで)

調査員 根鈴輝雄(倉吉博物館主任学芸員) 鳥田慶廣(文化課課長) 泰下哲哉(文化財係主任)

根鈴智津子(文化財係主任) 加藤誠司(文化財係主事) 間本智則(文化財係主事)

岡平拓也(文化財係主事)

調査補助員 山根雅美・松田恵子

事務局 故石田佑喜子(教育次長 9年9月まで) 新田征男(教育次長 9年10月から10年6月まで)

波田野頼二郎(教育次長 10年7月から12年9月まで) 景山 敏(教育次長 12年10月から)

生田淳美(文化課課長兼教育次長 9年度まで)

山脇将郎(文化課課長兼教育次長 10年度から11年度まで)

中井寿一(文化課課長補佐 12年度4月から12月まで) 渡辺峰寿(文化課課長補佐 13年1月から)

藤井 晃(文化課文化財係長・課長補佐 11年度から) 藤井敬子(文化財係主任 10年7月から)

山崎昌子(文化財係主事) 山崎慎之介(文化財係主事 8年度から10年6月まで)

山下博子(臨時職員 8年度) 金田朋子(臨時職員 9年度から)

内務整理員 青戸千秋(8年度)・泉 美智子・妻藤君江(11年度まで)・竹嶺純子・松嶋あつ子・山崎有香子(9年度)

山本 錦(10年度から)・世浪由美子・米原 澄(12年度)

3 現場での調査は、第1次森下・根鈴智・岡平、第2・3次根鈴智・岡平、第4次根鈴智・加藤、第5次根鈴智が担当し、第1～5次山根が補佐した。

4 遺構の図面整理・遺物の実測は、調査員と調査補助員・内務整理員が行い、写真撮影は調査員が行った。図版0-1瀬川S E01全景・近景、11-Na1・6、12-Na17、20-Na53・54、32-Na10は奈良国立文化財研究所 牛嶋 茂、図版29-Na64・66～68、31-Na98は杉本和樹により撮影された写真を掲載している。墨書きは、泉・山本・世浪が行った。

5 本報告の執筆は各調査の担当者が分担し、文責については文末に記した。編集は松田・世浪・山本が担当した。

6 遺構測量のための基準杭設置を鷹技術コンサルタント株式会社に委託した。

7 第5章は鑑定の分析結果についてご寄稿いただいたものである。

・銅製鏡・獸頭の科学的調査は、東京国立文化財研究所・保存科学部 平尾良光氏に依頼した。

・木製品の年輪年代測定は、奈良国立文化財研究所 光谷拓実氏に依頼した。

・瓦類胎土分析および須恵器付着白色物質分析は、岡山理科大学 自然科学研究所蔵山分室 白石純氏に依頼した。

・木簡・木札の墨書きの解説は、奈良国立文化財研究所 鶴野和巳氏にお願いした。

・遺構土被及び自然遺物の科学分析は、パリノ・サーヴィス株式会社に委託した。

・動物骨判定は、岡山理科大学 富岡直人氏に依頼した。

・ガラス小玉の分析はライフパーク倉敷市民学習センター 織野早苗氏・奈良国立文化財研究所 肥塚隆保氏にお世話になった。

8 第3回地形図は、国土地理院発行の1：50,000の地形図「倉吉」の一部を複製・加筆したものである。

9 採図中の方位は、国土座標第VII座標系の北を指す。遺跡付近の真北は、国土座標の北から約0.3° 東偏する。

10 遺物に付した記号・番号は本文・採図・図版で統一している。

11 調査によって得られた資料は、倉吉市教育委員会が保管する。

12 発掘調査と本書の作成にあたり、上記の方々以外に次の諸氏および機関からご教示、ご協力を得た。記して感謝の意を表したい。

　　大西貴夫・大島 謙・亀田修一・糸川真一・佐藤興治・植山林蔵・鈴木靖民・高野 学・津川ひとみ

　　坪井清足・仲野 浩・林 健亮・藤澤典彦・水野正好・牧光森正士・森 郁夫・山田真宏 (五十音順、敬称略)

　　文化庁 岡村道夫・坂井秀彦・小池信彦・岸本直文

　　奈良国立文化財研究所 田辺征夫・松村惠司・花谷 浩

　　鳥取県教育委員会文化課 田中弘道・久保原二朗・中原 齊・高田健一・山川茂樹

　　鳥取県文化財保護審議会委員 稲田孝司・鈴織 勤・和田晴香

　　鳥取県埋蔵文化財センター 松田 謙・原田雅弘・山川雅美

本文目次

第1章 調査に至る経緯と概要	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の経緯	1
第2章 研究史	4
第3章 位置と歴史的環境	6
第1節 位置と周辺の遺跡	6
第2節 遺跡周辺の地名	8
第4章 調査の概要	8
第1節 調査区の設定と調査方法	8
第2節 基本層序と遺構の位置関係	9
第3節 遺構	10
1 寺城区画施設	10
2 中心伽藍	12
3 寺域外施設	21
第4節 遺物	28
1 瓦類	28
2 土器	51
3 金属製品	63
4 木製品	66
5 塼仏・石仏・塑像	76
6 その他	78
第5章 化学的調査	85
第1節 銅製匙・銅製獸頭の自然科学的研究	85
第2節 漆枡および木製品の年輪年代	86
第3節 瓦・須恵器の科学的調査	87
第4節 自然遺物の科学分析	91
第5節 ガラス小玉の分析	101
第6章 まとめ	101
報告書抄録	

挿図目次

第1図 大御堂庵寺跡調査位置図	3
第2図 谷田龜毒実測図	5
第3図 倉吉市周辺の地形と遺跡分布図	7
第4図 山陰古代寺院分布図	7
第5図 大御堂庵寺跡周辺字図	9
第6図 大御堂庵寺跡遺構全体図	10
第7図 西築地壘 S A01遺構図	11
第8図 東築地壘 S A02遺構図	12
第9図 北段 S D02遺構図	13
第10図 中心伽藍遺構全体図	14
第11図 僧房 S B01・S B02遺構図	15

第12図 金堂S B03遺構図	16
第13図 塔S B04遺構図	17
第14図 西面回廊S C01遺構図	18
第15図 讲堂S B05遺構図	19
第16図 炉跡4遺構図	20
第17図 炉跡5遺構図	20
第18図 東溝S D01遺構図	22
第19図 木棟S X01遺構図、木棟・溜枡摸式図	23
第20図 溜枡S E01遺構図	26
第21図 溜枡番付・墨付図	27
第22図 軒丸瓦1	30
第23図 軒丸瓦2	31
第24図 軒平瓦	33
第25図 鶴尾	34
第26図 鬼瓦	35
第27図 道具瓦1	36
第28図 道具瓦2	37
第29図 刻印瓦	38
第30図 ヘラ書文字瓦	39
第31図 丸瓦1	40
第32図 丸瓦2	41
第33図 平瓦1	42
第34図 平瓦2	43
第35図 平瓦3	44
第36図 平瓦4	45
第37図 平瓦5	46
第38図 平瓦6	47
第39図 平瓦7	48
第40図 平瓦8	49
第41図 寺城区画施設・中心伽藍出土土器	53
第42図 S E01内出土須恵器	54
第43図 S E01内出土土師器	55
第44図 S E01掘方出土須恵器	57
第45図 S E01掘方出土須恵器・土師器	58
第46図 S E01周辺出土須恵器・土師器	59
第47図 S D01出土須恵器	61
第48図 S D01出土土師器1	63
第49図 S D01出土土師器2	65
第50図 銅製品1	67
第51図 銅製品2・鉛製品	68
第52図 鉄製品	69
第53図 金属関連遺物	71
第54図 S E01出土木製品(農具・工具・その他)	73
第55図 S E01出土木製品(容器)	74
第56図 S E01出土木製品(容器・食事具・その他)	75

第57図	S E01出土木製品(祭祀具)	76
第58図	S E01出土木製品(文房具・遊戯具・装身具・その他)	77
第59図	S A01周辺・S D02・遺構外出土木製品	78
第60図	S D02出土木製品	79
第61図	埠仏・石仏	80
第62図	ガラス小玉・土製品・石製品	83
第63図	銅製品の鉛同位体比	86
第64図	木材の年輪年代測定結果	87
第65図	瓦型式別散布図	89
第66図	須恵器の比較	90
第67図	須恵器横瓶内付着白色物質のX線回折図	91
第68図	主要珪藻化石群集	94
第69図	花粉化石群集	94
第70図	大御堂廃寺跡推定地割	102

図 版 目 次

巻頭図版1 遺構 僧房S B01・02 炉跡4 炉跡5

巻頭図版2 遺構・遺物 東溝S D01出土銅製匙 西面回廊S C01出土銅製獸頭

溜枡S E01、木樋S X01

図版1 遺構 全景空中写真(第1次補足調査) 全景空中写真(第2次調査)

図版2 遺構 西築地塀S A01(第1次調査) 東築地塀S A02(第4次調査)

東築地塀S A02断削断面南壁・下層掘立柱脚S A03(第4次調査)

東築地塀S A02、東雨落溝 東築地塀S A02、西雨落溝

図版3 遺構 北段S D02(第5次調査) 北段瓦溜(第5次調査) 北段S D02(平成6年度調査)

僧房S B01(第1次調査)

図版4 遺構 僧房S B01(第1次調査) 僧房S B01(第2次調査) 僧房S B02(第2次調査)

図版5 遺構 金堂S B03(第1次調査) 金堂S B03乱石積基壇

金堂S B03・塔S B04(第2次調査) 塔S B04(第2次調査)

S B04下層掘立柱建物S B05(第3次調査)

図版6 遺構 讲堂S B05・西面回廊S C01調査区全景(第3次調査) S B05南瓦溜(第3次調査)

S B05根石断削(第3次調査)

図版7 遺構 西面回廊S C01(第3次調査) S C01東雨落溝(第3次調査)

S C01銅製獸頭・金銅製帶先金具出土状況(第3次調査) S C01(第3次調査)

図版8 遺構 東溝S D01敷瓦(第1次調査) 銅製匙出土状況(第1次調査)

矢板出土状況(第2次調査) レンチ3 西壁(灰原)(第2次調査)

図版9 遺構 木樋S X01全景 近景 取水口蓋取り上げ状況 取水口塞瓦状況

木樋取り上げ状況 石組状況

図版10 遺構 溜枡S E01全景(第4次調査) S E01近景 S E01第3層遺物出土状況

S E01木製祭祀具出土状況 S E01底面状況 S E01敷石状況

図版11 遺物 軒丸瓦

図版12 遺物 軒丸瓦

図版13 遺物 軒丸瓦

- 図版14 遺物 軒平瓦・鬼瓦
- 図版15 遺物 文字瓦・鷲尾
- 図版16 遺物 中心伽藍、溜枡S E01内・周辺出土須恵器・土師器
- 図版17 遺物 溜枡S E01掘方・周辺出土須恵器・土師器
- 図版18 遺物 東溝S D01出土須恵器・土師器・墨書き土器
- 図版19 遺物 墨書き土器
- 図版20 遺物 金属製品・鋳型
- 図版21 遺物 岗塙・驪の羽口
- 図版22 遺物 ガラス小玉・不明土製品・椎衡・碁石様石
- 図版23 遺物 土鍤
- 図版24 遺物 溜枡S E01部材(東・西横板、調柱)
- 図版25 遺物 溜枡S E01部材(北・南横板)
- 図版26 遺物 溜枡S E01部材(土居枠)・番付・墨付
- 図版27 遺物 溜枡S E01出土木製品(農具・工具・容器・食事具・装身具・その他)
- 図版28 遺物 溜枡S E01出土木製品(祭祀具)
- 図版29 遺物 溜枡S E01出土木製品(文房具)
- 図版30 遺物 溜枡S E01出土木製品(容器・文房具・遊戯具・桧皮・その他)
- 図版31 遺物 西築地壍S A01周辺出土木製品(轉読札・タモ様・容器・有孔棒)
北段S D02出土木製品(へら・皿・杓・斎串)・遺構外(包丁形)
- 図版32 遺物 塼仏・石仏
- 図版33 遺物 塑像
- 図版34 遺物 銅製匙・銅製獸頭の分析資料測定箇所
- 図版35 遺物 瓦の砂粒分類別による実体顕微鏡写真
- 図版36 遺物 硅藻化石の顕微鏡写真
- 図版37 遺物 花粉化石の顕微鏡写真
- 図版38 遺物 最終形成年輪の状況の顕微鏡写真
- 図版39 遺物 大型植物遺体の顕微鏡写真1
- 図版40 遺物 大型植物遺体の顕微鏡写真2

第1章 調査に至る経緯と概要

第1節 調査に至る経緯

大御堂廃寺跡は、寛保2年(1742)の『伯耆民談記』に「大御堂」の項があり、所在については古くから知られていたようである。明治時代の公園には、水田中に東西2カ所の土盛り(隈)が残り、小字の震盪はそれを指している。

遺跡の周辺は、正方位の条里地割をとどめる農業地域であったが、昭和27年に約14haの水田が埋め立てられて工場敷地となった。その造成時に、東側の土盛りの下で塔心礎が発見され、心礎と四天柱礎1個が近くの上灘小学校へ移動された。2カ所の土盛りが水田化されないまま残された金堂と塔の基壇であったことが分かるのは、平成9年度第2次調査である。

昭和44年工場内を工事中、木樋が取り上げられたが、工場内の発掘調査は工場閉鎖まで行うことはできなかつた。工場の周り一帯は、昭和47~58年に上灘土地地区画整理事業にかかり、その後は市街地域へと急激に変化していった。工場に南接する字五反田・字松ヶ坪の調査は、事業途中の昭和48・49年度に実施している。寺院の遺構を確認するには至らなかつたが多量の瓦が出土し、山陰を代表する最古級の寺院であることが明らかとなつた。

昭和61年工場は閉鎖となり、平成2年県外大手企業の進出計画があがる中で、市民から、市による商業活性化のための施設を考えほしいとの要望があり、平成5年倉吉市土地開発公社が跡地を取得した。平成6・7年度工場跡地の利用計画策定にあたって、大御堂廃寺跡とその関連遺跡の存在が問題となり、遺跡保存と開発との調整を図るために範囲確認の調査を実施した。

その結果、寺域西限を画す築地塀が確認され、それより西側はく倉吉パークスクエアの建設地となり、21世紀の文化交流ゾーンとして平成10年3月に着工した。寺域推定区域内については、遺跡公園整備を目的に平成8年から平成12年まで5次にわたりて国庫・県補助金を受け、範囲的に試掘・確認調査を進め、大規模な寺域や本格的な伽藍配置、長大な導水施設などが確認され遺跡的重要性が明らかとなつた。

遺跡保存の範囲については、文化庁、土地開発公社、市の関係機関と協議を重ね、平成12年度第5次調査の結果を踏まえて、平成12年6月に範囲を確定し、7月に用地測量・分筆、8月に史跡申請を行つた。
(根鉢)

第2節 調査の経緯

松ヶ坪遺跡の調査

昭和47年に、興和紡績倉吉工場を除く周辺の上灘土地地区画整理事業が始まり、大御堂廃寺跡の一部を破壊する可能性がでてきた。このため倉吉市教育委員会は、上灘土地地区画整理事務所と協議し、工事に先立ち調査を行うこととなつた。昭和48年度調査は、昭和48年12月に酒造会館と上灘小学校の間の市有地で行った。調査の結果、寺院跡に関する遺構の確認はなかつたが、大量の瓦片や輪の羽口・鉢溝などが出土し、寺院の工房跡かそれに關する遺構の存在が想像された。

昭和49年度調査(松ヶ坪遺跡第1次調査)は、昭和49年12月にこの市有地が河田組と倉吉市農業協同組合の所有地となり、工場建物や事務所の建設工事が着工されることになったので、協議の結果発掘調査を行うことになった。倉吉市教育委員会は、教育長丸井晴美を団長とする調査団を組織し、昭和50年1月から発掘調査を実施した。調査の結果、绳文時代晚期の配石遺構や埋甕遺構とともに大量の绳文土器が出土した。大御堂廃寺跡に関連するものは、瓦窓から大量の瓦が出土したが、遺構の確認はなく、寺域外と判断されたため、遺跡名を字名から「松ヶ坪遺跡」と呼称した。

昭和55年度調査は、上灘土地地区画整理事業による興和紡績倉吉工場の南側沿いの市道改良工事に伴って実施した。工場の外壁に沿つて幅2m、長さ30mのトレンチを設定して行った。遺構等の確認はできなかつたが、軒丸瓦等の出土があり大御堂廃寺跡に隣接する地区であることが確認された。

昭和58年度調査(松ヶ坪遺跡第2次調査)は、昭和58年9月に旧上灘小学校地が倉吉地区合同庁舎建設予定地になつたため、事前の試掘・確認調査を行つた。調査の結果、顯著な遺構は確認できなかつたが、出土した須恵器壺の底部に「久米寺」の墨書きがあった。從来字名から大御堂廃寺跡と呼称していた寺院の本来の寺名を示すものと注目され、貴重な発見であつた。また墨書きに記された久米は、大御堂廃寺跡が所在する郡名であり、寺院の解明と研究にとって貴重な資料となつた。

試掘・確認調査

大御堂廃寺跡を含む興和紡績倉吉工場跡地は、事業の縮小による工場の閉鎖、工場用地の倉吉市への売却を経て、平成5年に倉吉農業博覧会が実施された場所である。この間、大御堂廃寺跡の確認調査が倉吉市ラグビー場内で2度(昭和59年度調査・平成6年度調査)実施されてい

る。

その後、倉吉市による興和紡績倉吉工場跡地再開発事業計画が実施されることになったため、倉吉市教育委員会は再開発事業に先立ち、工場敷地内の遺跡の状況を把握するため、平成6年度から平成8年度にかけて試掘・確認調査を実施した。

調査は、平成6年度が工場内の道路から北側部分、平成7年度が道路から南側の農業博覧会駐車場部分、そして平成8年度が道路南側の工場建物跡部分で行った。調査面積は、平成6年度が1173m²、平成7年度が446.7m²、平成8年度が310.05m²、計1929.75m²であった。試掘・確認調査は、まず工場造成時の客土を重機によって排して旧水田面を確認し、この水田面にトレントを設定して行った。

平成6年度の調査は、工場内道路の北側を中心に、ブルー・女子寮・食堂等の建物の間に14本のトレントを設定して実施した。その結果、トレント2で木樋を確認した。木樋は、昭和44年に工場増設工事中に発見された木樋の位置から東へ約10mの地点にあり、東西に延びることを再確認した。トレント6・8では、工場の埋め立て以前に利用された南北に延びる旧水路を確認した。この水路を境にして、東側の水田耕作土中には多量の瓦をはじめとする遺物の出土が見られるが、西側からは極端に遺物の出土量が減少する。

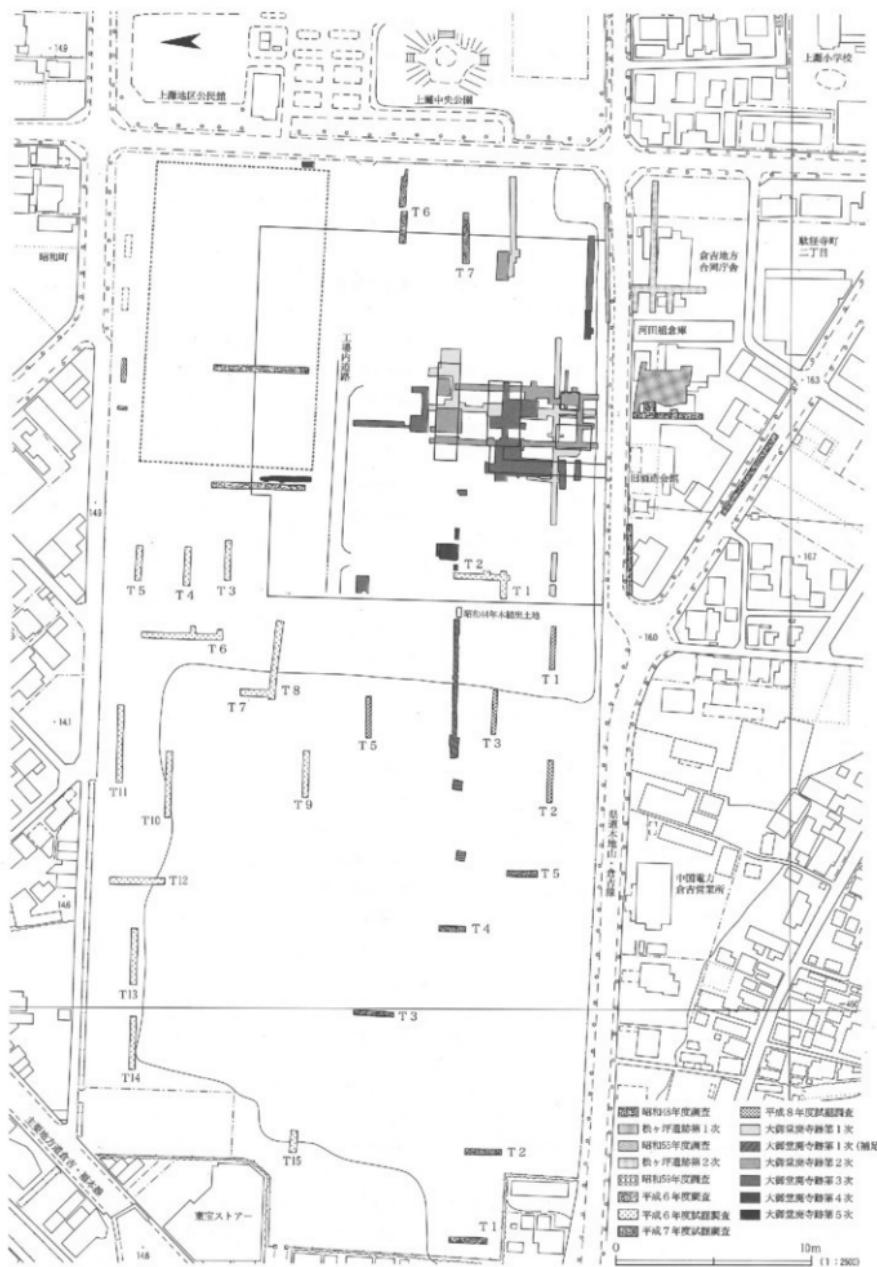
平成7年度の調査は、工場跡の南西側に広がる農業博覧会駐車場跡地の住吉地区5本と、東側の歓迎寺地区に

2本の計7本のトレントを設定して実施した。その結果、住吉地区に設定したトレントでは、いずれも工場造成時(昭和27年)の客土が厚く、また工場中心部では建物基礎のコンクリートが残り、旧水田面を確認するのが困難であった。水田面以下は比較的良好に旧状を留め、基本層位は耕作土・水田床土・灰色シルト層・砂利層・砂層であった。トレント場所が西側になるにつれて灰色シルト層が厚くなり、さらにシルト層に挟まるように葦草の堆積が存在した。地区住民の話では、工場用地西側は沼地であったとのことであり、シルト層や葦草の堆積の状況は沼地を示すものである。大御堂廢寺跡の東限を確認するため設定した歓迎寺地区トレント6・7は、古代の流路が確認され、灰釉陶器や刀金具が出土した。

平成8年度の調査は、工場建物が取り壊されたため、この部分を中心にトレントを5本設定して実施した。平成6年に工場内道路の北側で確認した南北に延びる旧水路の南側での確認と、木樋の西側先端部の確認を目的とした。調査の結果、トレント1とトレント4の東側で旧水路を確認し、溝がさらに南に延びることを確認した。木樋は、平成6年度の調査で確認した位置から直線的に西側に延びることが明らかとなり、旧水路からさらに50m西側に延びることが判明した。木樋の西側先端部分は、導水場としての特別な施設を予想していたが、特別な施設はなく、木樋端に瓦片を立てかけた状態だけであった。トレント1・2以外では、顕著な遺構の確認はなく、いずれも自然地形を示すものであった。
(森下)

大御堂廢寺跡発掘調査一覧

調査年度	調査名	調査期間	調査地区	調査面積	調査担当者	調査原因	経費負担
1973(昭48)	昭和48年度調査	73.12.05～12.15	倉吉市歓迎寺町字五反田・巣ヶ坪	300m ²	名越敏・箕田慶幸・箕田真理子	倉吉都市計画事業上塙地区適正整理事業	本市
1974(昭49)	昭和49年度調査	75.01.16～03.29 (松ヶ坪遺跡第1次)	倉吉市歓迎寺町字松ヶ坪	300m ²	箕田慶幸	倉吉都市計画事業上塙地区適正整理事業	本市
1980(昭55)	昭和55年度調査	80.08.01～08.31	倉吉市歓迎寺町字飯盛	122m ²	森下哲哉	倉吉都市計画事業上塙地区適正整理事業 (道路整備工事)	本市
1983(昭58)	昭和58年度調査	83.09.29～11.17 (松ヶ坪遺跡第2次)	倉吉市歓迎寺町2丁目(字松ヶ坪)	254m ²	森下哲哉	倉吉地区合岡合併設	国庫補助
1984(昭59)	昭和59年度調査	85.02.05～02.08	倉吉市歓迎寺町字上河原	30m ²	朝倉輝雄	ラグビー場クラブハウス設置・追加設置	本市
1984(平6)	平成6年度調査	94.05.13～05.09	倉吉市歓迎寺町字大前堂・上河原	291m ²	朝倉輝雄	—	本市
1994(平6)	市内遺跡調査	94.05.14～07.12	倉吉市歓迎寺町字麻原・栗出・上河原・下路原・上瀬原、歓迎寺町2丁目(字大前堂)、住吉町	1173m ²	森下哲哉	対象遺跡古工場跡地河川開発事業	国庫補助
1995(平7)	市内遺跡住吉・歓迎寺地区	95.05.22～07.04	倉吉市歓迎寺町字麻原・栗出・上河原・下路原・上瀬原、歓迎寺町2丁目(字大前堂)、住吉町	446.7m ²	森下哲哉・齊木裕司	対象遺跡古工場跡地河川開発事業	国庫補助
1996(平8)	市内遺跡歓迎寺地区	96.05.15～05.10	倉吉市歓迎寺町字上河原、歓迎寺町2丁目(字大前堂)	3102.05m ²	森下哲哉・箕田恒也	対象遺跡古工場跡地河川開発事業	国庫補助
1996(平8)	大御堂廢寺跡第1次	96.05.11～11.11	倉吉市歓迎寺町2丁目(字大前堂、飯盛)	1134.5m ²	森下哲哉・板谷智津子	歓迎寺跡調査	国庫補助
1996(平8)	大御堂廢寺跡第1次補足	96.11.11～97.01.14	倉吉市歓迎寺町字大前堂・上河原、歓迎寺町2丁目(字大前堂)	235m ²	板谷智津子・高野配也	本調査	本市
1997(平9)	大御堂廢寺跡第2次	97.06.30～98.01.07	倉吉市歓迎寺町2丁目(字大前堂、飯盛)	1040m ²	板谷智津子・西平拓也	歓迎寺跡調査	国庫補助
1998(平10)	大御堂廢寺跡第3次	98.07.17～99.03.04	倉吉市歓迎寺町2丁目(字大前堂、飯盛)	1000m ²	板谷智津子・西平拓也	歓迎寺跡調査	国庫補助
1999(平11)	大御堂廢寺跡第4次	99.07.02～09.01.17	倉吉市歓迎寺町2丁目(字大前堂、飯盛)	150m ²	板谷智津子・加藤誠司	歓迎寺跡調査	国庫補助
2000(平12)	大御堂廢寺跡第5次	00.05.08～05.15	倉吉市歓迎寺町2丁目(字大前堂)	60m ²	板谷智津子	歓迎寺跡調査	国庫補助



第1図 大御堂廃寺跡調査位置図

第1次～第5次の調査

第1次調査(平成8年度) 3年間を目途に確認調査を開始する。中心部の初めての調査で、主要堂塔と寺域区画施設の確認を主目的とした。昭和27年發掘調査の記録および「大御堂廃寺跡地形略図」(第2図)をもとに、予測された塔の位置から十字にトレントを設定した。調査の結果、塔跡は確認できなかったが、僧房S B01・金堂S B03・西面を画する築地塀S A01を確認した。S B01は面的に拡張し、規模の確認を図った。東では東溝S D01を確認し、祭祀遺構が明らかとなった。『日本考古学年報^{註1)}』では、S B01を講堂に、S D01を東限にあてたが、2次調査で否定された。

主な出土遺物に、埴仏・塑像・銅製懸頭・「久米寺」銘墨書土器がある。

第1次補足調査(平成8年度) 倉吉パークスクエア建設予定地内の記録保存調査である。導水施設S X01の木樁12本62m分の調査を行った。湧水を自然流下方式で寺域へ引水していることがわかった。

第2次調査(平成9年度) 推定寺域の中軸線、即ち西築地塀S A01と東溝S D01との中軸線上に1本、またS B01の中軸線上に1本の南北トレントを設定した。重機による造成土除去中、水田化していない塔跡部分が識別され、塔跡の調査へ移行した。調査の結果、僧房S B01と並列するS B02・西に金堂S B03を、東に塔S B04を確認し、大規模な僧房とともに、宮寺特有の「觀世音寺式伽藍配置」を推定するに至った。東溝S D01の西に瓦礫の灰原と推定される炭化物層を確認した。

主な出土遺物に、仏具の鉢型をはじめとする金属工房関連遺物がある。

第3次調査(平成10年度) 確認調査の最終年度として、伽藍配置・寺域の確認を目的に各所を調査した。講堂を予想して設定した調査区では、講堂S B05の規模の推定にとどまったが、下層に掘立柱建物S B07を検出した。金堂の西では回廊S C01を広範囲に調査し、東面金堂を

傍証することとなった。S C01下層には掘立柱建物S A05を確認した。東溝S D01と西築地塀S A01を別地点で調査したところ、S D01は寺域を区画せず北東へ斜行することがわかった。僧房の北では付属施設の存在が明らかとなり、僧房・回廊周辺には金属関連施設が散在していることがわかった。導水施設の延長部分に設定したトレントでは、資料は得られず第4次調査に先送りした。

主な出土遺物に、銅製懸頭・金銅製帶先金具、石仏片がある。

第4次調査(平成11年度) 大御堂廃寺跡を特徴づける木樁の追加調査として実施した。寺域内での状況を把握するため、平成6年の確認地点から東隣へトレントを設定した。木樁の取水口から96mの地点で溜井S E01を確認し、導水施設の全容が明らかとなった。東溝S D01の西では、東築地塀S A02を検出し、下層に掘立柱建物S A03も確認した。

主な出土遺物としては、「久寺」施印土器、木簡片・木製祭祀具がある。

第5次調査(平成12年度) 遺跡の範囲を確定するため、平成6年度調査で寺域北限とした北段が、築地塀の可能性がないか再確認した。調査の結果、木杭による護岸がなされた段であり、北は天神川の旧流路の堆積層が広がり、北に造構は遺存していないものと判断するに至った。

寺域は区画施設である東西築地塀の心々距離135m、南北は北段から南へ165m以上でおよそ210mを推定している。

各次調査は、調査区・内容とも重複しており、本報告書では遺構及び遺物毎に記述する。下層に縄文時代晩期～弥生時代前期の遺跡である松ヶ坪遺跡が存在し、遺物は旧石器遺物から存在するが、本報告書では奈良時代以降の遺構・遺物に限った。

(根絆)

註

1 根絆智津子「鳥取県倉吉市大御堂廃寺」『日本考古学年報^{註2)}』
日本考古学協会 1998年

第2章

研究史

大御堂廃寺跡のこととは、18世紀の中頃に著された地誌『伯耆民談記^{註3)}』に記載がみられる。「是も今は堂閣なし、」ではじまる記述により、大規模な寺院跡の存在が古くから知られていたことが分かる。

研究的には、昭和7年に発刊された『鳥取懸郷土史^{註4)}』で紹介された「東伯郡倉吉町大字駄歌寺大御堂廃寺」の記事が初出であろう。著者は、倉光清六氏と足立正氏。大御堂廃寺跡を白鳳期に造営された寺院で、勝宿禰社

が近くに所在することから、勝部氏との関係を想定されている。次に、昭和16年に刊行された『倉吉町誌』の第二編歴史と第十二編名蹟でそれぞれ大御堂廃寺跡が紹介されているが、『鳥取懸郷土史』を出るものではない。

昭和27年、倉吉町が誘致した興和紡績倉吉工場の敷地拡張工事に伴い、大御堂廃寺跡一帯が埋め立てられることになった。この埋め立て工事中に塔心礎が発見され、倉吉町により簡単な調査が実施されている。工事の関係

から調査期間が3日間であり、塔跡の規模や構造などは明らかにされていないが、瓦類を中心とする遺物が出土している。この調査の成果は、発掘を担当した谷田亀壽氏によってまとめられ、昭和31年発刊の『倉吉市誌』におさめられている(第2図)。このなかで、谷田氏は大御堂廃寺跡の伽藍配置を地形や遺物の出土地点などから法起寺式と推定された。また、この塔心礎の発見が端緒となって、倉光清六氏が「駄経寺について」と題した小論を昭和27年に著されている。この小論は、大御堂廃寺跡が所在する倉吉町大字駄経寺の地名と、『続左丞抄』天暦2年(948)の官符に記されている「道興寺」の関連を考察したもの。『続左丞抄』の官符は、国名が欠失しているものの、記事の内容から伯耆國の法華寺の焼亡を伝えるものという。この記事の中に、焼失した法華寺の再建が困難になったため、機能を「府を去る十町余り」に所在する「仏殿が広大で雜舎が多数ある道興寺」に移したいと願ったとある。この道興寺と駄経寺の発音が相似するとして、駄経寺地内に位置する大御堂廃寺跡を道興寺と推定した。以後、大御堂廃寺跡に触れる文献の多くが駄経寺廃寺の名称を用いている。

大御堂廃寺跡出土の軒瓦類や鬼瓦の一部は、『鳥取県文化財調査報告書』⁴⁷⁾の第1集に拓本が掲載されたが、大きく紹介されたのは昭和40年に島根県立博物館で開催された「山陰の古瓦展」であった。この古瓦展には、山陰地方の寺院跡や瓦窯跡等から出土した瓦が網羅されたもので、大御堂廃寺跡からは軒丸瓦4種、軒平瓦2種、鬼瓦2種が出品されている。また、展示図録では大御堂廃寺跡の軒丸瓦の一種と同類のものが、近くの大原廃寺跡や野方廃寺跡にあることが指摘されている。

山陰の古瓦展が契機となり、この後、幾編かの山陰地方の古瓦及び寺院跡の論考が発表されている。これらの論考の中には大御堂廃寺跡にも触れたものがあるが、出土軒瓦の一種が奈良・川原寺式の軒瓦を有する遺跡として紹介される程度。このような中で、近江昌司氏は大御堂廃寺跡の鬼瓦に着目され論文を発表している。大御堂廃寺跡から出土した鬼瓦は、鬼面を大きく表し下方に腕と脚を配した鬼面文を飾る特異なもの。特異な鬼面文が、新羅統一時代の鬼瓦の系譜に属するものであることを明らかにするとともに、製作された背景に勝部氏や、和銅2年に伯耆国司に任じられた金上元等の新羅系帰化人の存在を指摘されている。

昭和48年度、土地区画整理事業に伴い大御堂廃寺跡の南側で実施された発掘調査において、多量の瓦類が出土し注目された。筆者は、昭和55年に鳥取県の中西部、所謂伯耆國の古代寺院跡について軒瓦から考察したが、大



第2図 谷田亀壽実測図

御堂廃寺跡はこの昭和48年度の調査で得られた資料を用いた。大御堂廃寺跡の軒丸瓦を瓦当文様の特徴から12種類に細分し、山陰地方の最古段階に位置付けた7世紀中頃の第1段階から8世紀後半の第4段階までの変遷を考え、造営の背景に「勝」姓の集団を想定した。

昭和58年、大御堂廃寺跡の南東側に隣接する松ヶ坪遺跡⁴⁸⁾2次調査において、瓦類と共に「久米寺」と記された墨書き器が出土した。大御堂廃寺跡の所在地は、古代の行政区画では伯耆国久米郡勝部郷にあたることから、郡名を冠する寺院跡であった可能性が浮上した。このことから、筆者は大御堂廃寺跡について考えを著した。それは、大御堂廃寺跡の軒丸瓦のうち、7世紀末から8世紀初頭段階のものが7種類と他の寺院跡に比較し多種類であり、かつ、周辺寺院跡との共有関係がみられる等、その様相は後代の伯耆国分寺跡の状況に似ることを明らかにし、郡名を冠する寺院であることから「公寺」の性格を有する寺院と推論したものである。さらに同様の考えを『新編倉吉市史』⁴⁹⁾でも述べた。

なお、駄経寺廃寺とも呼ばれる大御堂廃寺跡の名称だが、『伯耆民談記』に「駄経寺」の項がある。そこには、「駄経寺」と「大御堂」とは別な寺院跡として記載されていることから、大御堂廃寺跡の名称が適切と判断し使用している。

(眞田)

註

1 松岡布政 「伯耆民談記」(佐伯元吉編 「内叢書」第二回)
1972年

- 「・ 大御堂 久米郡駄經寺村
- 是も今は堂なしと、駄經寺村の前なる田の中に少しがれ、是れ即ち大御堂なり、古へは大なる伽藍の道場なりと言傳ふ、今に其時の礎石とて、諸所に散見す、大きさ徑三尺余りの石也、是を以て案するに、何様大きくなる高闕なりしなるへし、彼の臺も穿て田堵となり、今残る所は少しの腰の如く、此邊を穿て見れば、古佛佛具など數多出るなり、此地の前に小川があり、堂道川と言ふ、堂前の道にならびたる故、かく稱するにや、俗に謂てどん川といふ也、此下に伽藍橋といふ有り、此寺古へ隆盛の時、門前にありしだ橋の跡と云傳ふ、今總かの古橋なり、俗語でがら橋と云ふ、又此邊に華表羅手という徑あり、駄經寺の鎮守、新宮人明神への古道なり、此所に大花表ありし故に、かく稱するとかや、俗語てとりが亂手という、」
- 2 足立 正・倉光清六 「奈良時代に於ける状況」『鳥取縣郷土史』鳥取縣編 1932年
- 3 谷田亀壽 「歴史」『倉吉町誌』倉吉町編 1941年
- 4 谷田亀壽 「大御堂廃寺跡第1次發掘報告書」(ガリ版刷り) 1952年
- 調査期間は昭和27年(1952)5月26日・29日・30日
- この記録には、移動した心臓と四天柱跡の他、過去に大御堂廃寺跡から移動したと推定される礎石について調査がなされ、駄經寺新宮神社鳥居石2個、勝宿禰神社造籠垣石2個が実測されている。また、報告文控図には「200年前大御堂跡より発掘して勝同書舗本店から配られた」という四天柱跡並に廻聲が現在庭園に使用されていると傳う家々 德岡本宅、遠藤氏、進藤氏、奥平(奥田)という、ここはもと辻氏がいたという、大島屋、何れも茶庭用として一基づつあるいは「一基づつあるいは」という記述があり、相当持ち出されていることがわかる。これらの中には、柱座の中心に十字を刻み廻聲風に加工した礎石があり、大御堂廃寺跡というよりあるいは駄經寺跡のものかもしれない。現在、大御堂廃寺跡の礎石と推定されるものが、倉吉博物館に1個ある。
- 5 谷田亀壽 「上古」『倉吉市誌』倉吉市編 1956年
- 6 倉光清六 「駄經寺について」『伯耆文化』第一 伯耆文化研究会編 1985年復刻
- 初出『伯耆文化』II 1952年
- 7 鳥取県教育委員会 『鳥取県文化財調査報告書』第1集 1960年
- 8 鳥取県立博物館 『山陰の古瓦展目録』 1965年
- 9 A 江谷 寛 『山陰における古瓦の系譜』『古代文化』17巻第5号 古代学協会編 1966年
- B 鳥取大学歴史学研究会 『伯耆の古庵寺』『千代川』6 鳥取大学歴史学研究会編 1968年
- C 間賀英子 『官寺と私寺』『古代の日本』中国・四国 1970年
- D 奈良国立博物館編 『飛鳥白鳳の古瓦』 1970年
- E 佐永聯男 『古代文化の推移』『鳥取県史』鳥取県編 1972年
- 10 近江昌司 『伯耆国駄經寺廃寺址出土鬼板の源流』『朝鮮學報』第43輯 朝鮮学会編 1967年
- 11 真田廣幸 「奈良時代の伯耆國にみられる軒瓦の様相」『考古学雑誌』第60巻第2号 日本考古学会編 1980年
- 12 斎下哲哉 「松ヶ坪遺跡」『倉吉市内遺跡分布調査報告書』倉吉市教育委員会編 1984年
- 13 斎下哲哉 「伯耆国大御堂廃寺考—奈良時代に於ける地方寺院の一部について—」『山本 清先生喜寿記念論集 山陰考古学の課題』 山本清先生喜寿記念論集刊行会編 1986年
- 14 真田廣幸 「瓦罐が語る郷土の歴史」『倉吉市史』第1巻古代編 新編倉吉市史編集委員会編 1996年
- 15 前掲註 1 「一 駄經寺 久米郡駄經寺村
- 今は寺なし、山を安瀬山といふ、古は此地熊野山を横したる山なりと相傳ふ、古寺の跡あり、當村の氏神は熊野三所御現也、戰國の時滅亡し、遂に逃隠の地なり、只た寺号を村名に存するのみなり、駄經の号は、漢朝の白馬寺の意によつて名づくるにや、何様故ある古寺なりとかや」

第3章 位置と歴史的環境

第1節 位置と周辺の遺跡

大御堂廃寺跡は、鳥取県中央部を日本海へ北流する天神川と、その支流小鶴川に挟まれた沖積平野の標高16mの微高地に立地する。旧郡郷名でいうと久米郡勝部郷に当たるとみられる。ほぼ真西4.8kmに伯耆国府跡(第3図5・国史跡)が位置することから、南には国府跡へ続く山陰道が想定され、水陸交通の要衝の地であったと推定される。不入闇遺跡(第3図7)1期は久米郡衙か前身国衙と推定されるが、どちらであるか決め手を欠き、いまだ久米郡衙は特定されていない。北には約600基からなる向山古墳群があり、その中に東伯耆で最大級の規模を

持つ7世紀の横穴式石室墳、三明寺古墳(第3図17・国史跡)がある。

以下、伯耆地方を中心で寺院跡について述べる。

大御堂廃寺跡が創建された7世紀中頃、東伯耆では、野方庵寺跡(第4図10)・弥陀ヶ平庵寺跡(第4図11・東郷町)が建立されるが、未発掘のため詳細は不明である。7世紀後半は大原庵寺跡(第3図18・国史跡・寺域北辺約69m・東辺約79m・南辺約75m・西辺約74mの変形四角形)、斎尾庵寺跡(第4図4・東伯町・国特別史跡・寺域東西約110m×南北約160m)、上淀庵寺跡(第4図3・淀江町・寺域推定東西約162m×南北約108m)、大寺庵寺跡



第3図 倉吉市周辺の地形と遺跡分布図

- | | | | | |
|-----------|---------------|-----------|----------|----------|
| 1 上神宮／前還跡 | 5 伯耆國府跡御守跡 | 9 郡塚遺跡 | 13 矢戸遺跡 | 17 三明寺古墳 |
| 2 西前遺跡 | 6 伯耆國府跡法華寺煙遺跡 | 10 宮ノ下遺跡 | 14 福田寺遺跡 | 18 大原廢寺跡 |
| 3 四王寺跡 | 7 伯耆國府跡不入岡遺跡 | 11 河原毛田遺跡 | 15 平ル林遺跡 | |
| 4 中尾遺跡 | 8 伯耆國分寺跡 | 12 鵜ノ掛遺跡 | 16 長谷遺跡 | |



第4図 山陰古代寺院分布図

(第4図2・岸本町)など寺院の造営が盛んになり、ほぼ1郡につき1つの寺院が造営される。

大原廢寺跡は法起寺式、斎尾廢寺跡は法隆寺式の伽藍配置をとるが、ともに金堂の背後に講堂を置く変則的な伽藍である。大原廢寺跡出土の創建瓦軒丸瓦I類は大御堂廢寺跡の軒丸瓦Ⅲ類と同様で、野方廢寺跡・弥陀ヶ平廢寺跡軒丸瓦II類、久見遺跡(東郷町)軒丸瓦I類と同型瓦である。その他、塑像片・六尊連立佛の破片などが

出土している。上淀廢寺跡は南北に3塔を近接して建立する特異な伽藍配置で、壁画や「癸未年」の記年銘をもつ瓦が出土したことで有名である。大寺廢寺跡は東西する法起寺式伽藍配置をもち、石製鷲尾が出土している。8世紀に入り石塚廢寺跡(第4図6・倉吉市)が建立されるが、未発掘で詳細は不明である。中頃には伯耆國分寺跡(第3図8・倉吉市・国史跡)、法華寺煙遺跡(第3図6・倉吉市・國分尼寺・150m四方)が近接して設けられ、

同じころ藤井谷廈寺跡(第4図5・関金町)が建立される。

平安時代以降の寺院跡には四王寺跡(第3図3)、大日寺遺跡群、広瀬廈寺跡がある。四王寺跡は伯耆国厅跡から北に約2kmの四王寺山頂に存在し、貞觀9年(867)新羅の骨威に対抗するため四天王像を安置したものである。大日寺は天台宗の寺院で、往時には広大な寺域を持ち多くの坊舎があったと伝えられ、阿弥陀如来坐像(重要文化財等の平安時代の仏像が残り、記年銘のあるものとしては最も古い延久3年(1071)の瓦経が出土している。広瀬廈寺跡は臨池伽藍の寺院跡である。

(加藤)

第2節 遺跡周辺の地名

大御堂廈寺跡は、倉吉市駄經寺町字大御堂・限巡・どんど川に所在し、松ヶ坪・五反田にも広がるものと推定される。この地は古くから寺院跡の存在が示されており、町名の「駄經寺」も含めて、「寺」に関する名前を、地名や字名に見ることができる。

大御堂廈寺跡の存在を古くから伝えているものに、寛保2(1742)年に松岡布政によって著された『伯耆民談記』(『因伯叢書』第2冊、抜粋全文は前章註に掲載)があり、大御堂廈寺跡の存在を地名や字名から推定している。この書物によると、「田の中に少き豪あり」とあるのは工場埋立て以前に、水田の中に存在した東西2カ所の土盛り(隈)部分をさし、字図に示された「限巡」にあたる。今回の発掘調査の結果、2カ所の土盛りは伽藍中心の塔と金堂であったことが判明し、東が塔で西が金堂であった。また「堂道川」部分では、記載されるとおり堂(大

御堂)の東の小川であり、字名には「どんど川」とある。発掘調査の結果から、東築地層の雨落溝の位置にある流路が堂道川であることが明らかになった。

字図には住吉町と駄經寺町との境あたりに、「伽藍橋」・「築出」などの地名があり、いずれも寺に関する字であり古寺の存在を示す地名である。また畦道にその名を残している「華表繩手」の華表とは、神社の鳥居の漢譯語であり、駄經寺の鎮守神官大明神につながる鳥居の存在が語られ、現在の字名に見る「鳥居繩手」に通ずるものである。のことから『伯耆民談記』に従えば、東の堂道川から西の鳥居繩手までが大御堂廈寺跡に関する地と推定することができる。

大御堂廈寺跡の南側から、外道山の北側裾部に沿って方形に並び、その字名も「石ヶ坪」・「松ヶ坪」・「森ヶ坪」・「八ヶ坪」といった坪字名などの条里開闢地名が残る。この方形区画は、大御堂廈寺跡の寺域辺に沿うように存在しており、大御堂廈寺跡建立後、あるいは廃絶後につくられた区画であろう。また大御堂廈寺跡の北側、「大御堂」や「どんど川」等の字名の北側は、南東から北西にかけて、「上河原」・「西割田」・「西堀」・「西上手」といった水や川に関する字名が残り、南側に広がる条里的区画の乱れを造る。これは天神(竹田)川の氾濫を物語るもので、氾濫により条里が壊されたことを示す。

(森下)

第4章 調査の概要

第1節 調査区の設定と調査方法

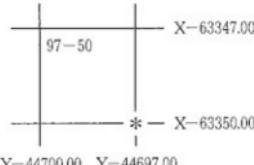
遺跡の周辺に残っていた条里はほぼ東北方向をとり、寺院に関係するものと推測されていたため、調査区は、国土座標軸に基づき、工場擾乱を避けて可能な限り幅3mのトレンチを設定した。設定にあたり、工場敷地造成前の地形を推測することが必要となり、発掘調査で見つかった水田の畦や水路を明治時代公園と比較しながら検討を重ねた。

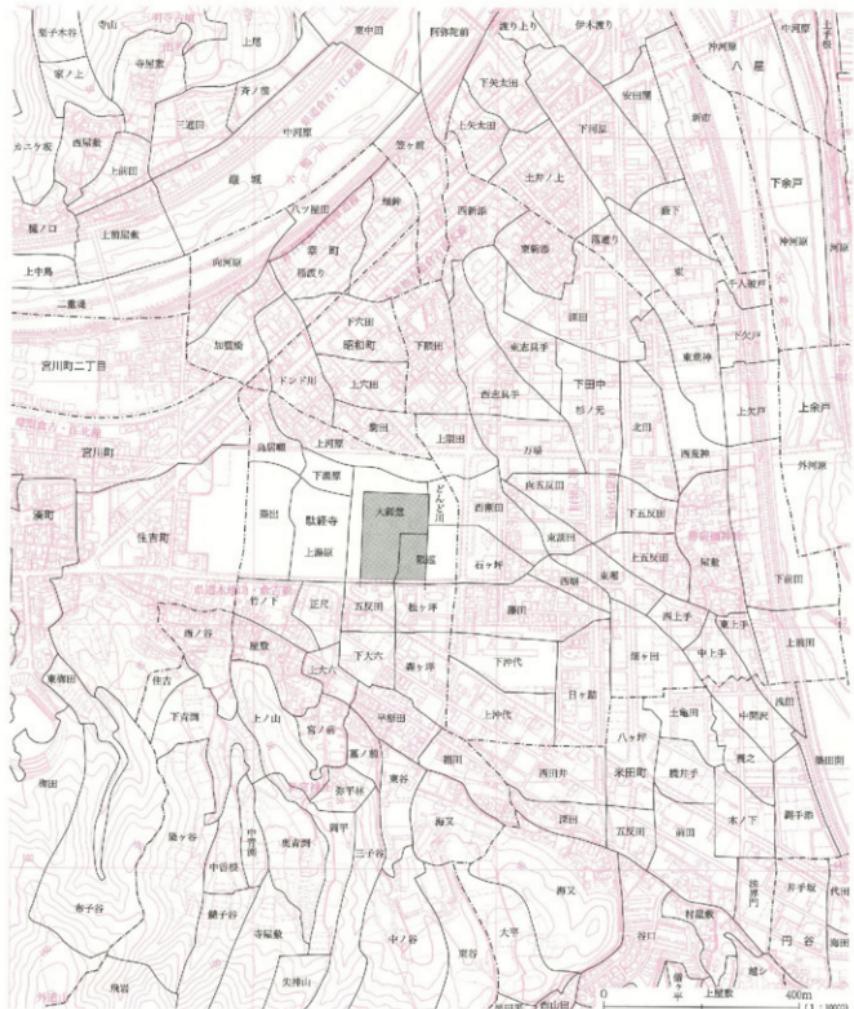
工場造成土厚さ約0.3~1.0mについては、重機による掘削とし、その下層の耕作土から人力による掘下げとした。第1次調査ではトレンチ部分のみ造成土を除去したが、第2次調査以降はトレンチ周辺を広範囲に除去し、トレンチ拡張に備えた。

寺院遺構面の調査を目的とし、寺院建立以前の権柱建物の調査は行っていない。また、建物基壇の断面は最

低限に止めて、工場建物基礎や排水管等の掘方を利用した。遺構面は鉄分の酸化により茶褐色化しているうえ、基礎土由来の自然堆積層は判別し難く、調査方針を平面的精査から断面観察に変えていた。寺域南側一帯の旧篠高地上には縄文時代の遺跡が広がっているが、未調査である。

遺物の取上げは、発掘年とトレンチ名を記した上で、基本的に3mのグリッド毎とした。グリッド名は、第1(例)





第5図 大御堂廃寺跡周辺字図

次調査では任意にアルファベットを振ったが、各地区的位置関係が拡張により複雑となるので、第2次調査以降は国土座標で区画された範囲の南東隅の数値で代表させ、Y-Xの整数2桁で示し統一をはかった。

遺構の実測は、遺構全体図1/20を基本とし、各遺構平面断面図は1/10で作図した。

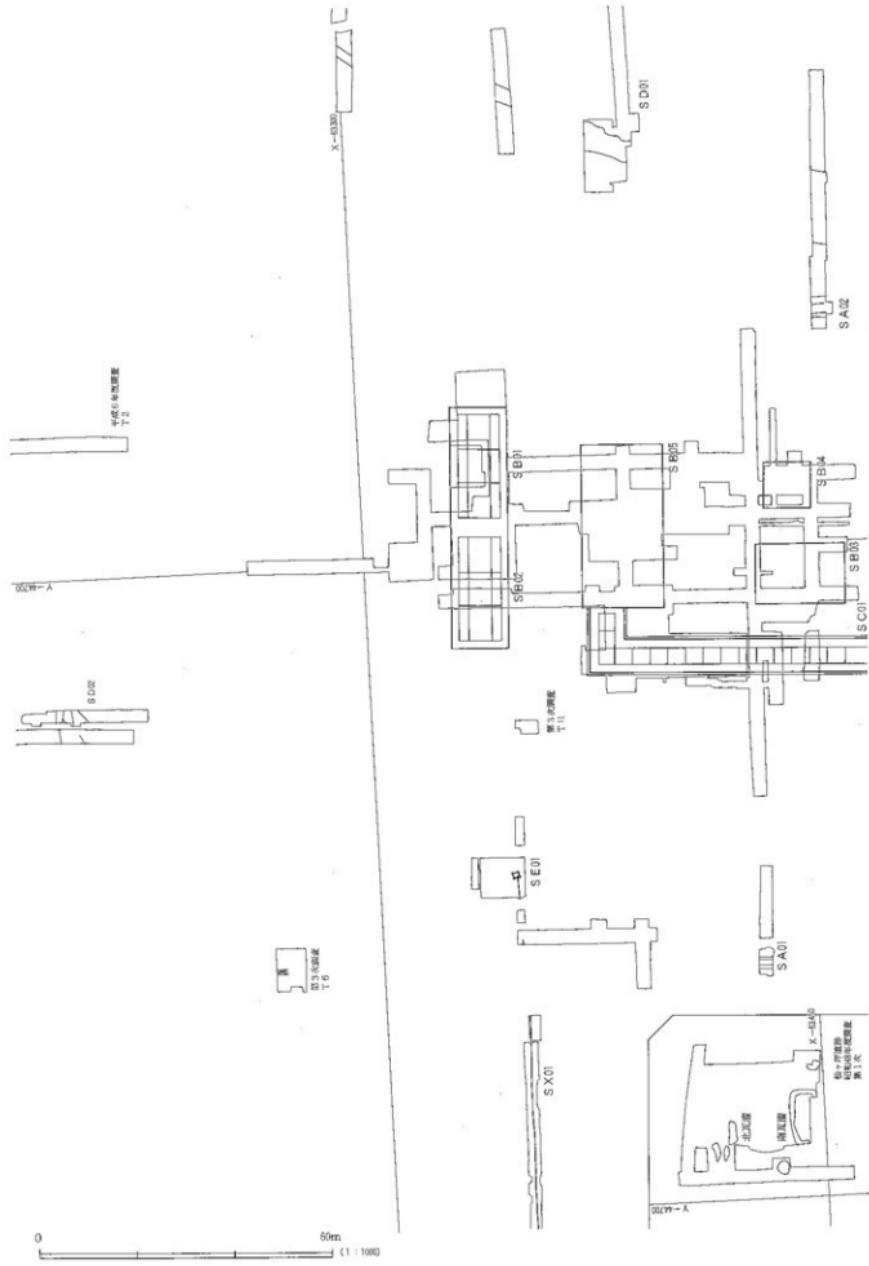
埋戻しは調査面を砂で保護し、人力で排土を被せた後、重機で行った。

(根鉈)

第2節 基本層序と遺構の位置関係

層序は、<東築地盤 S A02・東溝 S D01><西築地盤 S A01・木構 S X01><金堂 S B03・塔 S B04><僧房 S B01・S B02>と、東西南北の場所毎に異なる。これは旧地形と寺域の整地に関係している。

創建以前の旧地形は、おおまかには、南に丘陵、北に小鴨川と東に竹田川があり、北東へ緩やかな傾斜をなしていたものと推定される。調査によって、両河川の氾濫がうかがわれ、北限では小鴨川の流路が寺域のすぐ近く



第6図 大御堂廃寺跡遺構全体図

まで及んでいたことが判明した。金堂・塔辺りが一段高く、南を除くその周り三方が1m程度低かったようである。木樋のあった西の字上湯原一帯は堆積層の状況から、地下水位の高い湿地であった。金堂・塔といった中枢施設は自然堤防の微高地上に立地しているのであり、特に塔外北側では耕土床土直下は川原石層である。

その北にある講堂の下層掘立柱建物S B07は、南北から北西に流れる幅約6mの流路を埋め立てた上に築かれ、この流路の埋土は微高地の切土、暗茶褐色砂であつた。旧流路上面から北限まで、寺域全体の2/3の広い範囲は、主に黄灰色粘質土で埋め立てて整地している。

僧房辺りを中心には基本的層序を述べる。

①工場敷地造成による水田埋め立て土 約1m

南側は薄く、北側は厚い。大山・倉吉軽石層(D.K.P.)の崩壊土を含むブロック土である。

②水田耕土 約20cm

③水田床土 約5~15cm

中心伽藍外の北側と東側では、床土の下にさらに中近世の遺物を比較的多量に含む耕土と床土が認められた。河川の氾濫により、流路によっては土壤状のえぐりを呈すこともある。

瓦堆積面をそのまま床土とするところもある。

基壇土の遺存していた部分、即ち金堂・講堂・西面回廊・僧房は、基壇土が鉄・マンガンによって床土化していた。

④暗黄褐色粘質土 約15cm

奈良～平安時代の遺物包含層。焼土粒・炭化物・瓦崩壊土を含む。遺構検出面はこれより下である。

⑤黄灰色粘質土 約20cm

整地土。多くはないが、瓦片や窯壁塊を含む。

⑥灰白色粘質土 約30~50cm

整地土。繩文土器を含む。

⑦青灰色砂質土

地山。場所によって厚さが異なる。

⑧粗砂

⑨川原石

大御堂廃寺跡の寺域は、南の自然堤防上から北の川原に造られている。非常に大規模の寺域造成であるとともに、整地土が丘陵切土ではなく河川堆積土であることを考えると、治水工事に関連させながら寺地を拡大していく可能性も考えられる。
(根鈴)

第3節 遺構

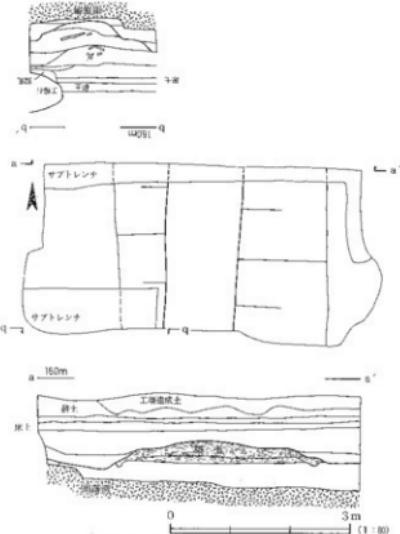
1 寺域区画施設

西築地堀S A01 寺域南西で南北方向に延びる築地堀を確認した。基底部の規模は幅約3.2mで、基底部から検出面まで高さ0.35m遺存している。雨落溝は西側のみを、断面で幅約1.42m深さ0.3mの規模で確認している。掘込地業については、基底部のすぐ下層が繩文時代の包含層となり確認できなかった。なお、第3次調査トレンチ6で寺域北西を掘り下げたが、中世の河川の氾濫によって流失してしまっており、築地堀は確認できなかった。

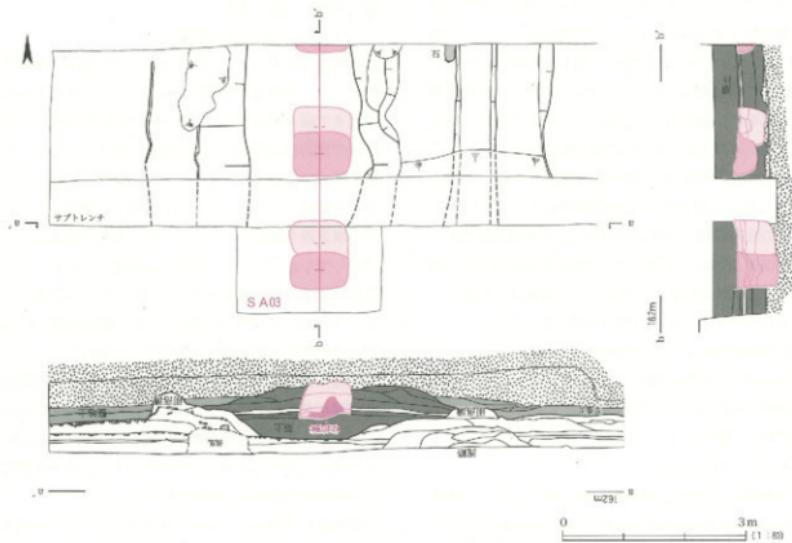
東築地堀S A02 西築地堀から東に135mの位置で、南北方向に延びる築地堀を確認した。基底部幅は約4.2mで、基底部から検出面まで高さ0.35m遺存している。その下層は深さ0.45mを掘込地業している。その両側には雨落溝が並行しており、幅約0.7~0.8m深さ約0.1~0.14mの規模で、東西の雨落溝間の距離は心々約5.0mである。東雨落溝にある石は縁石の可能性がある。西雨落溝付近の施設時の地表面から多量の瓦が出土した。

築地堀の下層には、掘立柱解S A03とみられる南北辺約0.6~0.7m×東西辺約0.9mの隅丸方形の、掘方をもつ柱を5本分確認した。柱は新田2時期に分かれており、それぞれ柱間は約1.9mの間隔である。柱穴掘方からは遺物は出土しなかった。

なお、築地堀の東側で、寺院廃絶後から現代に工場用地となるまでの流路跡が確認されており、「堂道川」とみられる。
(加藤)



第7図 西築地堀S A01遺構図



第8図 東築地盤 S A02遺構図

北段 S D02 後述する僧房の基壇北辺から約80m北に位置する段で、寺域の北限に比定している。検出面からの段差は0.2mで、整地土層は北に傾斜しており、トレチ南側の整地土面から測れば0.3mとなる。この整地土上面の標高は、僧房基壇外辺りの整地土面と比べると約1.2m低い。旧地形に合わせて僧房から北方へ緩やかに傾斜させた整地が行われたものと推測される。第5次調査トレチでは、遺構面(瓦溜検出面)まで、東壁サブトレチでは地山面まで掘り下げて調査した。

段 S D02a の北約0.4mからさらに深い段 S D02bとなる。S D02bには中世流路堆積層である暗黒灰色粘質土が厚く堆積し、底には瓦、木枝や木片、葦等が遺存する。この段差は約0.6mで北ほど深い。堆積層は平成6年度調査トレチ1以北まで続くことが確かめられ、堆積層上層には洪水砂が匂い、旧竹田川ないしその支流の堆積層と考えられる。流路の護岸施設として木杭列があり、その断面調査によって、河床から深さ約0.5mの淡青灰色粘質土層まで打ち込まれていることがわかった。杭は直径10cm前後の先端加工を施した芯持ちの丸太材で樹皮を残す。杭列の間には木樋とそれを固定する杭。また、南2mには矢板列があり、礎石様の石も落し込まれていた。瓦・土器以外の主な遺物としては、白磁・青磁・瓦器片1(258)、木製小皿1(101)・斎卓1(106)がある。

北段の南2mにある瓦溜は、南北長3.8m深さ0.7mで、完形に近い瓦が比較的多量に出土したが、軒瓦はなかつ

た。埋土は土器小片を含む炭混り粘質土であり、寺院廃絶段階の土壌と推定される。礎石様の石や瓦溜から、付近に瓦葺建物の存在が予想される。
(根崎)

2 中心伽藍

僧房 S B01・S B02 字限道の北西隅部に位置する。塔中心から僧房長軸ラインまで約63mの距離にある。東西棟両面廻付礎石建物 S B01・S B02が並列する。第1次調査で東僧房 S B01を、第2次調査で西僧房 S B02と S B01内陣部分を調査した。第II図は第1次・2次調査分を合成したものである。

礎石は自然石で、持ち去られたものと残っていたものとがある。礎石は、水田床土の下になるようすべて落し込まれていた。基礎土を掘り下げる根石の検出面までの調査としたため、礎石抜取り穴・落し込み穴を確認しただけであるが、第2次調査で S B01・S B02の北側柱列のみ礎石抜取り穴を掘り下げた。礎石抜取り穴の色調・土質は整地土層と近似し、礎石抜取り穴と据付け掘方とは判別が困難で、据付け掘方の調査に至っていない。

根石はほぼ元位置を保っており、建物規模を復元することができた。建物規模は、ともに東西21.3m南北8.8m、桁行9間乗行4間である。中央に幅3.9m(13尺)の通路(馬道)を設け、桁行3間ごとに区切って3房とした計6房を配する構造と推定される。復元される柱間寸法は、桁行中央3間が2.25m(7.5尺)、他は2.4m(8尺)で、中央房



第9図 北段 S D02遭墳図

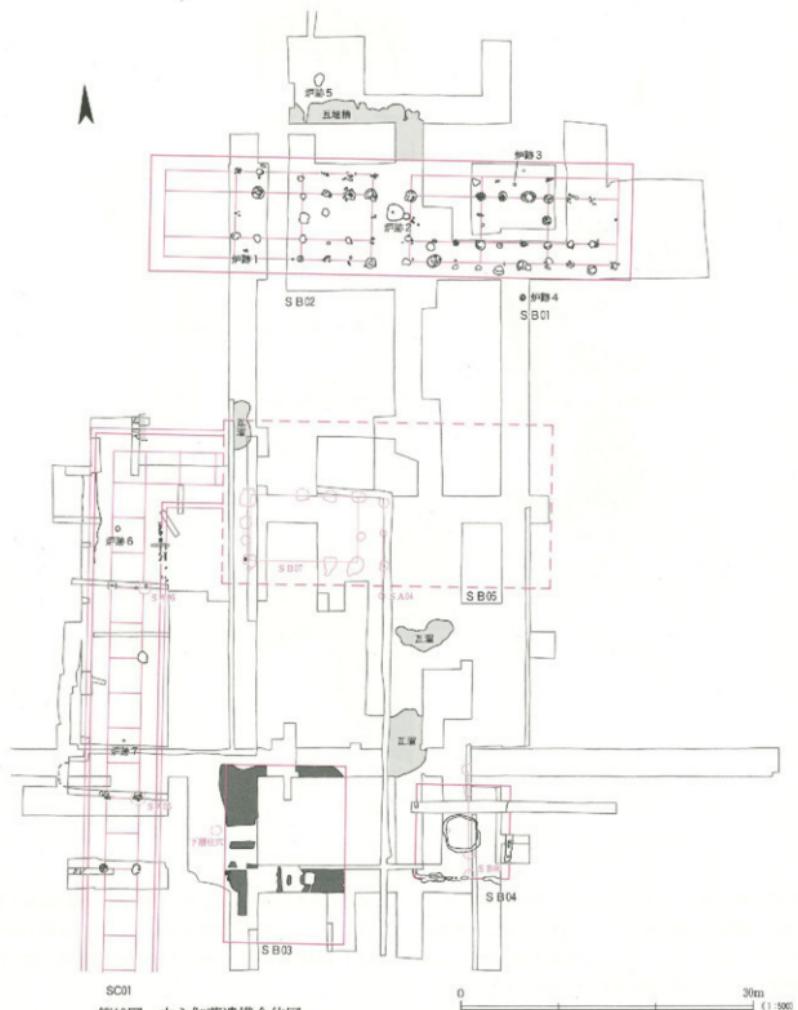
の柱間3間が狭い。梁行2.4m(8尺)、幅の出2.1m(7尺)である。建物の主軸方向はN 3°である。第2次調査でトレンチ1西壁、即ち、S B02中央室北西身合柱の位置を断削したが、下層に掘立柱建物は確認されなかつた。

基壇の北辺と東辺は後代の水田水路により削平され、南辺はS B01側に中近世の流路によるえぐりがある。第1次調査でトレンチ7東壁、即ち、S B01南西部を断削したが、基壇外装・雨落溝は検出できなかつた。基壇外装は施されず、掘込地業も行われていないものと思われる。遺存する整地層の厚さは約0.5mで、地山の上に積まれている。遺存する基壇高は約0.3mであるが、基壇外周北側に建物廃絶に伴う瓦堆積があり、そのレベルと礎石・整地層から考えて、復元される基壇高は0.6m程度となる。基壇規模は、南辺の基壇土の遺存ラインから

基壇の出を1.5mと推定して、東西49.0m南北11.8mとしたがそれ以上である可能性もある。S B01の基壇土のおよそ東房範囲のみ、直径3cmの大の小砾が面的に散かれていた。

S B01の基壇土を掘り込んだ土壤S K01・S K02の埋土には、焼土・炭・瓦・土器が含まれ、土器の時期から伯耆国第2段階(9世紀後半代)に建物が焼失したものと推定される。S B02内からはS B01と異なり伯耆国第3段階(10世紀後半)の土器が出土しているので、同一基壇内とはいえ廃絶時期を別にする可能性がある。

特徴的な遺物としては、碁石様石(I06~I09)がある。
(很鈞)



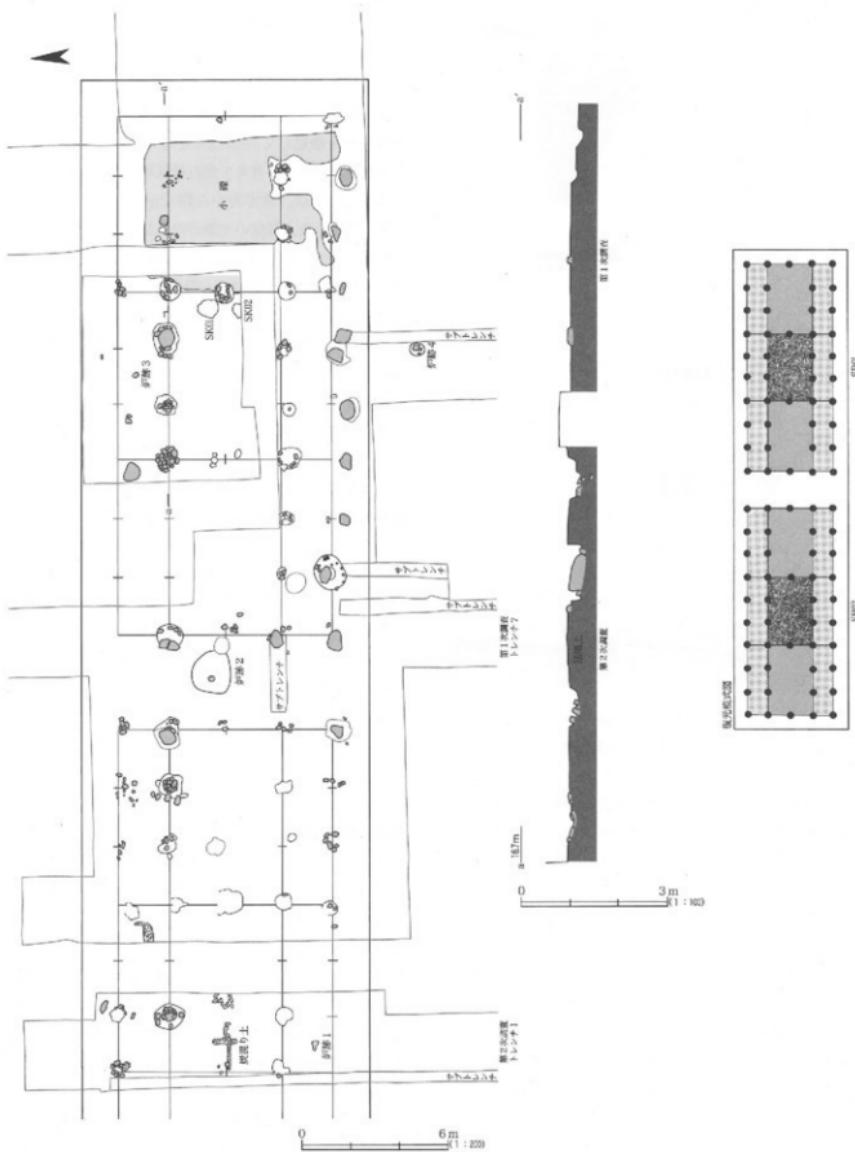
第10図 中心伽藍遺構全体図

金堂SB03 字隈巡の西端に位置する。塔S B04基壇西辺から約7.2m、西面回廊基壇東辺からも約7.2mの距離にある。南北棟建物の基壇で、規模は東西約12.3m南北18.4mと推定される。基壇上面は破壊を受け、建物規模は不明である。第1次調査で基壇北辺に瓦堆積、基壇西辺の一部に乱石積基壇を確認した。第2次調査では塔S B04とともに基壇東辺と南辺の調査を進めたが、遺構の遺存状態は悪く不確定である。

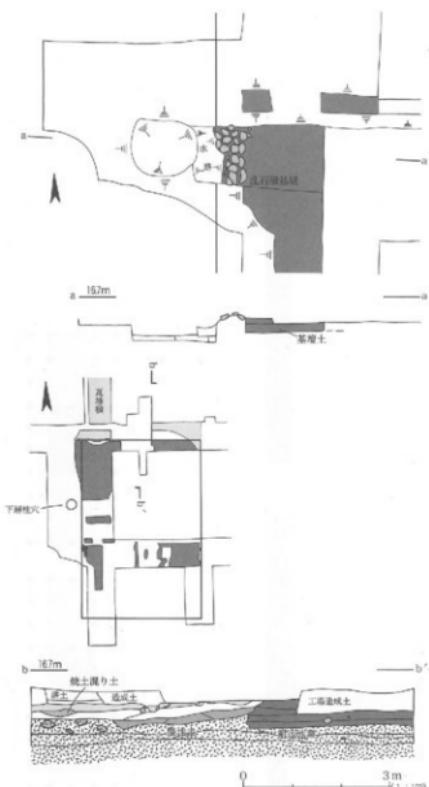
基壇北辺は、建物廃絶に伴う瓦堆積が面的にあり、工

場塙基礎掘方を利用したサブトレンチ断面で掘込地業を確認した。掘込地業は深さ約50cmで、縄文土器を多量に含んだ暗茶褐色土を約5cmの厚さに3層積んでいた。この掘込地業ラインは塔基壇北辺からみると約1.8m北の位置となる。

基壇西辺で、乱石積基壇を長さ2m分確認した。川原石積み3段と裏込め土、黄褐色粘質土を細かく版築した基壇土が観察された。石積みの西外側は、字境の水田水路が走り、雨落溝は検出できなかった。基壇北辺からこ



第11図 僧房S B01・S B02遺構図



第12図 金堂S B03遺構図

の石積み南端まで約12mの距離がある。

基壇東辺は、基壇土と基壇崩壊土との境界が平面的に観察された。東西トレンチ北壁のサブトレンチで断削調査を行ったが、推定される基壇縁部が溝様の攪乱を受けしており、掘込地業の確認に終わった。

基壇南辺は、南北トレンチ2カ所で断削調査を行い、基壇土・掘込地業の観察を行った。東辺と同様、推定される基壇縁部が溝様の攪乱を受けていた。地山は暗褐色砂質土で、基壇土の黄褐色粘質土と明瞭な差をもち、平面的には基壇土を北辺から約15.5m地点までは確認した。基壇の長方形度が大きく、塔の中軸線と合わない点で疑問が残るが、少なくとも、南北棟建物と推定される。

主な遺物としては、基壇北辺の瓦堆積から、埴仏(1～3・7)・塑像片(22)が出土している。(根鈴)

塔S B04 第2次調査で確認した。昭和27年の工場造成時の調査で、既に塔心礎が抜き取られ、塔基壇はほとんど

削平され失われていた。調査では、塔心礎の抜取り穴・塔基壇の遺存部・地覆石の据付穴・掘込地業、そして下層の掘立柱建物を確認した。調査では塔跡中央で礎石抜取り穴を確認した。規模は、南北約3.9m東西約3.6mを測り、深さは中央部分で検出面から0.82mを測る。建物規模は、基壇上面が失われており不明である。しかし、基壇が一部確認でき、地覆石の据付穴や抜取り穴などから、基壇規模を推定して9.6m四方となり、周辺から出土した多量の川原石から考えて乱石積基壇と推定される。掘込地業の深さは、検出面から約0.2mで、厚さ3～5cmの築土であった。基壇の主軸方向はN 3°30' Eである。

昭和27年の工場造成時の調査で発見された塔心礎の規模は、長軸2.3m短軸2.04m・厚さ約0.45mで、中央に直径0.87m深さ0.4mの円孔がある。発見時には、中央の円孔のなかに炭化材が残っていたとのことであるが調査では出土しなかった。

遺物は、主なものには埴仏(5)、S B04北側を中心青銅製品の破片(8・14・15・17・18)・鉄釘(23・24・35・41・45)が多く出土している。(根鈴)

塔下層遺構

掘立柱建物S B06 塔の中央部に設定したサブトレンチにかかった掘立柱建物である。柱列は南北には延びず、同一建物と判断した。建物規模は南北約10.8m、東西不明で、主軸方向はN 3° Eである。柱穴掘方は塔の掘込地業に切られ、直径約0.8～1.0mの円形、深さ約0.7mで、柱は抜き取られている。柱間寸法は北から2.1m、6.6m、2.1mで南北両面幅付の建物の可能性がある。

遺物は検出されなかった。

なお、同様の柱穴は金堂下層にも確認され(第12図)、S B06からの直線距離は26.4mの位置となるが、関係は不明である。(根鈴)

金堂・塔間瓦溜 金堂・塔間の北側にある瓦溜で直径約8m深さ約1mである。工場排水溝を利用したサブトレンチを掘り下げて調査した。多量の瓦とともに塑像片(18～21)が出土している。(根鈴)

講堂S B05 字眼巡の西端に位置する。塔中心から推定講堂の長軸ラインまで約34mの距離にある。第2次調査で講堂が推定されたのをうけて、第3次調査で西面回廊とともに調査範囲を広げておこなったが、基壇上面は削平され、遺存状態は悪く不確定な部分が多い。もともと、一段高い水田として利用されていたところで、推定基壇の西辺は字眼巡と字大御堂の境界に位置する。第15図は第1次～3次調査分を合成したものである。

金堂の北側は建物廃絶に伴う瓦堆積が面的にあり、途切れたところが講堂基壇と推定された。講堂廃絶に伴う

ものと推定される大型の瓦溜が、推定基壇の南・北にある。推定基壇内の南西隅には僅かながら基壇土が残り、根石様の石の集石(抜取り穴)と、その北約3m、約6mの地点で根石の抜取り穴を検出した。根石の元位置を隔たらないものとして、この3カ所をかけて断割を行ったところ、下層に掘立柱建物の存在が明らかとなつた。礎石据込み穴は検出できず、建物規模・基壇外装についての資料は得られなかつた。また、掘込地業は認められなかつた。

遺構図の基壇復元線は、根石様集石からの基壇の出を、西面回廊の基壇の出1.8mを上回る2.4mとし、梁行4間柱間3mの南北16.8m、それを伽藍中軸線で折り返して東西36.6mとしたものである。主軸方向は僧房・西面回廊に一致させた。南辺にかかる各トレンチの断面3カ所で、幅約50cmの溝を検出し、雨落溝とも考えたが確定できなかつた。

遺物は、基壇土から7世紀第4四半世紀に比定される須恵器壺蓋(17)が出土している。
(根鉢)

講堂下層遺溝

溝S D03 整地土下層に幅約6~12m、深さ約1mの亞つな溝があり、その埋土で掘立柱建物S B07・柵列SA04を確認した。S D03には直徑約10cmの木杭が残り、流路と考えられるが、自然堆積ではなく均質な暗茶褐色砂質土で埋められている。埋土は金堂・塔のある丘陵土である。

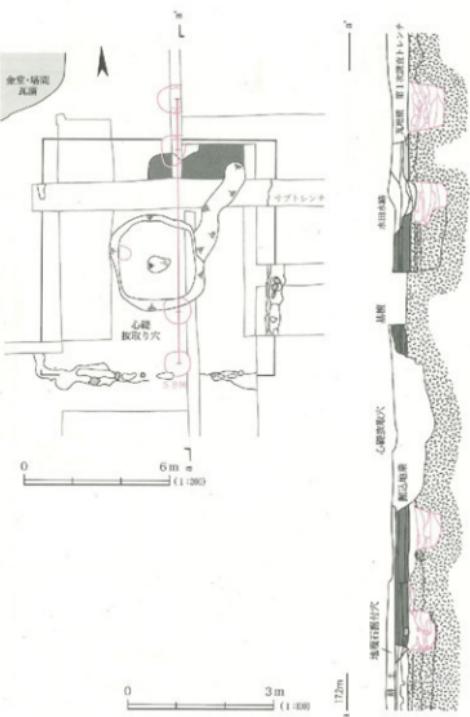
遺物は少量の瓦片を含んでいたことから、寺域造成に伴って埋められたものと推定される。

掘立柱建物S B07 東西棟掘立柱建物で、建物規模は東西11.0m南北6.75m、桁行4間で梁行は不明である。主軸方向はN 3° E。柱間寸法は桁行2.75mの等間で、掘方は一辺約1.5mの方形、深さ約0.7~1.3mである。柱は抜き取られ埋め戻されている。厚さ約30cmの整地土を掘り込む。

断割断面にかかった南西隅柱の柱穴の掘方内上層から銅粒・平瓦片が出土している。柱抜き取り時に混入したものか。平瓦は最古段階の軒丸瓦1類の胎土・色調に類似している。

柵列SA04 S B07の東2.6mで南北方向の柵列を3間分確認した。工場排水溝を利用したサブトレンチの断面にかかったものである。S B07の柱筋に平行し、ほぼ伽藍中軸線に位置する。柱間寸法は3.2mの等間で、掘方は直徑0.5mの円形である。
(根鉢)

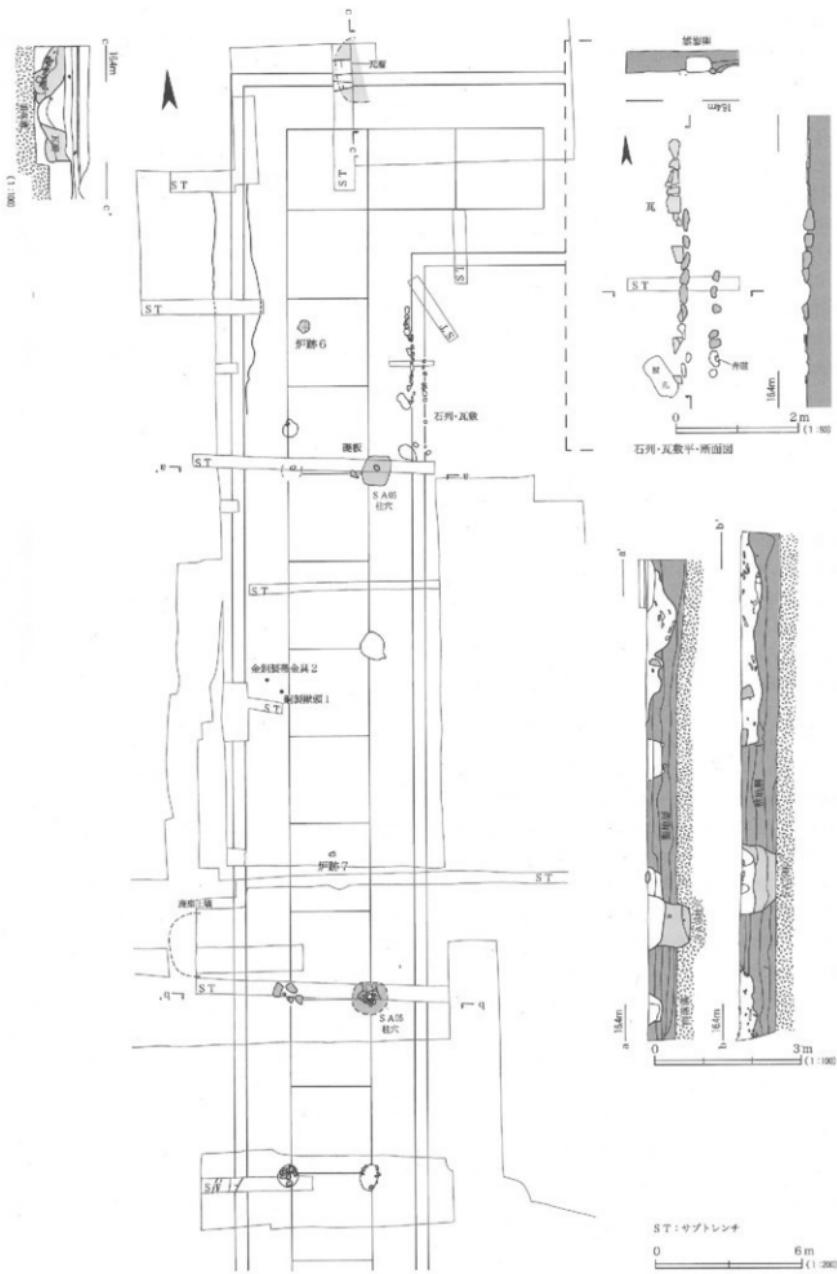
西面回廊SC01 第3次調査において確認した西面及び北面回廊。水田化のためかなりの削平を受けており、礎石はすでに失われているが、その下部の根石を調査区南側で3カ所、北側で2カ所確認した。また、調査区北側



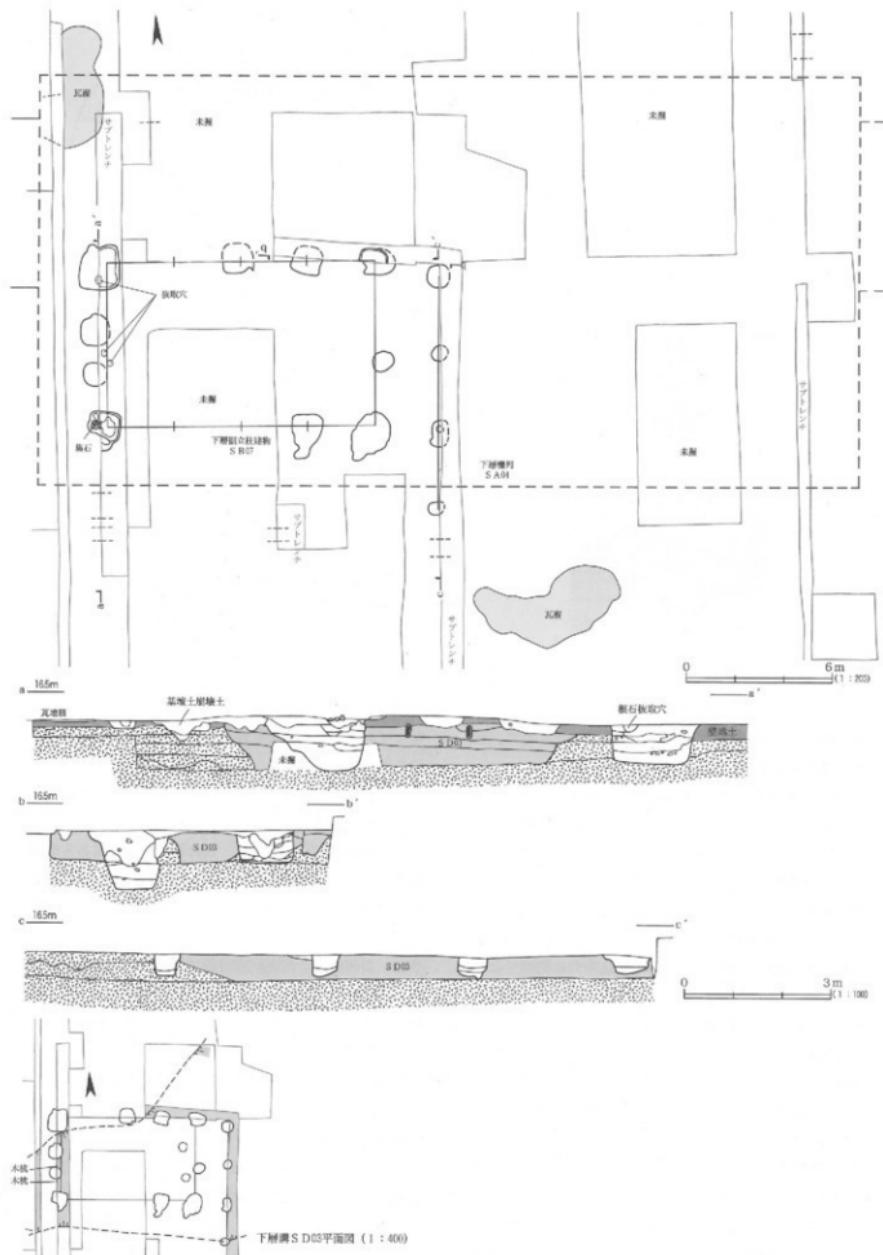
第13図 塔S B04遺構図

では基壇東端と考えられる石列・瓦敷を確認した。その西側約6.5mで南北方向に延びる溝を、北側に約10mで東西方向の溝を確認した。西側と北側の溝を雨落溝及びその痕跡と考え、東側の石列と根石との位置関係から、回廊は桁行3.6m梁行3.3m、基壇の幅は6.9mに復元される。回廊西辺の方位はN 3° 40' Eである。サブトレンチによる断面観察では基壇に伴う掘込地業は行われていない。

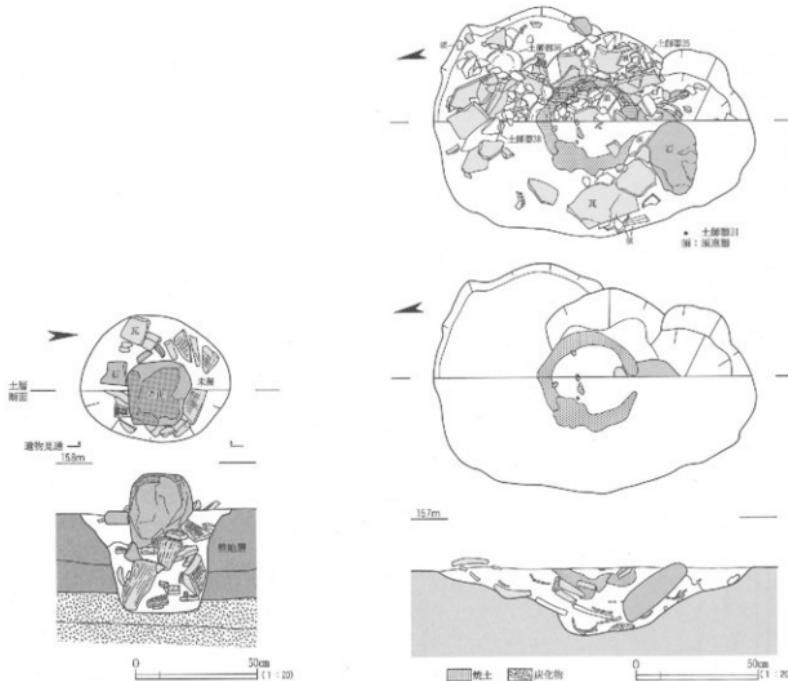
基壇東端の石列・瓦敷は、幅10~16cm・長さ12~30cmの川原石を、長軸を南北にそろえて約40cm離れて2条に配し、その西側(基壇側)に接して平瓦を1枚ずつ、主に凸面を上に向けて敷き並べているもの。石列と石列の間には深さ25cmの雨落溝が存在するため、石列は基壇の縁石であることを確認した。基壇縁石は1段のみで、雨落溝自体は素掘である。基壇側の縁石は、石を立てた状態のものが多く、東側の縁石は伏せた状態のものが多い。基壇縁石の西に接する平瓦は、縁石側に端部をそろえているものが多いが、基壇側は不揃いである。雨落溝埋土



第14図 西面回廊 S C01遺構図



第15図 講堂 S B05遺構図

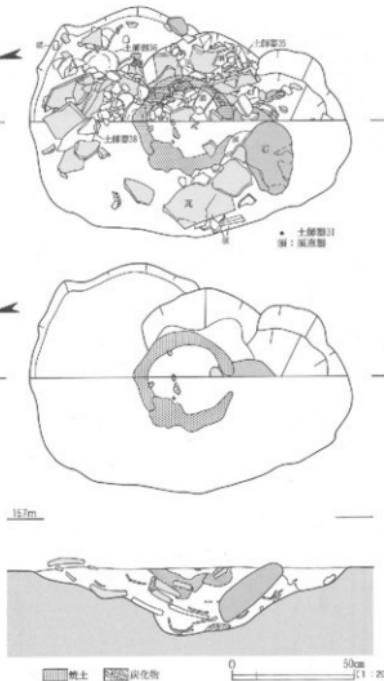


第16図 炉跡4遺構図

は、周辺の土(黄褐色土)にやや砂が混じったもので、石列が壊存する部分では特に瓦・石を多く含む。

西側(回廊基壇外側)の溝は素掘りで、東側のように基壇の縁取り的なものはみられないが、溝掘方が直線的でなく、埋土に瓦・石を多量に含むことから、雨落溝を中心と周辺の遺物を投棄するために溝を拡大するかたちで、後に擾乱を受けたものと考えられる。埋土中の石の存在を考えれば、基壇西端にも石が用いられた可能性がある。

根石及び礎石を設置するための据込み穴は明瞭ではないが、サブトレレンチによる断面観察では、a-a'・b-b'共に東側(内側)柱列の柱穴のみ深く大きい。柱穴の埋土には、検出面から45cm下にある地山粗砂を含む。同様の埋土をもつ柱穴を東側柱列でもう1カ所確認したが、西側柱列には存在しない。柱穴上層には礎石のための据込み穴と考えられる層が存在するため、この柱穴列は、回廊が造られるより前段階のもので、回廊東側柱列と同位置に据立柱脚 S A 05が存在していたと考えられる。断面 a-a' の柱穴底では長さ24cm幅19cmの礎板を検出した。回廊北側の東西溝は、埋土下層にレンズ状堆積した粗砂層が何層か確認でき、実際に雨落溝として機



第17図 炉跡5遺構図

能していたことが推定されるが、この溝は瓦溜を切って造られていることから、回廊は主要堂塔よりも後出であり、主要堂塔の整備中は据立柱脚により内外の区画をしていたものと考えられる。

出土遺物は、瓦が主とし、包含層中からではあるが銅製獸頭(1)・金銅製帶先金具(2)・菩薩立像石仏(10)・方形三尊佛(6)・六尊連立佛(9)・螺旋(11)などの塑像片が出土している。
(河平)

炉跡 僧房周辺と西面回廊周辺で、炉跡を7基確認した。検出面の炉跡の被熱範囲は直径20~40cmである。調査は検出面までとし、建物基壇外に築かれた炉跡4・5について半裁して調査した。炉跡周辺からは鉄型・埴堀・礎羽口・鉱滓など金属工房に関連する遺物が多く出土している。

炉跡1・3は、僧房の中央室廻に位置し、炉中央に還元硬化した炉底を残す。炉跡3周辺から埴堀片1点出土。炉跡2は、僧房間通路に位置し、長径1.8m短径1.6mの土壙を有す。炉跡1~3は、僧房内の位置関係からみて、操業は僧房の維持管理下にあったことが推定される。

炉跡4は僧房S B 01の推定基壇から約2m南に位置

し、直径0.6mの鉢状の土壙に瓦を詰め、鉄床石が据えられていた。炉跡4西側の廐棄物層から、仏具の鎧型片1(53)・塔礎片2(59・60)・鉄釘(33)・焼土塊・漆付着須恵器(26)・記号漆書土器(23)などが出土している。出土土器の時期は7世紀末から8世紀前葉に比定される。

炉跡5は、僧房S B02の推定基壇から約8m北に位置する。長径1.3m短径0.9m深さ0.3mの浅鉢状の土壙内の南側に長さ50cm大の石を斜めに落し、瓦片・須恵器堀片・土師器坏頸を詰めて構築していた。土師器は、伯耆国府第2段階と推定される。炉跡4・5の土壙は、防湿・蓄熱・地盤強化のための築炉工法であろう。炉跡5周辺で蓮弁の鎧型(54)が出土。

炉跡6は、西面回廊北側に位置し、直径0.5mの円形土壙の南西部が凹んだ形のもので、やや内側に被熱による変色があり中央に僅かに炉底を残す。周辺から塔礎片2点(56・57)出土。

炉跡7は、西面回廊中程に位置し、直径0.2mの焼土のみ認められた。炉跡7の東側の西面回廊下層に、塔礎片1点(58)他7世紀後半代の土器を伴う工房廐棄土壙があるが、炉跡6・7の操業時期と回廊の建立時期との関係は断定しがたい。

僧房北 僧房S B02推定基壇北辺から北5.5mの位置に南北約4mの基壇痕跡を、その両側に瓦堆積を確認した。遺構として把握するためには広範囲の調査を要し、ここでは建物痕跡の可能性にとどめておく。調査区内では、瓦の他多量の土器が出土し、煮沸具・食器類など種類も多い。それらの時期は伯耆国府第2段階の9世紀後半を主として、7世紀後半～II世纪代に比定される。(根鈴)

3 寺域外施設

東溝S D01 平成7年度調査・第1次～3次調査で確認した、築地壠の外東を北流する溝である。東築地壠推定線から第1次調査区での東溝までは約30mである。埋土は砂の堆積層が主で、機能時には水が流れていると判断される。東溝はやや蛇行しながら北北東に流れる。第3次調査検出地点と平成7年度調査検出地点を結んだ方向はN20°Eである。第2次調査トレンチ3では、部分的に深く抉りながら東側に広がり、検出面での最大幅は6.2mだが、本流と呼べる部分は幅1.7m、深さ0.6mである。

第1次調査トレンチ8では、東岸にそって護岸状の施設が検出された。護岸状の施設は、直徑数cmから10cm程度の木杭を15～40cmの間隔で打ち、杭列に沿って幅3～13cm、長さ20～98cmの板状の材を渡し、さらにその東側(岸側)に石を詰め込む。石は、南北方向(溝の走向)に長軸をそろえるものが多い。その東に接して、護岸状部分に

ほぼ直交する方向で2m×0.7mの範囲に平瓦を伏せて敷き並べた部分がある。現地は発掘調査時も湧水があり、非常にぬかるんでいたことから、敷瓦部分は安定した道路面を確保するための施設かと考えられるが、延長線上には同様の遺構は確認できなかった。

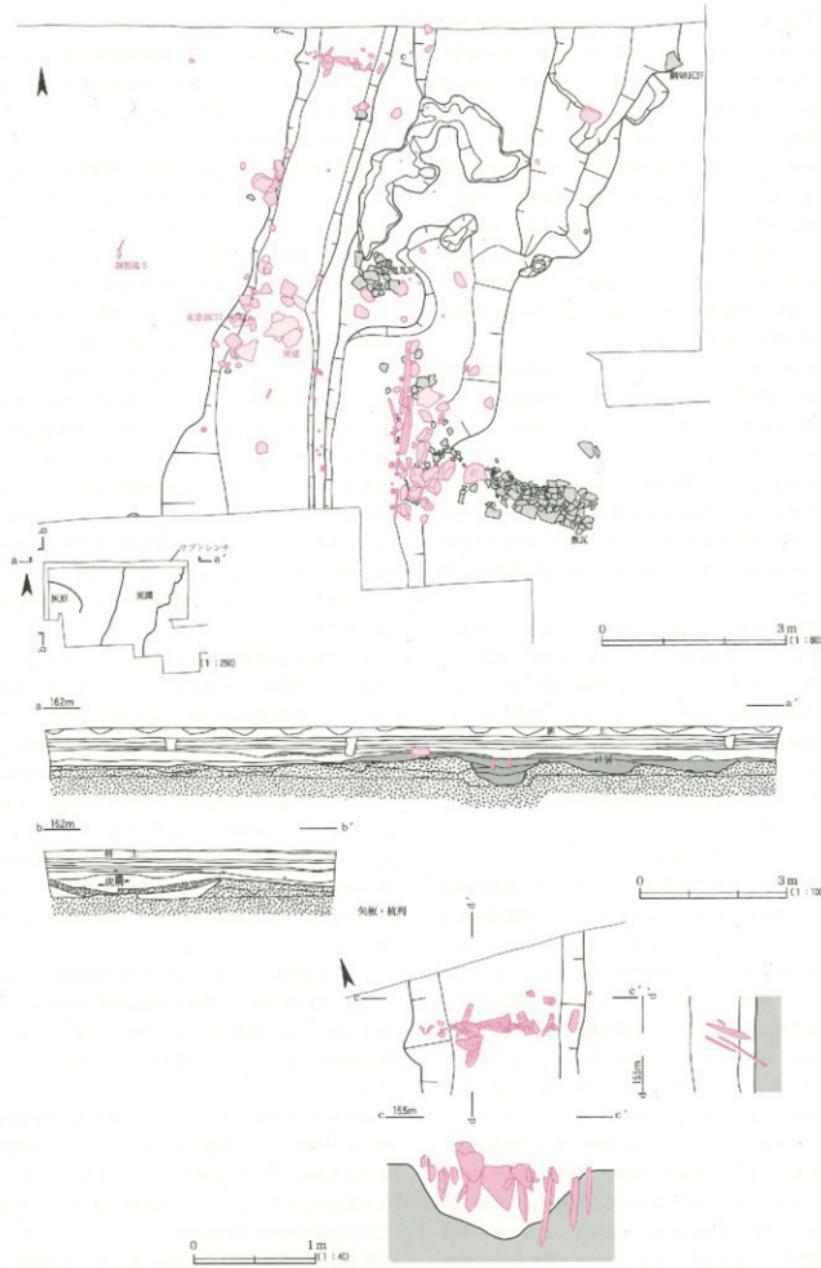
護岸状部分から約6.5m北(下流)で、溝本流部分に堰をするように、水の流れに直角に打ち込んでいる矢板・杭を検出した。矢板は15枚、杭は5本打ち込まれている。矢板列は先端部が溝底面に届いてないため、東溝が造られた時と矢板が打ち込まれた時の時期差が考えられる。杭には、角材を先端加工したものと、樹皮の残る枝に先端加工のみ施したものがある。矢板は流路中央に幅広のものを打ち、岸へ近づくほど幅が狭い。流路に矢板を打って堰をする目的としては、水位調節や、流路の変更などが考えられるが、検出した矢板列は、水流を完全に遮るほど強固に、また密に打たれていない。矢板列の深さもそう深いものではなく、水位調節とは考えにくい。その付近では、東溝は前述したように部分的に深く抉れながら東に広がっているが、流路を堰止めで整然と東側に水流を変更したような様子でもない。矢板列の下流部分が未調査なこともあり、現段階ではこの矢板列の性格は不明である。

第1次調査部分(護岸状部分周辺)を中心に埋土中から多量の瓦・土師器・須恵器が出土した。軒瓦は第2段階のものから最終段階のものが、鬼瓦(32)はII類が出土した。土師器・須恵器は7世紀のものから10世紀前半までのものが認められるが、9世紀の土師器が中心である。土師器・須恵器には墨書きがあるものが破片点数で161点ある。埋土中から遺物がこのように多量に出土しているのは、東溝の中ではこの位置のみであり、多量の墨書き土器の存在も含め、護岸状部分周辺は祭祀空間であったことが推定される。同位置の埋土中からは押出伝片(4)も出土している。

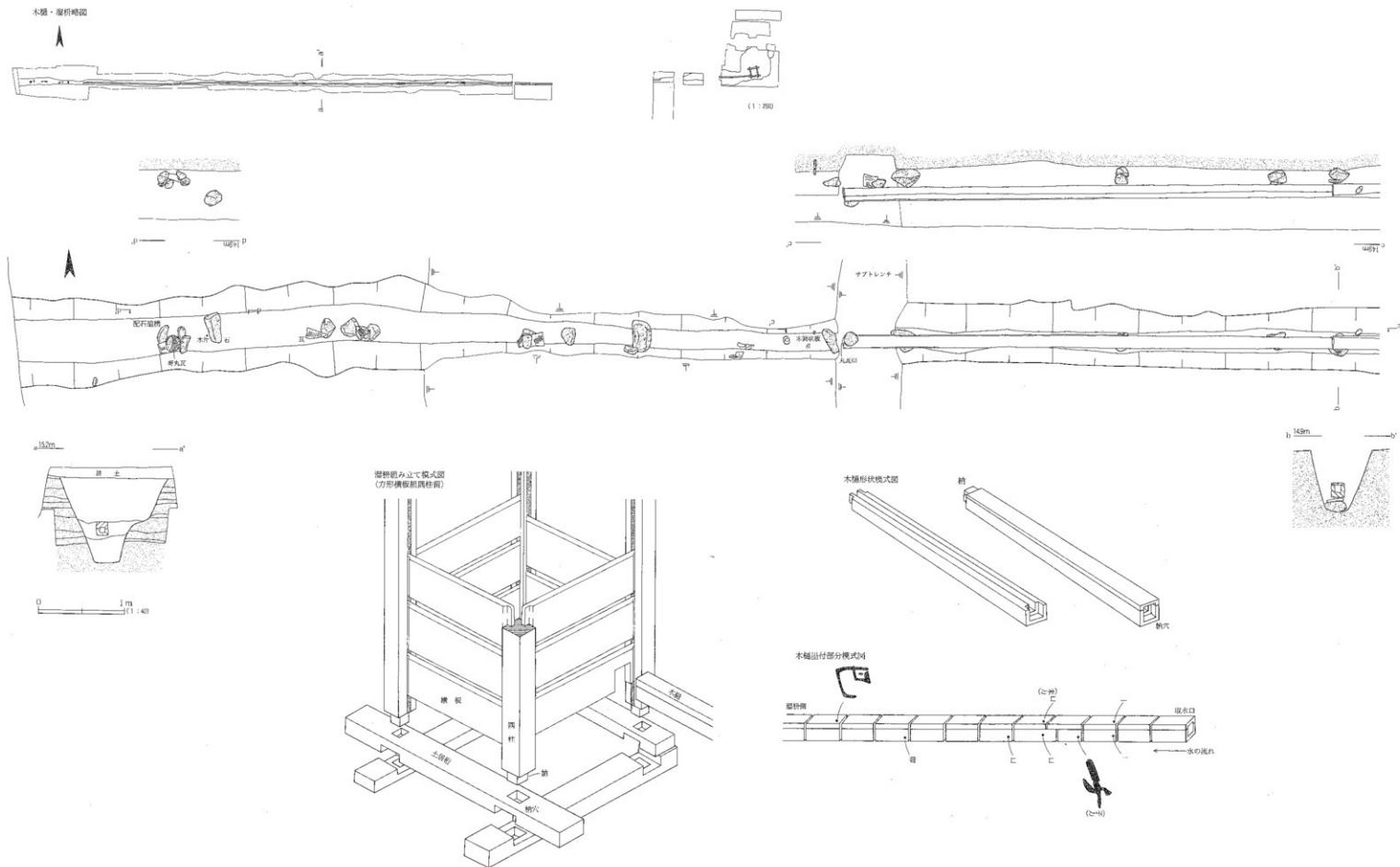
また、東溝西岸から西に2.2mの位置で銅製匙(5)が出土した。匙は検出面から数cm上の包含層最下層から、表向きに出土した。匙面と柄は既に折れ、分離していた。匙面も割れており、そのうち數片はすでに失われた状態であった。

東溝周辺から窯室が多く出土した。中には、須恵器高杯・瓦が窯窓している個体(72)がある。また第2次調査地では東溝から西に3.5m離れて、炭を多量に含む巨大な土壙が検出されており、これを灰原と考えれば、周辺に瓦陶兼窯室の存在が推定される。(岡平)

木橋S X01 平成6年度調査および第1次・4次調査において検出した、寺域外西側から湧水を寺域内にある溜



第18図 東溝S D01構造図



第19図 木橋S-X01遺構図、木橋・橋脚模式図

橋まで導水する上水施設である。湧水地点から溜柵までは溝内に木樋を連結して埋め戻し、暗渠としている。溝は、検出面での幅1.0～1.6m、深さ0.7～0.9mで、断面逆台形である。木樋は溝底面に高さ調節のため石・瓦を置いた上に設置される。取水口から溜柵内の木樋終点までは総延長96.2m、高低差は0.39mである。西築地塀心から取水口(木樋先端)まで約77mである。第1次調査では取水口から12本分を、平成6年度調査では西築地塀付近を、第4次調査では最終の1本および溜柵を調査した。また、昭和44年には、工場造成に伴い連結部を含め5.7m分が切り取られた。第1次調査の結果、この時切り取られたのは、第1次調査の東に連続する取水口から12・13本目(以下、何本目という場合は取水口からの順番である)の木樋であることが分かった。確認されていない13本目以降最終の1本までを、1本6m弱の木樋が連結されると仮定すると、あと4本の存在が推定され、取水口からS E 01まで合計18本の木樋が連結されていたことになる。第1次調査の結果では、取水口から12本目の途中までの高低差は0.22mだが、その内の数本は工場基礎下の松杭が打ち込まれた影響をうけている可能性がある。平成6年度調査検出時のレベル、18本目の勾配(それのみで0.13mの高低差)から復元すると、1本目以降15本目までは高低差10cm程度で、最後の3本で約30cmの落差をつくなっていたと推定される。

取水口には10cm四方の丸瓦片が1片立てかけた様な状態で出土した。また、取水口の上約15cmには、直径約15cmの丸石が設置されているが、他に特別な施設は認められなかった。

木樋は、1辺15cm程度の杉の角材を縦に裂き、蓋・身に分け、約6cm角の導水部分をくり抜いてつくられる。表面は手斧で仕上げられ、加工痕を良く残す。木樋は枘組で連結される。枘は幅9cm前後、長さは20cm前後。基本的には上流側の木樋が枘をもち、下流側の木樋が枘穴で受けるように連結されている。木樋1本の長さは18本目を除き、ばらつきがあるものの、枘を含め5.30～5.83mである。そのなかで4本日のみ3.93mと格段に短い。18本目は溜柵内で切断されて終わるため、4.55mである。4本目と5本目の連結部は、身は4本目枘、5本目枘穴で他と同じだが、蓋が4本目枘穴、5本目枘になっており枘・枘穴の関係が逆転している。長さが4本日のみ短いことからも、敷設時に異変があり、差し替えられた可能性が考えられる。3～6本目・9本目・11本目には上流側の端部に墨書きが認められた。中には「卯」「巳」と読めるものがあり、干支を用いた番付かと考えられる。また、枘組の関係が他と違う4本目蓋には、身の長さに

合わせて縦筋の墨付がなされている。

取水口から西にも、木樋を設置するための溝が延びており、溝底には高さ調節用の石が置かれている状態であった。木樋1本目の取水口には枘穴がつくられており、木樋は、計画としては、さらに西に長く延びるものであった可能性がある。

取水口から西へ7.7mの溝底に、軒丸瓦IXa類を石・瓦で囲むようにして配置した配石遺構が確認された。高さとしては、木樋を西に延長した場合の高さ調整としても使用可能ではあるが、瓦当面を上に向けてそれを中心に石が置かれていることから、祭祀遺構として考えたい。他に、取水口から西に35cm地点から、木簡板状(8I)が溝底に刺さった状態で出土した。
(圖平)

溜柵 S E 01 溜柵は西築地塀から約20m東側の守城内に存在し、木樋によって導かれた水を溜置く施設である。遺構検出面の掘方は東西4.4m×南北4.6m、深さ1.36mとほぼ隅丸正方形で、底面は東西2.2m×南北4.6mと隅丸長方形である。溜柵は掘方南辺に寄っており、南西隅に木樋が取り付く。掘方北辺は一部旧工場の基礎工事によって壊されている。

溜柵の規模は内法で東西0.99m×南北1.44m、高さ0.92m遺存し、容積約0.9m³分で、方位はN12° Wである。

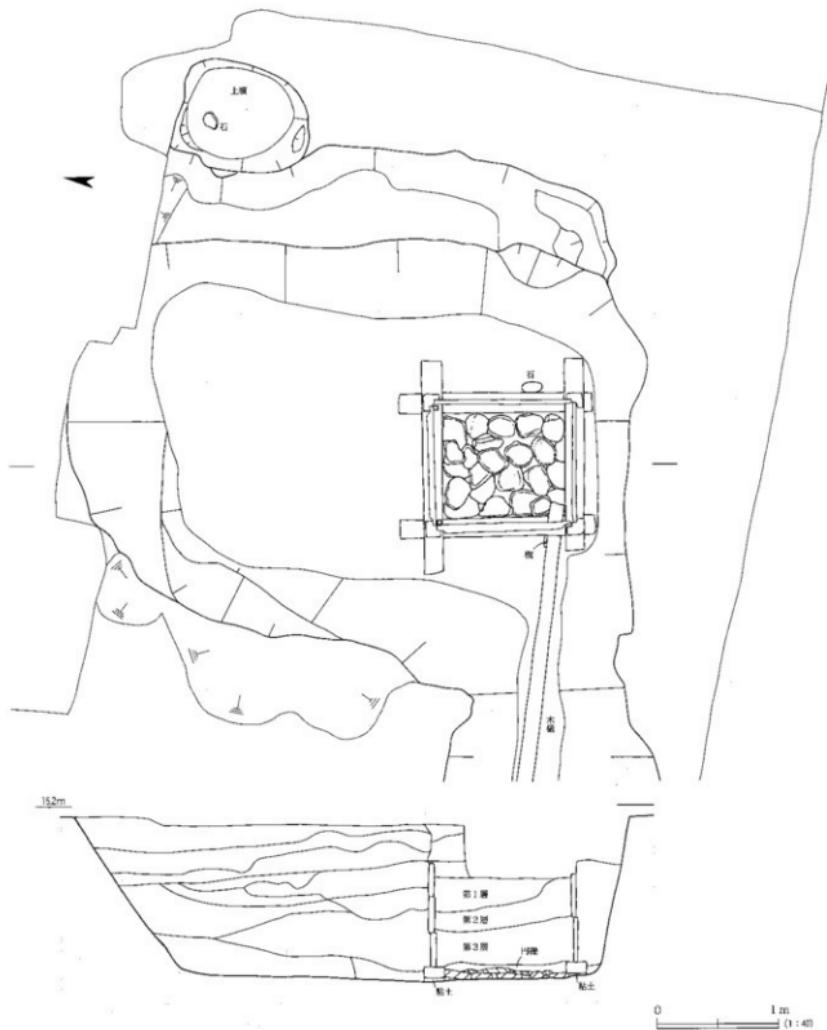
溜柵には何らかの覆屋があったことを想定して遺構の検出に努めたが、溜柵掘方の北東隅で土壙が1つ確認できたに止まる。

構築方法は、基底部に相欠接で角材を井桁に組み、交差する四隅に枘穴を穿ち、各隅に内側2方に溝を設けた漏柱を立て、各辺に横板を落とした構造である(方形横板組漏柱留)。土居桁内の底は約20cm大の平石を敷き、その上に数cm大の円礫を土居桁上面の高さまで詰める。南西隅には木樋が西土居桁に乗る形で取り付く。接合は横板を四角に切り取ってはめ込んであり、接合部の隙間に楔が北側で3枚、南側で1枚打ち込んでいた。木樋は溜柵に約81°で取り付く。

部材は木樋と同様に杉材で、緻密な赤身の柾目材である。ただし、横板材の1点のみ白太が一部遺存していた。年輪年代測定法で鑑定したところ推定伐採年が約730年頃と判明した。(鑑定結果については第5章第2節に詳述。)

溜柵掘方の遺物は、多量の瓦片と、7世紀後半から8世紀前半の多量の土器片が出土した。このうち須恵器のスタンプ土器(83・84)は久米寺の略である「久寺」と施印されている。

溜柵内の遺物は瓦・土器・木製品等が出土した。土器は円礫の上面で須恵器(50・52・56～58)・土師器(62・65

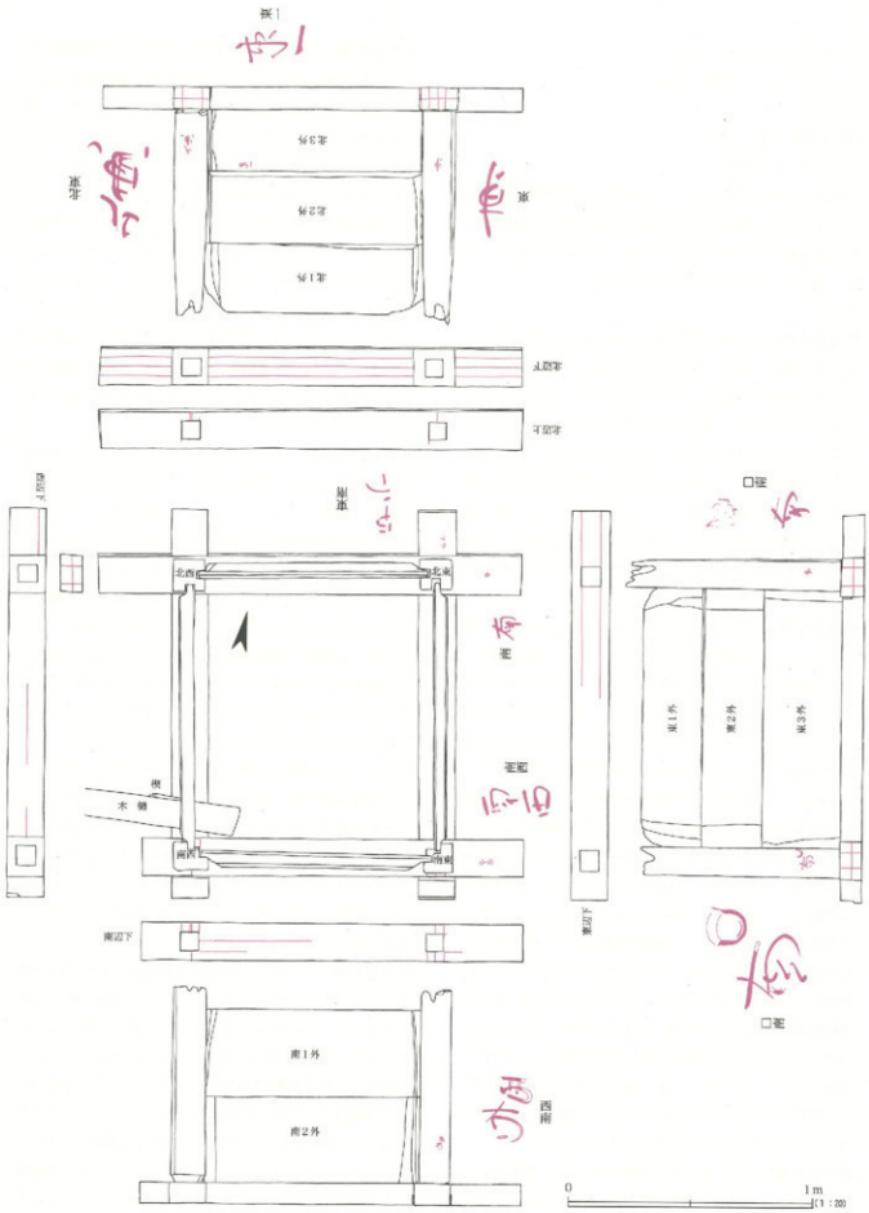


第20図 深堀S E 01遺構図

～67・71)が出土している。完形に近いものが多く、8世紀前半頃の遺物で須恵器が主である。また、木製品が上から3層目で多く出土した。その種類は、木簡形・木簡状板・楔・土掘具・曲物・網代・箸片・棒片・匙・杓子・柄杓・栓?・器片・独楽(未製品)・袍・人形・馬形・船形等、有頭棒状・簾串・横櫛片・布(漆絞布)がある。自然遺物は樹枝・炭化材・葉・シダ茎・種子等が出上し、特に種子はモモをはじめとして種類・量とも多かった。(鑑

定結果については第5章第4節に詳述。)

溜柵の部材には番付と墨付が遺存している。番付は桟板に1カ所、隅柱3本5カ所、土居柵3本3カ所の合計9カ所に遺存しており、一文字ないし二文字で方位を記している。ただし、番付方位は実際の設置方位に比べると、90°左回りにずれている。墨付は土居柵4本のいずれにも遺存しており、主に上面と小口に存在するが、北土居柵は裏面にも存在する。また、土居柵小口8カ所のうち、



第21図 溜枡番付・墨付図

南面する2カ所と西面する南側の1カ所の計3カ所は、

切り口が汚く墨付が遺存せず、溜枡設置の際に掘方いっ

ぱいに寄せるために切断したものと思われる。

(加藤)

註

1 第2章 註に同じ。

2 森下哲哉 「駒経寺地区」『倉吉市内道路分布調査報告書』

第4節 遺物

I 瓦類

数次にわたる発掘によって多量の瓦類が出土している。ほとんどが丸瓦と平瓦だが、軒丸瓦15型式18種377点、軒平瓦5型式98点が出土している。この他にも鳩尾、鬼瓦、道具瓦、文字瓦等が出土している。

軒丸瓦

軒丸瓦I類(1) 単弁8弁蓮華文軒丸瓦。中房は凸形で1+6の蓮子を置く。弁弁は楔状を呈し、蓮弁は丸みのある無子葉弁で弁端がわずかに反転する。外区は高い直立線で構成される。丸瓦の接合位置は高く、瓦当と丸瓦凹面の接合粘土量は少ない。瓦当裏面はナデ、側面は強いヨコナデによって調整される。復元される瓦当径は約17cm。胎土は大粒の石英粒子を含みやや粗い。色調は黄色で、焼成は軟質である。昭和48年度調査で9点、SA02から1点出土している。いずれも焼成が軟質で黄褐色を呈している。軒丸瓦の2.7%を占める。

軒丸瓦II類a(2) 複弁8弁蓮華文軒丸瓦。中房は凸形で1+8の蓮子を四角形気味に置く。蓮子の周囲は凹み蓮子周環状をなす。蓮弁は彫りが深く、各弁ごとに丸みのある長大な子葉2個を配している。外区は三角線で構成され、表面は素文であるが内線に圓線をつける。瓦当裏面の端部近くを円弧状に穿ち、凸面を僅かに加工した丸瓦を接合し、凹凸面とも少量の接合粘土で固定する。凹面は指頭圧痕がわずかに残る。瓦当は厚く裏面は平坦で、ナデ調整され、側面はヨコナデ調整されている。瓦当側面の断面は、瓦当面より直線的に立ち上がり、裏面寄りは内傾する。裏面側、内傾している部分に木目がかすかに残るものがあることから枷型が使用された可能性がうかがえる。瓦当径17.3cm。胎土は砂粒を含むものの比較的緻密。色調は灰褐色を呈し、焼成はやや軟質。松ヶ坪遺跡昭和48年度調査及び第1次調査で19点、SA02から5点、中心堂塔周辺から8点等、計43点が出土しており、全体の11.4%を占める。なお、他のII類aは黄褐色を呈して軟質のものから、灰褐色を呈し須恵質のものまであり、なかには瓦当面が黒色のもののがみられる。

軒丸瓦II類b(3) 複弁8弁蓮華文軒丸瓦。II類aとほぼ同じだが、外区の三角線が幅広くつくられている。瓦当径18.7cm。胎土、調整技法等もII類aと同じ。松ヶ坪遺跡昭和48年度調査及び第1次調査で7点、SA02・SD01から3点、中心堂塔周辺から2点等、計14点出土しており、全体の3.7%を占める。

軒丸瓦III類(4) 複弁8弁蓮華文軒丸瓦。瓦当文様の構成は、基本的にII類と同じ。中房周縁に細い圓線をめぐらし、円形状に置かれる蓮子に周環状の凹みがなく、蓮弁がII類に比較して小振りなものとなっている。瓦当と丸瓦の接合はII類と同じであるが、瓦当側面の断面はく字状に屈曲し、屈曲する線をハケ目で消している。また、瓦当側面の裏面側に木目が残るものがあり枷型の使用が考えられる。瓦当径18.0cm。胎土は大粒の石英粒子を含むものの比較的緻密。色調は灰褐色を呈し、焼成はやや軟質。松ヶ坪遺跡昭和48年度調査及び第1次調査で10点、SD01から2点、中心堂塔周辺より7点等、計23点が出土しており、全体の6.1%を占める。他のIII類の色調と焼成は、黄色褐色を呈し軟質のものから灰褐色を呈して硬質のものまで存在する。

軒丸瓦IV類(5) 複弁8弁蓮華文軒丸瓦。瓦当文様の構成は、基本的にII・III類と同じ。大きく異なる点は、中房がII・III類より大きくなられ、蓮子を1+7置く。蓮弁は大型であるが彫りが浅い。瓦当面の外区部分に粘土を押し込み、その後に内区部分に粘土を押し込んで瓦当をつくる。瓦当と丸瓦の接合は、瓦当裏面に円弧を穿ち丸瓦を差し込む。丸瓦の先端は、凸面が削られているものの、刻み等の加工はなされていない。瓦当裏面は、ナデ調整されるが充分ではなく、指頭圧痕が残る。瓦当側面は横方向に2段のヘラケズリで調整されているが、痕跡等から枷型が使用されたと考えられる。なお、接合される丸瓦の内面には粘土紐巻状痕跡が残る。復元される瓦当径は約19cm。胎土は少量の大粒の粒子を含むものの比較的緻密である。色調は明灰褐色を呈し、焼成はやや軟質。松ヶ坪遺跡昭和48年度調査及び第1次調査から5点、SA02から2点の計7点が出土しており、全体に占める割合は1.9%である。なお、他のIV類には須恵質に焼成されているものもある。

軒丸瓦V類(6) 複弁8弁蓮華文軒丸瓦。瓦当文様の構成は、基本的にII類～IV類と同じ。中房周縁に細い圓線をめぐらし、周環をもつ蓮子を1+7置く。蓮弁は小ぶりであるが彫りが深い。瓦当の成形及び丸瓦との接合、調整等はIV類と同様である。復元される瓦当径は15.5cm。胎土は緻密で、色調は明灰褐色を呈し、焼成は良好である。松ヶ坪遺跡昭和48年度調査及び第1次調査から6点、SA02・SD01周辺11点、SA01付近7点、中心堂塔付近からは19点等、計46点出土し、全体の12.7%を占めている。

軒丸瓦VI類(7) 複弁8弁蓮華文軒丸瓦。中房は凸形で周縁に圓線をめぐらし、周環をもつ蓮子を1+4+8に置く。蓮弁は平面的であるが、子葉は大きく丸みをもつ。

外区は三角縁につくり、内斜面に密珠文を配し、内縁に圓線をつける。IV類と同様に笠型の外区部分に粘土を押し込み、その後に内区部分に粘土を押し込んで瓦当をつくる。瓦当と丸瓦の接合は、瓦当裏面に円弧を深く穿ち丸瓦を差し込む。丸瓦の先端は加工されていない。瓦当は厚く、裏面はほぼ平坦でナデ調整される。側面はハケメ調整されているが、瓦当面寄りに笠型と柳型の合せ目と思われる痕跡がある。瓦当径は16.5cm。胎土は緻密で、色調は灰褐色を呈し、焼成は良好である。松ヶ坪遺跡昭和48年度調査及び第1次調査で10点、S A02から3点、中心堂塔構付近から4点等、計19点出土し、全体の5.1%を占めている。全体に焼きしまったものが多い。

軒丸瓦VII類(8) 複弁8弁蓮華文軒丸瓦。瓦当文様の構成及び成形・調整技法はVI類と同じであるが、蓮弁が小さくつくられている。復元される瓦当径は15.0cm。胎土は緻密で、色調は灰褐色を呈し、焼成は良好である。松ヶ坪遺跡昭和48年度調査で2点、S C01から2点等、計6点が出土しており、全体の1.3%を占める。

軒丸瓦VIII類(9) 複弁8弁蓮華文軒丸瓦。中房は平坦で周縁に太い圓線をめぐらし、1+5+9の蓮子を置く。蓮弁は平面的に表現されているが、先端は強く反転する。外区は低い三角縁につくり、表面に線鋸齒文を配し、内縁に太い圓線をめぐらす。この線鋸齒文は、鉢齒文内を2分割するかのような凸線が表現されている特異なもの。瓦当と丸瓦の接合は、笠型に粘土を押し込んで瓦当面をついた後、凹面を模状にカットした丸瓦を瓦当の側端にそって差し込み、瓦当裏面全体に粘土を補充しおこなっている。瓦当と丸瓦がはずれた状態で出土したものがほとんどみられないのが特徴。瓦当裏面はナデ調整されるが、裏面の下端にそって強いナデを施している。側面はヨコナデ調整。なお、接合される丸瓦は大型で凸面がカキ目調整されているものが多い。瓦当は厚く、裏面は平坦につくられる。瓦当径19.4cm。胎土は白色粒子を含みやや粗く、色調は灰褐色を呈し、焼成は良好である。松ヶ坪遺跡昭和48年度調査及び第1次調査から35点、S A01から4点、S A02から22点、中心堂塔付近から30点等、計110点が出土しており、全体の29.2%を占めている。焼成が良好で須恵質のものと、黄褐色を呈し軟質のものが半々。なお、全体的に厚くつくられているものが多いが、なかには厚さが半分程度につくられているものもある。

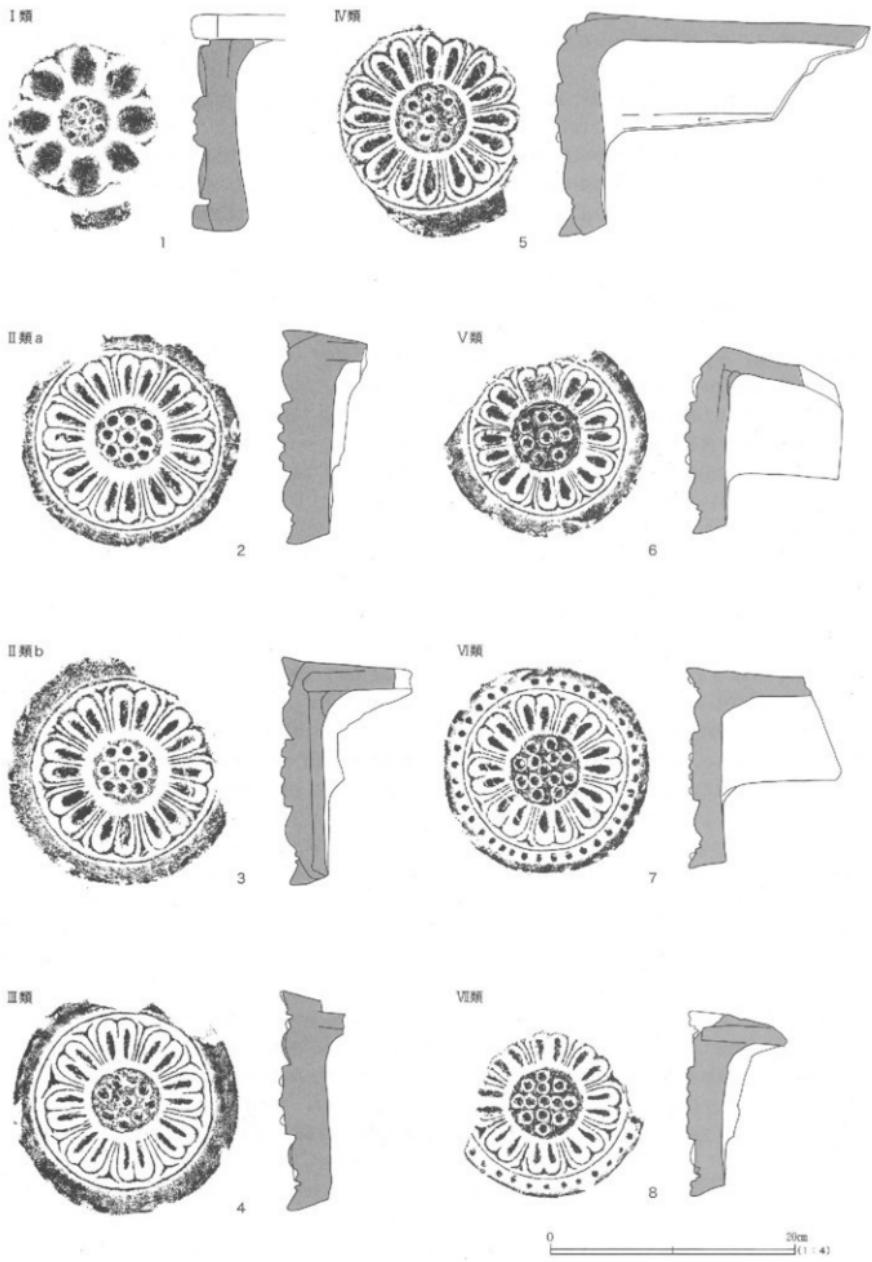
軒丸瓦IX類a(10) 複弁8弁蓮華文軒丸瓦。瓦当文様の構成はVII類に似る。中房は平坦で周縁に太い圓線をめぐらし、1+8+8の蓮子を置く。蓮弁は平面的で花弁端が切り込まれておらず、かつ、間弁が表現されていない。

外区は低い三角縁につくり、表面にVII類と同様の線鋸齒文を配する。瓦当と丸瓦の接合もVII類と同様であるが、丸瓦四面のカットが浅く、瓦当裏面に補充される粘土量が少ない。このため瓦当と丸瓦が接合面ではがれています。瓦当裏面はナデ調整されるが、丁寧でなく指頭圧痕が残る。瓦当は薄くつくられているが、裏面中央部より下端がより薄くなっている。瓦当径19.6cm。胎土は砂粒を含むものの比較的良好で、色調は暗灰褐色を呈し、焼成はやや軟質である。S B05とS B01の間から1点出土。

軒丸瓦IX類b(11) 複弁8弁蓮華文軒丸瓦。胎土や各連弁の特徴はIX類aと同範囲をうかがわせる。ただし、aの蓮弁の子葉は中房縁の圓線に接続していないのに対し、bは接続している。また、蓮子の大きさが違う、蓮弁の彫りがaよりもbが浅くなっている等の相違点も認められる。大きく異なる点は、外区外縁がIX類aの1/3程度しか表されていないところである。瓦当側面、特に下端部に笠型と柳型との合せ目痕跡が残る。瓦当は薄くつくられている。以上のことから、IX類aの笠型がつくりなおされた可能性が考えられる。瓦当径17.3cm。胎土は砂粒を含むものの比較的良好、色調は灰褐色を呈し、焼成も良好で硬質である。S X01の祭壇遺構から1点出土している他、松ヶ坪遺跡昭和48年度調査及び第1次調査から26点、S D01から3点、中心堂塔付近から6点等、計48点出土しており、全体の12.7%を占める。焼成が良好で須恵質のものから黄色褐色を呈する軟質のものまであるが、全体に焼成良好のものが多い。

軒丸瓦X類(12) 単弁12弁蓮華文軒丸瓦。中房は半球状を呈し、周縁に細い圓線をめぐらし、1+7の蓮子を置く。蓮弁は、有子葉單弁で太い棒状の子葉を配し、先端が尖形でわずかに反転気味に表現される。間弁は独立せず、界縁となって蓮弁の周開をめぐる。外区は三角縁につくり、表面に直鉢齒文を配する。瓦当裏面上端に浅い円弧を穿ち、丸瓦の先端を押し付け、凸面と凹面の両側から接合粘土をあてる。内部の接合粘土の量は比較的多く、接合線は台形状を呈する。瓦当径15.7cm。瓦当の厚さは薄く、瓦当裏面と側面ともナデ調整される。胎土は砂粒を含み、色調は灰褐色を呈し、焼成はやや軟質である。松ヶ坪遺跡昭和48年度調査及び第1次調査から2点、S D01から1点、計3点出土している。

軒丸瓦XI類a(13) 単弁12弁蓮華文軒丸瓦。瓦当文様の構成は基本的にX類と同じ。大きく異なる点は、中房が平坦につくられた蓮子を1+8置くことである。瓦当と丸瓦の接合は、瓦当裏面に浅い円弧を穿ち、丸瓦の上端をあて、瓦当裏面全体に粘土を補充しておこなっている。接合される丸瓦の凹凸面にはそれぞれ刻みがつけられて



第22図 軒丸瓦1

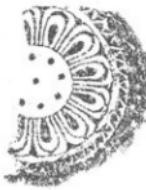
VII類



9



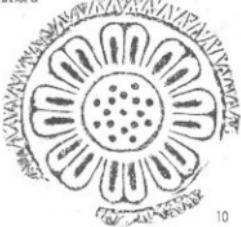
XI類b



14



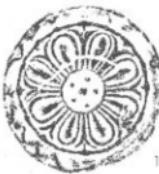
IX類a



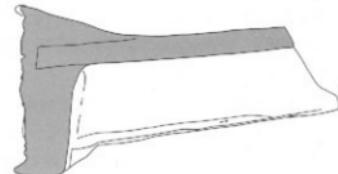
10



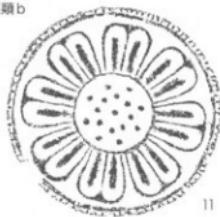
XI類



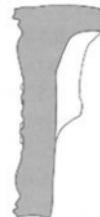
15



IX類b



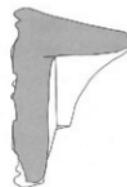
11



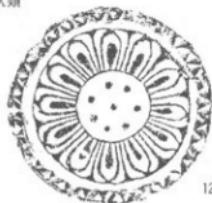
XII類



16



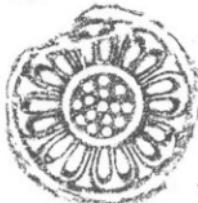
X類



12



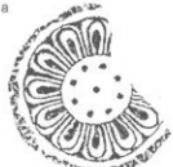
XIV類



17



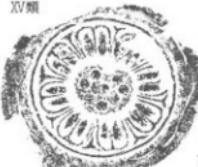
XI類a



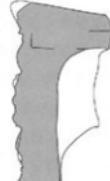
13



XV類



18



0 20mm
(1 : 4)

第23図 軒丸瓦2

いる。瓦当の裏面、側面ともナデ調整されるが丁寧さはない。瓦当径15.0cm。瓦当の厚さはやや厚い。胎土は比較的緻密で、色調は明黄褐色、瓦当面の一部が黒褐色を呈している。焼成は軟質。松ヶ坪遺跡昭和48年度調査から3点等、計4点が出土している。

軒丸瓦X I類b (14) 単弁12弁蓮華文軒丸瓦。X I類aの範型を使用してつくられたと考えられるが、外区が大きく傾斜線となっている。瓦当と丸瓦の接合方法、瓦当裏面及び側面の調整技法等もX I類aとほぼ同じ。ただし、胎土が大きく異なり、砂粒を多く含む粗いものとなっている。色調は明黄褐色を呈し、焼成は軟質である。復元される瓦当径は約18cm。中心堂塔付近、特に塔跡周辺から14点、講堂付近から3点等、計23点が出土しており、全体の6.1%を占めている。

軒丸瓦X II類 (15) 単弁8弁蓮華文軒丸瓦。中房に1+5の蓮子を置くが、中心の蓮子が大きくなっているためか半球状気味で周縁に圓線をめぐらす。蓮弁は中房側が細く先端が太い子葉を配した有子葉弁で先端が丸くつくられる。間弁も大きく表現されている。内区外縁に圓線をめぐらし、蓮弁と間弁先端の圓線上に珠文を配する。外区は三角線で内面に内線鉢齒文を表す。瓦当と丸瓦の接合は、範型に粘土を押し込んで薄く瓦当面をつくり、その瓦当面の端部より内側に丸瓦を置き、瓦当裏面に粘土を補充し、丸瓦凸面にも接合粘土を施しおこなっている。接合される丸瓦の先端は未加工であるが、凸面に刻みをつけている。なお、接合線は台形を呈する。瓦当裏面は軽くナデ調整され、側面もナデ調整されるが瓦当面より範型と施型の接合線と思われる線がめぐる。また、接合後に瓦当から丸瓦の凸面が一体的にヘラケズりされる。瓦当径13.0cm。瓦当は厚く、裏面は狭いものの平坦。胎土は砂粒を含むものの良好で、色調は明灰褐色を呈し、焼成はやや軟質である。松ヶ坪遺跡昭和48年度調査及び第1次調査から3点、S D01周辺から6点等、計13点が出土しており、全体の3.5%を占める。

軒丸瓦X III類 (16) 単弁8弁蓮華文軒丸瓦。瓦当文様の構成は基本的にX II類と同じ。蓮弁が鋭角的に彫られ、内区外縁をめぐる圓線上の珠文は失われている。また、外区の内面には面連鋸齒文が配されている。瓦当と丸瓦の接合方法、及び調整技法はX II類と同じである。瓦当径14.0cm。瓦当は厚く、裏面は平坦。胎土は砂粒を多く含み、色調は灰褐色、焼成は比較的に良好である。S A01から1点等、計2点が出土している。

軒丸瓦X IV類 (17) 複弁8弁蓮華文軒丸瓦。普通の瓦当面と凹凸面が逆になっており、一見、範型を思わせるものの、VII類の瓦当面を元型としてつくられたものであるが、

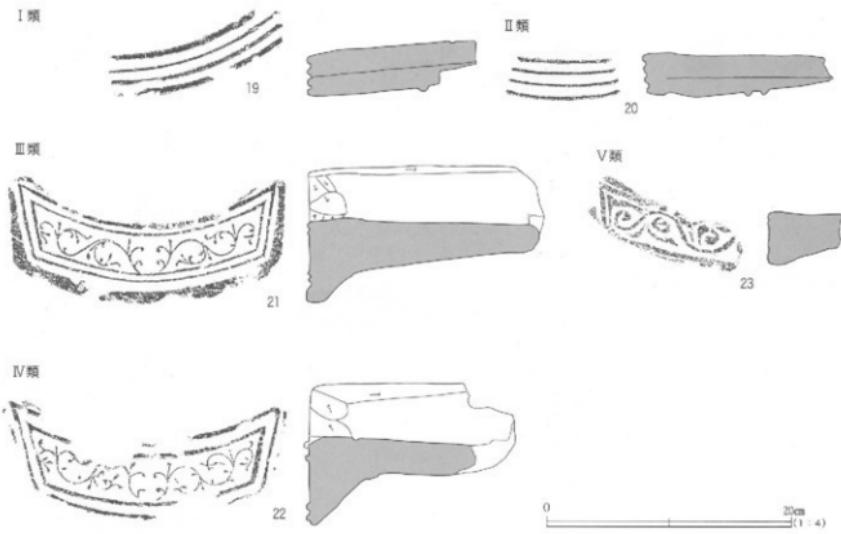
内区部分のみ表されている。瓦当面と丸瓦の接合は、瓦当面の端部に接して丸瓦を置き、接合粘土を施している。瓦当裏面は平坦で、ナデ調整され、側面はナデ調整されるが木目が残る。瓦当径16.5cm。胎土は砂粒を多く含み、色調は灰褐色を呈し、焼成は良好である。S D01とS C01からそれぞれ1点が出土している。

軒丸瓦X V類 (18) 複弁8弁蓮華文軒丸瓦。II類ないしIII類を元型として範型を作製し、その範型からつくられたものである。したがって、瓦当文様が鮮明さを欠き、内区の径が約25%縮小している。瓦当裏面を円弧状に穿ち、先端が加工されていない丸瓦を押し込んで接合する。接合位置が瓦当裏面の中程になり、接合線は台形を呈する。瓦当裏面はナデ調整され、側面はヘラケズリ後、ナデ調整される。瓦当径15.5cm。瓦当は厚く、裏面は平坦。胎土は砂粒を含み、色調は灰白色を呈し、焼成は比較的良好である。S D01から1点が出土している。

軒平瓦

軒平瓦 I類 (19) 四重弧文軒平瓦。瓦当両端部を三角形に切り落とし、頸は深い段頸で、頸面奥の端部近くに凸線を配する。平瓦を成形し、段頸部分に粘土板を貼り付けた後、挽き型によって瓦当文様を施す。四重弧文は、弧線と四線の太さがほぼ同じで、四線の底面が平坦気味になっている。頸面の深さは個体によって0.5cm内外の差があるものの、凸線と段は形態や法量がほぼ同じで規格的である。このことから、頸面の成形にも挽き型がもちいられたと考えられる。平瓦と段頸部分の接合は、平瓦成形時の格子叩き目を利用しておらず、この部分で剥がれたものが多い。ただし、なかには平瓦の接合面に刻みをいれるものもみられる。平瓦凹面の瓦当面近くにはナデ調整されるが、他は布目を残す。頸面はナデ調整されるが、挽き型のあて痕跡が残る。完形ないし大型の断面の出土がないため全容は不明だが、平瓦凸面は深い位置までナデ調整される。平瓦側面はヘラケズリが施される。瓦当の厚さは4.3cm。胎土は砂粒を含むものの良好で、色調は黄褐色を呈し、焼成は普通。松ヶ坪遺跡昭和48年度調査及び第1次調査から21点、中心堂塔周辺から11点等、計44点が出土。全体の44.9%を占める。色調は灰褐色ないし黒褐色を呈するものが多い。

軒平瓦 II類 (20) 四重弧文軒平瓦。頸は直線頸で2条の凸線を配する。平瓦を成形した後、粘土板を貼り付け、挽き型によって瓦当文様を施文する。弧線と四線の形態はI類と同じ。頸面の2条の凸線も挽き型で施文されたもので、奥側の凸線の位置はI類の頸面の段部分と一致する。ただし、瓦当面側の凸線の位置は異なっている。平瓦凹面端部はヘラケズリされ、頸面はナデ調整される。



第24図 軒平瓦

瓦当の厚さは4.2cm。胎土は砂粒を含むものの、比較的良好である。色調は灰白色を呈し、焼成は良好である。松ヶ坪遺跡昭和48年度調査及び第1次調査から7点、中心塔付近から8点等、計18点が出土。全体の18.4%を占めている。

軒平瓦III類(21) 均整唐草文軒平瓦。内区には中心から2回反転する唐草文を飾り、外区には圓線文を配する。唐草の主葉は、中心部の内区下端の界線から発し、脇区界線の手前で支葉状になり巻き込んで終わる。各支葉の先端は蕾状を呈する。中心飾りは表されていない。頭は曲線頭。瓦当と平瓦の接合は、瓦当裏面に一枚造りの平瓦の広端部をあて、接合粘土をもちいて接合する。瓦当上端部及び側端部はヘラケズリされ、頭面はヘラケズリ後にナデ調整される。平瓦凹面には布目が残り、凸面は綱目叩きが施される。瓦当の厚さは6.5cm。胎土は砂粒を多く含み粗く、色調は灰褐色を呈し、焼成は良く硬質である。S D01からII点、中心塔付近から7点等、計30点が出土。全体の30.6%を占める。色調は黄褐色を呈するものもみられるが、焼成は良好である。

軒平瓦IV類(22) 均整唐草文軒平瓦。瓦当文様の構成はIII類と同じ。瓦当文様の線がIII類より太く、右側に反転する主葉の先端が脇区界線に接する。また、内区上端部と脇区の界線上に珠文が配されている。ただし、脇区は上部に1個を置く。瓦当と平瓦の接合及び調整技法等もIII類と同じである。頭は曲線頭。瓦当の厚さは7.2cm。

胎土は砂粒を含むが比較的良好で、色調は灰褐色を呈し、焼成は良好である。S D01から3点、S B02の北から2点の計5点が出土。全体の5.1%を占める。

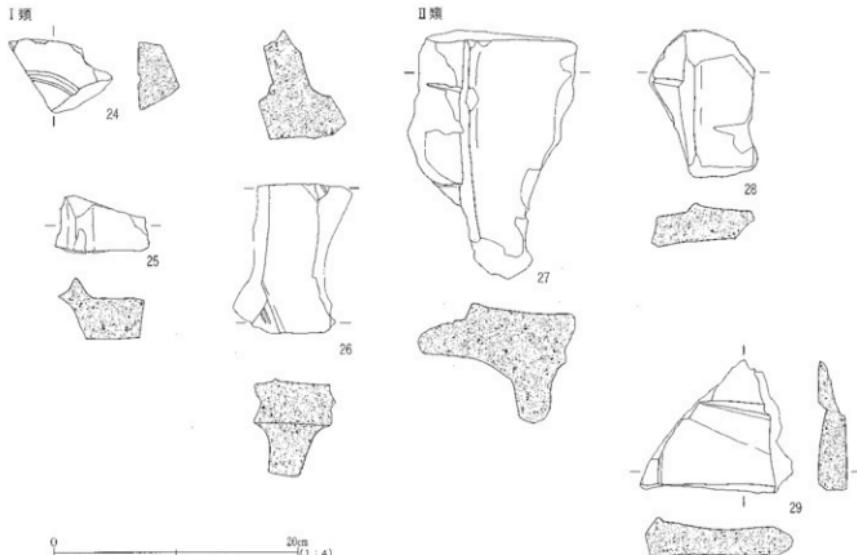
軒平瓦V類(23) 均整唐草文軒平瓦。中心から3回反転する唐草文を飾ると思われるが詳細は不明。唐草文は太く彫りが浅い。主葉はつながるが、各支葉は独立する。頭は曲線頭。瓦当と平瓦の接合は、瓦当裏面に平瓦の端部をあて接合粘土をもちいて接合するが、粘土の量は少ない。平瓦凹面には布目、凸面は格子叩き目が瓦当面端部まで残る。瓦当の厚さ4.2cm。胎土は砂粒を含み粗く、色調は赤褐色を呈しているが、焼成は普通。松ヶ坪遺跡第1次調査で1点が出土。

(眞田)

鰯尾

鰯尾は14点出土している。いずれも伽藍中心部からは出土していないため、どの建物に用いられたかは明らかではない。全形は不明だが、胎土・焼成などから、2種類に分類できる。

鰯尾I類(24～26) 縦帶は、断面三角形の突帯を約7cmの間隔で2列に設けている。貼り付け部には、貼り付け前に器壁にヘラ書きによる沈線を施す。鱗状に幅0.9cmの沈線が巡る破片(24)がある。脇部表面にあたる部分はハケメ調整を施す。裏面には平行叩き・同心円状の当て具痕が残る。胎土は緻密で1～7mmの砂粒を含む。焼成は硬質で色調は淡灰色。5点出土。



第25図 鴨尾

鴨尾II類(27~29) 鮫部はケズリによる段差で表現され、その前方、縦帯に相当する位置には断面三角形状ではあるが低い突帯がある。突帯はケズリ・ナデにより調整される。29は、突帯より前方と鮫部との凹凸の関係が他の2点と異なり、別種の可能性がある。胎土は1~6mmの砂粒と共に、植物質のスサを多量に含む。焼成は硬質で、色調は淡灰色だが、表面のみ暗青灰色の破片がある。9点出土しているが、その内7点がSD01からの出土である。
(調平)

鬼瓦

鬼瓦I類(30) 蓼華文鬼瓦。全体の1/2強が欠損する。上部が丸みを持つ方形の外形をなし、下辺中央に半円形の刺り込みがある。主文様は単弁8弁蓼華文。中房は平坦で周縁に画線がめぐり、蓮子はなく中央に方形の釘穴が設けられる。蓮弁は、平面的な表現で先端が丸く大型の子葉を配する。間弁は表現されていない。外区内縁は圓線で区画され、大型の株文を置く。株文の間に凸線でT字状の文様を配置しているが、全ての株文間には施されていない。復元では左右対称の位置に配した。外区外縁の上半部には、鴨尾にみられる段型状の文様が飾られる。瓦当裏面には同心円印き目が残り、側面はナデ調整される。瓦当の縦31.0cm・横(復元)24.0cm・厚さ2.6cm。胎土は白色の微粒子を多く含むものの比較的良好で、色調は左半分が暗灰褐色を呈し、焼成はやや軟質である。

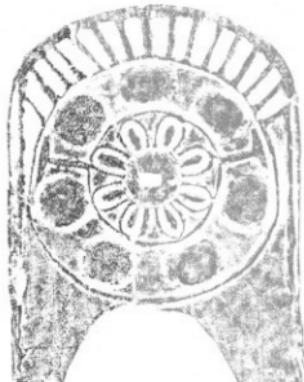
松ヶ坪遺跡昭和48年度調査で1点のみ出土。

鬼瓦II類a(31) 鬼面文鬼瓦。右側の下部を欠損する。外形はアーチ型をなし、下辺中央に半円形の刺り込みがある。鬼面を大きく表し、下方に腕と脚を配し、蹲踞する姿につくる。胴部の表現はない。鬼面の額にあたる部分に方形の釘穴を設ける。眉は鹿角状を呈し、耳は火縮形で表され、刺り込み上部に牙を刻く口が表現される。腕と脚にはそれぞれ手甲と脚甲をつけた表現がされている。外区外縁は下端部を除き、細い凸線が施される。瓦当裏面はほぼ平坦だが、指圧痕が残る。側面はヘラケズリされている。縦35.0cm・横31cm・厚さ3.7cm。胎土は大粒の砂粒を含み、色調は灰褐色を呈し、焼成は良好で硬質である。昭和22年に講堂跡周辺で表探されたという。他に松ヶ坪遺跡から1点出土している。

鬼瓦II類b(32) 鬼面文鬼瓦。左側約1/4の断片。II類aと基本的に同じ鬼面を飾るが、外区外縁が2条の凸線となる。また、釘穴が眉の間に設けられている点も異なる。瓦当の厚さも5.6cmと厚くつくられる。瓦型に粘土を押し込みナデによってある程度の成形後、同じ厚さの粘土板を重ね、繩印きを施して接合させている。接合面には加工を施した痕跡は認められない。側面はヘラケズリされる。胎土は大粒の砂粒を多く含み粗く、色調は黄褐色を呈し、焼成は良好である。SD01出土。他に表探品が1点あるが、同一部位の破片のため2個体が確認できる。

(眞田)

I類



30

II類a



31



道具瓦・その他

道具瓦としては熨斗瓦、面戸瓦、隅切瓦がある。またその他、平瓦の隅部分を四角く切り取ったものなどがある。図化したものは観察表に一括した。

その他用途不明の瓦について述べる。

62は、平瓦の広端部を折り曲げるようなかたちで凸面側に拡張したものである。拡張部分凸面側には型の痕跡が認められる。凹面側はヘラケズリ。

63はS X 01の取水口に立てかけてあった瓦。行基式の丸瓦を打ち欠いて使用。片方の側端部以外を打ち欠く。広端側を上にして使用している。

64は丸瓦凹面に波状文が施されている。1点のみ確認。

(岡平)

文字瓦

平瓦や丸瓦の中に刻印が押されたものが18点、ヘラ書されたものの28点が確認されている。

刻印瓦 刻印の種類には、「大」、「王」、「匱」、「井」がある。

「大」(40~44) 40は平瓦の凸面に刻印が押されている。刻印は縦1.3cm・横1.0cmの方形。平瓦の凹面には布目が残り、凸面は太い格子目の叩きで成形された後、ナデ調整されている。41は丸瓦の凸面に刻印が押されたもの。刻印される位置は丸瓦の狭端部に近いところ。刻印は縦1.3cm・横1.0cmの方形。瓦の狭端部には凹線状の窪みがあり、端部の角が面取りされているなど軒平瓦の可能性を考えられるが、小片のため断定できず、丸瓦とした。丸瓦凹面には布目が残り、凸面はナデ調整される。

II類b



32



0 20mm
1 : 4

第26図 鬼瓦

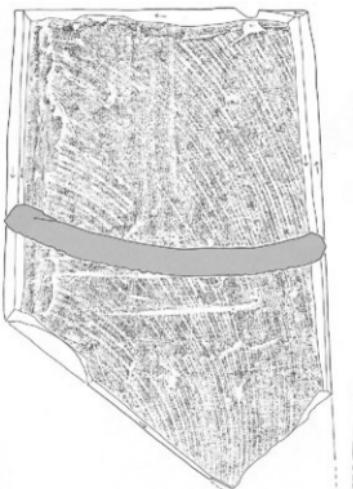
凸面、広端部近くに刻印が押される。原体は方形で縦1.2cm、横は欠失。丸瓦の凹面には布目が残り、凸面はナデ調整される。43は丸瓦の凸面に刻印が押されている。刻印は縦幅とも1.0cmの方形。丸瓦の凹面には布目が残り、凸面はナデ調整される44は丸瓦の凸面側の端部に刻印が押されたもの。刻印は縦1.2cm・横1.0cmの方形。丸瓦の凹面には布目が残り、凸面はナデ調整される。ここで紹介した以外に道具瓦で紹介しているが、面戸瓦(36)、隅瓦(39)にも刻印されたものがある。ただし、隅瓦の刻印は、「大」の字体が他の例とは異なっており、刻印が複数存在したことが想定される。40・43・44が松ヶ坪遺跡昭和48年度調査で出土し、41がS A 01付近、42がS B 03



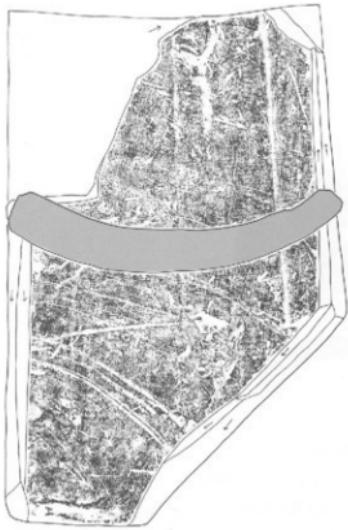
第27図 道具瓦1

道具瓦観察表

瓦No	道具瓦	出土位置	法 管			胎 土	焼 成	色 調	そ の 他
			長さ	厚さ	鉄青釉				
33	堅斗瓦	S A 02	(11.4)	2.1	36.4	陶。1~3mmの砂粒を含む。	硬質	灰 色	平瓦を利用。側面部はヘラケズリ。
34	面戸瓦	S D 01	(7.2)	3.4	36.4	陶。1~5mmの砂粒・黑色物質を含む。	軟質	灰黒色	平瓦を利用。曲線的に焼成前にカット。
35	面戸瓦	S D 01	(6.3)	2.2	31.3	陶。1~3mmの砂粒を含む。褐色物質多く含む。	硬質	淡褐色	丸瓦を利用。
36	面戸瓦	熱々坪遺跡(所蔵品 年度・第1次)	(5.0)	2.6	44.0	陶。1~3mmの砂粒・黑色物質を含む。	硬質	淡灰色	焼印「大」の施印はヘラケズリ前。曲線的に焼成後にカット。
37	胸切瓦	S D 01	(28.0)	2.4	36.7	陶。1~1mmの砂粒を含む。	硬質	淡褐色	平瓦を利用。側面部内面に粘土板の痕が付。側面部から90°で直線的に焼成前にカット。
38	脇切瓦	S D 01	(30.5)	2.2	24.1	陶。1~7mmの砂粒・黑色物質を含む。	硬質	淡灰色	積み作り平瓦を利用。正面面から39°で直線的に焼成前にカット。側面部内面へラケズリ。
39	柄切瓦	S C 01	(42.0)	3.5		陶。1~3mmの砂粒を含む。	やや軟質	深褐色	平瓦を利用。正面に焼印「大」。正面面から45°で直線的に焼成前にカット。



38



39

0 20cm
(1 : 4)

第28図 道具瓦2

で出土した。

「王」(45・46) 45・46とも刻印を平瓦の凸面、それも狭端部と側端部のコーナーに近いところに施したもの。両者とも刻印は縦2.3cm・横2.2cm。45・46とも平瓦の凹面に布目が残り、凸面は格子目の叩きにより成形されるが、

46は格子目がナデによって消されている。ともに松ヶ坪遺跡昭和48年度調査で出土したもの。

「匂」(47~49) 3点とも丸瓦の凸面で狭端部近くに刻印を押したもの。刻印の原体は台形状を呈するものだが、文字や記号は表現されていない。上面が縱横とも2.0cm前



第29図 刻印瓦

後、下端面が0.6cm前後の方形を呈する。47がS C01、48がS A02から出土し、49は表探されたもの。この他にもS A02とS B03・04間の瓦溜からそれぞれ1点、小片が出土している。これらも丸瓦の破片である。

「井」(50・51) 井字状に陽刻された刻印を押したもの。正確には、「井」の縦線が下段の線でとまる。陽刻の線は角張っている。50・51とも丸瓦の凸面、狭端部近くに押される。50は縦2.9cm・横2.4cm、51は縦3.2cm・横2.3cm。いずれも軟質のため丸瓦の成形・調整は明確ではない。表探資料。この他に2点出土しているが、いずれも丸瓦

の凸面に刻印が押されている。

ヘラ書文字瓦

「本上」・「本」(52~56) 52は平瓦の凹面に、先端がやや角張る棒状の工具で、「本上」と瓦面左側端部近くに書かれたもの。平瓦の凹面には布目が残り、凸面は格子目の叩きで形成される。53も52と同様である。54は丸瓦の凸面、狭端部近くに細いへら状の工具で「本上」と書かれたものの。丸瓦凹面には布目が残り、凸面はナデ調整される。55は丸瓦の凸面にへら状の工具で「本」一字が書かれているもの。丸瓦の成形・調整は軟質のため不明瞭。56

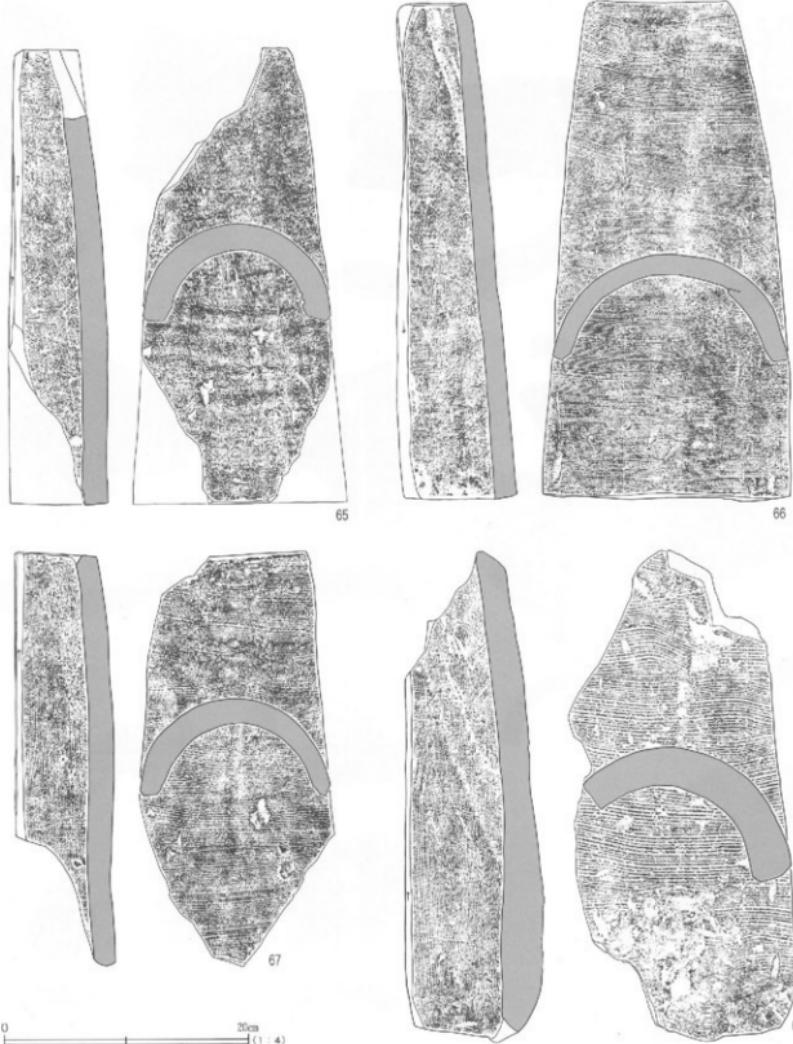


第30図 ヘラ書文字瓦

は平瓦の凹面、狭端部近くに細いヘラ状の工具で縦横數条の線が引かれたもの。この細い線を観察すると「本上」を意識して書かれた可能性がうかがえる。平瓦凹面には布目が残るが、凸面は軟質のため調整痕跡が不明瞭である。52～56まで松ヶ坪遺跡昭和48年度調査から出土。この他に、S B 03で1点(丸瓦凸面)、S A 02で1点(丸瓦凸面)、S A 01で1点(丸瓦凸面)、S D 01で4点(丸瓦凸面)

2・平瓦凹面2)がある。

「占」(57) 丸瓦の凸面に「占」と細い棒状の工具で書かれたもの。ただし、小片のため詳細は不明。S A 02から出土。「口口加」(58) 丸瓦の凸面にヘラ状の工具で書かれたものの、3文字以上の文字からなると思われ、下段の文字は「加」と考えられる。S A 02から出土。



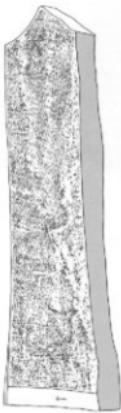
第31図 丸瓦 1

「井」(59) 平瓦凹面にヘラ状工具で書かれたもの。「井」字というより井桁状の記号と考えられる。松ヶ坪遺跡昭和48年度調査から出土。この他に3点出土しているが、いずれも平瓦の凹面にヘラ状の工具で書かれている。1点がS A02から出土し、他は松ヶ坪遺跡昭和48年度調査から出土している。

「二」(60) 平瓦の凹面にヘラ状工具により2条の平行

線が引かれたもの。平瓦の凹面には布目が残り、凸面は格子目叩きで成形後、ナデ調整される。S D01から出土。この他にも10点余り出土しているが、2条線が引かれている場所は、平瓦の凹面が5点、凸面が2点、丸瓦の凸面が3点である。

螺旋(61) 平瓦の凹面にヘラ状工具により螺旋状の線が描かれている。平瓦の凹面は布目が残り、凸面は多条平



69



70

行線叩きで成形されている。S D02から出土。

その他 拓本等を掲載していないが、上記の他に「キ」字状に線描きされたものや数条の線が引かれたもの等がある。平瓦の凹面に線描きされたものが多い傾向がある。

以上、大御堂廃寺跡から出土した文字瓦を紹介した。刻印された文字やヘラ書き文字の意味は不明。ただし、刻印とヘラ書きの両者にみられる「井」は、道教の符号である「九字」の略号の可能性が考えられる。

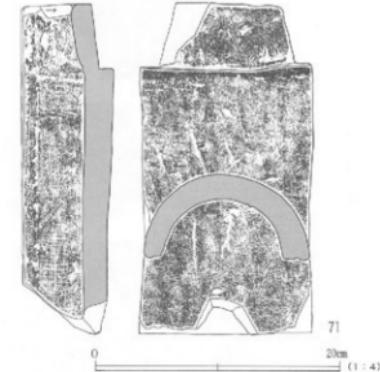
刻印とヘラ書きとも丸瓦・平瓦に施されており、両者に差はみられない。しかし、刻印が押されている位置は丸瓦・平瓦がともに成形時の外側にある凸面に押されるのに対し、ヘラ書のものは成形時の内側にある丸瓦・平瓦の凹面に書かれているものがある。特に平瓦に多い傾向が観察される。なお、これら文字瓦の時期は成形・調整の特徴から軒瓦の第2段階の時期と考えられる。
(眞田)

参考文献

高橋英之 「墨書き土器が語る在地信仰」『歴史学研究会日本史部会シンポジウム「古代の地域社会と国家」』 1997年

丸瓦 (65~71)・平瓦 (72~96)

各構造のうち、主要堂塔周辺のものは、造構面が削平を受けているため、瓦溜出土のもの以外は細片化している。逆に、造構面の低いSA01・02、SD01周辺のものは大型の破片が多い。

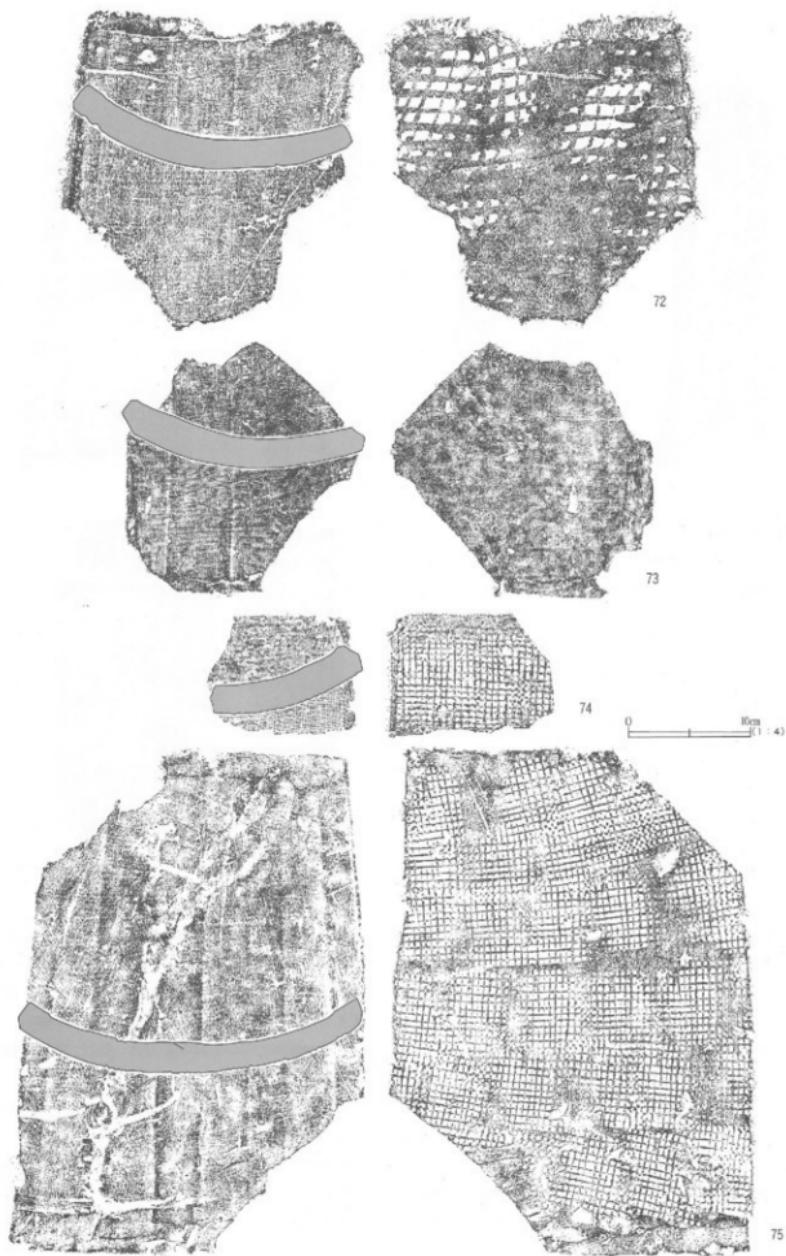


第32図 丸瓦2

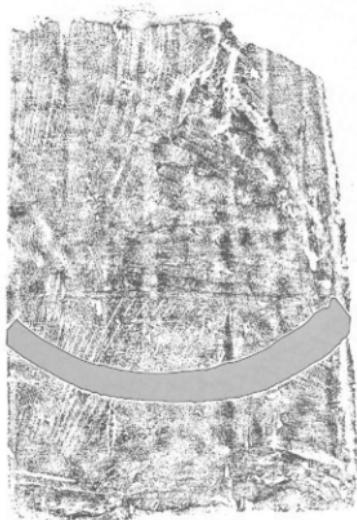
丸瓦・平瓦については完形度の高いものを中心に、叩き原体・製作技法などについて観察・分類したが、型式を設定するまでは至らなかった。今回は各種1点ずつ図化したが、全ての種類を網羅したとは言い難い。

各瓦の細部については観察表に一括し、以下特徴的なことを述べる。

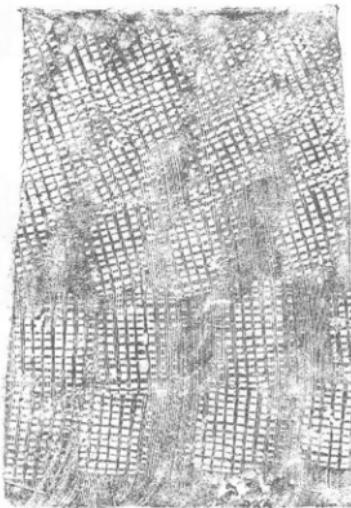
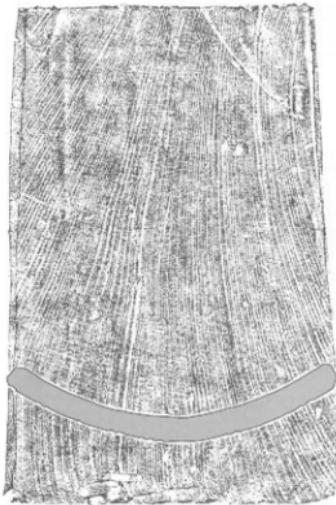
- ・丸瓦には行基式(無段式)・玉縁式(有段式)両者が存在するが、量的には行基式のものが圧倒的に多い。
- ・軒平瓦I類の顎面に観察できる叩き・剥かれと(8)の叩きが似るが、厚さ・端部の形状が異なる。両者とも全形が不明で断定はできないが、この種の叩きは極少数の破片にしかみられないため、軒平瓦I類専用の工具とも考えられる。



第33図 平瓦 I



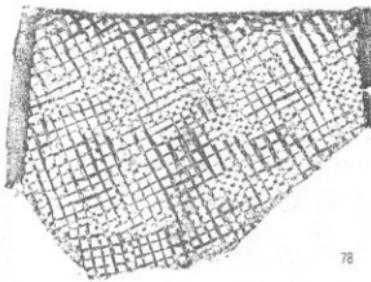
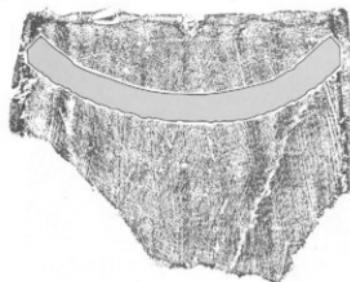
76



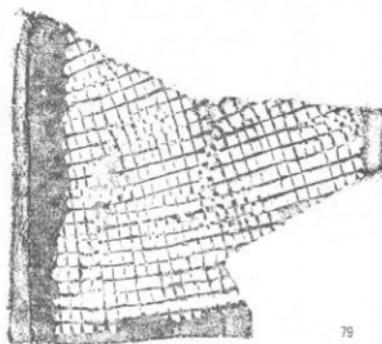
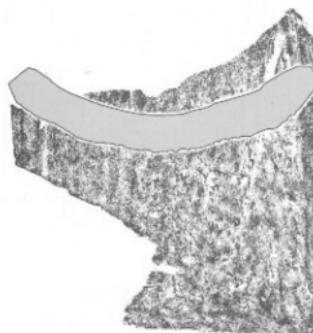
77

0 20cm (1:4)

第34図 平瓦2



78



79



80



81



82



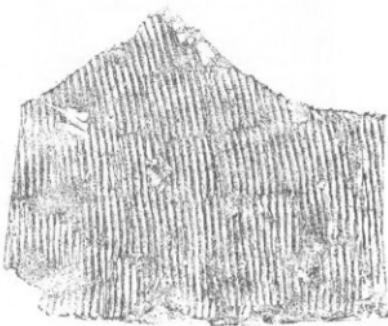
83

0 1 20cm (1:4)

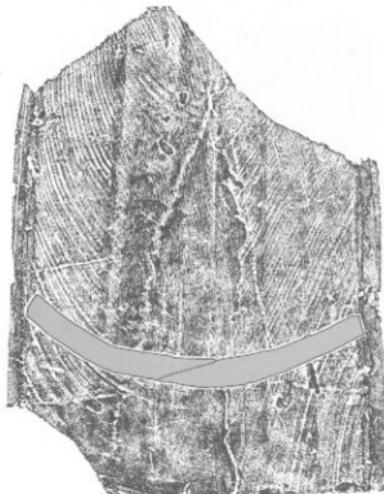
第35図 平瓦3



84



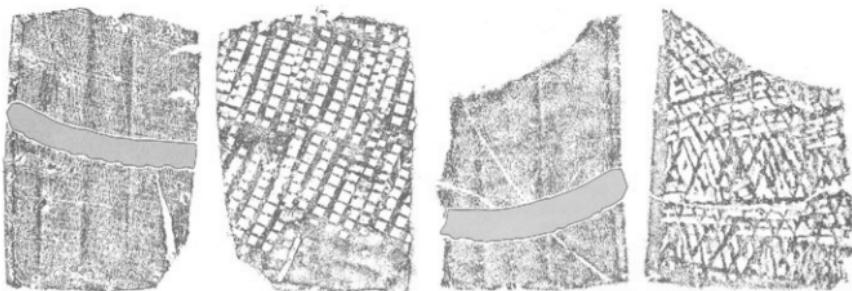
85



86

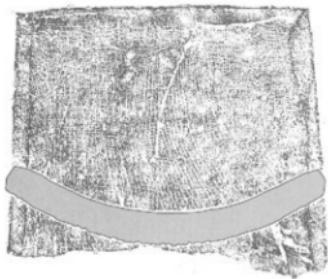
0 20cm
(1 : 4)

第36図 平瓦4

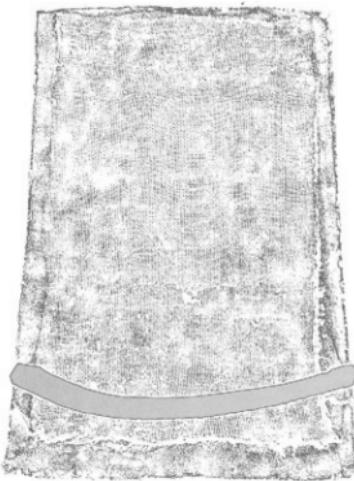


57

58



59

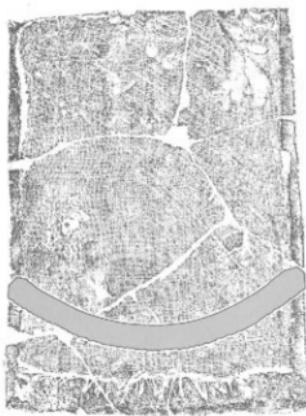


60

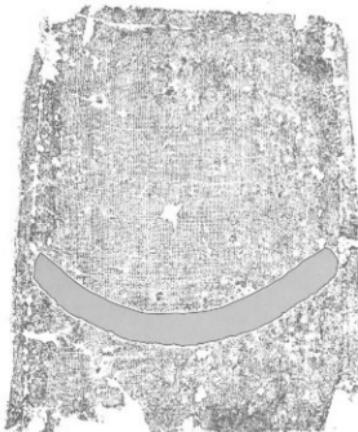
0 20cm (1/4)

A scale bar at the bottom right of the page, indicating a length of 20 centimeters (1/4 scale).

第37図 平瓦5



91



92

第38回 平瓦 6

・ S D01出土窯壁の中に、(74)の平瓦が窯着しているものがある。

(図平)

軒瓦について

大御堂廃寺跡からは軒丸瓦15型式18種、軒平瓦5型式と、地方寺院としては珍しく多種類の軒瓦が出土している。これらの軒瓦の様相や年代観について考えを述べ、合わせて、鬼瓦についても考察する。

系統別まとまり 大御堂廃寺跡から出土している多種類の軒瓦は、瓦当文様の諸特徴から次のようにまとめることができる。

軒丸瓦 (第22・23図)

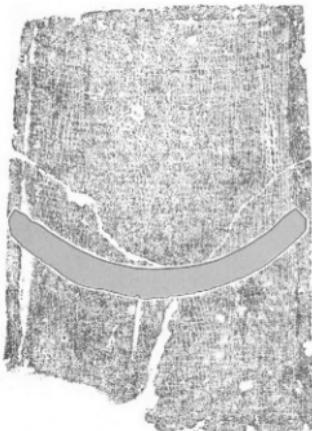
A群—蓮弁が無子葉の單弁8弁のもの。軒丸瓦I類(1)が属する。

B群—蓮弁が複弁8弁で、外区が三角縁のもの。軒丸瓦II類a(2)、II類b(3)、III類(4)、IV類(5)、V類(6)が属する。

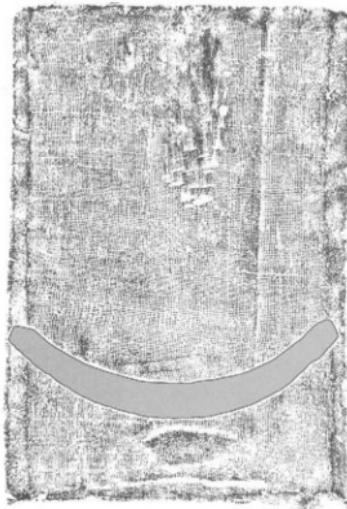
C群—蓮弁が複弁8弁で、外区の三角縁に珠文を置くもの。軒丸瓦VI類(7)、VII類(8)が属する。

D群—蓮弁が複弁8弁で、外区に線鋸齒文を配するもの。軒丸瓦VIII類(9)、IX類a(10)、IX類b(11)が属する。

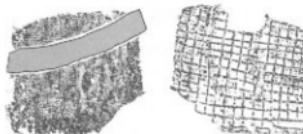
E群—蓮弁が有子葉の單弁12弁で、外区に面連鉤齒文を



93



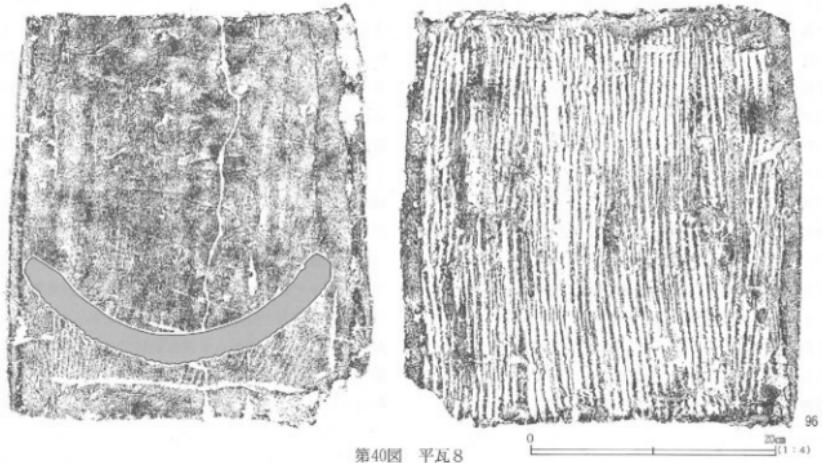
94



95



第39図 平瓦7



第40図 平瓦8

丸瓦観察表

A/N	出土位置	法 量			黏 土	構 成	色 調	そ の 他
		長 さ	厚 さ	底 幅				
65	S D01	37.4	2.1	6.0	(B7)	粘質 底: 1~3mmの砂粒・黑色粒子合む。	灰質 青灰色	
66	S A02	46.8	1.7	11.2	20.3	粘質 底: 1~2mmの砂粒を含む。	灰質 淡灰色	
67	S D02			2.6		粘質 底: 1~5mmの砂粒・黑色物質を含む。	灰質 淡灰色	
68	S D01		2.1			粘質 底: 1~3mmの砂粒を含む。	灰質 淡灰色~淡褐色	
69	S D01		1.4			粘質 底: 1~5mmの砂粒を含む。黑色物質を多量に含む。	灰質 淡灰色	
70	S A02	38.7	1.6	8.5	(B5)	粘質 底: 1~3mmの砂粒を多量に含む。	灰質 淡灰色	
71	S D01	27.2	2.0	8.1	(B4)	粘質 底: 1~7mmの砂粒を多量に含む。黑色物質・赤褐色粒子合む。	灰質 淡暗灰色	分割後未調整。

平瓦観察表

A/N	出土位置	法 量			黏 土	構 成	色 調	そ の 他	(cm: 法量 () は推定)
		長 さ	厚 さ	底 幅					
72	岩ヶ谷遺跡(昭和45年度・第1次)		2.5		粘質 底: 1~4mmの砂粒を多量に含む。	灰質 淡褐色	輪巻、幅5~6mmの横骨張あり。		
73	S D01		2.7		粘質 底: 1~3mmの砂粒を含む。	灰質 淡灰色	輪巻、幅5mmの横骨張あり。	Ns6と同型	
74	S D01		2.5		粘質 底: 1~5mmの砂粒を含む。	灰質 淡褐色	輪巻、幅5mmの横骨張あり。	Ns6と同型	
75	S A02	42.0	2.5	(25.0)	(30.0)	粘質 底: 1~10mmの砂粒・黑色物質合む。	灰質 淡褐色	輪巻、幅3~5mmの横骨張あり。	Ns70と同型
76	S D02	42.4	2.1~3.2	25.8	(26.0)	粘質 底: 1~9mmの砂粒・黑色粒子合む。	灰質 灰白色	輪巻、幅3~4mmの横骨張あり。立環部クラク風脈あり。	
77	S A02	41.8	2.1	34.5	27.3	粘質 底: 1~10mmの砂粒を比較的多量に含む。黑色物質含む。	灰質 淡褐色	輪巻、	Ns80と同型
78	S C01・S A01 團		2.4	34.4		粘質 底: 1~4mmの砂粒・他の粘土粒子合む。	灰質 淡褐色	輪巻、	
79	S C01		3.3			粘質 底: 1~2mmの砂粒を含む。	灰質 淡褐色	輪巻、幅約3mmの横骨張あり。	
80	S A02		2.1			粘質 底: 1~5mmの砂粒を含む。	灰質 淡褐色	輪巻、クラク風脈あり。	Ns79と同型
81	S D01		2.6			粘質 底: 1~5mmの砂粒・赤色粒子合む。	灰質 淡褐色	輪巻、無骨張。	Ns6
82	S D01		1.9			粘質 底: 1~5mmの砂粒を含む。黑色物質・植物 灰土合む。	灰質 淡褐色	輪巻、幅約4mmの横骨張あり。	Ns78
83	S D01		2.3			粘質 底: 1~2mmの砂粒・黑色物質合む。	灰質 灰白色	輪巻、幅約0.5mmの横骨張あり。	Ns88
84	S D01		2.8			粘質 底: 1~2mmの砂粒を含む。	灰質 灰白色	輪巻、幅約3~4mmの横骨張あり。 あり。	Ns75と同型
85	S C01		2.9		(25.0)	粘質 底: 1~10mmの砂粒を含む。	灰質 淡褐色	輪巻、3~4mmの横骨張あり。 リラク風脈あり。	Ns87と同型
86	S D01		2.4		(25.0)	粘質 底: 1~7mmの砂粒・黑色物質合む。	灰質 淡褐色	輪巻、4~4.5mmの横骨張あり。	
87	岩ヶ谷遺跡(昭和45年度・第1次)		2.2			粘質 底: 1~5mmの砂粒を含む。2cmの大い小石合 む。	灰質 淡褐色	輪巻、	Ns81と同型
88	S A02		2.5			粘質 底: 1~3mmの砂粒を含む。	灰質 淡褐色	輪巻、幅約5.3mmの横骨張あり。	Ns84と同型
89	岩ヶ谷遺跡(昭和45年度・第1次)		23.9			粘質 底: 1~10mmの砂粒を含む。	やや軟質 淡褐色	輪巻、1枚づくり。	
90	S D01	34.4	2.1	22.0	24.3	粘質 底: 1~5mmの砂粒を含む。他の粘土粒子合 む。	灰質 淡褐色	1枚づくり。	Ns82と同型
91	S A01	34.4	2.1	22.0	24.3	粘質 底: 1~10mmの砂粒を含む。赤色粒子を多量に 含む。	やや軟質 淡褐色	1枚づくり。	
92	S D02	36.1	2.7	22.8	25.6	粘質 底: 1~10mmの砂粒・黑色粒子合む。	灰質 淡褐色	1枚づくり。	
93	S A01	35.9	2.5	22.4	25.6	粘質 底: 1~10mmの砂粒・黑色粒子合む。	やや軟質 淡褐色	1枚づくり。底面幅から1/2 の縮縮・減縮感あり。	
94	S A02	41.7	2.0	26.2	26.7	粘質 底: 1~5mmの砂粒を含む。	やや軟質 淡褐色	1枚づくり。	
95	S D01		1.9			粘質 底: 1~10mmの砂粒を含む。	灰質 淡褐色	1枚づくり。	Ns77

粘土分析番号は第5章第3節瓦・瓶の科学的調査参照。

配するもの。軒丸瓦X類(I2)、X I類a(I3)、X I類b(I4)が属する。

F群一蓮弁が有子葉の单弁8弁で、外区に凸線ないし面邊鋸齒文を配するもの。軒丸瓦X II類(I5)、軒丸瓦X III類(I6)が属する。

G群一踏み返し等でつくられたもの。軒丸瓦XIV類(I7)、軒丸瓦X V類(I8)が属する。

軒平瓦(第24図)

H群一瓦当文様を四重弧文につくるもの。軒平瓦I類(I9)、軒平瓦II類(20)が属する。

I群一瓦当文様を中心から2回反転する均整唐草文につくるもの。軒平瓦III類(21)、軒平瓦IV類(22)が属する。

J群一瓦当文様を中心から3回反転する均整唐草文につくるもの。軒平瓦V類(23)が属する。

特徴等について 各群の特徴や問題点等について整理する。

A群は、無子葉单弁8弁蓮華文を内区に配し、外区を素文の直立線につくるもの。瓦当文様もそうだが、大粒の石英粒子を含むやや粗い胎土や、黄褐色を呈する色調も他の大御堂廃寺跡の軒丸瓦と異なる。また、瓦当と丸瓦の接合位置も高く接合粘土量も少ない。

B群は、いずれも複弁8弁蓮華文を内区に配し、外区外縁を三角線につくる。瓦当文様は基本的に同じだが、中房の蓮子や蓮弁、外区の広さ等に相違がみられる。このなかでⅢ類は、蓮子の周環が表現されておらず、蓮弁の影りも浅い等、他より後出的な要素がみられる。しかし、瓦当裏面の端部近くを円弧状に穿ち、凸面を僅かに加工した丸瓦を接合する技法や、胎土、焼成は同じである。したがって、B群の軒丸瓦は、ほぼ同時期に製作されたものと考えられる。なお、本群の瓦当文様の祖形は、蓮子が二重にしか配されてなく、外区の三角線に鋸齒文が施されていない等の相違点が認められるものの、全体的な構成から川原寺式の系統に求められる。この群が全体に占める出土量は35.8%と多い。

C群は、平面的に表現された蓮弁と三角線に配された密珠文が特徴である。VI類とVII類とも瓦当文様と製作技法が同じであり同時に製作されたものであろう。また、瓦当と丸瓦の接合方法や調整技法は、B群に共通する。外区の内斜面に密珠文を配することは大官大寺式に共通するが、中房に周環が伴う蓮子を三重に配することや、蓮弁が平面的に表現されている等の相違点がある。また、外区ではないが内縁の外区に密珠文を配するものとして、本巣師寺式・藤原宮式が知られている。VI類とVII類の内区の瓦当文様は、むしろ本巣師寺式・藤原宮式に近い。全体に占める割合は6.7%である。

D群は、大型の瓦當に複弁8弁蓮華文と特有な線鋸齒文を配するもの。VII類の内区から間弁を除いたものがIX類aで、IX類aの外区幅を狭めたものがIX類bという関係になる。前後関係は、VII類を原型としてIX類a、IX類aからIX類bが派生したと考えられる。VII類は、出土点数が最も多く全体の29.3%を占める。一型式の出土点数としては最も多く、その数はB群全体の出土量に次ぐ。VII類をB群の軒丸瓦と比較すると、中房の形態等に後出的な要素が認められる。

なお、VII類と同系の軒丸瓦が大原廃寺跡(倉吉市)、野方・弥陀ヶ平廃寺(東郷町)、久見古瓦出土地(東郷町)に分布する。野方・弥陀ヶ平廃寺と久見古瓦出土地は、発掘調査が実施されておらず表探資料であり、VII類との詳細な比較検討ができない。これに対して、大原廃寺跡は発掘調査が実施され、VII類と同型式の大原廃寺跡軒丸瓦I類が多数出土し、詳細な検討が加えられている。大原廃寺跡の報告者は、大原廃寺跡I類と大御堂廃寺跡VII類は同範関係にあり、派生型式の存在から大原廃寺跡を中心に周辺の寺院に分布すると判断している。大原廃寺跡I類と大御堂廃寺跡VII類を比較すると、大原廃寺跡例は外区外縁の圓環がヘラケズリされ失われている特徴がある。この特徴は、瓦の供給先を区別したものと考えられる。オリジナルな瓦當に加工していることや、大御堂廃寺跡例の瓦當の厚さが大原廃寺跡例より厚くつくれれていることを評価すると、むしろ大御堂廃寺跡例が先行するものと考えられる。したがって、東伯者地方に部分するVII類系統の軒丸瓦は大御堂廃寺跡を中心に分布すると思われる。

E群は、特徴のある有子葉单弁を配するもので、X類の中房が半球状を呈するのに対し、XI類の中房は平坦となっている。また、XI類aとbは外区の形態が異なるものの同範関係にある。いずれも、成形や調整技法に大きな差は認められないが、XI類aとbでは胎土が異なるとともに、XI類aの範型がつくりなおされbが作製されたと判断されるため、そこに前後関係を見出すことができる。なお、蓮弁の先端が尖り蓄状を呈することや、中房が半球状に盛る点等、新羅系軒丸瓦の影響を受けたものと考えられる。

F群は、小型とともに有子葉单弁を配するもの。瓦当文様の外区外縁等に相違がみられるが、構成は基本的に同じ。瓦当と丸瓦の接合技法や調整技法は、両者とも同じであり、同時に製作されたものと判断される。なお、XI II類は中房の形状や内区外縁の圓環上に珠文を施す等、新羅系の要素が認められる。

G群のXIV類は、VII類の内区を原型として製作された

ものであり、XV類はII類ないしIII類の踏み返しである。瓦当と丸瓦の接合方法及び調整技法は、それぞれの原型となった軒丸瓦と異なり、後出的な要素が強い。

H群は、I類は段頭、II類は直線頭と顎面の形態が異なるものの、ともに弧文が挽き型によって施文される等、成形・調整技法も同じであり、同時期に製作されたものと考えられる。胎土や焼成等は、B群の軒丸瓦に近い。

I・J群は、ともに均整唐草文を飾る軒平瓦。III類とIV類は、基本的に同じ瓦当文様であり、成形・調整技法が同じであり、胎土も近い。これに対してV類は、瓦当文様が異なるとともに、胎土や焼成も大きく異なっている。ただし、III・IV類との時期的な差は認めがたい。なお、III・IV類の胎土はF群の軒丸瓦に近い。V類に近い胎土を有するものは大御堂廃寺跡にはみられない。均整唐草文を飾る軒丸瓦は、伯耆国分寺跡や大原廃寺跡にみられるが、同系統のものは知られていない。(眞田)

2 土器

調査では多量の土器が出土している。古代から中世の土師器・須恵器がほとんどであるが、繩文土器や瓦質土器、灰陶器、白磁、青磁など多様である。後世の攪乱を受けてはいるが堂塔周辺の土器、そして、大御堂廃寺跡の実態を示す溜井S E 01と東溝S D 01についてを主に報告する。須恵器の器種名は飛鳥・藤原宮、平城宮報告にもとづいて記述する。

土師器については、原則的に『伯耆国跡発掘調査概報(第5・6次)』や『平城宮発掘調査報告V』に記載される器種の分類や調整技法、そして時代区分に従った。土師器壺・皿の調整には、口縁部をヨコナデし、底部外側未調整のもの(a手法)と底部外表面をヘラケズリ調整するもの(b手法)がある。またa手法には、ナデ調整のものとヘラ切り技法のものがあり、ヘラ切り技法には、ヘラ切り部分を一部ナデ調整するものと、ヘラ切り未調整のものがある。さらにロクロ使用に伴っては、底部の切離しに糸切り手法が加わる。ナデは、ロクロを除く回転運動を利用するナデをヨコナデ、回転を利用しない乱方向のナデを単にナデ、壺部内面の一方向ナデを仕上げナデとした。またロクロを使用したナデは、ロクロナデとして他のナデと区別した。赤色顔料の塗彩は、やや濃い深紅色の顔料を用い厚く塗るものと、茶褐色でハケ跡を残すものがある。

以下、遺構ごとに述べる。

S D 02

土器量は少なくはないが奈良時代の遺物の他、中世の遺物をも混在する流路堆積遺物である。須恵器転用硯壺

を1点図化した。

須恵器

壺B (1) 底部は厚いが高台は細く高い。高台の基部に小円孔2カ所あり、3方にあく可能性がある。内面を硯に転用。平成6年度調査トレンチ2出土。

S B 01

基壇を掘り込んだ土壤内から出土した土師器類がある。須恵器は特徴のあるものを抽出した。転用硯は壺類3点あり、2点を図化した。土師器は非常に細片が多く、4点を図化した。

須恵器

合子 (2) 相輪形のつまみ。天井部は平坦で大型の蓋と推定される。色調淡灰白色。つまみ部径4.4cm。旧水田水路底出土。

壺B (3・4) 高台付壺で塊状の体部につくもの。3は高台内側に面をなし、内外に稜をつくる。底部外周をヘラケズリ、中央3cmに静止糸切痕を残す。4は底部外周静止糸切。ともに内面を硯に転用。3は床土、4は中央房北隈検出面出土。

平瓶 (5) 体部上面円形の粘土粒を2個貼付する。胎土粗く表面にざらつき感有り。焼成良好。色調外面釉が濃くかかり暗緑黒茶色。ボロのかかった部分はケズリ仕上げ。

壺 (6) 外側へ開いた高い高台がつく。高台端面は内側に稜をなす。均整のとれたつくり。脚径9.8cm。

土師器

壺A (7~10) 口径10cm未溝で、器高3cm内外の小型で内湾気味に立ち上がるもの(7・8)と、底部が狭く丸みを持つもの(9・10)とがある。法量が一段と小さくなり、口縁部は丸味をます。7・8には塗彩がない。時期は伯耆国庁の第3段階の10世紀前半代か。

S B 02

遺物は少なく、図化できたものは土師器1点のみ。須恵器は図化していないが3点について記す。

須恵器

壺H蓋 かえりは小さく口縁端部から僅かに突出する。天井部へラ切り未調整。焼歪み品、口径約11.4cm、1/4片。礎石抜取穴の下層から出土。

壺 長頸壺の高台。4方に直径約1cmの円形孔があく。脚端部は強く外反して横位にのび下端は小さく突出する。

円面硯 破片1点。S E 01掘方出土98に類するもの。

土師器

壺B (1) ロクロ製。赤色塗彩なし。時期は伯耆国庁の第3段階か。

S B01内S K01

土師器

坏A (12) 大きく上外方へ開く口縁部とヘラ切り未調整の底部。

坏B (3) 高台部断面三角形。

S B01内S K02

土師器

坏A (4・15) 上外方へ開く口縁部とヘラ切り未調整の底部。

S B03周辺

土器はほとんど出土していないが、転用硯がある。S B03外北西隅部で平瓦？片転用1点、須恵器壺体部転用が2点ある。遺跡内で瓦転用のものはこれのみである。

S B04周辺

S B03同様、土器はほとんど出土していない。完形度の高い須恵器平瓶を図化した。

須恵器

平瓶 (16) 小型。体部扁球形で底部は厚い。口縁部欠失。焼成良好。外面肩部及び内面口縁部直下に暗緑黄褐色の自然釉がかかる。色調淡紫灰色。S B04外南出土。

S B05及び周辺

須恵器

坏B蓋 (17) 端正な宝珠形つまみと退化したかえりをもつ。天井部は平坦で、かえりの先端は口縁部よりも下方に突出しない。天井部外面ヘラケズリで指のあたりを残す。内面多方向のナデ。色調淡灰白色。口径14.0cm、器高3.2cm。S B05基壇土内から出土。

瓶 (18) 肩部と胴部との境界に断面三角形の突帯をめぐらせる薄手の壺。肩部に孔をくり抜き小型の口縁を貼付する。肩部外面は沈線2条で画す。内面の平滑なヨコナデの擦痕が明瞭で、同一個体と思われる破片が広く散在していたが、S B05を中心とする範囲であった。

土師器

上外方へ開く口縁部とヘラ切りの段を残す底部の坏A (19)と小型の皿(20)。時期は伯耆国庁の第2段階、9世紀後半。

S C01及び周辺

遺構に伴う出土ではないが、包含層中の量は比較的多い。坏類・壺類の転用硯は8点ある。図化した須恵器は小片ながら特徴のあるものである。

須恵器

蓋 (21・22) 21は大型厚手で扁平。口端部は角張り面をなす。かえりの先端は口縁部から僅かに突出する。色調白灰色。口径16.8cm。床土出土。22は口端部を外方に折って広い下面をつくる。瓦質。暗灰白色。口径19.0cm。

床土出土。

炉跡4周辺

炉跡4に伴うものと推定される廃棄土層から、まとまって出土した比較的完形度の高い須恵器群である。仏具の鉢型(53)とともに出土している。

須恵器

坏H蓋 (23) 小型。坏Gと差がない。天井部外面ヘラ切り未調整。外面体部に花様の漆による記号を付す。内面底部擦面。口径10.0cm。

坏B蓋 (24) 扁平な宝珠形つまみのつく大型蓋。口端部が屈曲しない笠形の形態。天井部ヘラケズリ。口径9.6cm。

皿B (25) 口端部を薄く外方に引き出した器高の低いものの。脚端面僅かに内方に向く。底部外面静止糸切。内面硯に転用。1/4片。

壺 (26・27) 26は薄手で平底の壺、肩部に黄緑色の自然釉がかかる。1/2片。内面漆付着。27は厚手で最大胴径位が高い。外面底部粗いヘラケズリ。

壺G 図化していないが、外面カキメ調整の細長の壺がある。内面・側面に漆が付着。

壺K (28) 肩の強く張った長頸壺。底部は丸く、高台貼付部には3条の沈線をめぐらす。体部下半ヘラケズリのちヨコナデ。

土師器

坏A (30) 小型の坏で、狭く丸みを持つ底部からなる。赤色渲染なし。

炉跡5

土壙掘方内に詰められていた土器類である。

須恵器

甕 図化していないが、波状文を数段巡らせた大型の甕片がある。

土師器

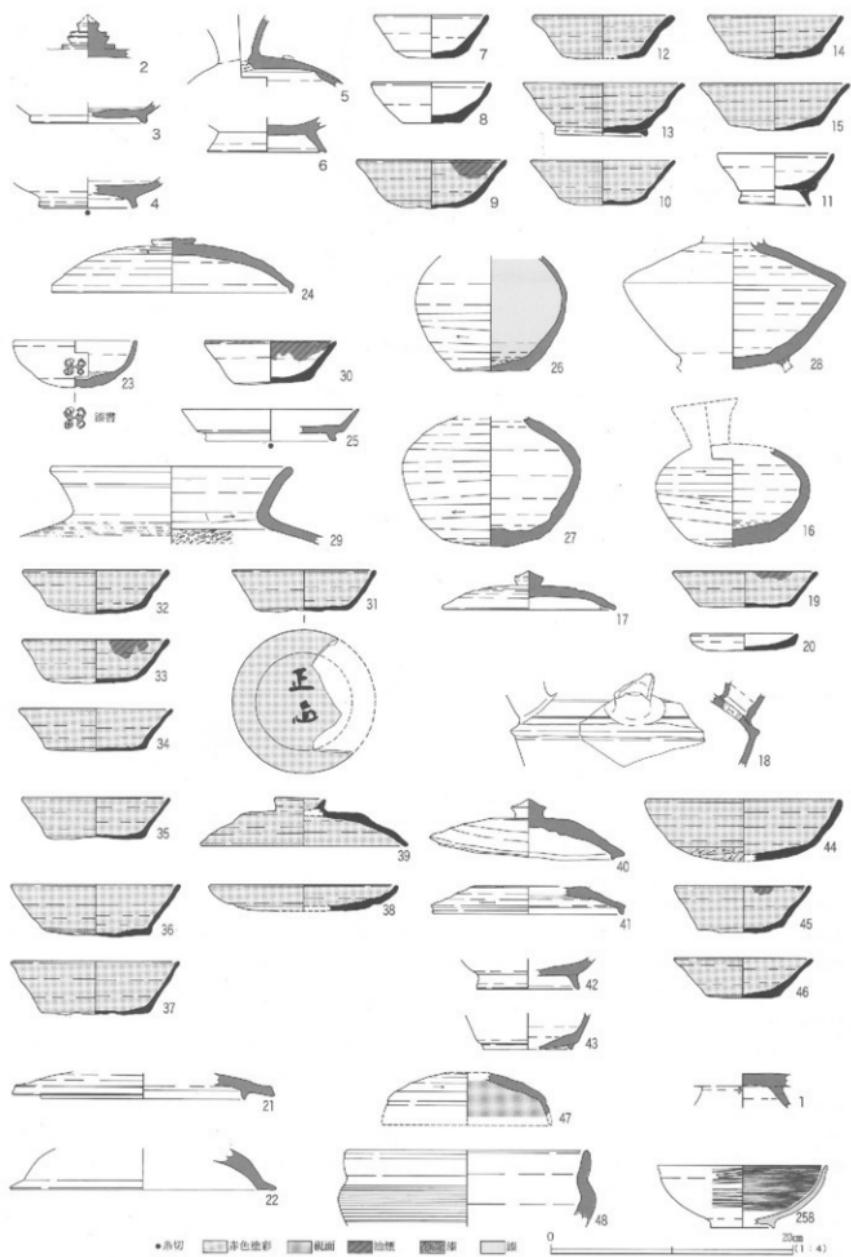
坏A (31~37) 口径10cm前後で外方に大きく開く口縁部と狭い底部からなるもの(31~33)と、上外方に開く口縁部と底部未調整を残し、ヘラ切りの段を残すもの(34~37)がある。

皿A (38) 口縁部がやや内湾気味に開く小型の皿。底部外面は、ヘラ切り未調整で、ヘラの段が残る。

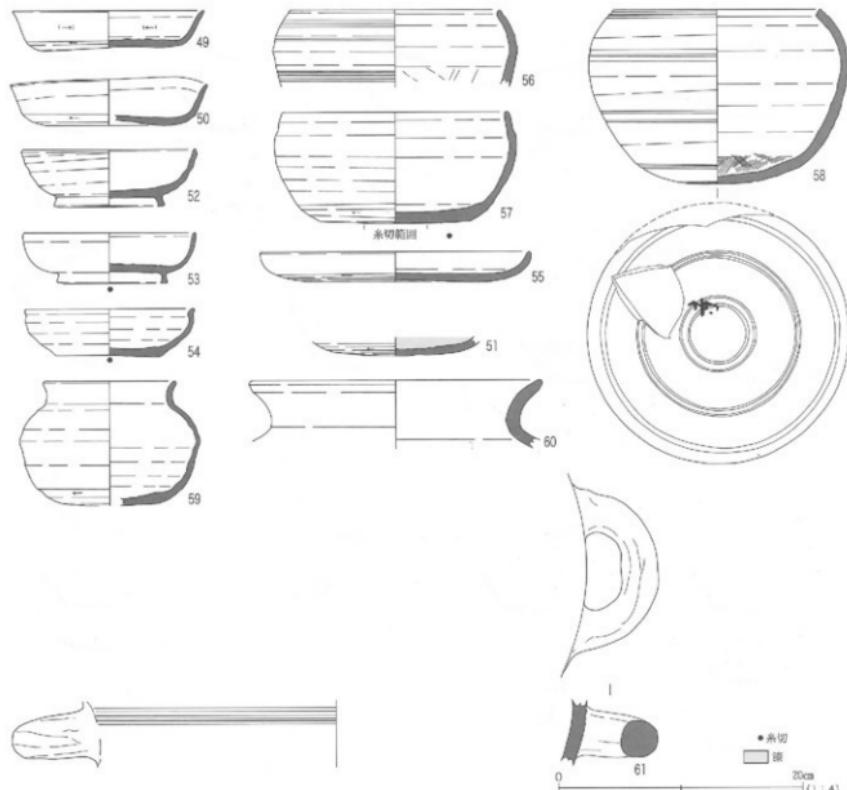
蓋 (39) 皿Aを逆さにした形態の蓋に環状のつまみを付けたもの。

僧房北

多数の廃棄土層・土壤から出土した土器である。寺域中心部の中では土器の出土量が多く、供膳具・煮沸具ともみられた。ここから出土した円面硯は小片1点であったが、転用硯は遺跡全体の半数に近い20点にものぼり、



第41図 寺城区画施設・中心伽藍出土土器



第42図 S E01内出土須恵器

大変集中している。これらの土器は僧房の維持期間を示すものと考えられる。須恵器は特徴的なものを抽出した。土師器は小片が多く、図化できるものは少ない。

須恵器

坏A蓋 (45・46) 整った宝珠形つまみで退化したかえりをもつ。焼膨らみ著しい。色調淡灰色で自然釉かかる。

坏B蓋 (41) 平坦な天井部から直線的に口縁部へづき、口端部を下方へ短く屈曲させて内面に膨らみをもたせたもの。床土出土。

坏B (42) 塊形の坏部に長い高台が付く。切り離しは不明。

壺 (43) 断面三角形に近い小さな高台が付く。脚径7.2cm。中・近世耕土出土。

土師器

鉢 (44) 丸底に近いヘラケズリの底部とやや内湾気味に立ち上がる口縁部。

坏A (45・46) 大きく外方に開く口縁部と狭い底部。

寺域内包含層

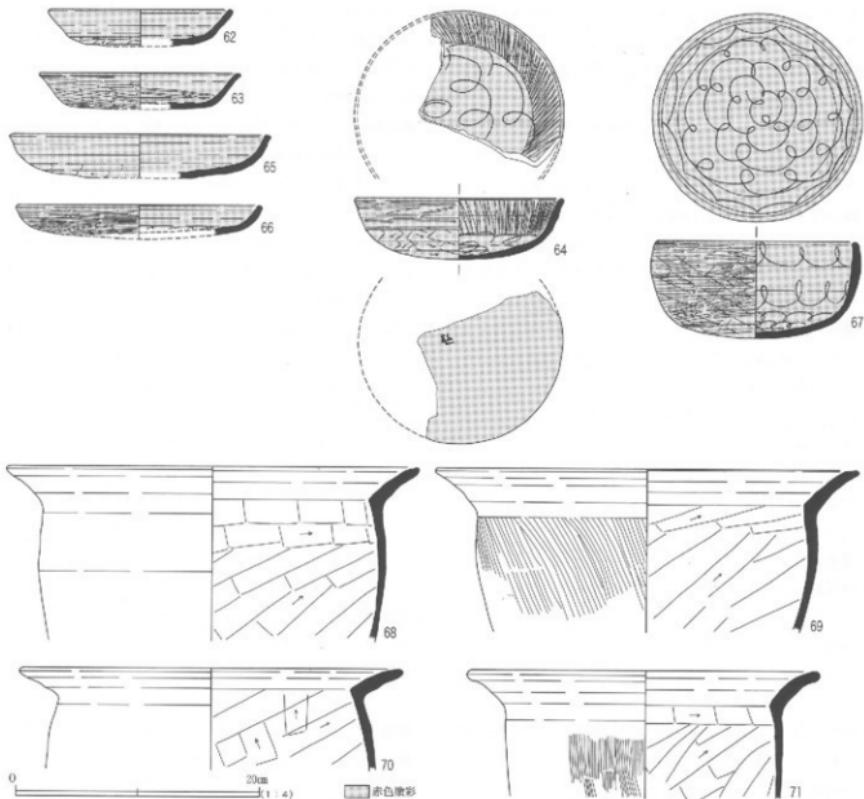
須恵器

坏H蓋 (47) 天井部破片。天井部と口縁部との境界は鈍い稜をなす。内面観に転用。1/3片。焼成良好、色調暗青灰色。S A01・S C01間、床土下の暗褐色包含層出土。3m区画範囲内の同包含層中から出土した軒丸瓦にはV・VI類の2点がある。天井部と口縁部との境界に稜をもつ坏H蓋の破片は僅か細片3点、飛鳥I・II段階のものとして希少。

鉢 (48) 内湾する体部に直線的に立ち上がる口縁部をもつ。体部外面カキメ調整。S B01・S B05間出土。

S E01内

完形に近いものがないわけではないが、破片でしかないものの個体数が多く、木製品や木片・自然遺物と混在して、第3層から多数の出土であるので、S E01廃絶時



第43図 S E 01内出土土師器

を示す遺物としてとらえられる。時期差があるが、須恵器の新しいものは平城II段階に比定される。土師器は、壺C・皿A・鉢・甕が出土した。器種は少ないものの比較的まとまった一括資料である。時期は、壺Cの皿形化が進み、鉢に見られる内面の暗文や密なヘラミガキの状況から7世紀後半～7世紀末に比定される。

須恵器

壺A (49～51) 底部外面へラケズリ。内面底部粘土紐痕跡残す。50は焼歪み著しい。49・50とも1/2片。51は内面漆付着、1/8片。

壺B (52・53) 坪状の壺部に脚端部内側に稜をもつ高台がつく。52は底部切り離しはヘラ切りか、53は回転糸切。

壺 (54) 内湾する浅い体部に外面肥厚させた口端部をもつ。底部回転糸切。1/2片。

皿A (55) 大型。口縁部は短く内湾する。底部外面へラケズリ。口縁部一部欠損。色調外面黒色、内面褐色。

鉢A (56～58) 56・58は口端部内傾し面をなす。56は外面カキメ状の痕跡を残す。瓦質。57は平底で浅い。底部中央6cmは静止糸切。58は丸底に近い平底で深い。2条1組の沈線が5帯めぐる。内面丁寧な仕上げ。底部外面が口付着のまま、焼窪みがありその右上に「寺」の墨書きを付す。ほぼ完形。

壺 (59) 肩部に最大胴径をもつ球形の体部に、外反して立つ広い口縁部をもつ。体部薄手。

甕 (60) 強く外反する口縁部で、端部で僅かに稜をもつ。甕体部破片は多個体みられる。

把手 (61) 直径約3cmの粘土紐を横位に付けた大型の環状把手。体部に3条の沈線がめぐる。同一個体の破片なし。

土師器

壺C (62～64) 小さな平底ないし丸底を有し、斜め上外方へ開く口縁部からなる。小型のもの(62・63)と大型の

もの(64)がある。口縁部内外面ヨコナデ、底部外面はヘラケズリする。63は内外面ともヘラミガキし、64は全体に丁寧なヘラミガキをし、内面に放射暗文1段と、内面中央に三重の連弧暗文を施す。

皿A (65・66) 広い平らな底部と斜め上外方に開く短い口縁部からなる。口縁部内外面ヨコナデ、底部外面ヘラケズリする。65はやや深く、66は連弧暗文を施す。

鉢 (67) やや内湾する口縁部が直線的に立ち上がる深身の鉢である。内外面とも密なヘラミガキを施し、口縁部内面に二重の連弧暗文と、中央に一筆書きによる満巻き状の連弧暗文を施す。

甕 (68~71) 大きく外反するく字口縁と卵形の胴部からなる。口縁部内外面をヨコナデ、胴部外面を縱方向のハケメ調整を施すが、難な調整で凹凸な面を残す。内面は縱方向のヘラケズリで整える。

S E 01掘方

須恵器・土師器が多量に出土している。飛鳥Ⅲ・Ⅳ、平城Ⅰ段階の編年上重要な遺物群であり、同類のものは省いたが、なるべく図化をはかった。

須恵器

坏H蓋 (72) 小型。天井部と口縁部の境界は不明瞭。天井部外面ヘラ切り未調整。口径11.2cm、器高4.3cm。

坏蓋 (73~77) 球状つまみの蓋でかえりのつくもの(73・74)とつかないものの(76・77)がある。76のつまみはシャープなつくり。いずれも天井部ヘラケズリ。74の内面墨付着。75・76の内面漆付着。77の外面つまみ部内側漆様付着。77は平成6年度試掘調査出土。

坏B蓋 (78) 扁平な体部に低い宝珠形つまみがつく。口端部は下方に小さく突出する。天井部外面ヘラ切り。焼成良好、外面緑色の自然釉がかかる。口径13.5cm。

坏H (79) 底部外面ヘラ切り。内面焼成前のヘラ記号有り。横板抜き取り穴掘方内出上。

坏B (80~82) 80の口縁部は強く外反し、高台は高くふんばる。底部厚手で外面ヘラ切り明瞭。81は外傾する口縁部で高台は外側に鋭い棱をもつ。底部外面ヘラケズリ。外面墨付着。82は底部中央4cmに糸切痕跡を残す。底部外面に「寺」墨書。

坏類 (83・84) 「久寺」施印土器。坏類内面中央に施す。細片のため調整不明瞭。印部分縦2.2×横1.6cm。

高坏 (85~88) 85はやや深めの塊状の坏部に太短の脚部がつく古墳時代以来の形態。脚裾部に1条の沈線を巡らし三角形透しと切り込みとを2方に施す。86は浅めの皿状の坏部に緩やかに開く高い脚部をもつ。脚部の4方に透かし様の沈線を有す。坏底部外面ヘラケズリ、内面同心円タタキ目文のちナデ。瓦質。色調灰白色。87は小型

の塊状の坏部で、坏底部外面ヘラケズリ。坏部内面に漆厚く付着。88は小型の高坏で、坏底部と口縁部との境界、脚部中位に沈線を施す。坏底部外面ヘラケズリ。胎土精良、黒色物質を多く含む。色調灰白黄色。口径8.1cm。

脚付盤 (89) 大型の坏部に外反する高い高台をつけたもの。口縁端部は面をなし内側に稜をつくる。脚下端部は小さく突出する。坏底部外面ヘラケズリ。坏底部内面鏡に転用。

鉢 (90~92) 90は金属器模倣須恵器。口縁端部内外面・胴部に沈線を施す。全体にシャープなつくり。口縁部外面カキメ調整、底部外面ヘラケズリ。口径13.8cm。91は口縁部外面に沈線2条施した浅鉢。口端部は内湾して内側に面をなす。体部内面カキメ調整。1/8片。92は土師器が須恵器焼成されたもの。口端部は内側に稜をなす。ハケメ調整のちヘラミガキ仕上げ、体部内面上方へのヘラケズリ痕残る。1/3片、破片は掘方内に広く散在。

壺 (93~96) 93は平瓶口縁部か。胎土88に類する。94は直口壺で肩部内面ろくろ回転ナデ。95は胴部に沈線と波状文を多用するもの。96は扁平で厚手。底部外面ヘラケズリ。97は壺か鉢の体部片で「口ア(部)内」の墨書がある。

円面鏡 (98・99) 98は突線帯状の脚端部。長方形透しの内面側に面取りが入る。脚径18.6cm、1/11片。99は大型、広い透しを設けるもの。脚端部上面の凹線の内側に脚を付ける。脚径28.4cm、1/11片。

横瓶 (100) 口縁部は短く外反し外側に小さな面をもつ。甕 (101~113) 多種多様で、体部破片も多量にあったがほとんど接合しなかった。104は口縁部外面にヘラ記号を有す。

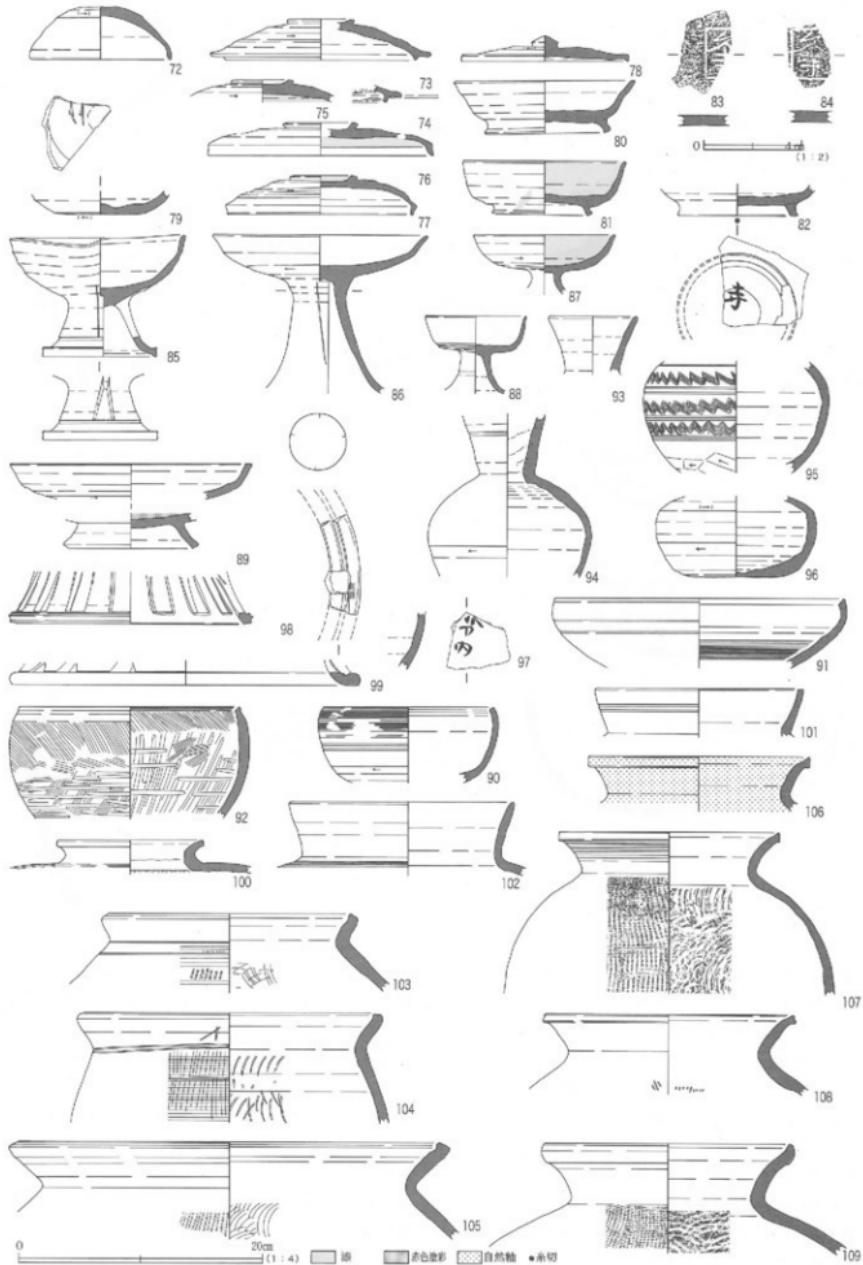
土師器

坏A (114・115) 114は上外方へ開く口縁部。底部は欠くものの、口縁部ヨコナデ後1段の放射暗文を施す。

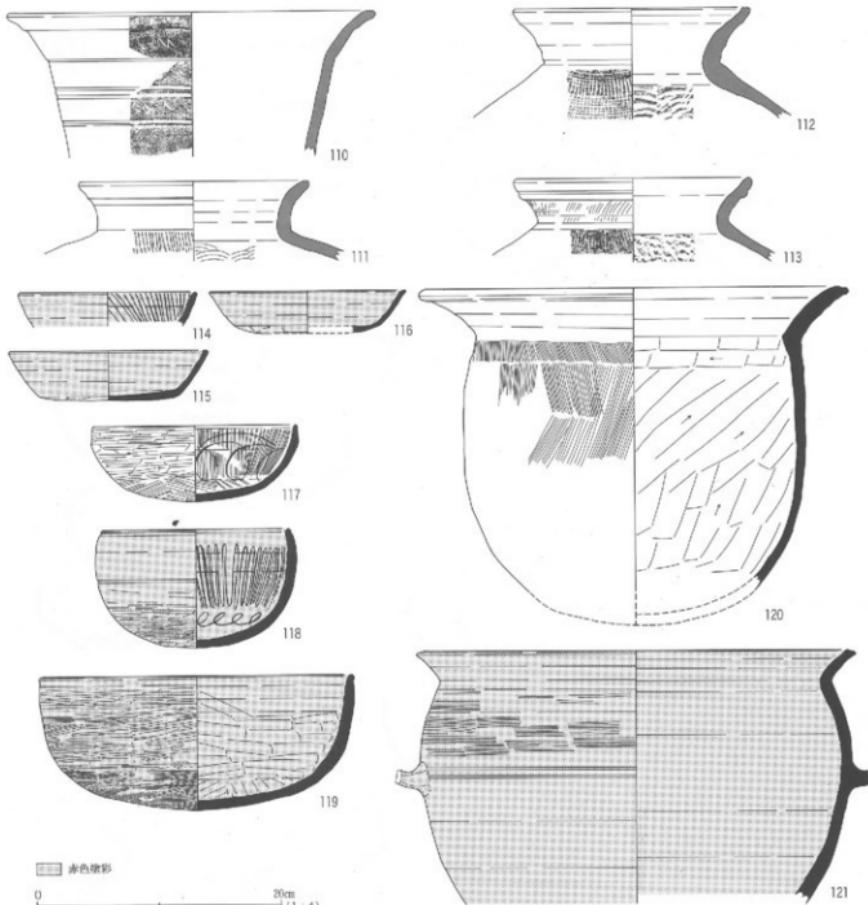
坏C (116) やや広い平底で、口縁部が斜め上外方に立ち上がる。口縁部内外面ヨコナデ、底部外面はヘラケズリする。

鉢 (117~119) 丸底に近い平底で、口縁部が内湾しながら開く深身の鉢。大きさにより形態が若干異なるが、内外面丁寧なナデ調整し、密なヘラミガキを施す。118は口縁部内面に連弧暗文を施し、118は口縁部に一段の放射暗文と底部に二重の連弧暗文を施す。119は大型の鉢で、底部外面はヘラケズリの後、極め細かなハケメ調整とナデ調整を施し、全体をきめ細かなヘラミガキする。

甕 (120・121) 口径が体部最大径を上回る丸底の甕 (120) と、球形で体部の最大径付近に一对の把手を付す甕 (121) がある。121の把手は形状三角形で上方向に屈曲する。体



第44図 S E 01掘方出土須恵器



第45図 S E01掘方出土須恵器・土師器

部外面にハケ目調整を施し、内面にはナデ調整をし部分的に極め細かなヘラミガキを施す。内外面ともやや濃い深紅色の赤色顔料を塗彩する。

S E01周辺

S E01検出面に至るまでの包含層内遺物である。上層は瓦質土器釜・鍋など中世遺物を含んでいたが、下層は奈良～平安時代の遺物に限られていた。

坏G蓋 (I22) 小型。かえりは口縁部より突出しない。暗緑色の釉が厚く降着する。口径8.6cm。

坏 (I23) 直立する口縁部と底部との境界に凹線がめぐる。底部外面へラ切り未調整。口径7.7cm。

坏H (I24) 立ち上がりは矮小化し、体部は深い。底部

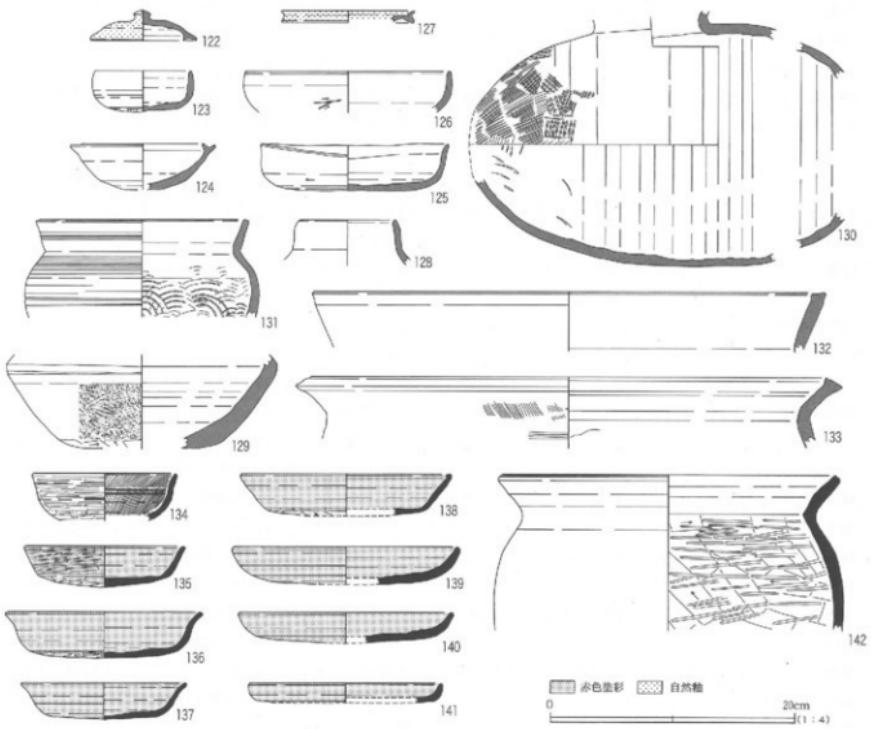
外面へラ切りナデ調整。丁寧なつくり。口径9.6cm。

坏A (I25) 平底で口縁部が直線的に開く。底部外面へラケズリ。口縁部焼き歪む。

塊 (I26) 口縁部外面に沈線がめぐる。体部外面にへラ記号を有す。

壺 (I27～I29) 口縁端部を上下に屈曲させた薄手のもの。I27は淡緑色の釉がかかる。I28は大型の短頸壺で口縁部が長く内傾する。I29は肩部に明瞭な棱をもつ厚手の壺で、体部外面格子叩き目文のちナデ。底部へラ切り、粗雑なつくり。

横瓶 (I30) 薄手。体部俵形。外面平行叩き目文のちヨコナデ、内面突き込み痕を残すが丁寧なヨコナデ。ヨコ



第46図 S E 01周辺出土須恵器・土師器

ナデの擦痕は壺18と同様である。内面に白色～薄ピンク色の物質付着。成分分析では水酸化アルミニウム、尿容器の可能性がある。体部1/5片、口縁部欠失。

壺 (131～133) 131は中型で、口縁部外面と胴部に沈線2条を施す。肩部外面カキメ調整。132・133は大型で口径約42.0cm。

土師器

壺A (134・135) やや小型の壺。平らな底部と斜め上外方に立ち上がる口縁部からなる。口縁部外面丁寧なヘラミガキを施し、底部外面へラケツリする。

壺C (136～138) 底部が平底で、口縁部が斜め外方に開くもの。137は口縁部が内側に折り返され丸く肥厚する。

皿A (139～141) 広い平らな底部と斜め上外方に開く短い口縁部からなる。口縁部内外面ヨコナデ、底部外面へラケツリする。139はやや深く、140・141は浅い。

壺 (142) 上外方へく字状に開く口縁部と、球体の胴部からなる壺。口縁部内外面ヨコナデ、体部外面はナデ調整し、内面はヘラケツリの後部分的なヘラミガキを施す。

S D 01

遺構の中でもまとまった土器量があり、仏器器種を含んでいる。ほぼ寺院存続期間を反映している遺物と推定されるが、寺城外の流路堆積であり新旧混在していることに注意を要する。特に9世紀代の土師器壺皿類が多く、灯明器として用いられたものも少くない。須恵器と土師器の量的差は約3:7程度であろう。須恵器の量も少なくはないが9世紀代の土師器ほどに復元されなかつた。

須恵器は各器形、器種をあげ、同様のものは図化していない。土師器には壺A・壺B・鉢・皿A・皿B・高壺がある。いずれも細片や破片が多く、完形品は非常に少なかった。これらの土器には、伯耆国庁第1段階の西方官衙から第3段階に比定できるものがあり、比較的の長期間利用されていたことが判明した。

須恵器

壺H蓋 (143・144) 天井部と体部との境界は不明瞭。143は口縁端部内面に面をなす。天井部外面丁寧なヘラケツリ。1/8片、口径14.9cm。144は大きく焼き歪む。

坏蓋 (I45) 円形のつまみが付く扁平な蓋。口縁部は短く折れて丸終わる。天井部外面へラ切りか。口縁部3/4欠損、外面1/2に厚く黄緑色の灰がかかる。

坏G蓋 (I46～I49) I46は小型の宝珠つまみで天井部扁平、I48は最小品、薄手。かえりが内側に突出する。外面へラ切りナデ仕上げ。I49は厚手でかえりは小さい。天井部外面へラケズリ。

坏B蓋 (I50) 天井部は平らで、口端部は面をなして稜をつくるシャープなつくり。天井部外面へラケズリ。

坏蓋 (I51～I54) I51は口縁端部を横位に屈曲させ丸つくるもので金属器模様須恵器の一種。環状つまみが付く。天井部外腹頂部のみへラケズリ、周辺にへラ切り痕残す。I52は天井部平坦で、口縁端部は外側に面をなすシャープなつくり。I53は体部中位に沈線をめぐらせた金属器模様須恵器。つまみは外傾する高い環状つまみで、端面内外に稜をなす。焼き歪み著しい。つまみI54は上面にへラ記号を有す。

坏H (I55) 底部外面へラ切り未調整、板目残す。体部焼き歪む。

坏G (I56・I64) I55は最小品、1/5片。口径9.4cm。I64は坏H蓋に近く、口端部外面にヨコナデによる稜をもつ。底部外面へラ切りナデ仕上げ。内面体部に朱墨残す。口径13.6cm。

坏A (I57) 大型。底部外面ナデ。内外面とも火拂様の焼継が入る。底部外面「廿」の墨書き有り。

坏B (I58～I63) I58は厚手で粗雑。高台は外側に凹面をなし下端はつぶれる。内面覗に転用。I59・I60の高台は断面方形で低い。I59は底部外面へラ切りで、高台端部段をなす。I60はI57と同様、内面に火拂様の焼継が入る。底部外面中央に「上」の墨書きあり。I61底部外面糸切。I62は塊状の坏部に低く聞く高台。底部外面静止糸切。I63は薄手で深い坏部に低い高台が付く。底部外面へラ切り。

坏 (I65～I67) 口縁端部外面が肥厚するもので、I66は内面底部を覗に利用した墨溜。I67は大型。底部外面回転糸切で粗雑なつくり。

坏 (I68) 金属器模様須恵器。体部歪みのないゆるやかな塊状をなし、口縁端部は内外に凹みをもたせたシャープなつくり。底部外面へラ切り。1/4片。

皿B (I69) 底部外面へラ切り。内面底部覗に転用、外面底部に判読不明の墨書き有り。口径15.6cm、器高2.9cm。

鉢A (I70) 鉄鉢形。口縁部内溝し端部内傾する。底部尖底。内外面黒漆塗。口径18.5cm。

高坏 (I71・I72) I71は太短の脚部で塊状の坏部がつくもの。2方透し、形状不明。I72は全体に熔着していたも

ので、柱状部が細く2条の沈線を2カ所施す。その間に透し様の切り込みを入れる。脚端部外側に面をもつ。

壺L (I73・I76) 口縁端部屈曲させ外側に凹面をなす。体部外面板ナデ様。I76は口縁端部が下外方に開き、面をもたせたもの。淡緑黄色の釉がかかる。

壺K (I74・I75) I74は胴部に1条の沈線をめぐらす。体部外面へラケズリのちナデ。I75は外側に強く踏ん張る高台で、下端は小さく突出する。底部外面へラケズリ。内面突き込み裏残す。

壺 (I77) 外面平行叩き目文のちヨコナデ。口縁部内面黄緑色の釉がかかる。焼き膨らみ有り。1/4片。

土師器

坏A (I78～I215) 口径13cm前後で、底部にへラケズリを残すや古い様相を示すもの(I78～I84)、口径が12cm前後で底部切離しにへラ切り技法を用い、へラ切りの跡を丁寧にナデ消すもの(I85～I98)、口径が10cm前後で、へラ切り技法による切離し後底部未調整のもの(I99～I211)、底部がやや丸味を帯びる未調整のもの(I212～I215)がある。いずれも器高は3.5cm前後で上外方へ開く口縁部を有する。口縁部内外ヨコナデ調整し、大型の古い様相を持つものにへラミガキを有するものがある。I213の坏Aを除き赤色顔料による塗彩が施される。

坏B (I216～I220) やや深めの坏Aに高台を付けたもの。大型のI216・I217と、小型のI218～I220がある。口縁部内外面ヨコナデ、底部外面は未調整を残す。

鉢 (I221～I224) 内湾気味に立ち上がる口縁部が端部で内傾するもの(I221・I222)と、外傾するもの(I223・I224)がある。前者は口縁部内外面密なヘラミガキを施し、外面底部をへラケズリする。I224は幅が狭く、深い作りである。

皿A (I225～I234) やや大型で、口縁部と底部が明瞭に区別でき、口縁端部が上外方に折り曲がるもの(I225～I229)と、内湾気味に外傾する口縁部を有するもの(I230～I233)、そして底部外面を手捏状に調整した雑な作りのもの(I234)がある。

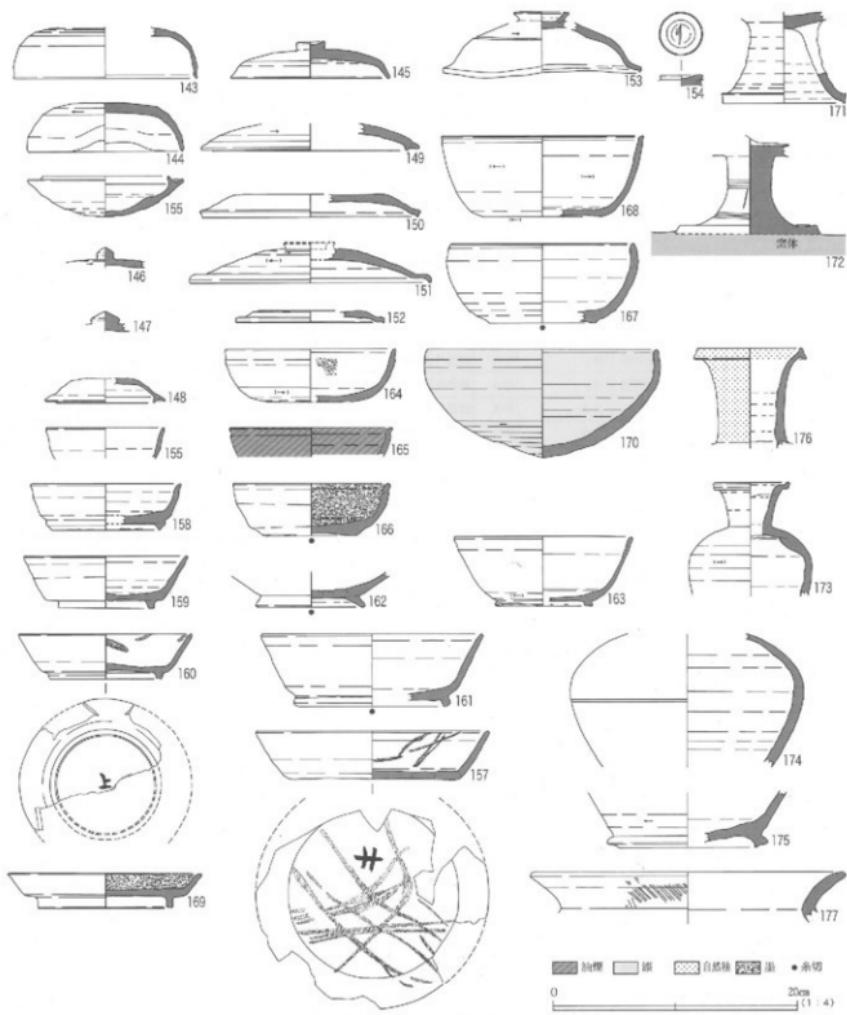
皿B (I235～I240) 大型の深い坏部に外側に広がるやや高い高台を持つもの(I235～I237)と、浅い坏部の皿に断面三角形の小さな高台がつくもの(I238～I240)がある。前者は、口縁端部を上外方へ折り返しわざかに外反する。

高坏 (I241・I242) 高坏の坏部の破片。口縁部を上外方へ短く屈曲させる坏部に、部分的な面取りを有する脚部をもつ。脚部は欠く。

(須恵器：根鉢 土師器：森下)

墨書き土器

生活用具の土師器や須恵器などの器に墨で文字や記号を書いたものが墨書き土器である。大御堂廐寺跡の墨書き土器は、松ヶ坪遺跡第2次調査において「久米寺」銘の須



第47図 S D01掘方出土須恵器

恵器环(243・図版18)の発見が最初である。今回の調査では、文字や記号、判読不可能な文字、文字の一部を残す断片など、総点数約160点の墨書き土器が出土した。この内、判読可能なものを中心概要を述べる。

墨書き土器の出土は、S D01と、S E01内及び掘方から出土した。これ以外にはS B01周辺から、数点出土した。

墨書きを記載した土器は、土師器と須恵器で、掲載したものは須恵器7点、土師器35点で、圧倒的に土師器への記載が多い。器種は、环A32・环B4・环C1・皿A2・

皿B1・鉢1・壺1があり、环類への記載がもっとも多い。

墨書きを記す土器の部位は、文字の一部を残す小片や断片を除き、ほとんどが体部外面や底部外面であり、そのうち底部外面が大多数を占める。体部外面への記載では、环の口縁部直下に見られ、書方は正位、横位、逆転した倒位がある。198のように、体部外面(横位)と底部外面の2カ所に墨書きを施す例もある。

文字の内容については、文字の一部を残す小片や、判

墨書土器一覧

上巻番号	出土位置	器種	墨書篆文	器形	記載位置
23	炉跡4周辺	須恵器	「88」(漆書)	环G	体部外面
31	鉢跡5	土師器	「正口」	环A	底部外面
58	S E01内	須恵器	「寺」	鉢A	底部外面
64	S E01内	土師器	「広」	环C	底部外面
82	S E01前方	須恵器	「寺」	环B	底部外面
97	S E01前方	須恵器	口部内?	壺?	体部外面(正位)
157	S D01	須恵器	「廿」	环A	底部外面
160	S D01	須恵器	「上」	环B	底部外面
180	S D01	土師器	口	环A	底部外面
187	S D01	土師器	「久寺」	环A	底部外面
188	S D01	土師器	「久米寺」	环A	底部外面
190	S D01	土師器	「久米寺」	环A	底部外面
195	S D01	土師器	「淨」	环A	体部外面(横位)
197	S D01	土師器	「寺」	环A	底部外面
198	S D01	土師器	「久寺」	环A	底部外面
199	S D01	土師器	「久寺」	环A	体部外面(横位)
206	S D01	土師器	「吉」	环A	底部外面
207	S D01	土師器	「東」	环A	底部外面
208	S D01	土師器	「久寺」	环A	底部外面
209	S D01	土師器	「久寺」	环A	底部外面
210	S D01	土師器	「久寺」	环A	底部外面
211	S D01	土師器	「印」	环A	体部外面(正位)
215	S D01	土師器	「仏行」	环A	底部外面
216	S D01	土師器	「介」	环B	体部外面
218	S D01	土師器	「和大」(重字)	环B	体部外面(逆位)打欠き
228	S D01	土師器	「淨私」	皿A	底部外面
229	S D01	土師器	「久寺」	皿A	底部外面
237	S D01	土師器	「口」	皿B	底部外面
243	松ヶ坪瀧跡第2次	須恵器	「久米寺」	环	底部外面
244	S D01	土師器	「井」	环	体部外面(正位)
245	S D01	土師器	「吉」	环	底部外面
246	S D01	土師器	「器」	环	体部外面
247	S D01	土師器	「福」	环	底部外面
249	S D01	土師器	寺	环	底部外面?
250	S D01	土師器	寺	环	底部外面?
251	S D01	土師器	「久寺」	环A	底部外面
252	S D01	土師器	「久寺」	环	底部外面
253	S D01	土師器	「久寺」	环A	底部外面
254	S D01	土師器	「久寺」	环A	底部外面
255	S D01	土師器	「久寺」	环A	底部外面
256	S D01	土師器	「久寺」	环A	底部外面
248	S D01	土師器	「寺」	环A	底部外面
257	S D01	土師器	「久寺」	环A	底部外面

読不能な墨書を除き計41点を読解した。この内寺の呼称に関する墨書が最も多く、「久米寺」「久寺」「寺」の3種があり41点中22点を数え、全体の半数を占める。「久米寺」が3点、「久寺」が13点、「寺」が6点であった。「久寺」は、久米寺の「米」が省かれたものと思われる。そのほか吉祥文字と言われる「吉」や「福」、仏事関係の「淨」・「淨私」・

「仏行」、場所や数字を示す「上」・「東」・「廿」・「口部内」、そのほか「器」・「井」・「印」などがある。

「久米寺」については、大御堂廃寺跡の寺名と考えるのが妥当であろう。伯耆国には、河村・久米・八橋・汎入・会見・日野の六郡が『和名類聚抄』に掲載される。当時の久米郡は現在の行政区画でいえば、倉吉市・閲金町・北条町にあたり、大御堂廃寺跡の所在地も含まれる。さらに久米郡には、久米郷が存在するが、勝部郷の西側、現在の倉吉市東岩倉町から西倉吉町・福守町あたりまでを郷域としており、大御堂廃寺跡は勝部郷に含まれる。このことから大御堂廃寺の「久米」は郷名ではなく、郡名である可能性が高く、郡名をもついた寺院であった可能性が考えられる。当時の寺院で寺名が今まで伝わるのは、近畿地方以外の寺院では非常に少なく、中国地方では島根県安来市の野方廃寺が「教吳寺」、広島県三次市の寺内廃寺が「三谷寺」と文献から知られるだけであり、発掘調査で寺名が明らかになった例は大御堂廃寺跡が初めてである。

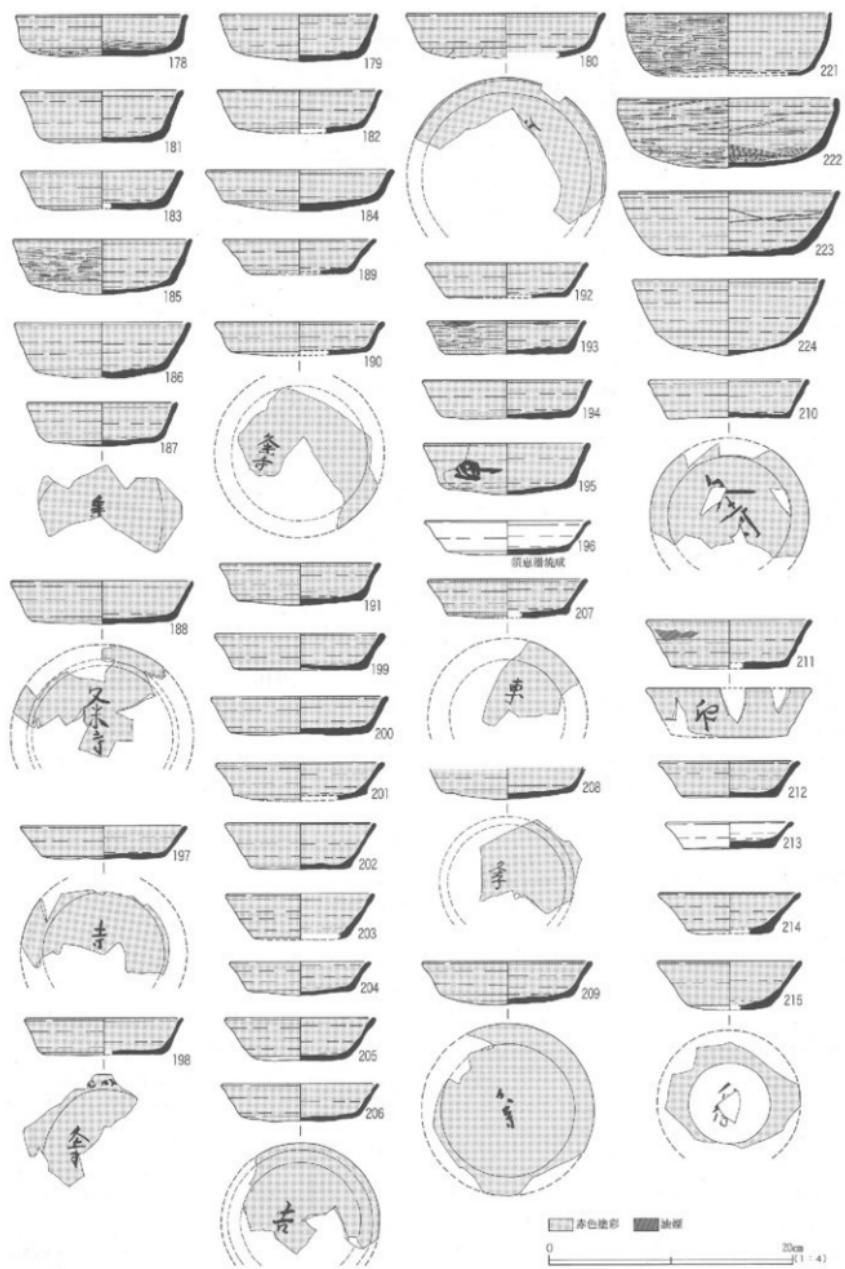
墨書の「久米寺」に見られる筆使いは、字の大きさやバランスから三点とも三者三様であり、特に米と寺に違いが見られる。また「久寺」では、楷書的なものや草書的なものがある。草書的な墨書の内、その筆運びの様子から同一人物による記載の可能性も考えられるものがある。

また吉祥文字とされる「吉」や「福」も、出土數は少ないものの明瞭な筆跡を持つ墨書である。文字の意味は不明であるが、人名の略の可能性もある。

「口部内」は、大御堂廃寺跡の所在地である久米郡勝部郷に意味するものなのか、あるいは久米寺(大御堂廃寺跡)を建立したとされる勝部氏を示すものは不明であるが、その存在は非常に重要な意味を持つ。

さらに二文字を一文字のごとく密着、あるいは重ねるように書く字形「重字」の可能性が考えられるものに、「和大」と書かれた墨書がある。环Bの体部外面に書かれたもので、一見では一字に見えるものの、一字の中に和と大が重なる。

墨書の「井」は、墨書土器では1点であるが、文字瓦



第48図 S D01出土土師器 1

には線刻による「井」がある。一般的には井戸の「井」と解釈するのが普通であるが、その字体が井ではなく、直線的な井で有るところから、民俗例で確認することができる一種の魔よけ記号の可能性も考えられる。(森下)

スタンプ土器(施印土器)

S E01掘方から出土した須恵器环底部内面に施印する土器である。印面陽字印で、いわゆる押捺器表の字画が窪む印で、「久寺」と施印される。83は印の端部分が欠けているためその幅が不明であるが、長さ2.2cmを測る。84は、端が欠けるものの欠けた場所が凹線であり幅1.6cmと復元できる。長さは2.2cmを測る。両方とも字画の周りを凹線が囲む。印字は、墨書き土器にも存在する「久寺」で、「久米寺」の「米」を省略した大御堂廃寺跡の寺名と考える。「久」の字の表現方法や周りを囲む凹線との接し方などから、2点のスタンプ土器は同一印から施印されたものである。

印字の内容については、産地を示すものや供給先を示すものとされており、平城宮・京や產宮跡、岡山県金山廃跡などから出土例が知られている。大御堂廃寺跡の「久寺」印は、その出土から産地を示すものではなく、この須恵器环類が大御堂廃寺跡で使われるためのスタンプで、いわゆる供給先を示したものと推定できる。「久寺」のように、寺の名前がスタンプされるのは、初めての例であり、大御堂廃寺跡の寺名や寺の性格、須恵器环類の供給元を考える上で重要な資料である。(森下)

中世土器・陶器・磁器

守城全域から土師質土器・須恵質土器・瓦質土器・白磁・青磁・備前焼(259~263・図版18)・瀬戸焼・唐津焼など中世土器が出土しているが、いずれも破片で全体が復元できるものは1点であった。

瓦質土器塊(258) 体部は内湾し、口縁部はヨコナデによってわずかに外反する。口縁部内面に段状の沈線が巡る。体部は内面が密、外面が疎なヘラミガキを施す。胎土は精良で、色調は内外面黒色、断面は淡灰白色である。口縁部約10分の1遺存、底部一部欠損する。復元される口径約14cm、高約5cmである。形態・手法から、畿内大和型第I段階(11世紀末~12世紀前葉)に比定される。S D02出土。(岡本)

参考文献

異常一郎『記号・文字・印を刻した須恵器の集成』 平成9年~11年度科学研究費補助金研究成果報告 2000年

尾上火・森島康雄・近江後秀 「瓦器塊」『概説 中世の上器・陶磁器』 中世土器研究会編 1995年

土器について

須恵器

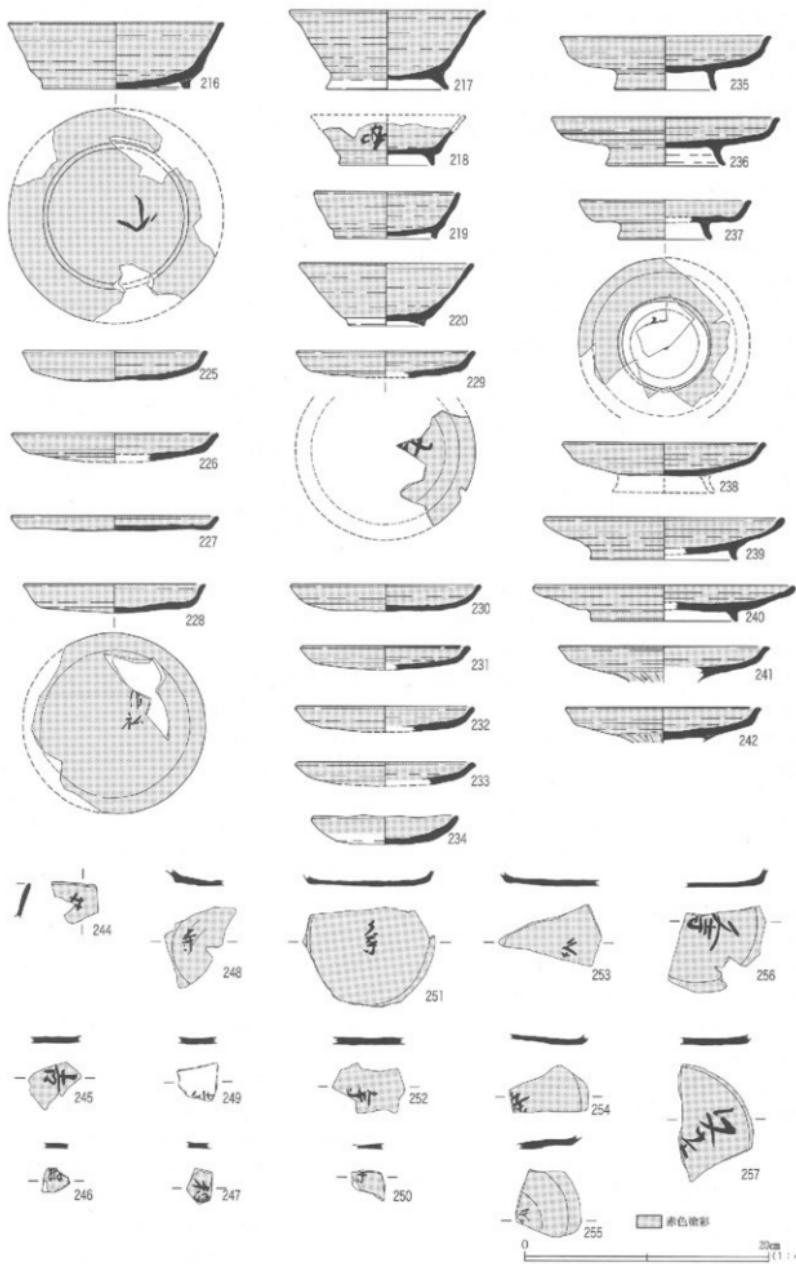
大御堂廃寺跡出土土器のうち、最も古い年代を示す飛鳥I・II段階に相当する須恵器群は、第3次調査トレンド6築地塚推定区の流路堆積層で確認したが、大御堂廃寺跡の遺構に伴うものとは言い難い。寺域内包含層出土の坪H蓋(47)は転用窓で、寺院に関するものとも考えられたが、この器種は1点のみで、出土位置周辺の遺構調査は行なっていないので、混入品かどうか不明である。遺構に伴う土器としては、溜枡S E01掘方出土土器、東溝S D01出土土器の飛鳥III段階のものをあげることができ、これらは創建年代を推定する資料となる。

溜枡S E01掘方出土土器は、古墳時代的な様式と奈良時代的な様式が混在し時期幅をもつものの、寺院関係薬物と推定される上器群である。古墳時代以来の器形である坪H蓋(72)・坪H(79)はヘラ切り未調整で陰田7、飛鳥III段階に比定される。新器形としては坪B(80)が粗い作りながら形態は飛鳥III段階に類するものである。溜枡部材の年輪年代測定では西暦730年頃伐採との結果が得られ、低い宝珠つまみでかえりのない坪B蓋(78)、坪底部中央に糸切痕跡を残す坪B(82)などがその時期を示すものであろう。

東溝S D01出土土器は、古墳時代以来の器形である坪H蓋(143・144)・坪H(155)がある。いずれも坪G・坪G蓋との判別が難しいものである。S D01には瓦陶兼業窯が隣接するものと推定され、出土遺物の中に須恵器の焼亞み品が多いのもその理由と考えられる。144・155も焼亞み品であるので、窯着した高坪(72)と同時期の可能性が高い。坪頭の出土量は少なくないにもかかわらず、乳頭状つまみがみられないことから、飛鳥III・IV段階に比定しておく。

特記すべき土器としては、講堂S B05基壇から出土した坪G蓋(17)がある。端正な宝珠つまみとかえりの形態から飛鳥IV段階に属するもので、講堂の建立時期を示すものと推定される。

須恵器の形態と使用方法についてみると、仏器形態である合子蓋(2)・多嘴壺(18)、金銅器模倣の鉢(90・168)、鉄鉢様漆塗鉢(170)など特別なものが存在する。僧房北・溜枡掘方では、漆容器として使用された壺や黒漆が付着した坪頭類が目立った。溜枡内で漆絞り布も出土していることから、寺院内に漆工房が存在していたのは明らかである。転用窓は僧房北に多くみられたが、窓に限らず須恵器・土器類の日常雑器が投棄された状態であった。9世紀代を中心とする土器群で、須恵器窯具・土器窯・煮炊具が揃っている。寺院存続期間の実態を示す土器群



第49図 S D01出土土師器 2

であるが、遺構が不明瞭で遺物が混在し、遺物整理期間の制約から略したことと付しておく。

これまで、東伯者地方の7世紀代の食器は、古墳供獻用の須恵器を基本に、煮炊具である甕以外の土師器はほとんどわかつていなかった。たとえば、大原庵寺跡は7世紀代の須恵器はあるが、8世紀後半になるまで土師器はほとんどない。それに対して、溜井と東溝から出土したバラエティに富む7世紀後半～8世紀前半の土器群は、律令体制下の土器生産・流通にかかる資料として重要である。この時期の須恵器と土師器の割合は6:4程度であるが、8世紀後半以降土師器に交代していき、9世紀代には土師器の量が増加する傾向をみることができる。
(銀峰)

土師器

大御堂庵寺跡において出土した土師器は、环A・环B・环C・鉢・皿A・皿B・高环・甕があり、溜井と東溝の出土のものがその大半を占める。調整技法は口縁部をヨコナデし、底部外面未調整のもの(a手法)と、底部外面ヘラケズリ調整するもの(b手法)があり、b手法ではさらにヘラミガキや暗文が施されるものもある。さらに土師器に塗彩される赤色顔料にもその違いが認められる。こうした条件で大御堂庵寺跡の出土土師器を概観すると溜井出土遺物と東溝出土遺物には明らかな違いがあり、時期的な差を見ることができる。特に溜井出土遺物は、环A・环C・皿A・鉢・甕など、そのほとんどがb手法の調整技法により整えられ、極め細かなヘラミガキや複雑な暗文を多用する。赤色塗影もほとんどが深紅色で、東溝出土の上器とは明らかに異なる。

倉吉地方の奈良時代の土師器編年とその年代観は、昭和53年度に刊行された『伯耆国庁跡発掘調査報告(第5・6次)』において異塵一郎氏が、伯耆国庁出土の土師器をもって第1段階から第3段階までを、8世紀後半から10世紀前半に位置づける大綱を示した。その後伯耆国庁では確認できなかった8世紀前半代の土器を、福田寺遺跡2次調査の1号土壙で出土した环Cにより確認した。この結果、倉吉地方の奈良時代土師器編年は、8世紀代を福田寺1号土壙と国庁西方官衙の土師器で、9世紀代を伯耆国庁のS D37・S D33・S K05・S D35・S D38出土の土師器で、10世紀代を伯耆国庁S D38とS D39でそれぞれ比定できた。そして、8世紀前半からロクロ成形土師器の出現する10世紀代までの流れがとらえられた。

大御堂庵寺跡の溜井出土の土師器は、まず暗文や密なヘラミガキを持つ個体が多いことが特徴としてあげられる。暗文の種類は、伯耆国庁第1段階の土師器に見られ

る暗文に比べ、暗文が太く、その種類も連弧暗文・放射暗文があり、施文方法も多様化し、丁寧な作りを示す。調整技法も、全てb手法であり、环Cも大型品が残る。さらに肩部に上方に折り曲げた三角把手を付けた甕が残る。こうした条件は、暗文が消える8世紀前半代に比定できる福田寺1号土壙出土の土師器より古い要素をもち、金属器模倣の伝統を暗文やヘラミガキに強く残した鉢や环が存在する等から、7世紀後半から7世紀末に比定できるといえる。

量的に少ない中での時期決定であるため、环Aや环Cの資料の増加を待ちざるに検討を加えたい。
(森下)

参考文献

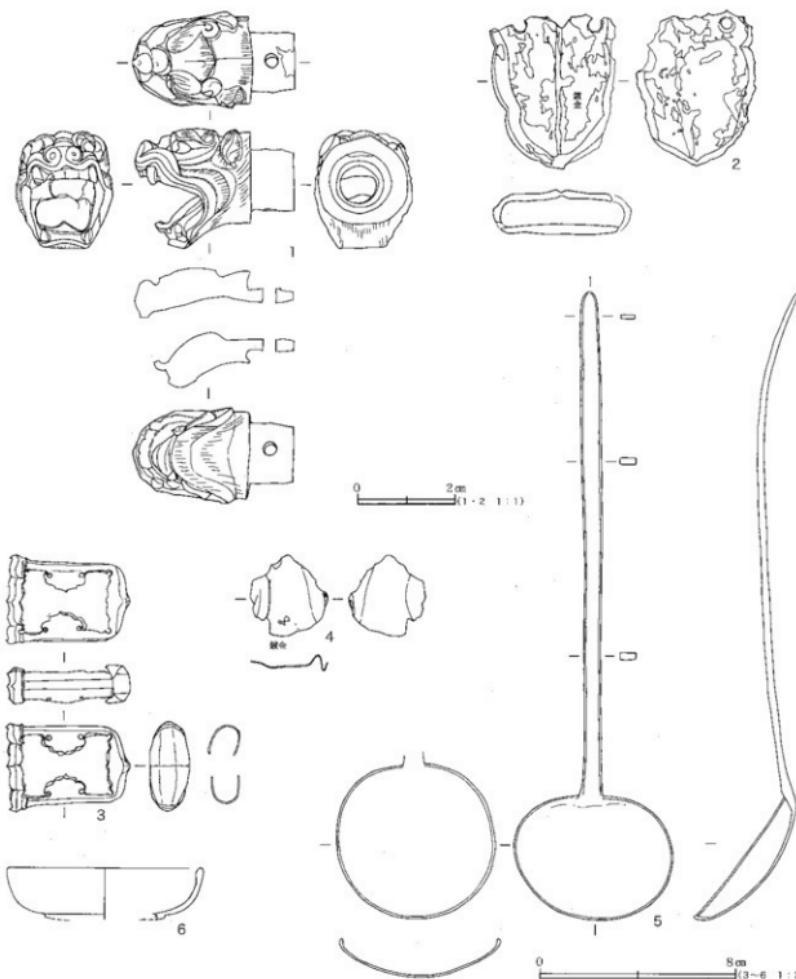
- 『伯耆国庁跡発掘調査報告(第5次・6次)』 倉吉市教育委員会
1979年
『平城宮発掘調査報告Ⅶ』 奈良国立文化財研究所編 1976年
『福田寺遺跡発掘調査報告書(第2次調査)』 倉吉市教育委員会
1998年
『古代の土器1 郡城の土器集成』 古代の土器研究会編 1992年

3 金属製品

銅製品

獸頭・帶先金具・刀金具・押出仏・匙・鏡などの製品を含む、総数52点が寺域全域から出土した。そのほとんどは破片であり、全体の形状を窺うことができるものは僅かであった。以下、図化できるものについて述べる。
獸頭(1) 仏具の飾り金具と推定される。獸の頭を具象的に表現した精巧なつくり。口を大きく開けて威嚇的である。眉目口耳や毛並み・鬚など細部は毛彫りで表現している。全長32.5mm、頭長23.8mm、重さ34.1g。柄の直径は12.1mmで上下に直径2.5mmの目釘穴が貫通する。柄からみて直径約2cmの細い棒に取り付けたと考えられる。用途は不明である。S C01基壙検出面の遺物包含層から出土した。

獸頭は、鑑定の結果、錫が96%含まれる青銅であり、朝鮮半島の材料である可能性が高く、新羅系統の分布領域に近いものである。造形意匠・制作技術からみても優品であり、管見する限り、東アジア圏内では類例がない。
帶先金具(2) 細中央に稜線をもち、縁は花形に割りをもつ。上方には装着用の直径2.0mm大の突孔が2カ所ある。一部欠損し、外面には金メッキが残る。表面と裏面に分離して、外面を上に向けて重ねた状態で出土した。復元すると中空の同一個体になると思われる。一部欠損する。表面は長さ32.0mm、重さ4.6g。裏面は長さ32.0mm、



第50図 銅製品1

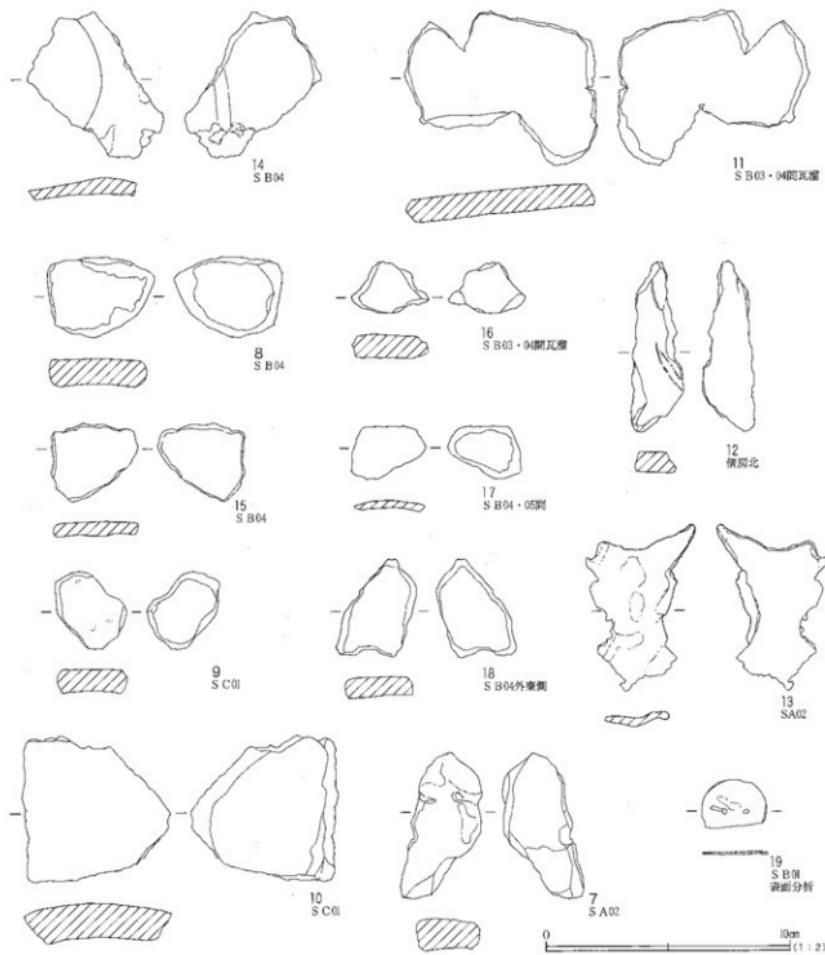
重さ4.2g、S C01の獣頭出土地点から北西へ約0.75m離れた基壇検出土面の遺物包含層から出土した。

刀金具(3) 石突(梢尻)部分と考えられる。全長5.1cm。完形品。S D01から出土した。時期は不明である。

押出仏(4) 衣様を呈する。33×31mmの小片。厚さは0.65mmと厚いが、形状から押出仏と推定した。表面には鍍金痕跡が一部認められる。部位は不明である。S D01から出土した。

匙(5) 匙面は円形を呈し、柄は細長く緩やかに湾曲する。柄は、表の縁に細い沈線が刻まれ、先端は上下面とも使用による摩耗跡が認められる。総長26.3cm、匙面の直径約6.5cm、厚さ0.3~0.7mmで一部欠損する。柄の長さ20.7cm、幅は太いところで0.75cmである。S D01付近、当時の地表面に近いところで出土した。

匙は、鑑定の結果、銚が22%含まれる青銅で、材料产地は不明。正倉院宝物の佐波理匙に寸法・形態とも類似する。



第51図 銅製品2・鉛製品

鏡(6) 復元される口径約8cm、器高約2cm弱、厚さ2mmで小型。約6分の1遺存する。S A02から出土した。その他 梵鏡片と推定されるもの(7~12)が計6点出土している。いずれも破片で、最大58×78mm、厚さ8~14mm。部位不明。S B03・S B04間、S B02、S B04、S C01北外、S A02で出土した。他の破片(13~18)は、小片のため不明。

鉛製品(19)

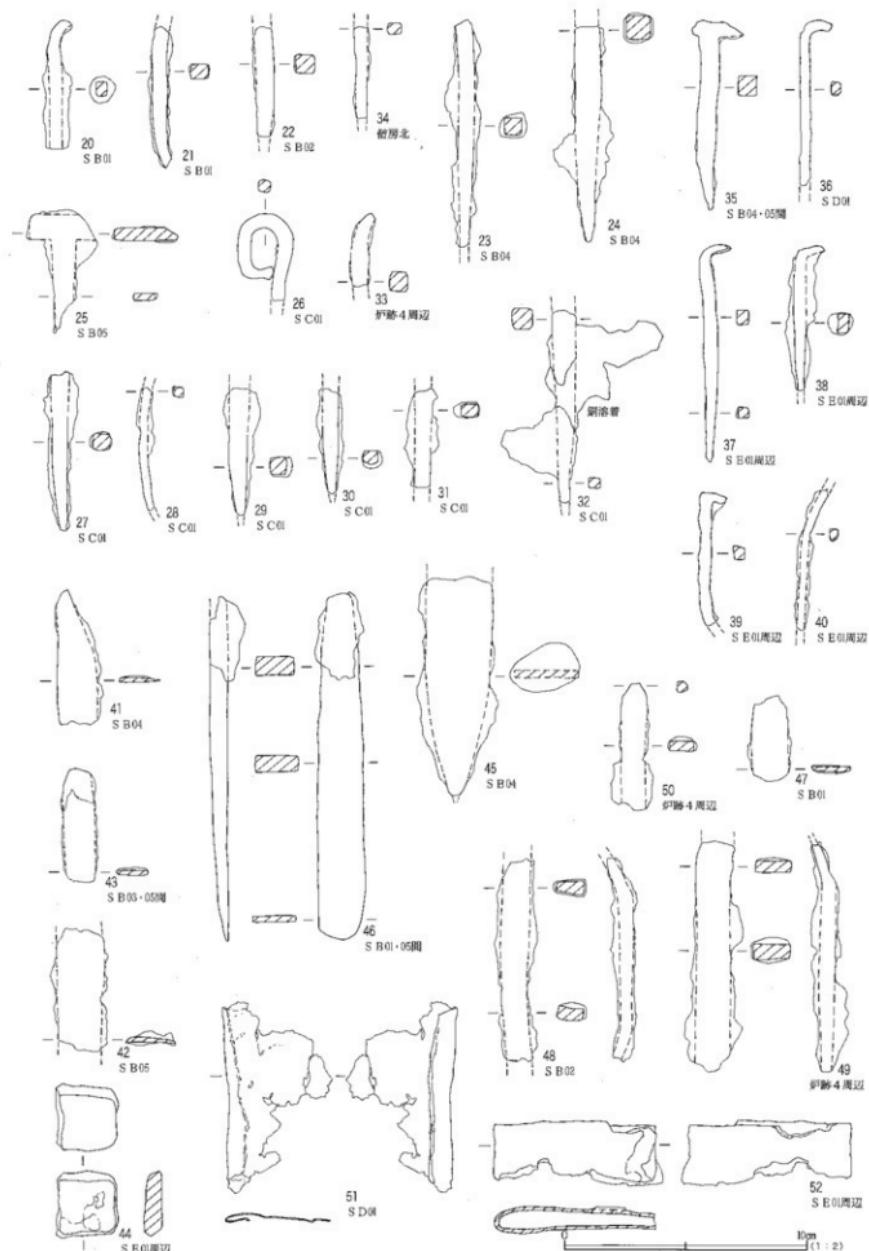
ほぼ中央に径約1mmの穴があり7mmの間隔をあけて2カ所貫通する。長径2.7cm、短径2.0cm、厚さ1.4mm、重さ6

gで半円形に近い。約4分の1が欠損する。S B01から出土した。

鉄製品

総数97点出土した。鉄釘の他、刀子、鑿といった建築用材で約7割を占める。出土した時点で鏽による腐食が著しく、形状の不明なものが多い。

釘(20~40) S C01を中心 S B05、S B01、S B02付近で総数61点が出土している。図化したものの中でも頭部が遺存するものは8点あり、頭部の形状から3種類に分別できる。折りまげて頭部とするものが6点(20・35~39)、



第52図 鉄製品

釘身の幅で2方向に延びる頭部をもつものが1点(25)、環状に折り重なった頭部をもつものが1点(26)ある。釘身の断面は正方形ないしは長方形を呈しており、0.4~1.0cm角である。完形で出土したものは35・37の2点で、7.8cmと9.0cm。他は残存部で、最大9.4cmある。

刀子(41~43) いずれも破片で全容の確認できるものはない。S B04で1点(41)、S B05で1点(42)、S B03・S B05間で1点(43)出土している。

鉄塊(44) 板状で25×27mm、厚さ8mm、重さ21g。S E01周辺の包含層中で出土。

その他 不明鉄製品のうち、鑿と思われるものがS B04(45)とS B01・S B05間(46)から出土している。また、棒状のもののうち48・49は両端が折れ曲がるものである。47はS B01、48はS B02、49・50は炉跡4周辺から出土した。

51・52は何らかの製品と思われる。51は縁を直線的に折り曲げるもので厚さ0.5mm以下。S D01から出土した。52は厚さ1.5mmで両端をそろえて均等に折り曲げたもの。端部は欠損する。S E01周辺で出土した。いずれも形態は不明である。

金属関連遺物

鋳型(53・54) 53は、鋳型面は3条の溝がほぼ平行し、中央の溝は両側より先端部が約1.8cm長い。三鉈の先端部分の可能性がある。上側面には長さ1.9~2.1cm、幅5~6mmの型合わせ切り込みが2カ所認められる。胎土は淡黄褐色、大粒の砂粒を若干含むものの、主体は2mm以下の砂粒を多量に含み粗いもの。断面の鋳型面に近い位置はごくうすく淡茶褐色、中心部分が明灰褐色。外面は淡

黄褐色である。外面は火熱を受け一部赤変する。幅11.3cm、約2分の1欠損。炉跡4周辺出土。

54は小片で全形不明、鋳型面は蓮弁様を呈し外縁は円形。胎土は精良で、暗茶褐色である。用途は不明。僧房北炉跡5周辺出土。

坩堝(55~60) 完成するものもなく、坩堝と取瓶の区別が困難であるため両者を一括して坩堝として扱う。國化可能なものは6点であった。

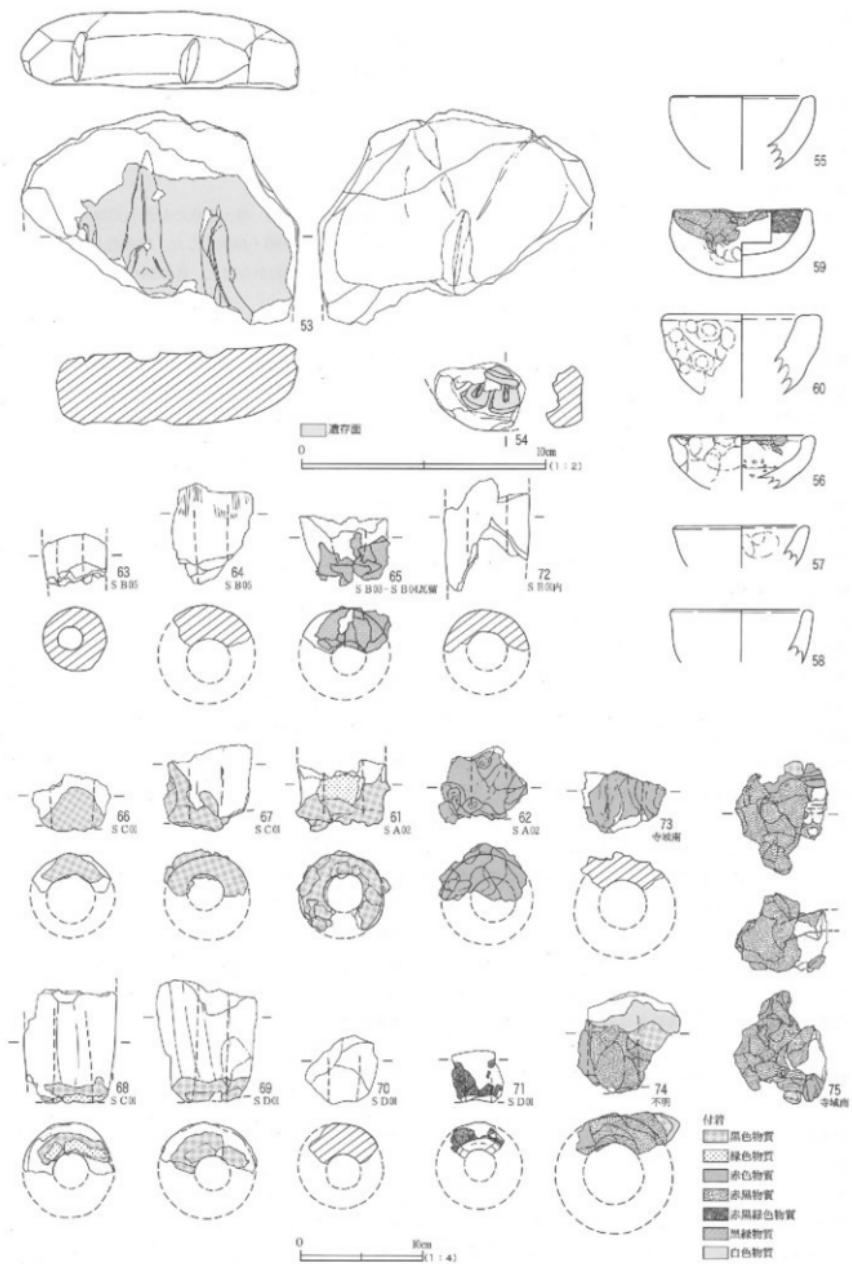
55は注口部分が残存するもので、体部及び外面に近い部分は淡灰色、内面に近い部分は暗灰色を呈している。口縁部を巻くように黒色と茶赤褐色の付着物が交互に認められる。外面には特に付着物は認められないが、注口付近には黒色と茶赤褐色の物質が付着する。外面は口縁から底部近くまで酸化しており青灰色を呈する。口縁部内外面には指痕が認められる。胎土は1mm以下の砂粒が含まれるが比較的精良。約3分の1が遺存する。他は4分の1以下的小片である。すべて炉周辺から出土した。55はS B01炉跡3周辺、56・57はS C01炉跡6周辺、58はS C01炉跡7周辺、59・60は炉跡4周辺で出土した。

轆の羽口(63~74) 計55点出土している。いずれも黒色の珪酸質が付着した先端部付近の破片で、形状は円筒形である。上部復元外径は5.0~9.5cm程度、先端部で5.0cm前後と推定される。上部復元内径は2.0~5.0cm前後である。厚さは1.5~3.0cm程度。先端部は丸くおさめる。胎土は黄褐色を呈し、強く火熱を受けた外面は灰白色から暗灰色に変色しており硬質である。先端部の形態は直線(63~74)と、湾曲(75)の2形態ある。

金属製品・金属関連遺物分析値(%)

遺物 番号	遺物 名	出土位置	Cu (鉛)	Sn (銅)	Pb (鉛)	Fe (鉄)	Ni (ニッケル)	Sb (アンチモン)	Zn (亜鉛)	As (アスコルビン酸)	Bi (ビスマス)	Au (金)	Ag (銀)	Si (珪藻土)	Al (アルミニウム)	Cu (カバナウム)	K (カリウム)	Ti (チタン)	Mn (マンガニウム)	
2	審先金具 裏面	64.96	—	0.24	1.29	—	—	0.28	—	2.53	1.09	5.76	0.98	13.64	7.86	—	—	—	—	
		73.30	0.12	0.18	1.91	—	—	0.11	—	1.24	1.31	1.29	0.81	11.25	5.73	—	—	—	—	
3	万金具	S D01	81.58	—	0.36	0.18	—	—	—	0.13	—	—	0.54	9.21	6.81	—	—	—	—	
4	笄出仏	S D01	73.97	—	—	2.02	—	—	—	0.37	—	2.71	0.21	13.91	5.09	—	—	—	—	
6	鍔	S A02	39.39	13.0	4.88	4.21	0.18	—	—	0.68	0.52	—	—	23.41	12.47	—	—	—	—	
19	船頭島 裏面	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.81	0.51	—	—	
		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1.48	0.43	—	—	
44	鍔	SE01周辺	—	—	—	90.49	—	—	—	—	—	—	—	—	4.29	2.23	—	—	—	—
59	坩堝 裏面(鋳型部分) 裏面(耐熱部分) 口縁部裏面	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	47.32	15.75	3.51	10.69	0.89	0.19
		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	39.11	17.61	7.38	8.29	1.25	0.44
		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	27.27	12.85	2.59	5.14	0.83	0.23
65	轆の注口 外蓋(密閉部分) 外蓋(密閉部分) 内蓋	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	35.82	15.81	9.41	6.65	3.22	0.50
		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	44.26	18.63	11.91	9.35	1.63	0.30
		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	44.93	20.21	15.99	9.19	1.58	0.47

*この分析値は、試料の表面分析であり、その試料に含まれている絶対値(定量値)ではない。従って、この値を試料に含まれる含有量として使用するには問題がある。しかしながら、性分析として使用が可能で、金属の材質を調べるのなら問題ないと考えられる。



第53図 金属関連遺物

鉢澤 炉跡を中心に寺域全域で銅滓、鐵滓が出土した。炉跡のある S C01に約2割が集中する。総重量約12.5kgである。
その他 松ヶ坪遺跡第1次調査時に炉床が1点(76・図版2)出土している。

(岡本)

4 木製品

木製品は、ほとんどがS E01内から出土した。以下、S E01内と掘方、その周辺、それ以外の順で記述する。

なお、出土位置の記述の無いものはS E01出土である。
()は残存値。

S E01内・掘方・周辺

農具

土掘り具(1~6) 棒状木材の両端を加工し、一端を裏表の2方向から削り尖らせ、もう一方は丸く削るもの1・2、尖らせるもの3・4、把手状に削り出すもの5がある。その他に柄片の6がある。3はS E01掘方出土。
横槌(7) 棒状木材の一端を丸く加工し、もう一端を細く削るものである。長さ36.0cm。

工具

楔(8) 完形で斧頭状の形で楔材とみられる。長さ15.6cm。

その他 漆紋布(9~11・図版30)が出土。ロール状になるものが多い。

容器

曲物(12~22) 平面形は全て円形。蓋は板を曲げて円柱状にした側板と縫合綴じ4カ所留めて結合する。12~14はほぼ完形、15は蓋板のみ。身は木釘結合で、19は5カ所、20は7カ所、21は12カ所留める。16~20は側板のみ、21・22は底板のみ遺存。蓋・底板は柾目材、側板は板目材。13~15は蓋板外面、21・22は底板内面に刃傷が残る。14の材質は檜材で、蓋板外面には漆が残る。大型のものは21が最大で直径24.3cm、次いで22が20.0cm、他は中型で直径11.5~16.5cmを測る。側板の高さは2.0~6.0cmを測る。蓋および底板の厚さは、全て0.6cmを測る。

杓底板(23) 棒円形で側板をはめる脚が一部切ってある。6.2×5.5cm。

網代(24・図版30) 約40×20cmの大きさで、全容は不明である。

食卓具

匙(25・26) 25は柄部分が欠損。剥物で黒く漆塗が遺存する。長さ7.2cm×幅4.8cm。26も柄が欠損し、欠損部は梢円形となる。匙面の断面形は平らである。長さ8.2cm×幅4.3cm。

杓子(27) 羽子板状で両端部に丸みをもつ。持ち手に近

い部分に一对の約3mm大の穿孔がある。長さ18.0cm。

盤(28) 握物の盤で口径・器高とも不明。

箸・箸片状(29~40) 棒状で加工のあるもののうち、細く、箸として使用できるとみられるものを箸・箸状とした。両端部はいずれも欠損。14点出土。断面が丸いものがほとんどだが、角張るもの(29・37)もある。長さ1.5~6.3cm。

棒・棒片状(41~47) 箸・箸状にしたもの以外の、加工のある太いものを棒・棒状とした。16点出土。このうち43のものがS E01掘方から出土。長さ3.4~19.5cm。

祭器具

斎串(48~59) 12点が出土した。48~52の5点は上端が主頭状で下端が剣先状、両側縁に1カ所ずつ切り込みをもつ。49・54は柾目である。51と52は同一材を測りだものである。長さは48が15.1cmと小型だが、それ以外はいずれも30cm余りである。53~57は、上端が主頭状で下端が剣先状、片側縁にV字状に2カ所を切り欠き、もう片側縁を53・54が1カ所、55~57が2カ所切り欠く。長さは30cm前後である。切り込み、切り欠けのあるものは飛鳥藤原宮出土(7世紀後半)遺物に類似する。58は上端を一方から斜めに切り、周縁には切り欠きが無い。長さ28.7cm。

人形(60) 正面全身人形が1点出土した。頭部が一部欠損するがほぼ完形である。手の表現はない。足と足の間が広く、先端を削って尖らせる。長さ17.9cm。墨画は赤外線撮影未実施であるが肉眼では確認できない。

馬形(61) 側面全身像の完形品である。目、立毛、鞍等の表現はない。長さ15.8cm。

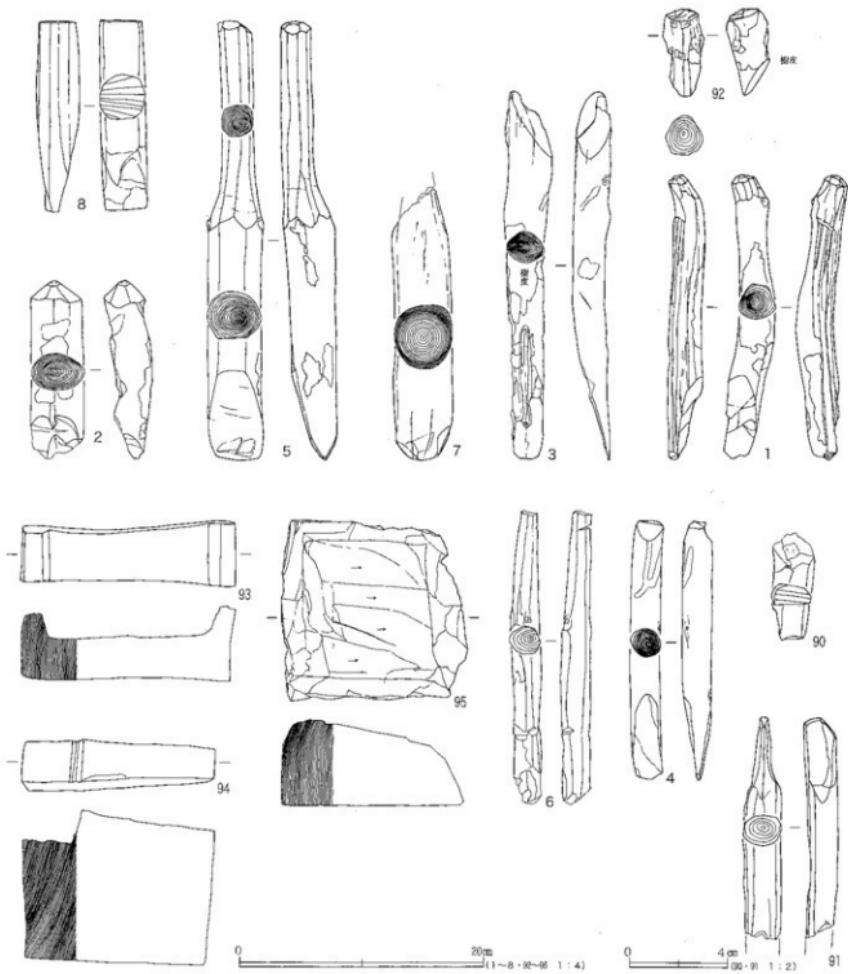
舟形(62・63) 62は先端部片で舟形とみられる。長さ(4.1cm)。63も先端部片だが紡錘車の破片とも推定される。長さ(3.6cm)。どちらも柾目である。

文房具

木筒(64・65) 64は付札木筒(019型式)。65は上下端が欠損。傾を狭めて再利用した木筒で削り残りの墨痕が遺存(081型)。その他、削屑(091型式)が3点(66~68)出土した。

木筒形(69・70) 荷札形木筒の形状で墨書の無いもの。69は下部欠損で長さ(10.1)cm、70は完形で長さ27.9cm(032型式)。

木筒状板(71~81) 木筒の形状とみられ墨書の無いもの。14点出土。77・78は使用後に削ったもの、75は削津とみられる。76は穿孔が一部遺存。81はS X01の取水口付近から出土した。端部がいずれも欠損、長さ(10.6~62.3cm)。削屑 多数出土した。このうち3点(66~68)については墨書があったが判読不能である。



第54図 S E 01出土木製品（農具・工具・その他）

木簡の形態分類

019型式 一端が方頭で他端は欠損、腐食によって原形が失われたもの。

032型式 長方形の材の一端の左右に切り込みをいたしたもの。

081型式 欠損、腐食によって原形の判明しないもの。

091型式 刈屑。 (分類方法は木簡研究による)

遊戯具

独楽 (82) 独楽の未製品とみられ、先端部が若干の膨らみをもって段をなして尖る。

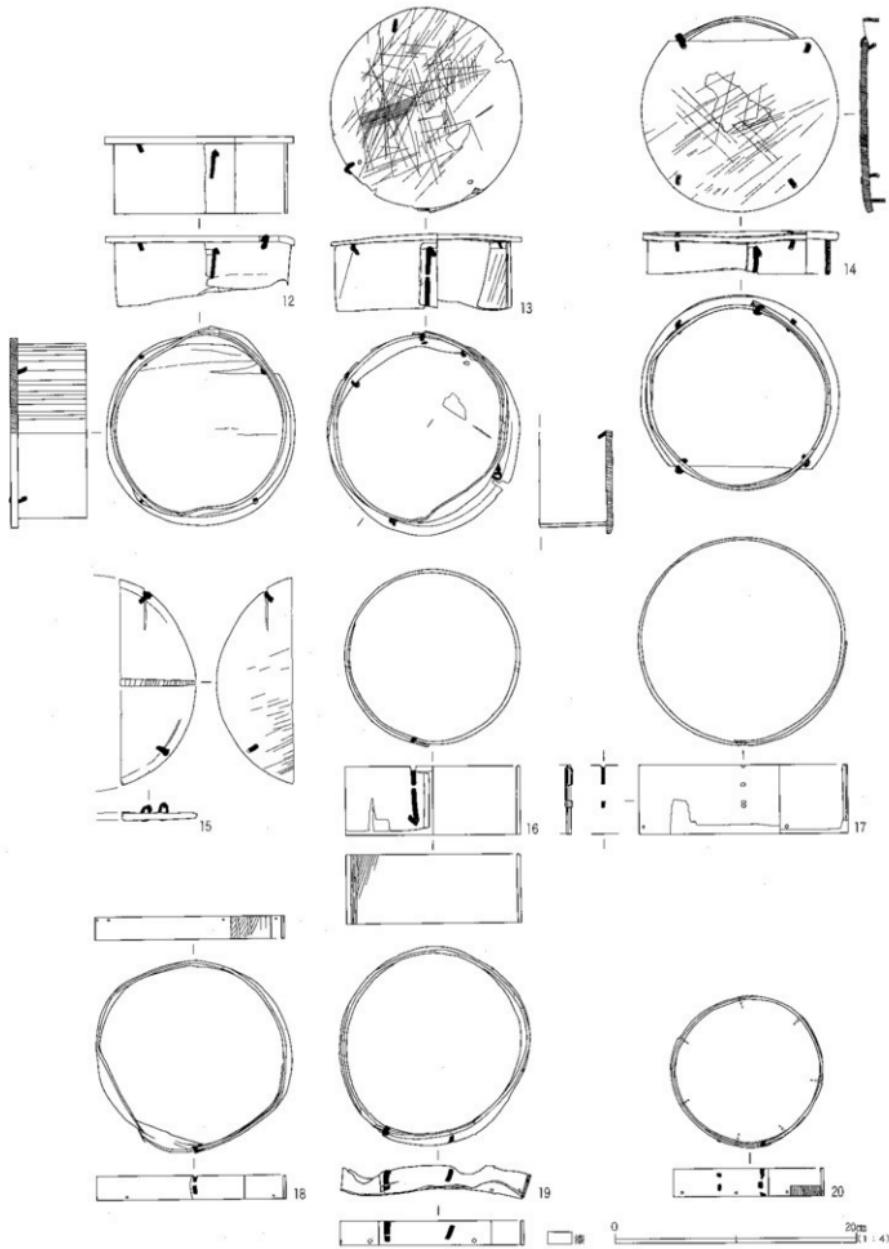
樂器 (83) 抱か? 先端がやや細くなり、一部に焼けた部分がある。長さ40.1cm。

装身具

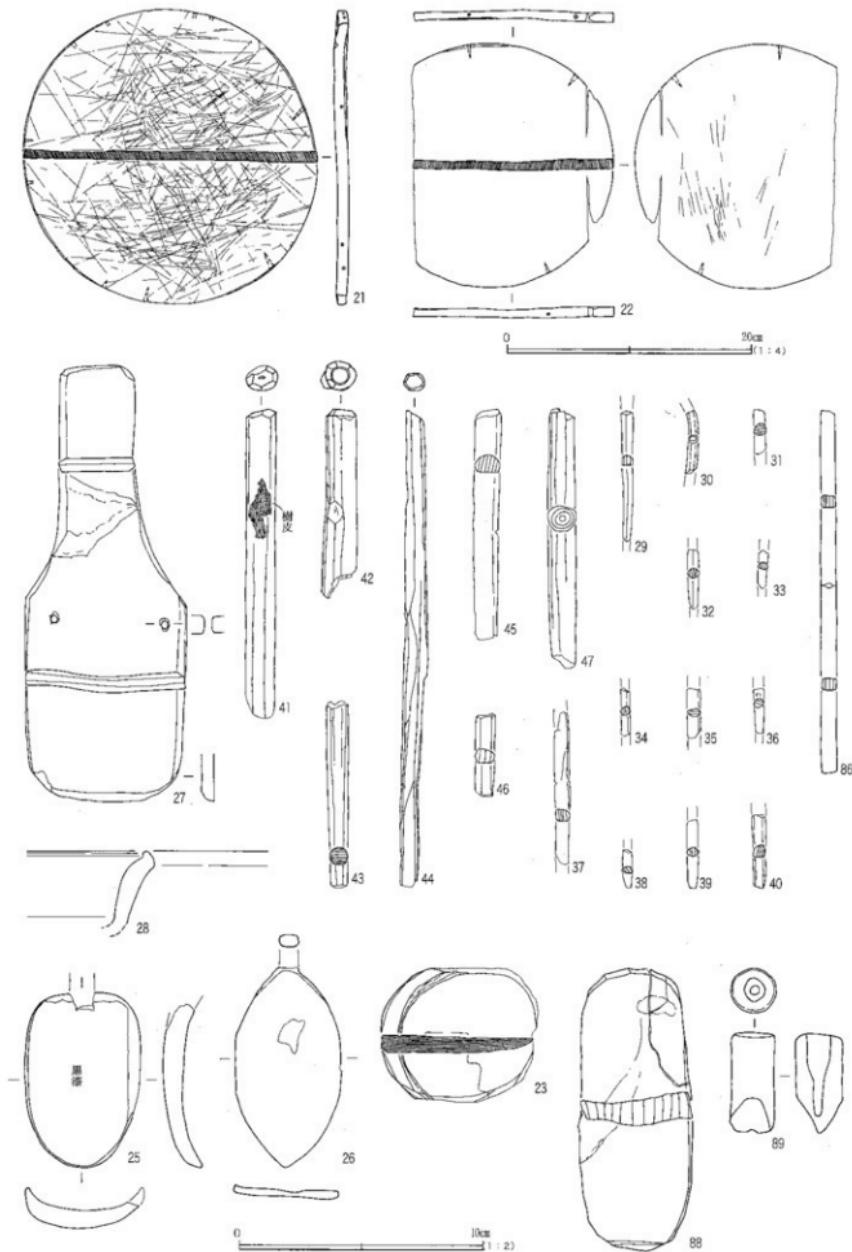
櫛 (84・85) 挿齒横櫛片である。84の楕部背が若干弧を描く。幅(8.3cm)。85はS E 01掘方の出土である。幅(1.9cm)。

その他

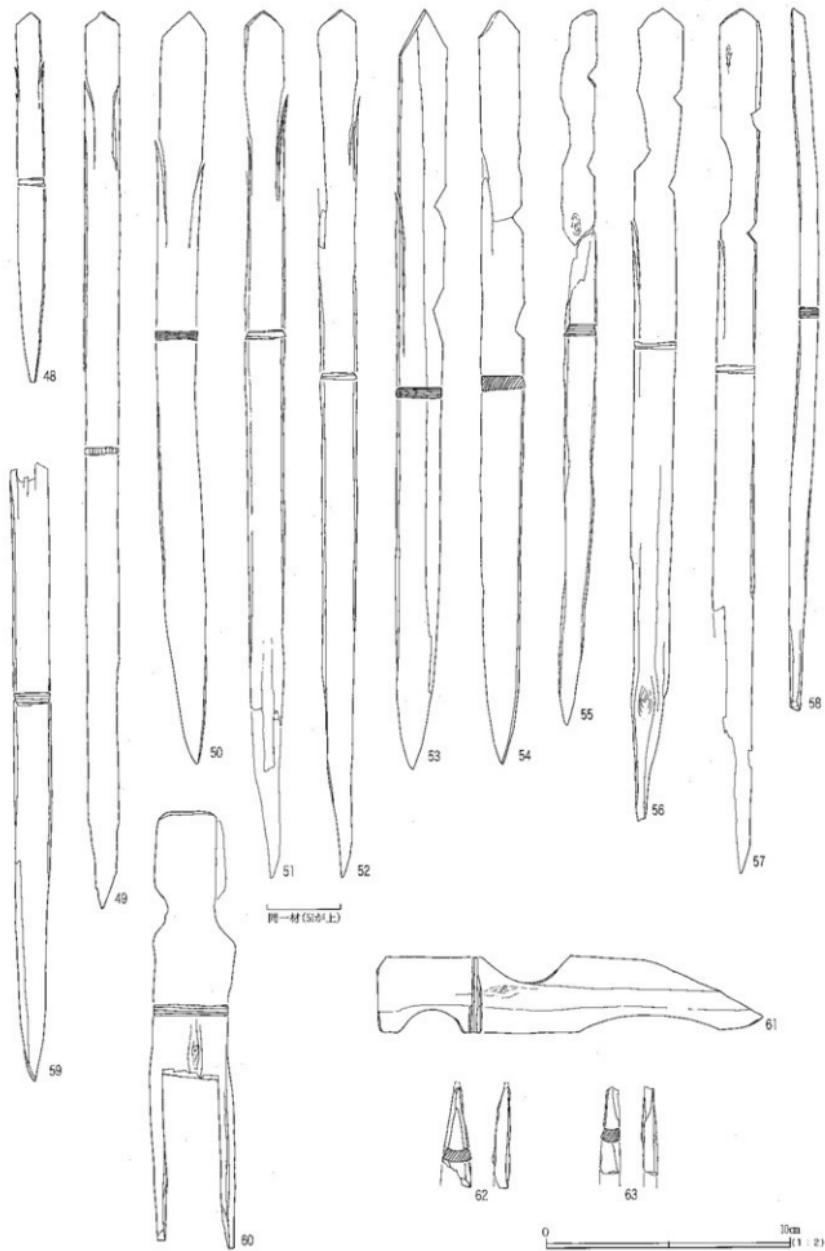
有孔棒 (86) 断面が方形の棒の中心に約2mmの孔が開いたもの。長さ14.8cm。



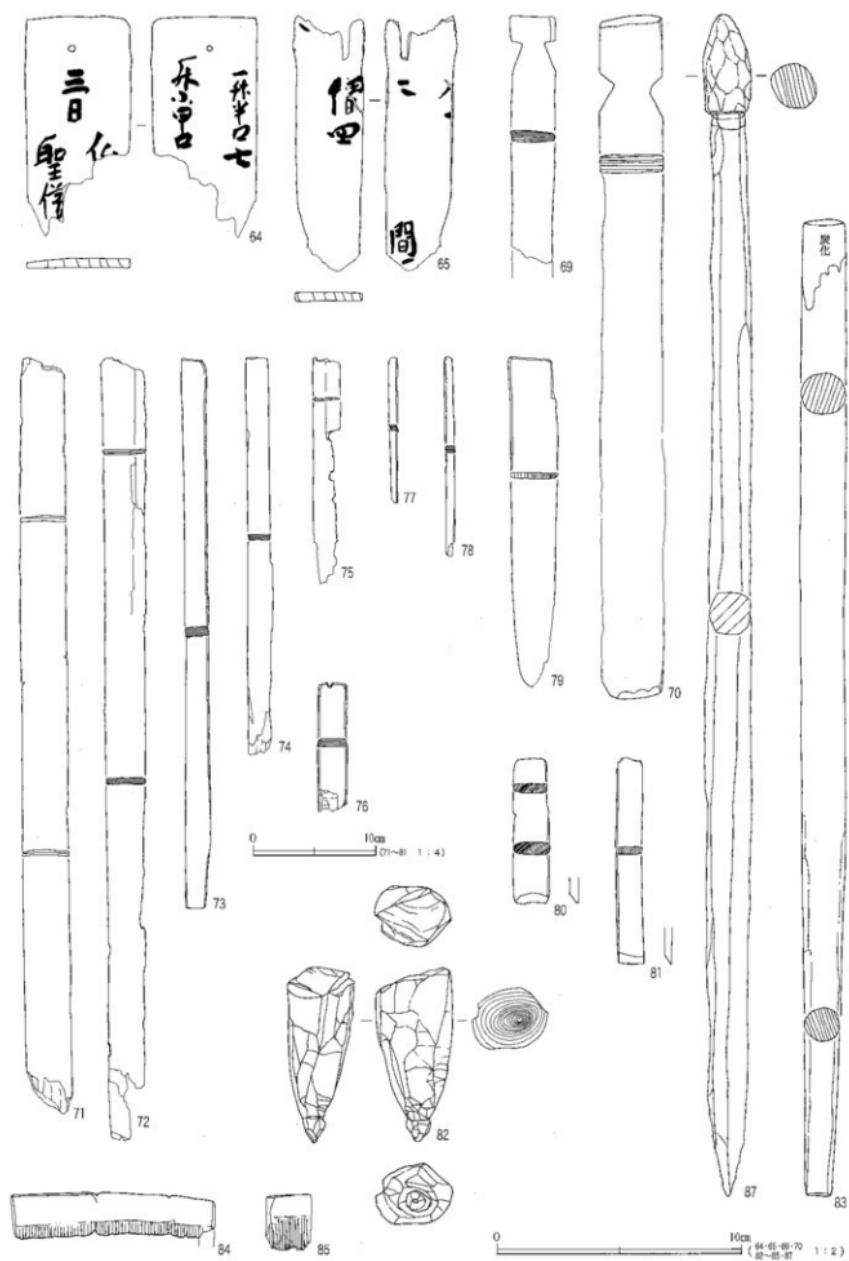
第55図 S E01出土木製品(容器)



第56図 S E01出土木製品（容器・食事具・その他）

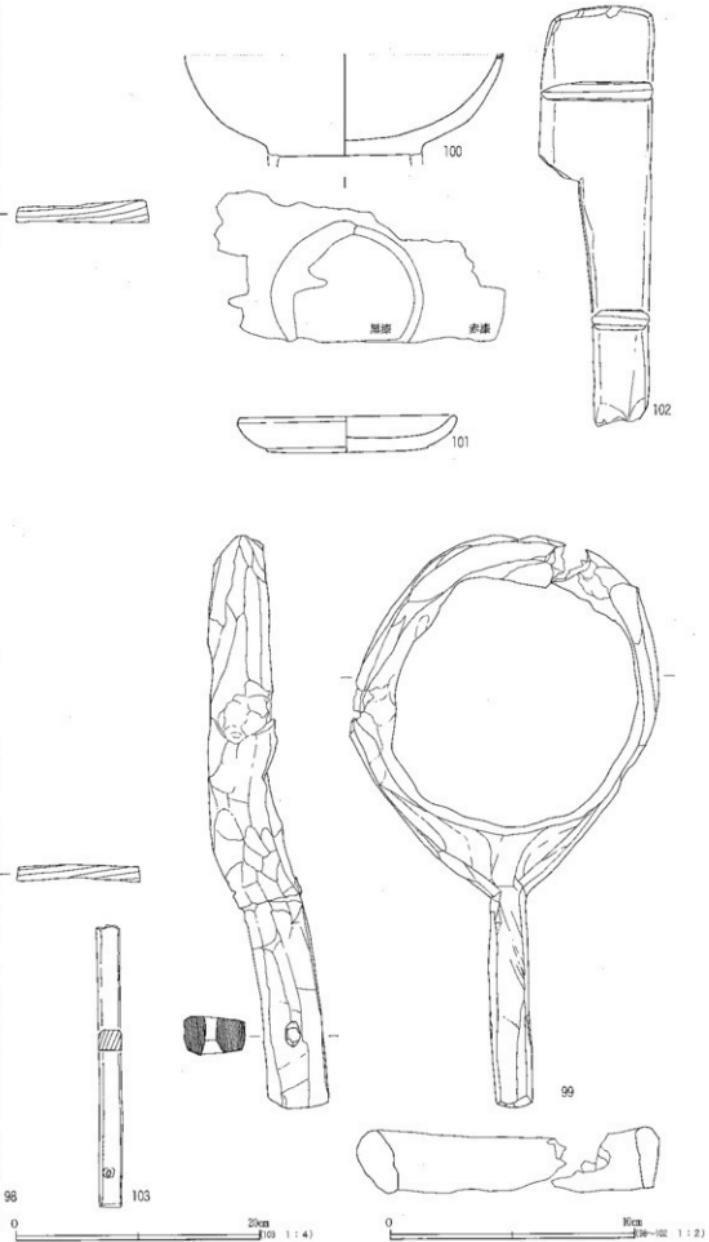


第57図 S E 01出土木製品（祭祀具）



第58図 S E01出土木製品（文房具・遊戯具・装身具・その他）

六善神皆來守護門可也
十六善神看護木般讀本



第59図 S A01周辺・S D02・遺構出土木製品

有頭棒状 (87) 一端を尖らせもう一端をやや尖った流線形に削り出す。蓮峰状。杉材である。長さ48.3cm。

その他に楕円形板の88、栓?の89、先端加工のある90、筋織具?91、柄片?の92や建築部材片93~97が出土する。

S E01部材

緻密な柾目の杉材の赤身を使用する。ただし、東辺横板2枚目のみ白太部分が一部あった。表面は手斧痕が顕著である。横板の厚さはまちまちだが柾柱の枘穴にはまる部分の外側を削り厚さを揃える。土居桁の各面には墨付けが遺存し、墨付けに沿って枘穴を開けたことが分かり、その大きさは土居桁幅の約1/2である。墨書の筆跡は「西」「南」は似るが「東」は若干異なっている。

S A01周辺

轉読札 (98) 完形であるが墨は殆ど消失し痕跡が盛り上がった状態。十六菩薩は大般若經の守護神である。

タモ様 (99) 節穴を利用して外側を削ったもの。把手部分に両面穿孔あり。全長23.5cm、柄部分8.6cm。

器 (100) 赤漆塗挽の底部から脛部片。高台欠損。

有孔棒 (103) 断面方形で2面を面取りしたもので両端部欠損。穿孔が1つある。長さ(23.0)cm。

S D02

へら (104) 基部は断面椭円形だが先端が三角形となり尖る。長さ(21.6)cm。

皿 (101) 完形の挽物で、黒色に塗られる。土師質土器の形態に類似。13世紀代。口径9.0cm、器高1.5cm。

杓底板? (105) 直径約8cmの円板で一部欠損。

斎串 (106) 端部が尖り、切り欠きが無い。柾目である。長さ(26.0)cm。

遺構外

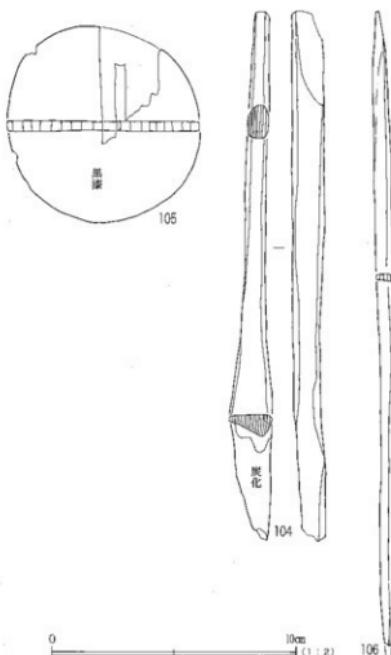
包丁形 (102) 刃部長さ7.3cmに対し柄部が(9.9)cmと長い。第3次調査トレンチ6出土。

以上、灌耕内の約0.9m³と限られた範囲から多くの木製品が出土した。このうち祭祀遺物について述べて、木製品のまとめに変える。

灌耕内の祭祀遺物は斎串12本、人形1点、馬形1点、舟形2点である。これらは、廐棄状態で出土したもので、祭祀そのものが何處でどのように行われたかは不明である。しかし、寺院内での律令祭祀の存在は、この地方に律令国家成立期において、どのように受容されてどんな祭具を使って執り行われたかを知ることができるものである。
(加藤)

参考文献

金子裕之他 「神道考古学講座 第3巻 原始神道期二」 雄山閣
1981年



第50図 S D02出土木製品

金子裕之編『律令朝祭祀遺物集成』 律令祭祀研究会 1988年
井原一郎『まじないの世界II(歴史時代)(日本の美術6第361号)』
至文堂 1996年
『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告—長屋王墓・藤原麻呂邸の調査—』 奈良教育委員会 1995年

5 塼仏・石仏・塑像

S B03・S B04・S B05・S C01周辺から埴仏・塑像・石仏の断片が出土している。その量は、埴仏が13点、塑像64点、石仏1点と多くない。いずれも小片であるため、何らかの形状をとどめるものを報告する。

埴仏

方形三尊埴仏と独尊埴仏、連立埴仏が出土している。

方形三尊埴仏 (1~6) 方形の壇面に倚坐する中尊と、その左右に立像の脇侍を配し、上方に天蓋と散華する飛天を表現するもの。

1は壇面右上端部の断片。壇面端部に低い高まりの縁をめぐらし、散華する飛天の足先と天衣が表されている。胎土は緻密で、色調は表面が黒褐色、裏面が黄褐色を呈する。焼成はやや軟質。厚さ0.6cmだが、裏面は剥離している。S B03出土。



第61図 鐘仏・石仏

2は埠面左上端部の断片。埠面の端部に僅かな高まりの縁をめぐらし、散華する飛天の下半身と天衣が表されている。胎土は緻密で、色調は表裏とも灰褐色を呈する。焼成は良好。裏面はヘラ切りで丁寧に調整されているが、

布目が若干残る。厚さ1cm。S B03出土。

3は右脇侍の腰部から頭部にかけての断片だが、顔面は失われている。脇侍は円光を負い、合掌する姿につくる。埠面の右端部には丸みをもつ縁が設けられ、脇侍の左側には中尊の火焔形身光と光背の一部が残る。胎土は緻密で、色調は表裏とも灰白色を呈する。焼成は良好。裏面はヘラ切り調整され、部分的に布目の圧痕が残り、一部に白土が付着している。白土は壁土の可能性を考えられる。脇侍の腰部分で厚さが約1cm。S B03から出土している。

4は右脇侍の脚部の断片。脇侍の右側に僅かな高まりを施した埠面の端部が残る。胎土は緻密で、色調は表裏とも灰白色を呈する。焼成はあまり良くなく軟質。裏面はヘラ切りによって調整される。厚さ1.5cm。僧房北で出土。

5は中尊光背の頭光部分の断片。中尊の頭部は失われている。頭光は円光で周囲にC字形の装飾をめぐらす。残存する埠面の右上部に宝樹の葉が残る。胎土は緻密で、色調は表面が暗灰褐色、裏面が黒褐色を呈する。焼成は良好。裏面はヘラ切り調整されているが、非常に丁寧に調整されている。厚さ1.7cm。S B04から出土。

6は中尊胸部右半身の断片。中尊は衣を偏袒右肩にまとい、右手を上にする定印を結ぶ姿につくる。おそらく倚坐する姿と思われる。中尊の右手脇部分に漆箔が残る。胎土は緻密で、色調は表面が黒褐色、裏面が暗灰褐色を呈する。焼成は良好。裏面はヘラ切りで調整される。厚さは胸部分で1.6cm。S C01で出土。

以上の埠仏の断片から復元される方形三尊埠仏は、中尊の火焔形身光、C字形の装飾をめぐらす頭光、脇侍と飛天の像容等の特徴からいわゆる「夏見庵寺」形に属する埠仏である。夏見庵寺方形三尊埠仏は、畿内ではなく地方に広く分布するもの。山陰地方では、大御堂庵寺跡に近い斎尾庵寺跡にもみられる。大御堂庵寺跡の方形

三尊壇仏は、図像等が比較的鮮明に表されており、原型の形崩れはみとめられない。これに対して、斎屋庵寺跡の方形三尊壇仏は、夏見庵寺形方形三尊壇仏の踏み返しが考えられるものである。

独尊壇仏(7) 塚面右上端部の断片。頭上に化仏をつけ、重巻の輪光で縁に火焔を配した頭光を負う。胎土は緻密で、色調は表裏とも暗褐色を呈する。焼成は良好。裏面及び側面端部ともヘラ切りによって調整される。厚さは化仮部分で12cm。S B03から出土。

この独尊壇仏は、化仏や頭光の状況から三重県天華寺庵寺跡の独尊立像壇仏と同系で、塚面に大きく觀音菩薩立像を配する図様と考えられる。天華寺庵寺跡独尊立像壇仏と同系のものはこれまで銅板錫出觀音立像や銅板錫出觀音立像が知られているが、壇仏に類例は知られていない。なお、天華寺庵寺跡からは、独尊立像壇仏の他に独特の菱形独尊壇仏や、夏見庵寺形の方形三尊壇仏が出士している。

連立壇仏(8・9) 2点出土しているが、両者とも塚面右側端部の断片。それぞれ如来立像を配するもの。如来立像は衣を通肩にまとい、両手を腹前で合わせ宝珠様のものを捧持し、背後に二重円相光背を負う。塚面の右側端部上部には花文が飾られている。8・9とも胎土は緻密であるが焼成が軟質で、表裏とも明黄褐色を呈する。側面、裏面ともヘラ切り調整されている。両者とも腹前部分の厚さが1.5cm。8はS A01周辺、9はS C01から出土。

この連立壇仏と同形のものは、奈良県山田寺跡や奈良県朝妻庵寺跡、和歌山県佐野庵寺跡、大御堂庵寺跡近くの大原庵寺跡等で出土し、その他に奈良県橿寺出土と伝えられたものがある。また、壇仏以外にも唐招提寺に所蔵される銅板錫出三尊仏像に類例がみられる。なお、大御堂庵寺跡例と大原庵寺跡例を比較すると、大原庵寺跡例が約10%小さく、踏み返しの可能性が考えられる。

石仏(10)

S C01の北西隅で1点出土した。砂岩質の石材から彫りだされた丸彫の菩薩立像石仏の右脚部断片。菩薩立像の足首は袋蓋で覆われ、足先が僅かにのぞく。右の側面は欠失しているが、袋蓋は足元より垂れ下がる様相を呈する。石造の正面の袋蓋上部に紐状の突起があり、袋紐から垂下する紐の端部とも考えられ、右側面近くにも垂下する2条の凸縁が表現されているが、この凸縁には僅かな凹凸が認められ瓔珞の可能性が推測される。衣文は背後まで表現されているが、全体的に浅く彫線の断面はV字状を呈する。なお、脚部の裏面には枘穴が設けられている。色調は、黄灰褐色。足先の長さは約10cm。

塑像(図版33)

螺髻(11) 卷貝型の螺髻で底部を欠損する。螺旋の方向は右巻き。火中しており型か手作りか不明。高さ1.5cm。S C01から出土。

白毫(12・13) 無文の土玉状で、底部が平坦となっている。肉瘤球とも考えられる。12は高さ2.2cm、最大径2.7cm。13は高さ2.0cm、最大径2.6cm。12はS C01から、13はS A01から出土している。

地髪断片(14) 地髪部と思われる断片。櫛状の沈線が施されていることから判断した。火中しており表面は須恵質となっている。縦2.1cm、横2.4cm。S B05南側の瓦溜から出土。

髻断片(15) 髻の断片と考えられる小片。断面が丸みを呈し反りをもつ凸状の高まりのなかに、四線が1条施されている。この高まりが連続する状況が観察されたため、髻ではないかと判断した。縦2.9cm、横2.3cm。S B04・05間出土。

文様断片(16) 中心部の丸みのある高まりから渦巻状に派生する文様か。中心部の高まりは花弁かとも思われるが詳細は不明。使用部位も特定できない。縦2.7cm、横3.0cm。S C01から出土。

菩薩右上腕部断片(17) 背銅をつける上腕部の断片。背銅は2条の素文の凸帯で表現されている。断面が台形の芯の痕跡が残る。火中しており表面は須恵質となっている。長さ9.1cm、太さ3.6cm。S A02から出土。

坐像脚部断片(18) 台座に結跏趺坐する尊像の右脚部の断片。台座は、瓶と返花の一部が残るが蓮内部は衣が架かり不明。粘土の芯に化粧土を貼り付け成形している。底部は指で押さえて調整する。高さ4.1cm、幅8.8cm、奥行き7.1cm。火中したためか、硬質で赤化した部分がみられる。S B03・04間瓦溜から出土。

部位不明塑像断片(19) 太い凸帯の右側に波板状の文様があり、左側は指で押さえて成形している。表面は灰褐色を呈するが、その下に白土がみえる。波板状の文様から唇の一部と思われるが断定できない。縦10.3cm、横7.0cm、厚さ4.8cm。S B03・04間瓦溜から出土。

衣文断片(20・22) 尊像脚部の断片と判断される。20の衣文線は浅く、22は凸線状に表される。20は軟質のままだが、22は須恵質となっている。20は縦5.2cm、横4.4cm。22は縦10.3cm、横5.5cm。20はS B03・04間瓦溜から、22はS B03から出土。

髻断片(21) 髻の断片と推定したが、詳細は不明。頂部付近に数条の凸縁があり、かつ、頂部から右側面にかけて窪みがあり、全体に面取り状に成形されていることから三山髻の断片ではないかと判断した。断片右側の表面

に近いところに断面四角形の芯痕跡がみられる。縦7.3cm、横5.1cm。S B03・04間瓦溜から出土。(眞田)

参考文献

倉吉博物館編『埴仏一土と火から生まれた仏たち』1992年

奈良國立博物館編『押出仏と仏像』1983年

久野 健編『押出仏と埴仏』『日本の美術』第18号 1976年

6 その他

ガラス製品

ガラス小玉(1~3) 1は最大径3.6mm、孔径1.0mm、透明感のある深い青色。S D01出土。2は最大径11.5mm、孔径1.75~3.0mm、透明感のある深い青色。S A01とS C01の間から出土。3は最大径7.2mm、孔径0.2mm、透明感のない薄い青色。S A01付近出土。

分析の結果、1・2はソーダ石灰ガラスで、いずれも巻き技法で作られる。3はZnを少量含有するカリ石灰ガラスである。成分から前者は古墳時代以降のもの、後者は中世のものと推定される。

土製品

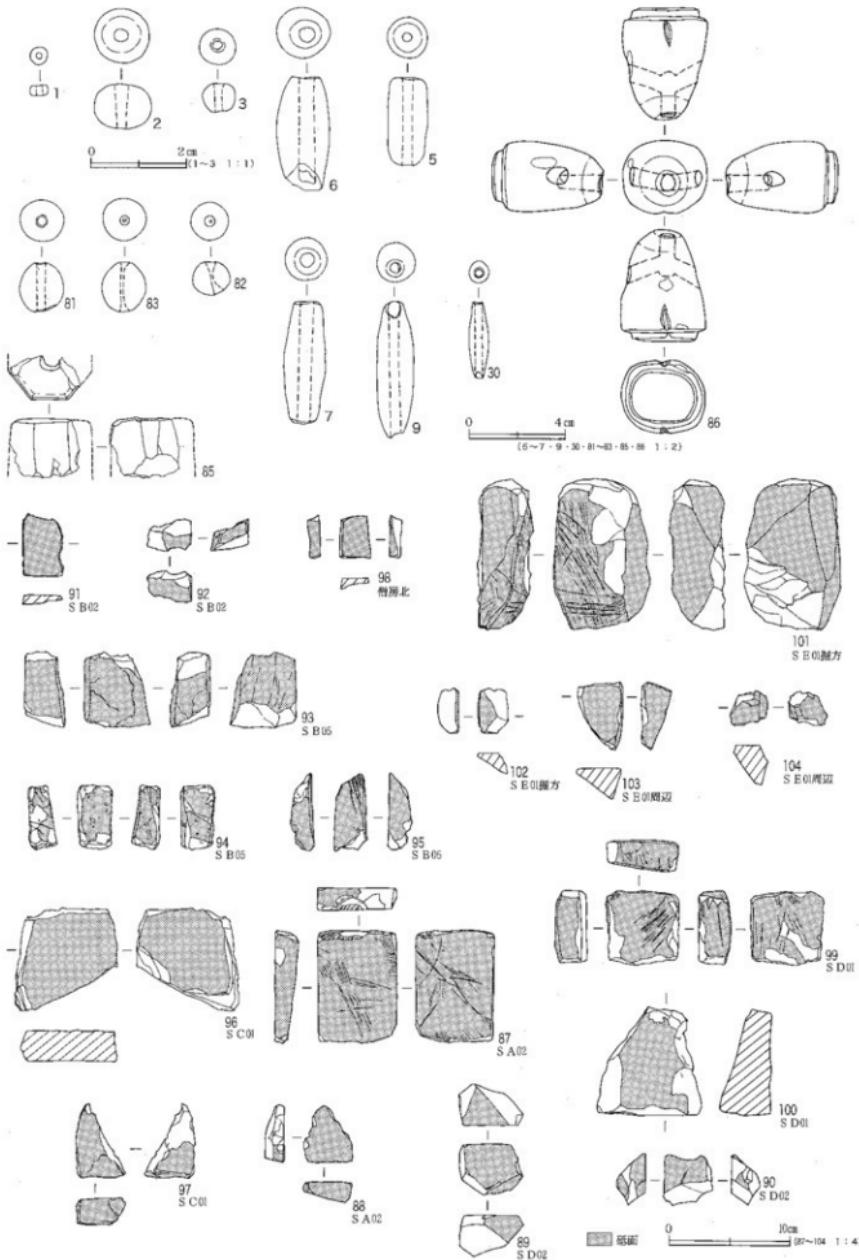
土錘(4~84) 形態は、縱断面が隅丸長方形(4・5)、さらに最大胴部が膨らむ(6~8)、楕円形(9~81)、球形(82~84)の4形態ある。楕円形のものは大型(9~17)と小型(18~81)があり、この形態がほとんどである。代表的なものののみ図化し、他は表に一括した。

いずれも、心棒に粘土を巻き付けて成形するが、82・83は錐状のもので両側から穿孔したのか、中心部分が狭い。調整は、丁寧に撫でたもの、指頭圧痕を残すものがある。長さ2.4~5.6cm、最大径0.7~2.1cm。全体に胎土はない。

土錘一覧表

[cm・g : ()は残存部]

土錘番号	出土位置	長さ	最大径	孔径	重さ	遺存度	色調
4	S D01	3.55	1.92	0.50	14.56	完存	淡褐色
5	S E01周辺	3.00	1.63	0.35	12.31	完存	淡褐色
6	僧房北	4.70	2.18	0.60	20.60	一部欠損	暗褐色
7	僧房北	5.11	2.08	0.50	13.46	完存	暗褐色
8	S D01	2.95	1.50	0.5	6.43	完存	暗褐色
9	S A02	5.60	1.60	0.40	13.87	完存	暗褐色
10	北段	(3.20)	1.40	0.40	5.56	欠損	淡褐色
11	北段	4.20	1.65	0.45	13.52	完存	淡褐色
12	S B04	4.83	1.72	0.45	13.82	一部欠損	淡褐色
13	僧房北	4.68	1.50	0.55	8.96	完存	暗褐色
14	僧房北	(4.54)	1.56	0.45	10.05	欠損	暗褐色
15	S D01	(4.70)	1.70	0.35	15.05	欠損	淡褐色
16	S D01	(5.20)	1.80	0.50	14.05	欠損	淡褐色
17	S D01	4.10	1.60	0.60	9.52	一部欠損	暗褐色
18	S A01	(2.59)	0.92	0.25	1.97	欠損	暗褐色
19	S A01周辺	3.81	0.85	0.3	2.44	欠損	淡褐色
20	S A01周辺	1.60	0.97	0.28	1.42	欠損	暗褐色
21	北段	3.88	1.02	0.20	3.63	完存	暗褐色
22	北段	4.03	0.97	0.30	3.72	一部欠損	淡褐色
23	北段	3.58	0.92	0.20	2.75	完存	暗褐色
24	北段	(2.32)	1.09	0.30	1.69	欠損	暗褐色
25	北段	(2.48)	0.84	0.30	1.17	欠損	暗褐色
26	北段	(2.84)	1.17	0.35	2.81	欠損	淡暗褐色
27	北段	(2.57)	0.84	0.25	1.45	欠損	淡暗褐色
28	北段	(2.53)	0.82	0.25	1.75	欠損	暗褐色
29	北段	2.73	0.73	0.20	1.26	一部欠損	暗褐色
30	北段	3.13	0.82	0.20	1.57	完存	淡褐色
31	S B01	(3.19)	0.90	0.30	2.96	欠損	淡褐色
32	S B01	(2.64)	0.90	0.20	1.85	欠損	暗褐色
33	S B02	3.05	0.91	0.25	2.19	欠損	暗褐色
34	S B03	3.73	0.87	0.25	2.10	完存	暗褐色
35	S B05	3.97	1.15	0.35	4.81	一部欠損	淡褐色
36	S B05	4.10	0.90	0.20	3.45	完存	淡暗褐色



第62図 ガラス小玉・土製品・石製品

土器一覧表

(cm・g: ()は残存値)

土器番号	出土位置	長さ	最大径	孔径	重さ	遺存度	色調
37	S B05	4.04	1.17	0.30	4.47	一部欠損	棕褐色
38	S B05	3.82	0.94	0.25	2.93	完存	淡橙褐色
39	S B05	(3.09)	1.05	0.30	3.61	欠損	淡橙褐色
40	S B05	(2.96)	0.93	0.25	1.11	欠損	棕褐色
41	S B05	(2.61)	0.80	0.25	1.90	欠損	淡橙褐色
42	S B05	2.78	0.79	0.25	1.30	一部欠損	淡橙褐色
43	S C01	(2.54)	0.92	0.20	2.00	欠損	棕褐色
44	S C01	(3.00)	0.98	0.20	2.61	欠損	棕褐色
45	S C01	(2.15)	0.90	0.20	1.49	欠損	棕褐色
46	S C01	(1.58)	0.87	0.25	1.04	欠損	棕褐色
47	S C01	(1.52)	0.95	0.25	0.94	欠損	淡橙褐色
48	S C01	(3.08)	0.88	0.25	2.50	欠損	棕褐色
49	S C01	(1.94)	0.90	0.25	1.50	欠損	棕褐色
50	S C01	3.15	0.79	0.20	1.92	一部欠損	淡褐色
51	S C01	3.25	0.78	0.25	1.49	完存	棕褐色
52	S B02-05周	(2.18)	0.83	0.20	1.66	欠損	淡橙褐色
53	S B02-05周	(2.48)	0.86	0.20	1.89	欠損	淡橙褐色
54	S A01-S C01周	3.97	1.04	0.25	2.91	完存	淡橙褐色
55	S A01-S C01周	3.62	0.90	0.20	2.63	一部欠損	淡橙褐色
56	S A01-S C01周	(2.44)	0.98	0.30	1.60	欠損	淡橙褐色
57	S D01	(2.42)	1.10	0.25	2.35	欠損	淡褐色
58	S E01周辺	(2.90)	1.34	0.30	3.86	欠損	棕褐色
59	S E01周辺	3.87	0.96	0.30	3.20	完存	淡暗褐色
60	S E01周辺	4.02	0.86	0.25	2.60	完存	棕褐色
61	S E01周辺	3.96	1.04	0.25	4.65	完存	淡橙褐色
62	S E01周辺	3.92	0.88	0.20	2.81	完存	棕褐色
63	S E01周辺	2.47	0.80	0.20	1.79	欠損	棕褐色
64	S E01周辺	3.36	0.91	0.20	2.16	完存	棕褐色
65	S E01周辺	3.65	0.97	0.25	3.16	完損	棕褐色
66	S E01周辺	3.69	0.92	0.30	3.00	一部欠損	淡橙褐色
67	S E01周辺	2.88	0.89	0.20	2.05	欠損	棕褐色
68	S E01周辺	3.49	0.97	0.25	2.97	一部欠損	棕褐色
69	S E01周辺	3.57	0.95	0.20	2.81	完存	淡橙褐色
70	S E01周辺	3.44	0.95	0.20	2.73	完存	棕褐色
71	S E01周辺	(2.69)	0.99	0.25	1.61	欠損	棕褐色
72	S E01周辺	(2.50)	1.15	0.20	3.16	欠損	棕褐色
73	S E01周辺	(3.51)	0.98	0.25	2.86	欠損	淡橙褐色
74	S E01周辺	(1.71)	(0.79)	(0.20)	0.62	欠損	淡橙褐色
75	S E01周辺	(2.42)	0.80	0.25	1.50	欠損	棕褐色
76	S E01周辺	(2.58)	0.75	0.20	1.30	欠損	棕褐色
77	S E01周辺	3.30	0.90	0.20	2.30	完存	淡橙褐色
78	S E01周辺	3.31	0.72	0.25	1.60	完存	淡橙褐色
79	S E01周辺	3.07	0.82	0.20	2.03	完存	棕褐色
80	S E01周辺	3.06	0.85	0.30	1.77	完存	棕褐色
81	寺城外北西	3.72	0.97	0.25	3.01	完存	棕褐色
82	S B05	1.94	1.68	0.3	4.96	完存	棕褐色
83	S C01	1.37	1.49	0.3	3.19	完存	淡褐色
84	僧房北	1.98	1.80	0.3	6.16	完存	淡褐色

精良。焼成普通。表面に赤色顔料が残るものもある。計81点のうちの約3割がS E01周辺の中世遺物包含層から出土した。

不明土製品 (85) 残存部から一辺約3cmの正八角形で、柱状の土製品と推定される。中央には直径約1.5cmの貫通孔が開く。表面は丁寧にナデしており平滑である。胎土は1mm以下の砂粒を含む。焼成良好。色調は青灰色で須恵質。端部が約3分の1遺存する。S E01掘方で出土した。石製品

多量の石製品が出土したが、旧石器・縄文時代のものと思われるものは除いた。

權衡 (86) 四角形錐の上部を切り取った形を呈する。底部には4mm程度の柄状の段がつく。上部に孔が1カ所開けられており、左右の孔とつながる。外面下部の縁に細い切り込みが2面に認められる。高さ4.6cm、重さ49g。完形品。S E01掘方で出土した。

砥石 (87~104) 23点がS B05、S E01を中心に出土した。完存するものは長さ5.4~12.6cm、幅2.7~7.9cm、厚さ2.0~4.6cm、重さ43g~520g。

碁石様石 (105~124・図版22) 計20点が出土した。表面はよく磨かれる。長径1.3~3.1cm、短径0.9~2.2cm、重さ1.05~9.20g。色調は黒・茶・灰・白色系があり、赤色系はない。表に括した。

その他

錢貨 開元通寶が1点 S A02東どんと川上面で出土した。唐・武徳4年(621)初鋤。完形。S E01周辺包含層で2片出土。S B05内床土で直径2.8cm片が1点出土。

碁石様石一覧表 (g·cm)

碁石番号	出土位置	長径	短径	厚さ	重さ	色調
105	S D02	1.89	1.09	0.80	2.56	淡褐色
106	S B01	3.20	2.06	0.96	9.20	黒灰色
107	S B01西房	2.70	1.66	0.35	2.55	黒色
108	S B02	1.73	1.16	0.61	1.70	黒灰色
109	S B02	1.60	1.14	0.52	1.40	白褐色
110	S B05	2.17	1.43	0.73	3.35	黒色
111	S C01	1.51	1.16	0.30	0.91	黒褐色
112	鉢跡4周辺	1.95	1.83	1.54	7.55	茶褐色
113	壺房北	2.92	2.25	0.79	7.95	灰褐色
114	壺房北	1.47	1.30	0.53	1.40	黒灰色
115	壺房北	1.37	1.07	0.53	1.05	黒灰色
116	壺房北	1.96	1.62	0.79	3.35	白褐色
117	S D01	2.50	2.03	0.61	4.86	黒褐色
118	S D01	1.42	1.16	0.49	1.22	黒褐色
119	S D01	1.67	0.92	0.54	1.48	茶褐色
120	S E01西方	1.62	1.20	0.50	1.45	白褐色
121	S E01周辺	1.30	1.08	0.60	1.05	黒色
122	S E01周辺	1.97	1.25	0.64	1.66	黒褐色
123	S E01周辺	2.08	1.24	0.50	1.90	灰褐色
124	S E01周辺	2.17	1.35	0.99	3.20	灰色

壁土 S B03を中心に総点数38点出土した。最大でも8cmほどの塊である。このうち化粧壁土が残るものは16点ほどで、化粧土厚さは0.6~0.9cm、白色あるいは淡黄褐色土層が残り、白色土層の表面に淡褐色土が薄く残るものもある。壁土の断面、剥離面にはスサが認められる。

窯壁 窯壁(体)片がS D01を中心に多数出土しているが、窯の位置は特定できていない。
(岡本)

第5章 化学的調査

第1節 銅製匙・銅製獸頭の自然科学的研究

東京国立文化財研究所保存科学部

早川泰弘・榎本淳子・鈴木浩子・平尾良光
資料

資料は銅製獸頭(1)と銅製匙(5)である。資料の青銅材料に関して、蛍光X線分析法による化学組成の測定を、遺物の材料となった鉛について鉛同位体比法による産地推定を行った。また獸頭の錯に関しては、X線回折分析法による錯の結晶同定も行った。

今回測定を行うに当たり、金属露出を許された。露出箇所は資料の保存・展示に差し支えない箇所を選定した。匙は丸い部分から柄に向かう下面部分(図版34上)、獸頭は柄部分(図版34下)を選んだ。化学組成はこの金属露出部分を測定し、X線回折・鉛同位体比分析には除去した錯を用いた。

蛍光X線分析法による化学組成

結果と考察 蛍光X線分析で得られたスペクトル図を別刷の図1~2に示し、化学組成を表1に示した。

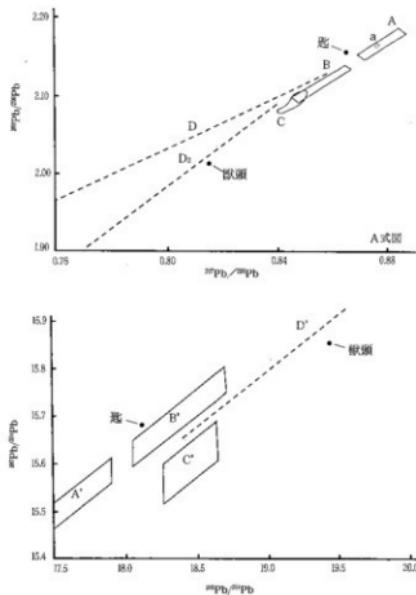
表1から判断すると、両資料とも錫が充分に含まれ、

表1 銅製品の化学組成

資料名	含有率 (wt.%)				
	銅(Cu)	錫(Sn)	鉛(Pb)	ヒ素(As)	銀(Ag)
銅製匙	78	22	0.1		0.2
銅製獸頭	79	16	0.8	2.6	

表2 銅製品の鉛同位体比

資料名	$^{208}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	測定番号
銅製匙	18.117	15.680	39.071	0.8655	2.1596	CP997
銅製獸頭	19.449	15.853	39.155	0.8151	2.0133	KP947
誤差範囲	±0.010	±0.010	±0.030	±0.0003	±0.0006	



第63図 銅製品の鉛同位体比

鉛が事実上含まれない青銅である。錫濃度が20%程度であることは偏析や鋸の影響を考えると、鋳造時に固化温度をより低く設定でき、しかも青銅として最も強靭な性質を持っている領域である。このことは資料を製作した工人達が青銅の性質を良く理解しており、必要な濃度に元素を混合していた可能性を示唆する。即ち、技術的につなぎ高度なレベルで作られた製品と推測できる。

匙と獸頭の大きな違いはヒ素濃度である。匙は検出限界以下(0.1%以下)であり、獸頭の方は2.6%となっている。獸頭にはビスマスも多く含まれていることを考えると、両資料は材料产地が本質的に異なる可能性を示唆する。

鉛同位体比法による青銅原料の产地推定

結果と考察 測定した鉛同位体比を表2で示した。大御堂廐寺跡から出土した匙は、第63図のA式図においてA領域・B領域の中央上部に位置し、両領域の範囲外であった。このような鉛同位体比を示す資料は今までにはほとんど測定されたことはなく、材料产地がどこであるのかは今のところ判別できない。

獸頭は第63図のA式図においてD領域下方に位置し

た。この位置は今までの測定結果から朝鮮半島産の材料である可能性が高い。最近では当研究室において、D₂領域(線)といふ朝鮮半島の中でも新羅系統の資料が分布する領域(線)が推定されている。獸頭はこの線に近いので、この地域の材料を利用している可能性がある。

X線回折分析法による鋸の測定

分析結果 分析結果を別刷の図4に示した。得られたスペクトルからは、明瞭な結晶を有する化合物を同定することができず、この鋸の組成は酸化物、炭酸塩、硫酸塩どれとも判断しがたい。鋸の形成が現在も進行中で、現状では検出するに充分な結晶性を有していないことも考えられる。いずれにしろ現状では結晶組成はわからない。

まとめ

大御堂廐寺跡から出土した銅製匙は、化学組成が錫濃度約20%の青銅であり佐波理を連想させる。ただし鋳造であるかどうかは未確認である。鉛同位体比から推定される材料の产地は、少なくとも日本産材料ではない。また今までに知られている朝鮮半島産の材料とも一致しない。それ故、产地の推定には類似資料あるいは中国・朝鮮半島産の資料の測定がさらに進み、この資料と対比できるようになるまで待つことが必要である。

獸頭は青銅として錫が高い濃度で含まれているので、青銅の製作技術が十分に理解されている環境において製作されたと思われる。またヒ素やビスマスが含まれていることから、鉱山の特徴が表れている。今後このような化学組成を示す資料との関連性を理解することは、資料が製作された時代や地域などに関する情報を得られる可能性がある。鉛同位体比から材料の产地は朝鮮半島の新羅系統と示唆される。

第2節 溜枠および木製品の年輪年代

奈良国立文化財研究所

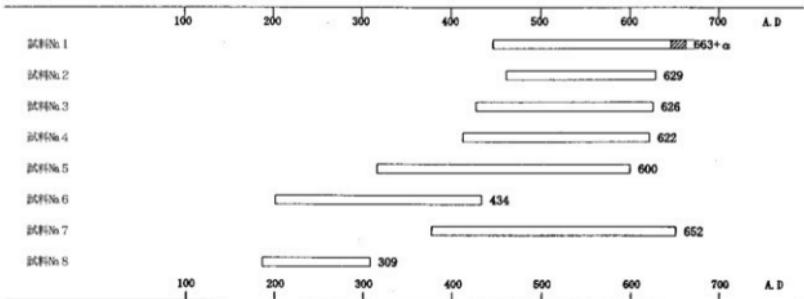
光谷 拓実

試料と方法

年代測定用に選定した物件は、溜枠の部材4点と曲物底板2点(I4・2)、建築部材の断片2点の総数8点である。材種は溜枠板材4点と建築部材の1点がスギで、残る3点はいずれもヒノキである。年輪幅の計測は専用の読取り器を使用した。コンピュータによる年輪パターンの照合は時系列解析に用いられる相関分析手法によった。年代を割り出す基準の曆年標準パターンは、スギが579年分(158年～736年)のものを、ヒノキが882年分(前37

表3 木材の年輪年代測定結果一覧表

試料No.	試 料	樹 種	年輪数	年 代	t 値	形 状	残存幅
1	溜柾横板東2	スギ	217	663	5.3	辺材部	1.0cm
2	溜柾横板東1	スギ	168	629	4.6	心材型	—
3	溜柾横板東3	スギ	199	626	6.5	心材型	—
4	溜柾横板南2	スギ	210	622	5.1	心材型	—
5	建築部材	スギ	284	600	6.1	心材型	—
6	建築部材	ヒノキ	233	434	6.1	心材型	—
7	曲物14底板	ヒノキ	275	652	7.3	心材型	—
8	曲物21底板	ヒノキ	133	309	5.7	心材型	—



第64図 木材の年輪年代測定結果

年～845年)のものを使用した。

結果

8点の計測年輪数は一応の目安としている100層以上のものばかりであった。スギ、ヒノキとも曆年標準パターンとの照合は成立し、それぞれの年輪年代を求めることができた。結果は表3と第64図に示したとおりである。これらのなかで、辺材部を一部に遺存しているものがあった。これは溜柾の試料No.1の板材である。これには約1cmの辺材部があった。これの年輪年代は663年と確定した。

普通、スギの平均的な辺材幅は、4.5～5cmである。もし、この板材に5cmの辺材幅があったと仮定すると、4cmほどは削られたことになる。この板材の残存辺材部1cmのなかには、17層分の年輪がある。この辺材部のなかの平均年輪幅は約0.6mmである。この数値を使って、4cmのなかの年輪層数を算定すると約67層分の年輪が刻まれていたことになる。この板材の年輪年代663年にこの概数値を加えると、730年という年代が得られる。これはあくまでも推定伐採年であって、正確な原本の伐採年ではない。いずれにしろ、この溜柾が製造された年代は8世紀前半代が予想される。

第3節 瓦・須恵器の科学的調査

岡山理科大学自然科学院研究所

白 石 純

瓦・須恵器の胎土分析

今回分析した試料は、別刷の表4に掲載した瓦100点、須恵器31点、窯壁5点の合計136点である。また、測定した成分は、主要成分であるSi(珪素)、Ti(チタン)、Al(アルミニウム)、Fe(鉄)、Mn(マンガン)、Mg(マグネシウム)、Ca(カルシウム)、Na(ナトリウム)、K(カリウム)、P(リン)と、微量元素であるRb(ルビジウム)、Sr(ストロンチウム)、Zr(ジルコニウム)の13元素である。

分析の結果、Ca、K、Rb、Srの各元素に顕著な差がみられることより、この元素を用いて、XY散布図を作製し、胎土の差異について調べた。

また実体顯微鏡による胎土の砂粒観察では、砂粒(鉱物・岩石)の有無、含有量について検討した。そして、(1)～(4)の課題について検討し、結果を報告する。

(1) 軒丸瓦14種類、軒平瓦4種類に分類されているものが、胎土的にどのように分類できるかでは、第65図 K-Ca散布図・Rb-Sr散布図から検討した。この結果、両散布図とも大きく2つの集中域(A領域、B領域)にまとまるようである。そして、表4のようにAとBの領域に、どの種類の瓦が入っているか分類すると、A領域にすべて入っているものは、軒丸Ⅶ類・X類、軒平Ⅰ類・

表4 蛍光X線分析法による軒丸・平瓦の胎土分類

段階	時期	A領域	B領域
1段階	7世紀第3四半期		軒丸瓦I類
		軒丸瓦II類(2・4・6)	軒丸瓦II類(3・5・7)
		軒丸瓦III類(9)	軒丸瓦III類(8・10・11)
2段階	7世紀第4四半期	軒丸瓦IV類(12・14)	軒丸瓦IV類(13)
		軒丸瓦V類(15)	軒丸瓦V類(15・17~19)
		軒丸瓦VI類	軒丸瓦VI類
		軒平瓦I類・II類	軒丸瓦VII類
			大原庵寺軒丸瓦I類
			軒丸瓦IX類(35・37・39)
3段階	8世紀前半	軒丸瓦X類	軒丸瓦X I a類
			軒丸瓦X I b類
		軒丸瓦X II(50)	軒丸瓦X II(51)~54)
			軒丸瓦X III
4段階	8世紀後半	軒平瓦III類(68)	軒丸瓦III類 踏み返し
			軒丸瓦IV類 踏み返し
			軒平瓦III類(69~71)
			軒平瓦IV類

II類で、B領域にすべて入っているものは、軒丸I類・VI類・VII類・XI類a・XI類b・XIII類、軒平IV類である。そして、両方の領域に入っているものは、軒丸II類・III類・IV類・V類・IX類・XII類、軒平III類であった。

(2) 4段階の時期に分類されているが、この時期ごとで胎土に変化がみられるかどうかでは、1・4段階ではB領域に分布するものがほとんどであるが、2・3段階では両方の領域に分布していた。ただし、1段階の瓦は、1点しか分析していない。

(3) 東溝S D01周辺出土の窯壁付着の瓦片がどの型式のものと胎土が似ているかでは、4点の窯壁付着瓦を分析したが、4点とも広く散漫な分布をし、AおよびBの両方の領域に分布した。

(4) 東溝S D01周辺出土の窯壁付着の須恵器片が、同窯跡から出土した須恵器との時期と胎土が類似しているかでは、第66図の両散布図により検討した。その結果、時期の異なる坏類は、重複して分布し、ほぼ同じ胎土と推測される。そして窯壁付着の須恵器片もこれら、坏類とほぼ重なった。また、撒入品?と考えられる長頸壺・坏と上神宮ノ前遺跡の坏・高坏は、前者の須恵器類とは重ならず胎土的に異なっていた。

次に、実体顕微鏡による砂粒観察では、以下のような5つの砂粒分類に分類される。

砂粒1類…0.5mm以下の角閃石を多く含むもの。(図版35-1・2)

砂粒2類…0.5mm以下の角閃石を普通に含むもの。(図版35-3・4)

砂粒3類…0.5mm以下の角閃石を少し含むもの。(図版35-5)

砂粒4類…1mm以下の角閃石を含み、1mm前後の石英・長石を多く含むもの。(図版35-6・7)

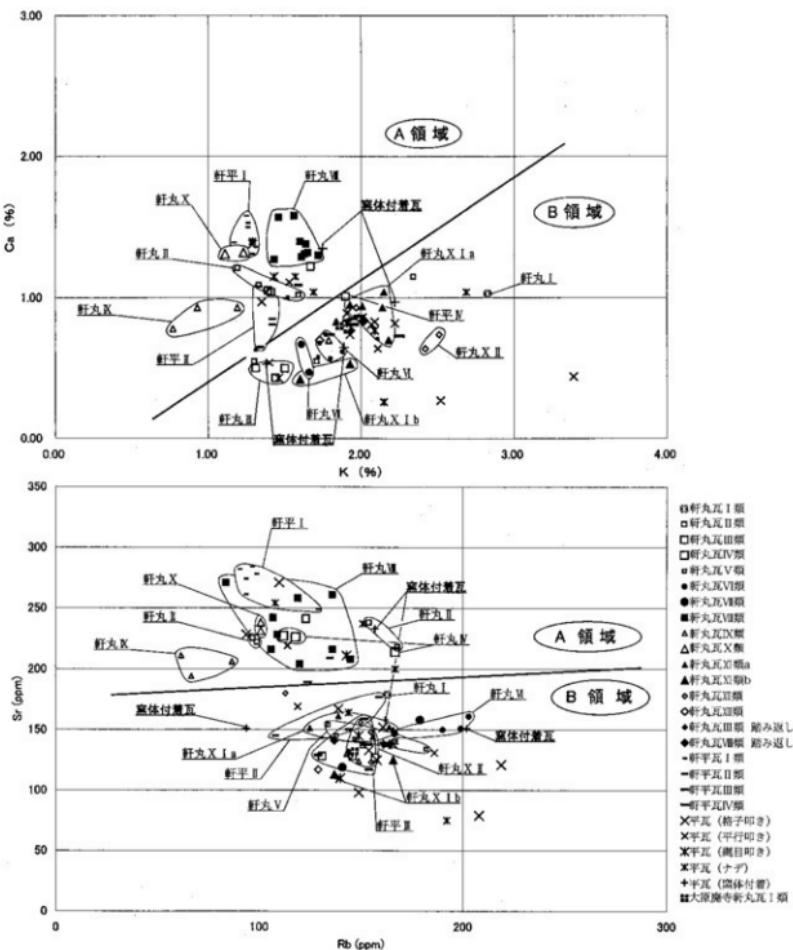
砂粒5類…1mm前後の石英・長石を多く含むもの。(図版35-8)

そして、1類の瓦は、A領域にほとんど入り(K量が1.5%前後、Ca量が1%以上)、2・3・4・5類の瓦はB領域に入る傾向がみられた。また、B領域でも2類はK量が1.6%~2.2%前後、Ca量が0.5%~2%前後。3類はK量が1.5%以下、Ca量は0.5%以下。4類はK量が2.3%以上、Ca量が1%前後。5類はK量が2%以上、Ca量が0.5%以下に大まかに分類される傾向があった。

まとめ 萤光X線分析法による胎土分析を実施したが、この分析で明らかになったことや今後の課題について述べたい。

同窯跡出土の軒丸瓦14種類、軒平瓦4種類に分類されているものが、胎土分析でどのように分類されるかでは、一つにまとまる種類のものと、同一種類でも複数にわかれるものがあり、瓦の種類により明確に胎土が異なるというような傾向は認められなかった。また、今回分析した瓦全体で検討すると大きく2つのグループに集中する領域がみられた(ここでは、A領域、B領域と分類した)。また、実体顕微鏡による砂粒観察では、A領域には、角閃石を多く含むもの(砂粒1類)、B領域では角閃石・長石の量で砂粒2類~砂粒5類の4つに分類された。このように、角閃石の含有量でCa量が、長石の含有量でK量がそれぞれ変わることが今回の分析で想定される(角閃石の量が多いとCa量が増加し、長石の量が多いとK量が増加する)。

同窯跡の瓦は4段階の時期に分類されているが、時



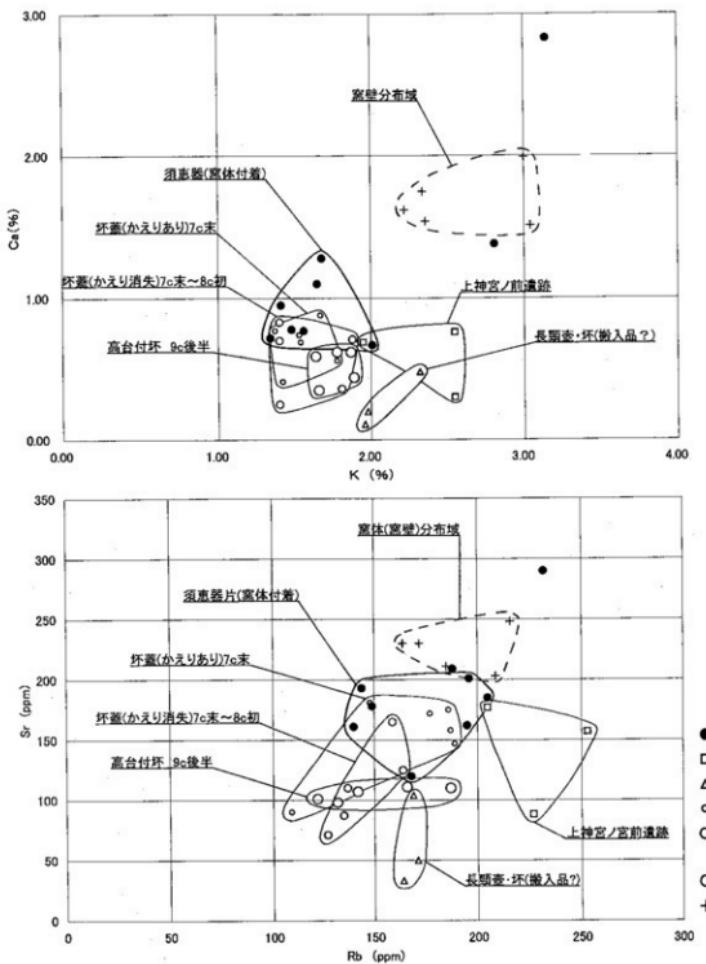
第65図 瓦型式別散布図

期により胎土に違いがあるかどうか検討したが、1段階(7世紀第Ⅲ四半期)の瓦は分析点数が1点と少なくて検討できなかったが、それ以外の時期でみると、2段階(7世紀第Ⅳ四半期)・3段階(8世紀前半)の瓦では、A・Bの両方の分布域に分布し、この両時期の瓦には複数の胎土がみられた。つまり複数の粘土を使用していると推測される。また、4段階(8世紀後半)にはB領域に分布する瓦が多いことが分析より推測された。

窯体付着の瓦がどの種類の瓦と胎土が一致するかでは、分析した4点の窯体付着の瓦片がいずれも胎土が異

なり、AおよびBの領域に關係なく広く散漫な分布をした。そして、この窯体付着の瓦片と同磨寺跡で使われているすべての瓦は胎土的にはほぼ類似していることが推定される。

窯体付着の須恵器片が、同磨寺跡出土須恵器との時期のものと胎土的に類似しているかの比較では、同磨寺跡出土の3時期(7世紀末、7世紀末~8世紀初、9世紀後半)の坏はいずれもほぼ同じ分析値となり、胎土的に差異はみられなかった。また、窯体付着の須恵器片もこれら坏の分布域とほぼ重なり、胎土がほぼ同じである

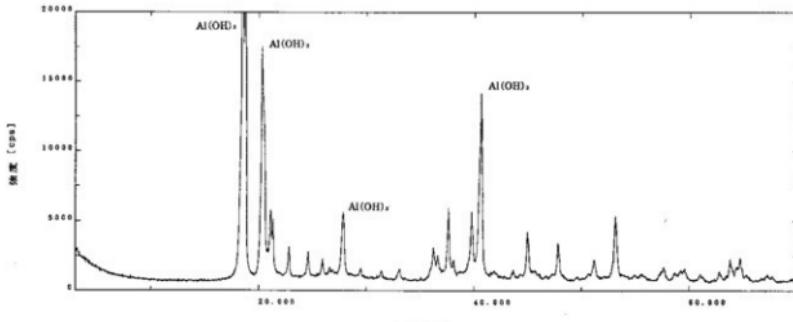


第66図 須恵器の比較

ことが推測される。このことは、同廐寺跡出土の須恵器に関しては、時期に關係なくほぼ同じ粘土を使用し生産されたと想定される。また、上神宮ノ前遺跡出土の須恵器のうち、高坏(別刷表4試料番号III)のみが窓体付着の須恵器分布領域に入った。そして、搬入品と考えられる長頸壺や坏は、分布範囲が異なり識別でき、同廐寺跡出土の須恵器とは生産地(胎土)が異なることが推測された。

以上のように、瓦の分析では、複数の胎土に識別が可能であったが、これは蒸地土となる粘土の採集地が異なるのか、あるいは混和材として入れる砂などが、異なる

ことが考えられる。そこで、大御堂廐寺跡の北側で合流する天神川と小鴨川の岩石や砂の砂粒構成を調べてみた。その結果、胎土に含まれる角閃石であるが、この角閃石が含まれる岩石は小鴨川流域の河原で採取される凝灰岩に多く含まれている。また、天神川流域の河原では、角閃石を含む岩石はみられないが花崗岩起源の岩石が多く観察された。このように両河川の岩石を観察すると岩石種類がやや異なっていることがわかった。このことは、これらの河川で堆積した粘土はそれぞれ特徴があり、また大御堂廐寺跡の北側では両河川が合流しており、同廐



第67図 須恵器横瓶内付着白色物質のX線回析図

寺跡の周辺には両河川の砂や粘土が堆積したことは十分予想される。従って同廐守跡に使われた瓦の粘土は遺跡周辺で採取された粘土、砂を使用していると考えられる。須恵器内付着の白色物質の科学的調査

分析目的 滝沢 S E01周辺出土の横瓶と東溝 S D01出土の壺の内面には、白色ないしやや薄いピンク色の物質が付着していた(図版17・130)。そこで、この物質が何に由来し、どのような成分のものか科学的調査を実施した。

分析方法はX線回折法により行なった。

分析結果・考察 白色物質の成分を調べるためにX線回折法で、成分の同定をした。その結果、横瓶内に付着した物質からは、Al(OH)₃のピークが観察された(第67図)。また、壺内面付着の物質からはAl(OH)₃のピークは検出されなかった。

以上の分析結果からこの横瓶内の白色物質はギブサイトと推測される。同様な類例としては、藤原・平城京、秋田城跡から出土した平瓶や壺の内面に付着した物質も、ギブサイト(γ Al(OH)₃、水パン土)かそれに近いものであることが判明しており、この白色物質が屎に由来する物質である可能性が示されている。つまり、この白色物質が入った容器は瀧瓶の可能性が考えられている。

本例も、これらと同じものと推測され、ここに新たに類例が加えられた。

第4節 自然遺物の科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

試料

試料は滝沢や木桶から検出された土壤試料10点と、滝沢などから検出された木材、種実、昆虫、貝類等の遺物である。土壤試料に関しては、目的等を考慮して選択し、珪藻分析、花粉分析、微細遺物分析、寄生虫卵分析を実施した。土壤試料の詳細については別刷の表1に示す。

木材は、滝沢 S E01から出土した大量の枝などの木材と加工材片のうち保存状態の良いもの40点(試料番号11～50)を抽出した。木枝の中には、樹皮が付いた状態のものが多数認められた。

また、種実、昆虫、貝類等の試料に関しては、詳細を各同定結果とともに表に示した。

結果

(1) 珪藻分析

結果を別刷の表5、第68図に示す。2試料(試料番号1・2)とも珪藻化石が豊富に産出する。完形殻の出現率は、約70%前後で化石の保存状態が比較的良好。産出分類群数は、24属101種類である。

試料番号1・2からは、淡水～汽水生種、淡水生種、陸生珪藻とが混在している。その割合は試料によって異なっている。

試料番号1は、陸生珪藻の割合が最も高く、分布がほぼ陸域に限られる耐乾性の高いA群(伊藤・堀内、1991)のAmphora montana, Hantzschia amphioxysが20%と多産し、淡水～汽水生種のNavicula veneta, Nitzschia frustulumがこれに隣接することを特徴とする。

試料番号2は、淡水生種が全体の約50%を占める。とくに多産するものではなく、前試料で産出した種類に加えて、好流水性種(流水域で最もよく生育する種)のNavicula viridula, N. elginensis var. neglecta, 流水不定性種(流水域にも止水域にも普通に生育する種)のPinnularia mesolepta, Sellaphora pupula、好止水性種(止水域で最もよく生育する種)のFragilaria pinnataなどが産出する。このうち、好流水性種を除く種は、有機汚濁の進んだ富栄養水域に一般的に生育する好汚濁性種(Asai, K. & Watanabe, T., 1995)である。また、これらの2試料からは、塩分濃度35～12‰の海水藻などに付着生育する海水藻場指標種群の代表種(小杉、1988)とされる

表5 珪藻分析結果

種類	生 墓 源			環境 指標	試料No.	
	屬分	pH	液水		1	2
<i>Cocconeis scutellum</i> Ehrenberg	Euh-Meh			CI	1	1
<i>Cyclorella meneghiniana</i> Kuetzing	Ogh-Meh	al-II	l-ph	L,S	1	1
<i>Gyrostigma nodiferum</i> (Grun.)G.West	Ogh-Meh	al-II	Ind	-	1	
<i>Navicula capitata</i> var. elliptica (Schultz)Cl. Eu.	Ogh-Meh	al-II	Ind	-	1	
<i>Navicula capitata</i> var. hungarica (Grun.)Reiss	Ogh-Meh	al-II	r-ph	U	-	2
<i>Navicula cincta</i> (Ehr.)Kuetzing	Ogh-Meh	al-II	Ind		1	-
<i>Navicula pusilla</i> W.Smith	Ogh-Meh	Ind	Ind		1	-
<i>Navicula veneta</i> Kuetzing	Ogh-Meh	al-II	Ind	U	24	4
<i>Nitzschia frustulum</i> (Kuetz.)Grunow	Ogh-Meh	al-bl	Ind		12	1
<i>Nitzschia palca</i> (Kuetz.)W.Smith	Ogh-Meh	Ind	Ind	S	-	1
<i>Rheopaliodia gibberula</i> (Ehr.)O.Muller	Ogh-Meh	al-II	Ind		2	5
<i>Achaenates crenulatus</i> Grunow	Ogh-Ind	al-bl	l-ph	T	1	-
<i>Achaenates exigua</i> Grunow	Ogh-Ind	al-II	Ind	S	-	1
<i>Achaenates lanceolata</i> (Breb.)Grunow	Ogh-Ind	Ind	r-ph	K,T	2	-
<i>Amphora affinis</i> Kuetzing	Ogh-Ind	al-II	Ind	U	-	3
<i>Amphora inariensis</i> Krammer	Ogh-unk	unk	unk		1	-
<i>Amphora montana</i> Krasske	Ogh-Ind	Ind	Ind	RA	50	39
<i>Amphora normannii</i> Rabenhorst	Ogh-Ind	Ind	Ind	RR	1	-
<i>Aulacoseira ambigua</i> (Grun.)Simonsen	Ogh-Ind	al-II	l-bl	N	-	1
<i>Caloneis largenziedtii</i> (Lager.)Choikey	Ogh-Ind	al-II	Ind	S	-	1
<i>Caloneis leptosoma</i> Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-Ind	Ind	l-ph	RB	1	-
<i>Caloneis silicula</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-Ind	al-II	Ind		1	2
<i>Caloneis silicula</i> var. <i>minuta</i> (Grun.)Cleve	Ogh-Ind	al-II	Ind		-	3
<i>Cocconeis discularis</i> Schumann	Ogh-Ind	al-II	l-bl		1	1
<i>Cocconeis placentula</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-Ind	al-II	Ind	U	3	4
<i>Cocconeis placentula</i> var. <i>cuglypta</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-Ind	al-II	r-ph	T	1	-
<i>Cymbella naviculiformis</i> Auerwald	Ogh-Ind	Ind	Ind	O	-	1
<i>Cymbella stiesiaca</i> Bleisch	Ogh-Ind	Ind	Ind	T	1	3
<i>Cymbella tumida</i> (Breb.)V.Kuetz.J.V.Hurck	Ogh-Ind	al-II	Ind	T	1	1
<i>Diploneis ovalis</i> (Hilse)Cleve	Ogh-Ind	al-II	Ind		2	6
<i>Diploneis parme</i> Cleve	Ogh-Ind	Ind	Ind		1	1
<i>Epithemis adnata</i> (Kuetz.)Trebleison	Ogh-Ind	al-bl	Ind		1	-
<i>Eunotia monodon</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-II	l-ph	O	-	1
<i>Eunotia monodon</i> var. <i>major</i> (W.Smith)Hustedt	Ogh-hob	ac-II	Ind		1	4
<i>Eunotia monodon</i> var. <i>undulata</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-II	Ind		1	1
<i>Eunotia praeputia</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-II	l-ph	RB,O,T	1	1
<i>Fragilaria construens</i> (Ehr.)Grunow	Ogh-Ind	al-II	l-ph	U	1	-
<i>Fragilaria construens</i> fo. <i>venter</i> (Ehr.)Hustedt	Ogh-Ind	al-II	l-ph	S	1	2
<i>Fragilaria leptostauron</i> (Ehr.)Hustedt	Ogh-Ind	al-II	l-ph		-	1
<i>Fragilaria pinnata</i> Ehrenberg	Ogh-Ind	al-II	l-ph	S	1	4
<i>Fragilaria ulna</i> (Nitzsch.)Lange-Bertalot	Ogh-Ind	al-II	Ind		-	1
<i>Fragilaria vaucherae</i> (Kuetz.)Petersen	Ogh-Ind	al-II	r-ph	K,T	1	-
<i>Fraustulia rhomboides</i> var. <i>saxorica</i> (Rabb.)De Toni	Ogh-hob	ac-II	l-ph	O	-	1
<i>Fraustulia vulgaris</i> (Thwaites)De Toni	Ogh-Ind	al-II	Ind	U	-	1
<i>Gomphonema acuminatum</i> Ehrenberg	Ogh-Ind	Ind	l-ph	O	1	-
<i>Gomphonema clevei</i> Fricke	Ogh-Ind	al-bl	r-ph	T	1	1
<i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg	Ogh-Ind	al-II	l-ph	O,U	-	2
<i>Gomphonema parvulum</i> Kuetzing	Ogh-Ind	Ind	Ind	U	8	1
<i>Gomphonema putrum</i> (Grun.)Reichardt & Lange-Bertalot	Ogh-Ind	al-II	Ind		2	-
<i>Gomphonema sphaerophorum</i> Ehrenberg	Ogh-Ind	al-II	Ind	T	-	1
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.)Grunow	Ogh-Ind	al-II	Ind	RA,U	45	23
<i>Navicula bryophilus</i> Beyer-Petersen	Ogh-Ind	al-II	Ind	RI	-	1
<i>Navicula confervacea</i> (Kuetz.)Grunow	Ogh-Ind	al-bl	Ind	RE,S	1	1
<i>Navicula contenta</i> Grunow	Ogh-Ind	al-II	Ind	RA,T	4	1
<i>Navicula contenta</i> fo. <i>bloops</i> (Arnott)Hustedt	Ogh-Ind	al-II	Ind	RA,T	5	4
<i>Navicula cryptocephala</i> Kuetzing	Ogh-Ind	al-II	Ind	U	1	-
<i>Navicula cryptoteniella</i> Lange-Bertalot	Ogh-Ind	Ind	Ind	T	1	-
<i>Navicula eglinitensis</i> (Gregg)Rafts	Ogh-Ind	al-II	Ind	O,U	1	-
<i>Navicula eglinitensis</i> var. <i>neglecta</i> (Krass.)Patrick	Ogh-Ind	al-II	r-ph	U	1	3
<i>Navicula lapidosa</i> Krasske	Ogh-Ind	Ind	Ind	RI	-	1
<i>Navicula laterostriata</i> Hustedt	Ogh-Ind	al-II	l-bl		-	1
<i>Navicula mutica</i> Kuetzing	Ogh-Ind	al-II	Ind	RA,S	12	10

種類	生態系			環境 影響度	試料名	
	堆分	pH	水		1	2
<i>Navicula mutica</i> var. <i>ventricosa</i> (Kuetz.)Cleve	Ogh-ind	al-II	ind	RI	5	3
<i>Navicula paramatica</i> Bock	Ogh-ind	ind	ind	RB	+	1
<i>Navicula pratio</i> Cleve	Ogh-hob	ind	ind	-	1	
<i>Navicula viridula</i> (Kuetz.)Kuetzing	Ogh-ind	al-II	r-ph	KJU	+	7
<i>Navicula viridula</i> var. <i>rostellata</i> (Kuetz.)Cleve	Ogh-ind	al-II	r-ph	KU	+	1
<i>Navicula viridula</i> var. <i>rostrata</i> Skv.	Ogh-ind	al-II	r-ph	-	1	
<i>Navicula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	6	1	
<i>Neidium affine</i> var. <i>longoops</i> (Greg.)Cleve	Ogh-hob	ac-II	l-bi	-	1	
<i>Neldium alpinum</i> Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	RA	-	1
<i>Neidium bisulcatum</i> (Lagerst.)Cleve	Ogh-ind	ac-II	ind	RI	+	1
<i>Nitzschia amphibia</i> Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	S	1	1
<i>Nitzschia angustata</i> (W.Smith)Cleve	Ogh-ind	al-II	l-bi	-	1	
<i>Nitzschia brevisima</i> Grunow	Ogh-ind	al-II	ind	RBU	2	-
<i>Nitzschia debilis</i> (Arnett)Grunow	Ogh-ind	al-II	ind	RBU	-	1
<i>Nitzschia fonticola</i> Grunow	Ogh-ind	al-II	ind	U	-	1
<i>Nitzschia nana</i> Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RBS	-	5
<i>Nitzschia umbonata</i> (Ehr.)Lange-B.	Ogh-ind	al-II	ind	U	1	1
<i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	2	1
<i>Pinnularia braunii</i> (Grun.)Cleve	Ogh-hob	ac-bi	l-ph	-	1	
<i>Pinnularia brevicostata</i> Cleve	Ogh-ind	ac-II	ind	-	1	
<i>Pinnularia divergens</i> W.Smith	Ogh-hob	ac-II	l-ph	-	1	
<i>Pinnularia gibba</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ac-II	ind	O	-	2
<i>Pinnularia gibba</i> var. <i>linearis</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-II	ind	-	2	
<i>Pinnularia mediterranea</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-hob	ac-II	l-ph	-	1	
<i>Pinnularia mesolepta</i> (Ehr.)W.Smith	Ogh-ind	ind	ind	S	-	5
<i>Pinnularia nodosa</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-II	l-ph	O	-	2
<i>Pinnularia schoenfelderi</i> Krämer	Ogh-ind	ind	ind	RI	4	10
<i>Pinnularia schroederi</i> (Hust.)Krämer	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	1
<i>Pinnularia stomatophora</i> (Grun.)Cleve	Ogh-ind	ac-II	l-ph	-	1	
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ogh-ind	ac-II	ind	RBS	-	4
<i>Pinnularia viridis</i> (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O	-	1
<i>Sellaphora bacillaris</i> (Ehr.)Mann	Ogh-ind	ind	ind	O	-	1
<i>Sellaphora papula</i> (Kutz.)Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	U	-	1
<i>Stauroneis anceps</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	S	-	3
<i>Stauroneis kriegeri</i> Patrick	Ogh-ind	ind	unk	T	-	2
<i>Stauroneis obliqua</i> Lagerstedt	Ogh-ind	ind	ind	T	-	1
<i>Stauroneis phoenixenteron</i> (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	1
<i>Stercopterobium delicatissima</i> (Lewis)V.Herck	Ogh-hob	ind	l-ph	O	-	1
<i>Surirella angusta</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-II	r-bi	U	-	2
<i>Surirella</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	1	
海水生種				0	0	
海水～汽水生種				1	1	
汽水生種				0	0	
淡水～汽水生種				41	16	
淡水生種				181	189	
堆積化石數値				223	209	

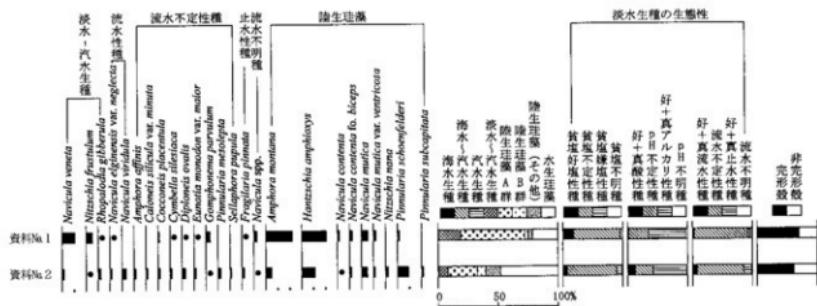
凡例

H.R. : 離分離度に対する適応性
 Euh-Meh : 淡水生種～汽水生種
 Ogh-Meh : 淡水～汽水生種
 Ogh-Ind : 貧電不定性種
 Ogh-Hob : 貧電導性種
 Ogh-unk : 貧電不明種

pH : 本邦イオン濃度に対する適応性
 al-II : 真アルカリ性種
 ac-II : 好アルカリ性種
 ind : pH不定性種
 l-bi : 真水性種
 r-ph : 好淡水性種
 unk : 淡水不明種

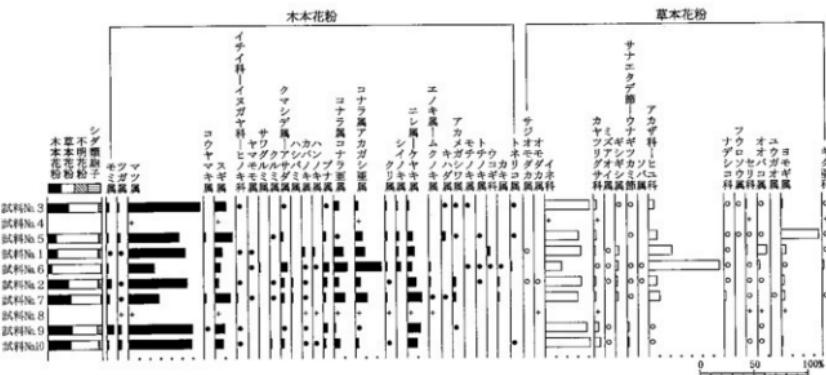
環境影響度群

CI : 水源調査指標(以上は小杉, 1988)
 K : 中～下流性河川指標, L : 最下流性河川指標, N : 溪流沼地向河川指標
 O : 沿岸湿地付着生種, P : 高層帶原創指標(以上は安藤Asai, K. & Watanabe, T., 1990)
 R : 陸上迷走(RA: A群, RB: B群, RU群、伊勢・瀬戸内, 1990)



汽水～淡水生産率出率・各種産出率・光合成率は全浮遊藻、淡水生種の生理性の比率は淡水生種の合計を基準として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお●は1%未満を示す。

第68図 主要珪藻化石群集



出率は、木本花粉は木本花粉化石群集、草木花粉・シダ類は出数より不明花粉を除く数を基準とした。なお●は1%未満、+は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

第69図 花粉化石群集

*Coccocystis scutellum*が1個体産出していることも特徴として挙げられる。

(2) 花粉分析

結果を表6・第69図に示す。試料番号4と8では花粉化石が少なかったが、他の試料からは比較的多くの花粉化石が検出される。全体的に草木花粉の割合が高い組成を示す。木本花粉ではマツ属の割合が高く全体の半数以上を占める試料が多い。その他、スギ、コナラ亜属、アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ属などが検出される。草木類では、イネ科、アカザ科-ヒユ科、ヨモギ属などの割合が高くなっている。その他、カヤツリグサ科、ギシギシ属、オオバコ属、セリ科などが産出している。

(3) 寄生虫分析

結果は花粉分析結果とあわせて表6に示す。寄生虫卵は試料番号1・2・5・6の4試料で回虫卵や鞭虫卵がみられるものの、数は少ない。各試料の産出状況を堆積物1ccあたりに換算するとそれぞれ数個体以下と少ない。

(4) 樹種同定

樹種同定結果を別刷の表9に示す。木材は、針葉樹4種類)[(スギ・サワラ・ヒノキ科・カヤ)と広葉樹16種類(ヤナギ属・コナラ属・アカガシ属・クヌギ属・コナラ属・アカガシ属・クリ・ヤマグワ・タブノキ属・クヌノキ科・ヤツツバキ・サカキ・ヒサカキ・ウツギ属・サクラ

表6 花粉分析結果

種類	試料 No.										
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
木本花粉											
モミ属	1	11	5	.	2	4	9	.	16	3	
ツガ属	1	2	3	.	3	.	1	1	8	7	
マツ属	53	127	139	5	54	54	89	6	141	121	
コウヤマキ属	
スギ属	7	9	22	2	19	12	45	1	22	16	
イチイ科-イタガヤ科-ヒノキ科	1	1	2	.	.	.	4	.	1	2	
ヤナギ属	.	1	
ヤマモモ属	1	2	3	.	.	.	
サワグルミ属	3	
クルミ属	.	1	.	.	1	.	2	.	.	3	
クマシデ属-アサグ属	.	8	1	.	3	14	16	.	1	5	
ハシバミ属	.	3	4	.	.	.	
カバノキ属	3	1	.	.	.	2	3	1	2	1	
ハンノキ属	2	2	.	1	.	1	
ブナ属	.	9	1	.	3	12	7	.	9	5	
コナラ属コナラ属	9	11	11	.	1	28	32	1	3	11	
コナラ属カガシ属	9	11	6	1	8	54	35	4	2	6	
クリ属	.	2	3	.	2	4	4	1	.	2	
シノノキ属	2	.	3	.	3	9	
ニレ属-ケヤキ属	7	19	4	.	6	10	43	2	29	19	
エノキ属-ムクノキ属	.	4	.	.	.	3	2	1	.	.	
ジャケツイバラ属	1	.	.	.	
キハダ属	.	.	1	.	4	.	1	.	.	.	
アカメガシ属	.	7	1	.	1	.	9	.	2	.	
ウルシ属	1	
モチノキ属	.	.	2	.	.	1	
カエデ属	.	.	1	.	.	1	
トチノキ属	.	1	.	1	2	.	1	.	.	.	
ブドウ属	
ツタ属	1	.	.	.	
グミ属	1	
ウコギ科	3	1	.	.	.	
カキ属	.	4	.	.	.	1	4	.	.	.	
イボタノキ属	1	
トネリコ属	.	.	1	.	1	3	
ジャケツイバラ属	.	.	.	1	
スイカズラ属	.	.	1	
草本花粉											
サジオモダカ属	1	1	
オモダカ属	.	1	1	.	.	
イネ科	180	198	215	9	214	440	221	.	293	199	
カヤツリグサ科	8	9	14	2	16	8	11	2	22	28	
ミズアオイ属	4	2	.	.	.	5	.	.	4	2	
クワ科	.	18	.	.	.	4	19	1	.	.	
ギンギシ属	18	12	5	.	.	74	18	.	.	.	
イブキトロノオ科	3	
サナエグサ科-ワナガツカミ属	.	1	1	.	5	5	3	.	8	6	
ソバ属	.	1	.	.	.	2	
アカザ科-ヒユ科	119	45	27	.	55	1877	75	.	1	1	
ナデシコ科	5	5	5	.	3	14	12	.	.	.	
キンポウゲ属	.	1	.	.	.	2	1	.	.	.	
キンポウゲ科	.	.	1	.	.	.	1	.	.	.	
アブラナ科	1	1	1	.	.	.	
バラ科	.	2	1	.	1	2	.	2	.	.	
マメ科	.	1	
フウロソク属	.	.	1	.	2	
セリ科	7	3	6	1	1	15	5	2	.	3	
ネナシカズラ属	.	1	2	
オオバコ属	46	5	1	.	4	53	.	1	1	2	
ヤエムグラ属-アカネ属	1	.	.	.	
ユウガオ属	1	.	.	.	
ヨモギ属	23	16	7	.	241	28	23	3	.	5	
オナモミ属	7	.	2	.	
キク亜科	1	.	1	1	3	39	3	.	.	.	
タンポポ属	.	.	2	1	.	1	.	2	2	1	
不明花粉	10	7	6	8	8	13	5	.	4	6	
シダ類胞子	30	39	27	28	35	62	16	16	48	28	
合計	木本花粉	100	232	208	11	114	222	315	19	238	205
	草本花粉	413	323	289	14	545	2572	404	14	243	249
	不明花粉	10	7	6	8	8	13	5	0	4	6
	シダ類胞子	30	39	27	28	35	62	16	16	48	28
総計(不明を除く)	543	594	524	53	694	2856	735	49	523	482	
寄生虫卵	回虫卵	1	1	.	.	2	
	鞭虫卵	2	.	.	.	2	4	.	.	.	

表7 大型鑑定の同定結果

試料No.	出 土 位 置	同定結果
51	東溝北	2回めの土塗 モモ(完形)1
52	東溝 S D01	瓦窓中部下層 モモ(完形)1
53	東溝 S D01	施設内沙質土 モモ(完形)1
54	東溝 S D01	モモ(完形)1
55	東溝 S D01	モモ(完形)1
56	東溝 S D01	西岸築造土層中 モモ(半分)1
57	東溝 S D01周辺	耕土 モモ(完形)1
58~59	東溝 S D01周辺	耕土 モモ(半分)2
60	東溝 S D01周辺	耕土 モモ(完形)1
61~70	東溝 S D01周辺	耕土 モモ(完形)0
71	北鉢	床土まで モモ(破片)1
72	北鉢	黄白色粘土 モモ(完形)1
73~74	北鉢	高麗燒青白釉瓦裏面 モモ(破片)2
75	北鉢	瓦窓焼青白釉瓦裏面 モモ(完形)1
76	木縁 S X01	東端楕円中層 モモ(完形)1
77	櫻井 S E01周辺	灰褐色土 モモ(完形)1
78~79	櫻井 S E01底方	灰褐色土 モモ(完形)2
80	櫻井 S E01底方	木植取付け部 モモ(完形)1
81	櫻井 S E01底方	下層 モモ(完形)1
82	櫻井 S E01底方	下層 モモ(完形)1 食器
83	櫻井 S E01底方	窓区灰色土層 モモ(完形)1
84~87	櫻井 S E01底方	モモ(完形)4
88	櫻井 S E01底方	モモ(破片)1
89	櫻井 S E01内	第1層 モモ(完形)1
90	櫻井 S E01内	第1層 モモ(完形)1 食器
91~92	櫻井 S E01内	第1層 モモ(破片)2
93~99	櫻井 S E01内	第2層 モモ(完形)1
100~105	櫻井 S E01内	第2層 モモ(半分)5
106	櫻井 S E01内	第2層 モモ(破片)1
117	櫻井 S E01内	第2層 モモ(半分)1
117~125	櫻井 S E01内	第2層 モモ(破片)10
127~143	櫻井 S E01内	第3層 モモ(完形)2
154~159	櫻井 S E01内	第3層 モモ(半分)7
161	櫻井 S E01内	第3層 モモ(破片)1
162~165	櫻井 S E01内	第3層 モモ(半分)4
166~168	櫻井 S E01内	第3層 モモ(完形)3 食器
169~182	櫻井 S E01内	第3層 モモ(破片)4
183~184	櫻井 S E01内	底下層 モモ(完形)1
185	櫻井 S E01内	底下層 モモ(完形)1 食器
186	櫻井 S E01内	底下層 モモ(破片)1
197	櫻井 S E01内	馬糞洗浄中 モモ(完形)1
198	櫻井 S E01内	洗浄 モモ(完形)1
199~201	櫻井 S E01内	第2層 スモモ(完形)3
202	櫻井 S E01内	第2層 スモモ(破片)1
203~209	櫻井 S E01内	第3層 スモモ(完形)11
210~212	櫻井 S E01内	第3層 スモモ(半分)2
222~226	櫻井 S E01内	第3層 スモモ(破片)5
227~234	櫻井 S E01内	第3層推定 スモモ(完形)8
235~238	櫻井 S E01内	底下層 スモモ(完形)4
239~240	櫻井 S E01内	第3層 スモモ(破片)5
241	櫻井 S E01内	第3層 不明(1)
246~258	櫻井 S E01内	第3層 スモモ(完形)3
269	櫻井 S E01内	底下層 サクラ属(1)
270~272	櫻井 S E01内	第3層 ジンヌイマ(3)
273~274	櫻井 S E01内	第3層 不明(2)

試料No.	出 土 位 置	同定結果
375~377	櫻井 S E01内	第2層 エゴノキ属(3)
378	櫻井 S E01内	第3層 ムクノキ(1)
379	櫻井 S E01内	第3層 不明(1)
380~381	櫻井 S E01内	第2層 オニグルミ(破片2)
382~383	櫻井 S E01内	第2層 モモ(破片2)
384~386	櫻井 S E01内	第3層 ナツメ(3)
387~388	櫻井 S E01内	第3層 オナシミ属(2)
389	櫻井 S E01内	第3層 不明(1)
400~431	櫻井 S E01内	底下層 ナツメ(3)
434~450	櫻井 S E01内	第3層 スダジイ(7)
451	櫻井 S E01内	第3層 エゴノキ属(1)
452	櫻井 S E01内	底下層 アカシキ属(1)
453~456	櫻井 S E01内	第3層 イヌガヤ(4)
457	櫻井 S E01内	第3層 ブナ科(破片1)
458	櫻井 S E01内	第3層 タリ(破片1)
459	櫻井 S E01内	第3層 スダジイ(破片1)
460~461	櫻井 S E01内	第3層 スモモ(破片2)
462	櫻井 S E01内	第3層 ナツメ(1)
463~477	櫻井 S E01内	底下層 スダジイ(3)
478	櫻井 S E01内	底下層 ブナ科(破片1)
479	櫻井 S E01内	底下層 クリ(破片1)
480	櫻井 S E01内	底下層 スダジイ(破片1)
481	櫻井 S E01内	第3層 オニグルミ(破片1)
482	櫻井 S E01内	第3層 クリ(破片1)
483~484	櫻井 S E01内	第3層 不明(2)
485	櫻井 S E01内	第3層 材(1)
486	櫻井 S E01内	第2層 不明(1)
487	櫻井 S E01内	第2層 エゴノキ属(1)
488~489	櫻井 S E01内	第3層 不明(1)
490~491	櫻井 S E01内	第3層 オニグルミ(破片1)
492~523	櫻井 S E01内	第2層 メロン類(3)
524~544	櫻井 S E01内	底下層 メロン類(3)
545	櫻井 S E01内	底下層 不雨(破片多枚)
546~553	櫻井 S E01内	第3層推定 メロン類(8)
554~561	櫻井 S E01内	第2層 ヒヨウタケ類(10)
564	櫻井 S E01内	第2層 不明(破片多枚)
565~566	櫻井 S E01内	第3層 ギヨシシ属(2)
567	櫻井 S E01内	第3層 メロン類(1)
568	櫻井 S E01内	第3層 ヒヨウタケ類(多枚)
569	櫻井 S E01内	底下層 ヒヨウタケ類(多枚)
570~575	櫻井 S E01内	第3層推定 ヒヨウタケ類(4)
574~575	櫻井 S E01内	越下層 イネ(5)
579	櫻井 S E01内	底下層 材(破片多枚)
580	東溝 S D01周辺	耕土 コナラ属(1)
581	東溝 S D01周辺	耕土 コナラ属(美実1)
582~583	東溝 S D01	コナラ属(子葉2)
584	東溝 S D01	コナラ属(美実1)
585~596	西島地蔵 S A01周辺	高麗色土 コナラ属(美実2)
597	西島地蔵 S A01周辺	高麗色土 タリ(破片1)
598~600	西島地蔵 S A01周辺	茶褐色土 スダジイ(3)
601	櫻井 S E01内	第3層 シダ類(破片1)
602~603	櫻井 S E01内	第3層 不明(破片2)
604~605	櫻井 S E01内	第3層 ウツラジロ近似種(8)
606	櫻井 S E01内	第3層 ブナ科の葉(1)

表8 小型埋没の同定結果

出土位置 試料No.	縦枠SE01内第1層		縦枠SE01内第2層		縦枠SE01内第3層		縦枠SE01内第4層		縦枠SE01内第5層	
	603	604	605	606	607	608				
木本類										
クマシデ	-	-	-	1	-	-				
ブナ科(果実)	-	-	-	破	破	-				
ケヤキ	-	-	-	-	1	-				
アケビ属	-	-	-	2	6	-				
サンショウ	-	-	13	66	4	6				
カラスザンショウ属	-	3+	22	72	14	10				
アカメガシワ	-	3	3	9	-	-				
ウルシ属	-	-	-	1	-	-				
ハゼノキ?	-	-	-	-	2	-				
ブドウ科	-	-	-	2	2	-				
ブドウ属	-	-	8	19	1	-				
ノブドウ	-	-	-	2	2	-				
クマノミズキ	-	-	-	1	-	-				
クサギ	-	-	1	3	-	-				
草本類										
イネ科	-	-	-	2	-	-				
イネ	-	1	2	6	3	-				
アワ・ヒエ	-	1	-	-	-	-				
カヤツリグサ科	10	-	-	-	-	-				
ホタルイ属	-	-	-	2	-	-				
アサ	-	-	-	23	1	1				
ギンギン属	14	-	25	多	多	1				
タデ属	-	-	-	2	-	-				
サンエタクナ似種	-	-	-	1	-	-				
アカザ科・ヒユ科	多	-	-	16	2	-				
ナデシコ科	1	-	-	1	-	-				
ツヅラフジ	-	-	-	1	-	-				
マメ類	-	-	-	1	-	-				
カタバミ属	2	-	-	-	-	-				
ナス科	-	-	-	1	-	-				
ズメウツリ	-	-	-	1	-	-				
メロン類	-	-	1	21	-	-				
ヒヨウタン類	-	-	-	10	破	-				
キク科	-	-	-	1	-	-				
メナモミ属	-	-	-	11	-	-				
不明	-	3	15	多	14	2				
材	-	-	破	破	破	-				
昆虫	破	-	-	破	破	破				

「破」は、微細片が数個以上存在していることを示す。

「多」は、100個体以上の検出を示す。

表9 微細遺物同定結果(試料番号1)

種類名	数量
木本類	
モモ	2
キイチゴ属	1
ミカン科	1
ウツギ属(材)	破
草本類	
イネ科	5
カヤツリグサ科	23
スゲ属	6
ホタルイ属	3
コナギ	6
ギンギン属	多
タデ属	多
アカザ科・ヒユ科	24
ナデシコ科	1
ウマノアシガタ近似種	1
キジムシロ属・ヘイビイチゴ属	2
カタバミ属	53
チドメグサ属	51
ナス科	8
メロン類	1
同定不能	
昆虫	
	破

「破」は、微細片が数個以上あるもの。

「多」は、100個体以上の検出を示す。

表10 出土貝類同定結果

試料No.	出土位置	分類名	部位	部分	数量	MNI
609	縦枠SE01内	第3層	タニシ類	蓋	1	1
	縦枠SE01内	第3層		殻皮	3	
810	縦枠SE01内	第3層	ドブガイ	微度	2	2
	縦枠SE01内	第3層		破片	1	
	縦枠SE01内	第3層				
811	縦枠SE01内	第3層	イシガイ/マツカサガイ	微度	4	
	縦枠SE01内	第3層		後縫	4	2
	縦枠SE01内	第3層		微度	9	
812	縦枠SE01内	第3層	種不明(二枚貝)	微度	8	
813	縦枠SE01内	第3層	福物	不明	破片	2
814	縦枠SE01内	底下層	ドブガイ	殻皮	3	1
815	縦枠SE01内	底下層	イシガイ/マツカサガイ	殻皮	破片	16

* 数量：破片数 MNI：最少個体数

表11 昆虫同定結果

試料名	出 土 位 置	種 類 名	部 位	個 数
616	瀬橋 S E01内	第3層 不明		1
617	瀬橋 S E01内	第3層 コガネムシ?		1
618	瀬橋 S E01内	オオゴミムシ	頭部	1
			前胸背	1
			後胸腹板	1
619	瀬橋 S E01内	第3層 キンナガゴミムシ?	胸部	1
620	瀬橋 S E01内	第3層 アオゴミムシ類の1種	前胸背	1
621	瀬橋 S E01内	第3層 ゴミムシの1種(複数種)	後胸腹板 上翅	1 7
622	瀬橋 S E01内	第3層 ガムシ類の1種	左右上翅	1対
623	瀬橋 S E01内	クロエンマムシ	前胸背+頭部	1
			前胸腹板??	1
			左右上翅	1対
624	瀬橋 S E01内	第3層 エンマコガネの類	前胸背	1
625	瀬橋 S E01内	エンマコガネの類(試料No524と別種)	前胸背	7
			上翅左	2
			上翅右	6
626	瀬橋 S E01内	マグソコガネの1種(オオマグソコガネ?)	前胸背	1
627	瀬橋 S E01内	マグソコガネの1種(試料No526とは別種、小型)	前胸背	1
628	瀬橋 S E01内	コアオハナムグリ	前胸背	3
			右上翅	5
			左上翅	3
629	瀬橋 S E01内	コガネムシの1種	前胸背	1
630	瀬橋 S E01内	コガネムシの1種(複数種)	脚各節	1
631	瀬橋 S E01内	コガネムシの1種	上翅	1
632	瀬橋 S E01内	ゾウムシの1種	右上翅	1
633	瀬橋 S E01内	ハエの類	黒蝶 3種	大1 中1 小4
634	瀬橋 S E01内	不明甲虫	前胸背他	1
635	瀬橋 S E01内	ゴミムシの1種(キンナガゴミムシ?)	前胸背	1
636	瀬橋 S E01内	ゴミムシの1種	前胸背の一部 腹板の一部	1 1
637	瀬橋 S E01内	コアオハナムグリ	前胸背	1
			左右上翅	1

属・フジ・ユズリハ属・タラノキ・カキノキ属)に同定された。

(5) 種実同定

結果を表7・8に示す。種実は微細遺物分析からも多数検出されている(表9)。遺構内に投棄されたと思われる有用植物も見られるが、周辺植生に由来すると思われる種類も多い。

(6) 微細遺物分析

結果を表9に示す。検出されたもののはほとんどは種実であり、あと若干の昆虫類を含む。種実の形態的な特徴に関しては、種実同定の項であわせて行っている。

(7) 品種同定

検出された品種の種名を別表の表13に、同定結果を表10に示す。第3層からはタニシ類の蓋1点、ドブガイの殻皮が2個体分、イシガイまたはマツカサガイと考えられる殻皮が2個体分、同定できない腹足綱(二枚貝類)の殻皮片が8点検出された。また、最下層からはドブガイの殻皮が1個体分、イシガイまたはマツカサガイと考えられる殻皮が16点検出され、後者は大小2タイプの大きさのものが見られることから、少なくとも2個体分であると考えられる。

(8) 昆虫同定

結果を表IIに示す。コガネムシ類やゴミムシ類などが比較的多く検出される。

考察

(1) 溝堀ならびに木樁の環境と埋積過程

溝堀、木樁とともに珪藻化石組成は近似する。産出種の特徴は、塩分を小量含んだ水域に生育する淡水へ汽水生種、有機汚濁の進んだ富栄養水域に生育する好汚濁性種、それに陸域の好気的環境に生育する陸生珪藻(とくに、耐乾性の強いA群)が多産することで特徴付けられる。遺構の構造から考えると、木樁で導水された水が溝堀に移ることからして水質が同じであっても矛盾しない。珪藻化石群集をみると、生態性が異なる水生珪藻と陸生珪藻とが共存することから、周囲の珪藻化石を含む土壤が木樁から溝堀に流入したと考えられる。また、有機汚濁の進んだ富栄養水域に生育する好汚濁性種が多産する点、微量ではあるが寄生虫卵が検出されることから考えると、水質は汚れていた可能性がある。なお、検出された寄生虫卵はヒト以外の動物の可能性もあり、また検出量が非常に少ないとから、人糞尿などに由来するのではなく、土壤中に混入していたものに由来すると思われる。一方溝堀内には廃絶される際に種実や木材が投棄されていることから、これらも汚濁の原因になっているものと思われる。ただし、今回得られた水質はおそらく廃絶後の状況を反映していると考えられ、実際使用されていた時は、木樁や溝堀内は清浄に保たれていた可能性がある。

昆虫遺体をみると(表I5・試料No.616~637)、第3層では大きく2つのグループに大別される。1つは、618~621のゴミムシ類、628~631のコガネムシ類と632のゾウムシを含む群。他は、623のエンマムシと624~627のいわゆる糞虫のグループ、それに633のハエの團蛹を加えた群である。この昆虫遺体試料は、比較的保存状態がよかつたものを慎重に処理されたらしく、おそらく同一個体ではないかと思われる部分がかなり認められた。はじめのグループのゴミムシ類とコガネムシ類は、前者は地上性、食性は食肉、食腐食性でよく地上を這いまわるのに対し、後者は食葉性でよく飛び回る。これらは生活様式を全く異なるが、いずれも集落に近い明るい林や原野に住み、遺跡の昆虫の代表的なもので、古い戸井があれば活動中にそれに落ちるという機会は多かったであろう。甲虫は飛び立つためには一定距離の滑走する平面とその先の空間が必要で、穴に落ちた甲虫が穴から出られなくなり死骸が集積するという例は少なくない。この中で最も個体数の多いのがコアオハナムグリであるが、よ

くクヌギなどの花に集まる普通種で、遺跡近くに何かこの虫が好む花の木があったであろう。622のガムシの類は、大型の池や沼などの水中にすむ種類ではなく、小型で水辺の陸上にすむグループに近いものと思われ、大量の水の存在を示すものではない。もう1つのグループは、食肉性、食糞性の昆虫で、多数の個体が遺体として残っている場合は、これらの昆虫を誘引したものがそこにあったことを示している。このうちエンマムシは腐肉に、マグソコガネは獣糞に、エンマコガネは主として獣糞、まれに腐肉にもくる。またハエの團蛹のあるところから、この溝堀が廃絶後、ゴミためのような状態であったと考えられる。トイレとして使用されたことも考えられるが、便池のような水気の多い所にはエンマコガネやマグソコガネは集まらないのではないかと思われる。これは様々な遺物が投棄されている点や、珪藻で富栄養な水域が推定されていることと調和的である。

次に、最下層については、試料が少なく断定はできないが、第3層の2つのグループのものが全く含まれていない。第3層と同様な環境であったが、下層堆積時にはこのグループの昆虫を誘引するような原因是なかった可能性もある。

(2) 周辺の植生について

検出された花粉、種実の種類構成をみると、故意に埋められたと思われる渡来種を除けば、全体的に草本の種類数や個体数が多い。これらは周辺植生を反映しているこのと考えられ、遺構周辺は基本的には草地であったと思われる。また木本花粉、木本種実、木製品以外の木材の組成をみると、山地に安定した森林を作るような種類は少なく、人里近くの日当たりのいい林縁部に生育する中・低木類や、人為的に開かれた場所などに先駆的に侵入してくる種類などが多くみられる傾向にある。

今回検出された種類のうち、種実でみられたアカガシ亜属やスグロイ、木材でみられたタブノキは、山地などに安定した森林を作る種類である。これらは花粉化石でもアカガシ亜属やシノノキ属として比較的多く検出されている。このような種類が山地の奥に森林を作っていたと思われるが、今回得られた花粉化石群集からみると、これらの割合は低い。このことから、遺跡周辺で生育していたことは確かであろうが、周辺植生の中では少数であったものと思われる。遺跡近くの後背山地に生育していた可能性があるものとしては、花粉化石、種実、木材とともにみられるクリやコナラ属、花粉化石で多産するマツ属などがあげられる。これらは開発等に伴って伐採が行われた場所に先駆的に侵入して二次林を作る種類である。またこれらは有用材であるため、保護されたり植林

されたりすることから、遺跡の背後にある山地を中心的に生育していたと推定される。木材でみられるサクラ属、サカキ、タラノキ、ユズリハ属、ヒサカキ、ヤマグワ、ウツギ属、ヤナギ属など、種実で見られるクマシデ、ケヤキ、アケビ属、キイチゴ属、サンショウ、カラスザンショウ属、アカメガシワ、ウルシ属、ハゼノキ、ブドウ属、ノブドウ、クマノミズキ、クサギなど、花粉化石でみられるツク属、グミ属、カエデ属、トチノキ属、モチノキ属、ニレ属－ケヤキ属などは、人里に近い林縁部や、川岸などの日当たりのよい場所に生育する中・低木やつる植物であることから、これらは遺跡周辺に生育していたと思われる。このように、遺跡の周囲は豊富な樹種構成からなる森林があったと思われるが、これらの中には食用となるものや、庭木として植えられるものも含まれることから、様々な用途で利用されていた可能性がある。また、花粉化石でスギ属が多いが、これは低地などに分布していた湿地林に由来すると考えられる。現在、遺跡周辺ではスギの低地林は見られないが、中国地方の日本海側では完新世の後期にはスギの低地林が存在していたことが各地の花粉分析成果より明らかになっている(高原、1998)。

草本花粉や草本種実をみると、種類数、個体数とともに豊富であり、これらが遺構周辺に生育していたものと考えられる。特に種実で多くみられるカヤツリグサ科、ギシギシ属、アカザ科－ヒユ科、カタバミ属、チドメグサ属などや、花粉で多く見られるイネ科、カヤツリグサ科、アカザ科－ヒユ科、オオバコ属、ヨモギ属などは、いわゆる人里植物とよばれる種類が多く含む分類群である。これらは、開発などによって裸地化した集落や田畠などに先駆的に侵入して生育するいわゆる「雑草」であることから、寺院周辺に生育していたと思われる。また、数は少ないがオモダカ属やコナギなどの水生植物もみられる。これらは溜枡が機能していた時に生育していたとは考えにくいが、廃絶後遺構が埋積する過程で生育していた可能性がある。

(3) 当時の動・植物の利用状況

溜枡から検出された木材、種実、貝類には、当時の生活残渣を投棄したものが含まれており、遺跡での動植物利用状況に関する情報を得ることができる。また、花粉化石においては当時周辺の田畠で栽培されていた植物の花粉化石が含まれている。これらの状況をもとに、当時の動植物の利用状況に関する検討を行う。

検出された貝類はいずれも淡水に棲む種類である。タニシ類は水田や沼に、ドブガイは河川や沼に、イシガイ・マツカサガイは河川に棲息する(奥谷、1983)。これらの貝は付近の湖沼や河川から採取され、食用にされた

後廻棄されたと考えられる。

溜枡 S E01から出土した木材は、樹皮が付いた枝と加工材がある。加工材は、周辺で木材の加工を行った際の木屑などと考えられる。加工材は、針葉樹のスギ、サワラ、ヒノキ科と広葉樹のカキノキ属が認められた。このうち、カキノキ属は、試料とした木材に明確な加工痕が見られないこと、枝材にもカキノキ属が認められること等から、枝材の一部が混入したものと考えられる。この結果から、加工材は、全て針葉樹材が利用されていたことが推定される。このうち、スギやサワラは、井戸や建物の建築材としてよく利用される木材である(島地・伊東、1988; 伊東、1990)。このうち、サワラの利用は、同属のヒノキが寺院等の建築材としてよく利用されていること(鴨倉、1970; 伊東・島地、1979; 西岡・小原、1979)とも調和的である。用途の詳細は不明であるが、いずれの種類も大木になり、加工性および耐水性に優れた材質を有する。これららの材質が利用された背景に考えられる。

また、枝は溜枡 S E01周辺に生育あるいは植栽されていた樹木の枝などが混入したものと考えられ、その多くが樹皮が付いた状態の小枝である。この中でもクリ、サクラ属、ヤマグワ、フジ属、カキノキ属等は、自生もあるが、鑑賞や果実利用を目的として植えられる種類であることから、寺院内に植栽された可能性がある。樹皮が付いた試料については、最終形成年輪の形成状況を観察し、枝が枯死あるいは伐採された季節の推定を試みた。その結果では、年輪が形成を終了しているか、形成終了に近い時期と判断できるもの、初春～初夏にかけて形成される年輪が途中まで形成されているもの、夏に形成される年輪が途中まで形成されているものが認められた。それぞれ、秋～冬、初春、晩夏に枯死あるいは伐採されたことが推定される。最も多いのは秋～冬であり、樹木の生長が止まる時期に剪定や用材の伐採が行われた可能性がある。

種実で検出された種類のうち、木本のモモ、スマモ、ナツメ、草本のアサ、イネ、アワヒエ、メロン類、ヒヨウタン類に関しては栽培のため渡來した種類であり、周辺での栽培・利用が考えられる。これらは溜枡が廃絶する際に当時の残渣を破棄したと考えられる。一方、自生する種類の中でも有用な種類が多くみられ、これらが利用されていたと考えられる。アカガシ亞属、スダジイ、クリ、アケビ属、サンショウ、ブドウ属、ムクノキ、サクラ属、キイチゴ属はいずれも種実が食用になることから当時利用されていたと考えられる。この中には庭木として植える種類も多いことから、寺院内に植栽されてい

た可能性もある。

花粉で検出された種類のうち、ソバ属とユウガオ属は栽培のため渡来した種類であり、周辺での栽培・利用が考えられる。なお、ユウガオ属の中にはヒョウタン類が含まれている。

以上のことをまとめると、検出された遺物のうち、動物質食料となりうるものはタニシ類、ドブガイ、イシガイ、マツカサガイであり、植物質食料となりうるものはアカガシ亜属、スダジイ、クリ、ムクノキ、ヤマグワ、アケビ属、モモ、スモモ、サクラ属、キイチゴ属、サンショウ、ナツメ、ブドウ属、カキノキ、アサ、イネ、アワーヒエ、メロン類、ヒョウタン類である。この中でも、モモ、スモモ、ナツメ、アサ、イネ、アワーヒエ、メロン類、ヒョウタン類は渡来種である。これら渡来種の大部分は、弥生時代以降の各地の遺跡において比較的よくみられる種類である(粉川、1988; 南木、1991など)、ナツメは類例がなく、稀な結果である。また、アカガシ亜属、スダジイ、クリ、ムクノキ、モモ、スモモ、サクラ属、ヤマグワ、ナツメ、フジ属、カキノキ属等は、鑑賞や果実利用を目的として寺院内に植栽されていた可能性がある。

動物骨同定

溜枡掘方から1点、溜枡内第3層から2点骨片が出土した。掘方内のものは哺乳類、中型動物の関節部分と推定される。溜枡内の1点は不明。他の1点は中型動物の頭骨と推定される。いずれも、食糧以上の焼け方をしている。

(根鈴)

第6章

まとめ

寺域と寺地

今回の調査で、大御堂廃寺跡の範囲を区画する施設を確認したが、この諸施設によって囲まれる範囲を、本文では「寺域」と呼び、大御堂廃寺跡の規模をあらわすものとして使用した。寺の範囲を言い表わす言葉として、「寺地」が使われる報告書や論文が見られる。同じ寺の範囲を指し示す言葉であるが、本報告書では伽藍配置とそれを取り囲む範囲を「寺域」とし、寺が使用する範囲を「寺地」として扱った。

大御堂廃寺跡の範囲を明確に推定したものは、寛保2年に著された『伯耆民談記』の「大御堂」の項が最初である。それによると東は堂道川から西は築出・伽藍橋までとし、現在の駄経寺地区内に大御堂廃寺跡が所在したことが示唆された。

昭和48年から始まった大御堂廃寺跡の調査は、当初か

表12 ガラス小玉測定結果

No	SiO ₂	Al ₂ O ₃	Na ₂ O	K ₂ O	MgO	CaO	TiO ₂	Fe ₂ O ₃	CuO	MnO	CoO	PbO	ZnO
1	64.0	2.2	22.0	3.0	1.3	5.0	0.1	1.6	0.17	0.08	0.08	0.2	
2	67.4	1.6	20.8	2.5	1.4	4.9	0.1	0.9	0.06	0.07	0.1	0.06	
3	67.5	5~6	0.5	14.5	0.5	7.0	0.1	0.3	1.0	0.00	0.2	0.3	

第5節 ガラス小玉の分析

ライフパーク倉敷市民学習センター

綾野 早苗

試料

分析試料は当遺跡から出土したガラス小玉3点で、肉眼観察では、あまり風化していないように見えるが、表面のガラスの化学組織は大きく変化していることが一般的である。

結果

J 1 青緑色小玉(巻き技法)。Na₂O-CaO-SiO₂系ソーダ石灰ガラス。コバルトにより青緑色を着色。

J 2 青緑色小玉(巻き技法)。Na₂O-CaO-SiO₂系ソーダ石灰ガラス。コバルトにより青緑色を着色。

J 3 淡青色小玉。K₂O-CaO-SiO₂系カリ石灰ガラス。銅により青色を着色。

所見

①J 1とJ 2は、わが国では、おもに古墳時代以降に流通するソーダ石灰ガラスで、いずれも、巻き技法で作られている。いわゆる西方のガラスと呼ばれる渡来品。

②J 3は、Znを少量含有していることと、カリ石灰ガラスであることから、奈良時代のものと考えられない。

(J 1・2は奈良時代と考えて差し支えない。)

ら寺域の確認を目的として調査を行ってきたが、その明確な構造や区画施設が確認できたのは、平成6年度の試掘・確認調査以降である。

東限は、平成11年度の第4次調査で確認した東築地堀である。基底部幅4.2m、残高0.35m。両側に雨落溝を持つ。雨落溝幅は0.7~0.8mを測る。掘込地業は旧地表面から0.45mを測り、下層には掘立柱塀を伴う。築地堀の東外側には、堂道川がある。

西限は、平成8年度の第1次調査で確認した西築地堀である。その規模は、基底部幅約3.2m、残高0.35m。外側に雨落溝をもつ。西築地堀は、平成6年度の試掘調査のトレチ1、及び第3次調査のトレチ6でもそれぞれ確認した。

北限は、平成12年度の第5次調査で確認した北段であ

る。僧房基壇北辺から約80mの位置にあり、段差は0.6mを測る。大御堂廃寺跡の北側は天神川の支流竹田川の氾濫地帯であり、講堂以北は旧河道を埋立てて整地しており、北段はこの整地の段と考える。この段は平成6年度の試掘調査トレンチ1でも確認した。

南限は、従来、工場の南側を東西に延びる市道付近と考えられていた。しかし調査では区画造構は確認できなかつた。しかし昭和49年度調査で中心伽藍の南側、字松ヶ坪において多量の瓦が出土したこと、昭和58年度調査において「久米寺」墨書き器が出土した点を考慮にいれると、中心伽藍の南側に位置する、字五反田や字松ヶ坪を含むものと推測する。

この結果、東築地塀、西築地塀、そして北段の各区画施設で囲まれた範囲が寺域である。この寺域は長方形の区画で、規模は東西の築地塀の心々距離で約135m(450尺)、南北は不明な点もあるが165m以上(200~220mを推定する)である。寺域の中軸線は伽藍の中軸線と一致せず、東へ約20mずれる。

僧房の西側46mには寺の上水施設の溜井があり、溜井に水を供給する導水施設の木樋が存在する。木樋は、溜井から西へ96m延びており、西の築地塀を越え寺域外西へ76m延び、字上湯原まで達している。

また東築地塀の東側には、南西から北東に流れる幅1.5mの水路の東溝がある。第1次調査では、木杭と矢板による流路が造られ、鬼瓦などの多量の瓦とともに非常に多くの墨書き器が出土し、溝の西側では銅製の匙も出土した。遺物の出土状況から、寺の祭祀空間であった可能性が考えられる。

このように大御堂廃寺跡には、寺域の外側に寺の施設と考えられる木樋や祭祀空間の存在が明らかとなつていい。確認はされていないが、寺の南側や北側にも諸施設の存在する可能性があり、これらは広い意味での寺の範囲と考えることができ、この範囲が寺が使用した範囲

「寺地」の可能性として考えることができるのではなかろうか。

(著下)

伽藍配置について

伽藍配置は、「川原寺式」を簡略化した「観世音寺式」に比定される。西に金堂、東に塔を置き、金堂は東面して塔と向き合う、官寺特有とされる型式である。北に講堂と僧房を配し、回廊は講堂に取り付く。

講堂が不確かであるけれども、後世の水田の段状に残った部分を基壇痕跡とすれば、西に偏ったものとなる。^{註2)} 講堂が金堂の背後に偏る例は、近年、発掘調査に伴い事例が加わってきており、大御堂廃寺跡の講堂を同例として報告したことがある。^{註3)} 本書では、僧房が大規模な礎石建物であることを重視し、全体のバランスから伽藍中軸線で対称となるよう講堂を復元した。

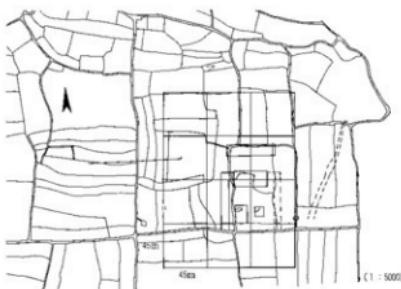
観世音寺式伽藍配置の特徴である東面金堂について、大御堂廃寺跡の金堂と塔との基壇縁間が7.2m(約24尺)と接近しているのは疑問視されるところである。「川原寺式」伽藍配置例の金堂・塔間距離をみると、南滋賀寺10.0m、大宅寺7.5m、西条虎寺8.0m(復元図から算出)などがあり、中枢部が密接するのは古い要素とも解釈されている。寺域全体との相関関係にあることは今までもなく、ここで、大御堂廃寺跡の寺域の設計について示しておきたい。

寺院設計について

大御堂廃寺跡の伽藍配置の特徴は、金堂・塔の規模は標準サイズながら、僧房・回廊を備えた本格的な伽藍配置をとることである。主軸方向のわかる遺構は僧房・塔・西面回廊で、各々国土座標北から3° 東・3° 30' 東・3° 40' 東で、その差は1° 内におさまる。また、僧房の東西軸と塔の中心を結ぶ線分を2分する位置には講堂の東西軸があり、計画的な整然とした配置とみることができる。

築地塀は東西1カ所ずつの確認であるが、東西心々距離は約135mである。北側を調査で確認してはいないが、寺院廃絶後、条里は築地塀で囲まれた寺域に即して展開していると考えられ、築地塀はそのまま北へのびていくものと推定される。一般に、地方寺院の寺域は1町=108m程度と考えられてきた。都城における寺院の寺域が1町=135mを基本とする条坊制に則ることを考え合わせると、数值的には興味深い。

伽藍中軸線は東築地塀から45m西に設定されることから、寺域東西135mを3分する45mを単位とする方形地割で設計しているのではないかと推測される。おそらく、寺域を東西3×南北4区画に地割し、南東の6区画―東西90m南北135mの範囲を主要堂塔にあて、北と西の6



第70図 大御堂廃寺推定地割

区画は付属施設にあてたものと思われる(第70図)。東西2区画の中に回廊で囲んだ金堂と塔を並置させたため、金堂と西面回廊も接近していると推測される。

付属施設としては、僧房西に、溜枡(戸戸)を確認した。涌水を利用した長大な導水施設を完備してたことがわかり、番付・墨付とともに木工技術の実際を知ることができた。木樋方向は伽藍中軸方向から12°振れ、施工計画の時期差を示すものと理解される。

本格的伽藍に整備される前の状況を示す遺構は、西面回廊下の掘立柱塀と東築地塀下の掘立柱塀がある。どちらも位置に変更がないので、仮解して考えるのが妥当と思われる。中樞部下層の掘立柱建物については、配置・時期・性格の確たるものはない。建物の主軸方向は、講堂下層掘立柱建物と塔下層掘立柱建物ともに、国土座標北から3°東であり、僧房と同一方向である。時期については、講堂下層掘立柱建物の柱抜取り穴から、軒丸瓦I類に近い胎土の瓦片が出土しただけでほとんど遺物はない。瓦を寺院のものと仮定すれば、掘立柱建物の解体は寺院建立以降~講堂建設以前であり、瓦にみる造営状況の第一段階の小堂にかかるものかもしれないが、推定の域をでない。

寺院内工房について

溜枡掘方から須恵器施印土器が出土した。須恵器の寺名の施印は未だ類例がない。硬質で薄手の环頬底部内面に施され、時期は共伴遺物から7世紀後葉~8世紀前葉と推定される。須恵器人が焼成前段階に「久寺」と施印して納入先を特定したもので、製品を一般物と区別したのであれば、品質保証のマークでもある。窯業生産において、納入先を特定するような管理体制下での生産をみるとできよう。須恵器は供給されるだけでなく、寺院内工房でも自給生産されている。

当地方では瓦窯は不明であったが、灰原らしき炭層を確認し、また、瓦陶兼業窯を端的に示す、窯体に熔着した瓦や須恵器あるいは焼き歪み品が出土することで、寺域外東側に工房が隣接していることが明らかとなつた。一般に言われているように、寺院造営に伴い瓦生産に須恵器人が動員されたのであろう。製作技法上では、鬼瓦I類の裏面に同心円叩き目文を、鷗尾破片に平行叩き目文と同心円叩き目文を有すことからもわかる。さらに、土師器技法+須恵器焼成の土器が存在することは、両工人の非分離をもうかがわせる。寺院建立に際し、瓦・須恵器・土師器の工房と工人編成は、窯業組織全体を巻き込んだものであつただろう。

金属関連の炉跡は、僧房の軒下や僧房周り、回廊内で確認し、創建から維持管理まで、寺院内で铸造あるいは

鍛造されていることが確認された。金堂・塔・講堂の下層で炉跡が確認されていないので、中樞部を除く随所で操業されたものと考えられる。仏具の鋳型が出土したが、出土した金属製品のどこまでを製造したかを知る手掛かりはない。いずれにせよ、中央からの技術援助による造寺体制を知る一資料となった。

祭祀遺構について

溜枡出土木製祭祀具から、8世紀中頃には久米郡内に律令祭祀が浸透していたことが分かった。寺院出土木製祭祀具の例は、奥山庵寺(奈良県)・西隆寺(奈良県)・但馬国分寺(兵庫県)に例がある。投棄状態とはいえ、仏教施設内での律令祭祀を実証するものである。

東溝は南西から北東へ斜行する流路で、第1次調査区一講堂の真東部分の遺物量は特に多く、銅製匙・多量の墨書き土器や灯明具が出土した。9世紀代を主とする寺域外の祭祀遺構として特定してよいと思われる。丹彩の供膳具とおよそ5:1の割合で薄手の手捏土器皿が目に付いたが、使用方法は不明である。墨書きの中には「淨」「淨私」などがあり、寺院僧尼統制で非常に清浄性が重視される時代背景を考えると、清浄性の維持に関わる仏教的祈願が行われ、祭祀具をまとめて廃棄したのかもしれない。「印」、重ね字の「和大」など珍しいものがあり、「介」は国府・国分寺との関係で気になる字である。

(根鉢)

軒瓦からみた寺院の造営状況

大御堂庵寺跡からは多種多様の遺物が出土しているが、これらの遺物のうち屋瓦をとおして寺院の造営状況について考えをまとめる。

軒瓦の年代観について

各軒瓦の特徴をもとにそれぞれの所属時期を考察する。

A群は軒丸瓦のなかで最も古式の要素をもつI類である。楔状の間弁、弁端が反転する比較的大型の運弁、高い素文の直立縁等、他の軒丸瓦に先行する特徴を有する。これら瓦当文様の特徴から7世紀第3四半世紀代に位置付けられるものと判断される。

B群の軒丸瓦II類からV類は、川原寺式の系統に属する瓦当文様を配するが、川原寺式の特色の一つである外区の面邊鋸歯文がなく中房蓮子も二重にしか施されていない等、後出的な要素が認められるもの。瓦当文様の特徴と、瓦当裏面端部を穿ち凸面を加工した丸瓦を接合する技法等から7世紀第4四半世紀代に位置付けられる。

C群の軒丸瓦VI類とVII類は、外区の密珠文の配置が大官大寺式に共通するが、内区の瓦当文様は本藻井寺式ないし藤原宮式に近い。このような特徴から、7世紀第4

四半世紀代、それも後半頃に位置付けることが可能と考えられる。

D群の軒丸瓦VII類は、いわゆる川原寺式の系統に属するものだが、中房を平坦につくり外区に独特の線縞文を配する等、後出的な要素が認められる。しかし、蓮弁の反転は比較的強いことや、瓦当と丸瓦の接合位置や接合方法等から、7世紀第4四半世紀に位置付けられるが、B群より後出的なものと判断される。IX類aとIX類bは、VII類の内区から間弁を除いたものであり、瓦当の厚さがVII類より薄くつくられていること等から、8世紀第1四半世紀に位置付けられると考えられる。

E群の軒丸瓦X類は、新羅系軒丸瓦の影響を受けて成立したと考えられる地方独特の瓦当文様を配するもの。瓦当と丸瓦の接合線が台形を呈しており、8世紀第2四半期の時期に位置付けられる。XI類aとXI類bは、X類と基本的に同じ瓦当文様となっているが、中房が平坦になる等、X類より若干下る時期が想定される。

F群のXII類も新羅系の要素が認められるもの。丸瓦の接合位置が瓦当裏面の中程近くであることや、先端が円くつくられる蓮弁等の特徴から8世紀第3四半世紀頃に位置付けられる。XIII類はXII類と調整技法や胎土等が共通することからXII類と同時期のものと判断される。

G群の軒丸瓦XIV類とXV類は、踏み返し等の技法でつくられたものであり、それぞれの原型になったVII類ないしII類等より後出するものであることは明らかである。瓦当と丸瓦の接合状況等からみると、8世紀第3四半世紀に位置付けられるのではないかと考える。

H群の四重弧文軒平瓦は、同時期に製作されたと考えられるもの。瓦当両端部を三角形に切り落とすが、これは川原寺の四重弧文軒平瓦に共通するもの。時期的には、7世紀第4四半世紀に位置付けられ、胎土等の特徴から軒丸瓦II類からV類に組み合うと考えられる。

I・J群のうち、III類とIV類は瓦当文様や胎土などから同時期のものであり、軒丸瓦XII類とXIII類に並行するとと思われる。組み合う関係は、IV類の界線上の珠文のあり方から、軒丸瓦XII類と軒平瓦IV類、軒丸瓦XIII類と軒平瓦III類が想定される。V類も瓦当文様の特徴から同じ8世紀第3四半世紀頃と考えられる。

鬼瓦について

2型式3種の鬼瓦が出土している。鬼瓦I類は蓮華文、II類は鬼面文を配するが、両者とも他に類例がみられない独特のもの。

I類は、外区内縁に大型の連珠文を置くもので、奥山久米寺や吉備寺跡の鬼瓦の系統に属するが、蓮弁の状態

等から後出的なものと判断される。裏面に同心円叩き目文が残ることや、胎土が軒丸瓦のB群に近いことから、7世紀第4四半世紀代に位置付けられる。

II類は、鬼面を大きく表すとともに、蹲踞する腕と脚を表現するもの。近江昌司氏によって新羅的な要素の強いことが明らかにされている。胎土は軒丸瓦のF群に近く、F群の軒丸瓦XII類も新羅的な要素が強いものであることから同時期のものと考えられ8世紀第3四半世紀に位置付けられるものであろう。

大御堂廐寺跡から出土している軒丸瓦15型式18種、軒平瓦5型式、鬼瓦2型式3種等の屋瓦を年代ごとに次のような段階にまとめることができる。

第1段階 7世紀第3四半世紀、軒丸瓦I類が属する。

I類は、軒丸瓦出土量のわずか2.7%を占める程度。大御堂廐寺跡の整地層上面から出土する土器類は、7世紀第4四半世紀以降のものであるが、包含層には7世紀第3四半世紀段階のものも含まれている。また、溜掘方内からも7世紀第3四半世紀の須恵器杯蓋が出土している。以上のことから、この段階に大御堂廐寺跡が創建されたと考えられる。ただし、軒丸瓦の出土量が少なく、かつ、廐寺跡の南辺近くの松ヶ坪遺跡からの出土点数が多いことなどから、主要堂塔が整っていたとは考えられない。主要堂塔の下層から検出されている掘立柱建物との関連も考慮しなければならないが、調査面積が少なく断定するにいたらない。

第2段階 7世紀第4四半世紀。軒丸瓦II類からVII類、軒平瓦I類とII類が属する。この段階の軒丸瓦が全体に占める割合は約71.5%であり、軒平瓦のそれも約63.3%と非常に高い。このことは、大御堂廐寺跡の伽藍が第二段階に本格的な整備がおこなわれたことを示していると考えられる。ただし、この段階に属する軒丸瓦にはII類からV類のB群と、VI類・VII類のC群、VII類とでは製作時期に差が認められることから、造営工事が継続的に営まれたと考えられる。また、VII類は大御堂廐寺跡を中心として、同系統の軒丸瓦が東伯耆地方の大原廐寺跡、野方・弥陀ヶ平廐寺跡、久見古瓦出土地に分布する。なお、鬼瓦I類と文字瓦のほとんどがこの段階に属する。

第3段階 8世紀第1四半世紀と第2四半世紀。いわゆる国分寺建立以前の段階。軒丸瓦IX類からXI類が属する。IX類は、a・bとも第1四半世紀に属し、X類とXI類のa・bは第2四半世紀に属する。それぞれが軒丸瓦全体に占める割合は、前者が13%、後者が8.2%であることから部分的な造営ないし改修がおこなわれたと考えられる。

第4段階 8世紀第3四半世紀。軒丸瓦F群のXII類とXIII類、G群のXIV類とXV類、軒平瓦I群のIII類・IV類とJ群のV類、鬼瓦のII類が属する。この段階の軒丸瓦は全体の4.8%を占めるだけだが、軒平瓦は37%を占めている。これは軒平瓦の出土点数が少ないとによるもので、それぞれの出土点数は軒丸瓦が18点、軒平瓦36点であった。いずれにしても出土量からみて、改修ないし差し替えに使用されたものと判断される。ただし、この段階の特徴として、それまでの軒瓦は畿内的な瓦当文様が用いられるのに対し、新羅的な要素の瓦当文様が用いられていることである。また、この段階は伯耆国分寺が造営される時期であり、伯耆国内に分布する同じ段階の寺院跡には伯耆国分寺系の軒瓦が用いられている。しかし、大御堂廃寺跡には伯耆国分寺系の軒瓦がみられないことも大きな特徴である。

大御堂廃寺跡では、第4段階以降の軒瓦が出土していない。しかし、土器類は10世紀段階のものまでが出土していることから、大御堂廃寺跡は存続しており、廃絶したのは11世紀段階が想定される。
(眞田)

性格について

その他、大御堂廃寺跡の性格について羅列的に記述する。

創建年代は7世紀第3四半世紀と推定される山陰最古級の寺院であり、仏教受容期の様相を具体的に知ることができる。近くに東伯耆屈指の三明寺古墳があり、古代山陰道が南に想定されている。

大御堂廃寺跡は、古代行政区画では伯耆國久米郡勝部郷に所在し、「久米寺」の寺名は郡名を負う。大御堂廃寺跡と国分寺跡には瓦の共有関係ではなく、国分寺造営時に別の瓦当を有したことは、国分寺とは別に寺格が保たれていたことがわかる。国府所在郡の郡名寺院を研究する一史料である。

仏教遺物として、埴仏・塑像・石製菩薩立像・銅製匙・銅製獸頭・仏具の鑄型がある。埴仏は方形三尊埴仏と六尊建立埴仏がありそれぞれ伯耆国内の斎尾廃寺跡、大原廃寺跡の埴仏の元型となっている可能性がある。石仏は非常に珍しく仏教美術の上でも重要である。銅製匙は正倉院宝物・雁鴨池出土品に類似する円形匙である。銅製獸頭は造形意匠の優れたもので類例は知られていない。

特殊な遺物として、溜枠・木桶・木簡・木製祭具・漆器などが加わる。これら豊富な遺物から、山陰を代表する本格的寺院であったと推定される。伽藍配置・規模・遺物から、中央と直結した技術援助がうかがわれ、国家仏教政策の拠点的寺院であった可能性が指摘される。

以上、大御堂廃寺跡について、考えられることを列挙したが、これら様々な資料に対して、多角的視野と総合的検討作業を展開していくことが必要である。
(根錦)

註

1 川原寺(観世音寺)式伽藍配置の例は、川原寺(奈良県)・観世音寺(福岡県)・多賀城廃寺(高崎寺・宮城県)・夏井廃寺(福島県)・郡山廃寺(宮城県)・穴太廃寺(創建寺院 滋賀県)・崇福寺(滋賀県)・南滋賀廃寺(滋賀県)・定林寺(奈良県)・西条廃寺(兵庫県)・大蛇庵寺(京都府)・野中寺(大阪府)・道成寺(和歌山県)・英賀廃寺(岡山県)・貴田廃寺(岡山県)・伝吉田寺(広島県)・讃岐百鳥廃寺(香川県)・陳内廃寺(熊本県)・上坂廃寺(福岡県)などがある。推定されるものや類するものを含んでいる。

2 講堂が金堂の背後に偏る例は、杉崎廃寺(岐阜県)・佐野廃寺(和歌山県)・伊丹廃寺(兵庫県)・伯耆国内の大原廃寺(倉吉市)、斎尾廃寺(東伯町)等がある。

3 加藤誠司『史跡 大原廃寺発掘調査報告書』 倉吉市教育委員会 1999年



報告書抄録

書名	支那 大師堂跡寺跡発掘調査報告書							
編著者名	一							
巻次	一							
シリーズ名	食古市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第177集							
著者名	畠田 廉三・在下 茂樹・根岸留洋子・加藤 誠司・岡本 審朗・岡平 新也							
編集機関	食古市教育委員会							
所在地	〒982-8501 烟取熊倉吉政町722番地 TEL.0854-22-4419							
発行年月日	西暦2001年3月19日							
所収遺跡名	所在地	コード 白町村：遺跡記号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
大師堂跡	白町村大師堂字 大師堂、上御殿、 點綴寺町2丁目字 大師堂、飛庭、どんど川	31203 : 6UDO	35° 25' 41"	133° 50' 39"	第1次 第1次(補足) 第2次 第3次 第4次 第5次	96001~961111 96111~970114 97060~980107 98017~990304 99072~000327 00058~000596	1134.5 235 1040 1000 150 60	範囲確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺物	主な遺物	特記事項			
大師堂跡	寺院	奈良~平安	僧房・四壁地蔵 瓦・須恵器・土師器・馬鹿土器・銅製鏡・銅片 東唐 (移用遺物)	瓦・須恵器・土師器・馬鹿土器・銅製鏡・銅片 須恵・唐瓦	寺内中心部の初めての断面。			
第1次調査 (縦溝)			木構 (導水施設)	木構・瓦・須恵器・土師器	礎石場の壁面、西側の築地帯を確認。 寺域外木構の調査。			
第2次調査			僧房・奉・金堂 鉢跡 (金属工具) 瓦窯灰	瓦・須恵器・土師器・壺形・埴輪・塔刹・塔型・埴輪口 瓦窯口	鉢跡配置は「川原寺式」と簡略化した「根掛寺式」と推定。地方寺院としては、大規模な壁面であることが明確。			
第3次調査			西面瓦窯・腰瓦 瓦・須恵器・土師器・壺形・埴輪・塔刹・塔型・埴輪口 金剛智多宝金具・石仏・大般若經般若札	西面瓦窯と腰瓦の調査。西面の下層に盛立柱跡を確認。僧房・西面瓦窯附近に鉢跡 (金属工具)を確認。寺域は大掛かりな整地が行われていることが明らかとなる。				
第4次調査			木構・廻柱・東南 地蔵	木構・廻柱・木構・木製祭祀具・木製品	古代本尊敷設の全容が明らかとなる。 廻柱の部分には善才と悪鬼が残る。			
第5次調査			北段	瓦・須恵器・土師器・銅鏡・小杭・木製品	東南地蔵の下層に盛立柱跡を確認。 寺域北側の調査			



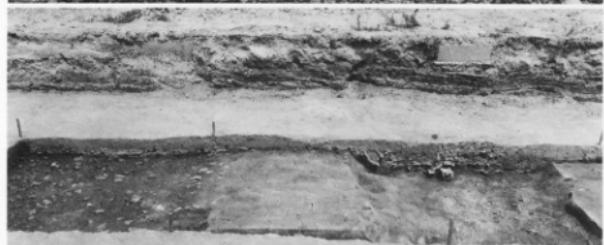
△全景空中写真（第1次補足調査）(北から)

▽全景空中写真（第2次調査）(南から)

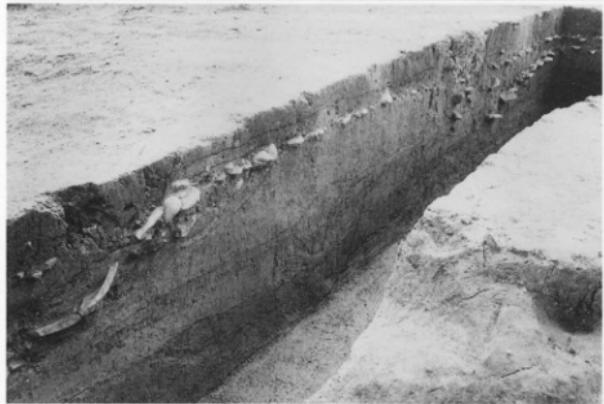
図版2



西築地堀 S A01 (第1次調査)
(南から)



東築地堀 S A02 (第4次調査)
(南から)



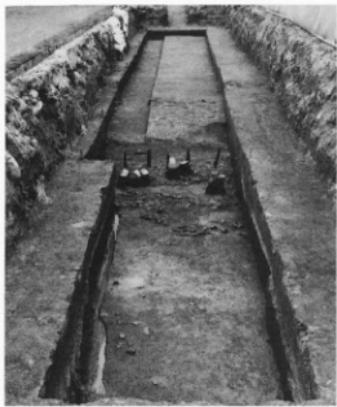
東築地堀 S A02断面南壁
下層掘立柱堀 S A03
(第4次調査) (北東から)



東築地堀 S A02、東雨落溝



東築地堀 S A02、西雨落溝



北段 S D02 (第5次調査)
(北から)



北段瓦溜 (第5次調査) (東から)



北段 S D02 (平成 6 年度調査)
(北から)



僧房 S B01 (第1次調査)
(西から)

図版4



僧房S B01 (第1次調査)
(東から)



僧房S B01 (第2次調査)
(西から)



僧房S B02 (第2次調査)
(西から)



金堂 S B03 (第1次調査) (東から)



金堂 S B03 亂石積基壇 (西から)



金堂 S B03・塔 S B04 (第2次調査)

(東から)



塔 S B04 (第2次調査) (南から)

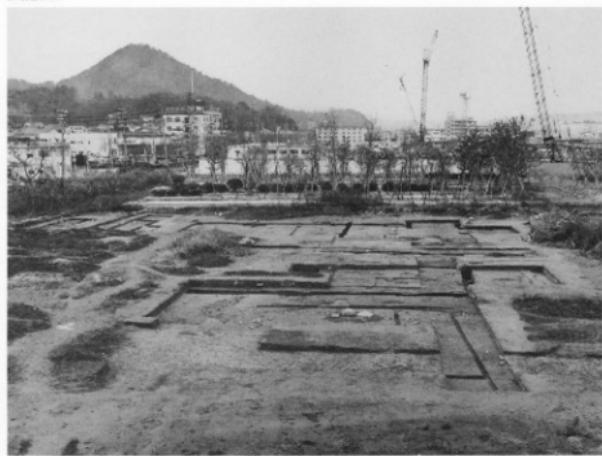


S B04下層掘立柱建物 S B06

(第3次調査)

(南から)

図版6



講堂 S B 05・西面回廊 S C 01
調査区全景（第3次調査）

(東から)



S B 05南瓦溜
(第3次調査) (南から)



S B 05根石断面
(第3次調査) (東から)



S C01 東雨落溝 (第3次調査) (南東から)

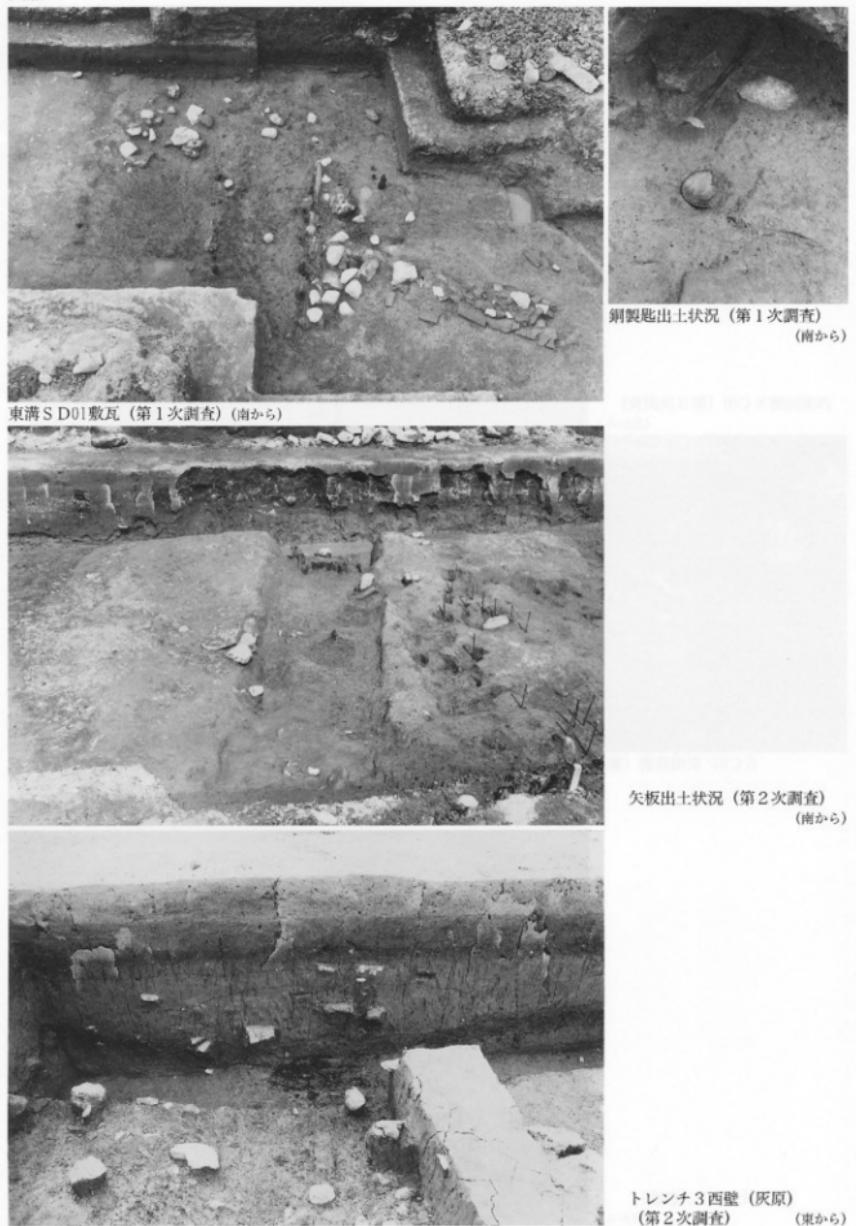


S C01 銅製獸頭・金銅製帶先金具出土状況
(第3次調査)



S C01 (第3次調査)
(南から)

図版8





木樋 S X 01 全景（西から）



近景（東から）



取水口蓋取り上げ状況（西から）



取水口塞瓦状況（北西から）



木樋取り上げ状況（南から）

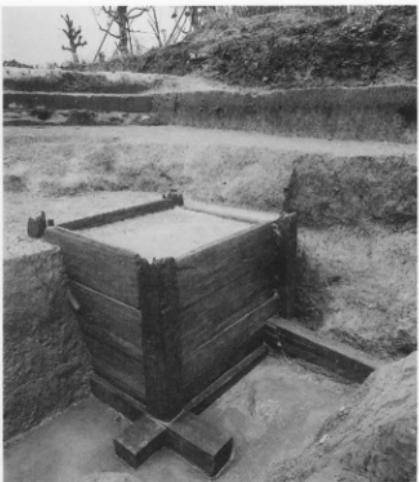


石組状況（東から）

図版10



溜枡 S E01全景（第4次調査）（南西から）



S E01近景（北西から）



S E01第3層遺物出土状況（南から）



S E01木製祭祀具出土状況（西から）



S E01底面状況（北から）



S E01敷石状況（東から）

軒丸瓦 I類



軒丸瓦 III類



1

4

軒丸瓦 II類 a



軒丸瓦 IV類



2

5

軒丸瓦 II類 b



軒丸瓦 V類



3

(1 : 3)

圖版12

軒丸瓦VI類



7

軒丸瓦VII類



8

軒丸瓦VIII類



9

軒丸瓦IX類 a



軒丸瓦

軒丸瓦IX類 b



11

軒丸瓦XIV類



17

(1 : 3)

軒丸瓦X類



軒丸瓦XII類



12

15

軒丸瓦XI類a



軒丸瓦XIII類



13

16

軒丸瓦XI類b



軒丸瓦XV類



14

18

(1 : 3)

圖版14

軒平瓦・鬼瓦

軒平瓦I類



軒平瓦II類



20

軒平瓦V類



23

軒平瓦III類



軒平瓦IV類



22

鬼瓦I類



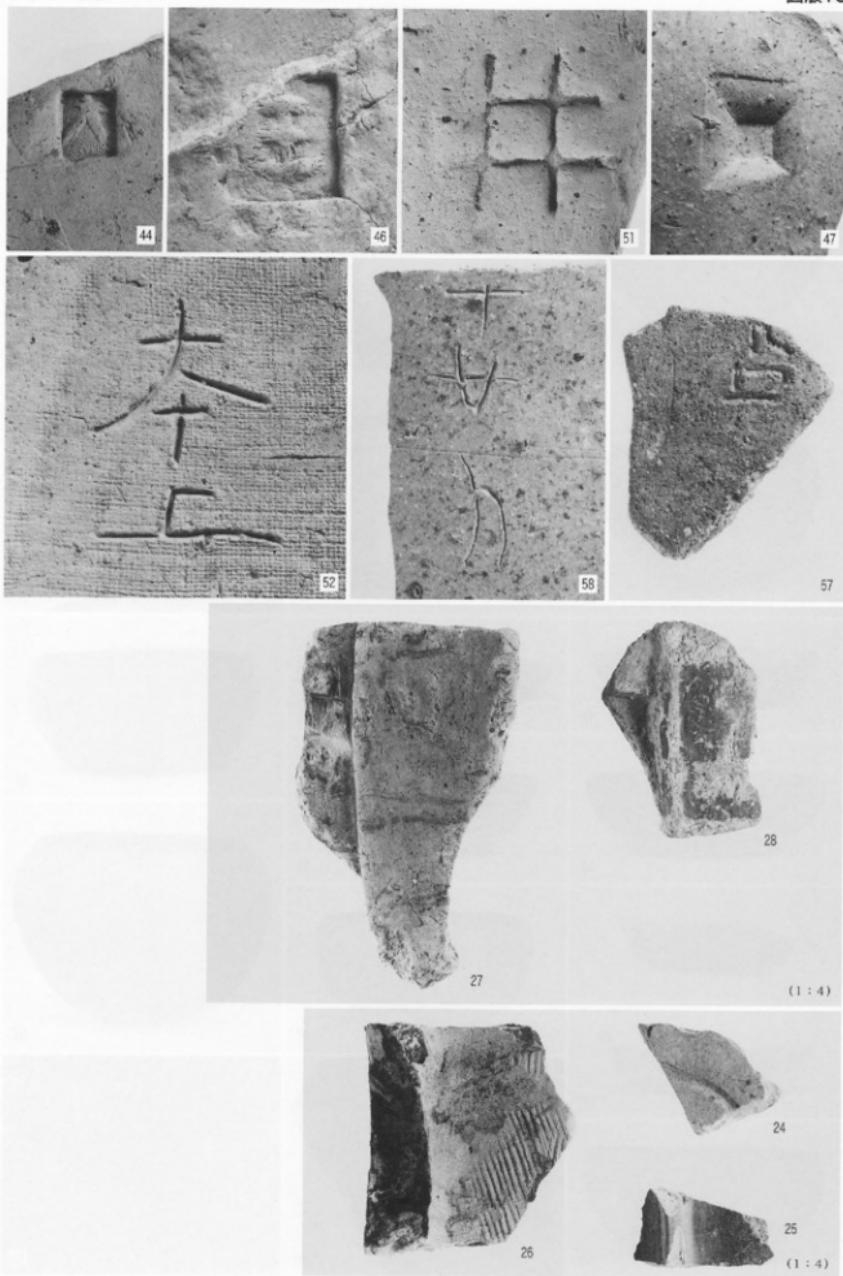
鬼瓦II類a

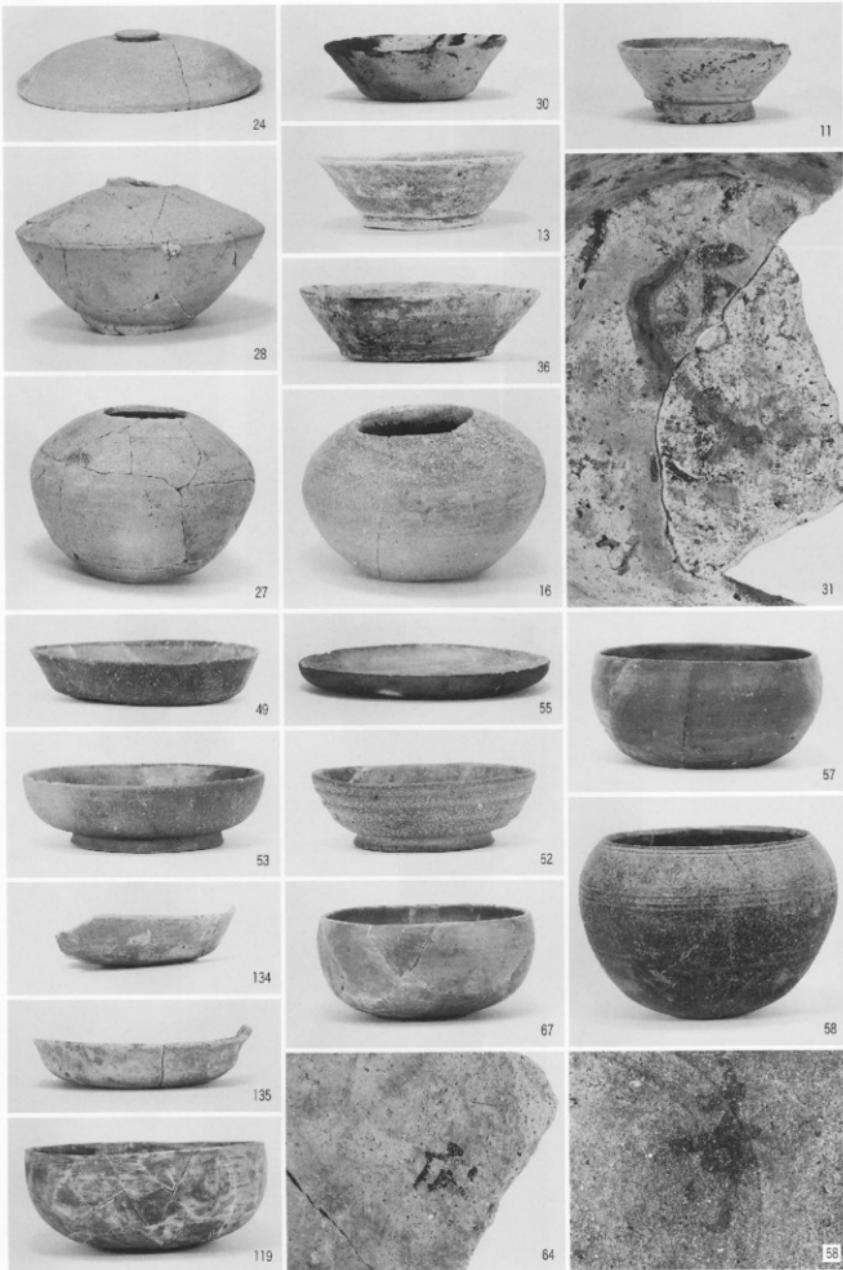


31

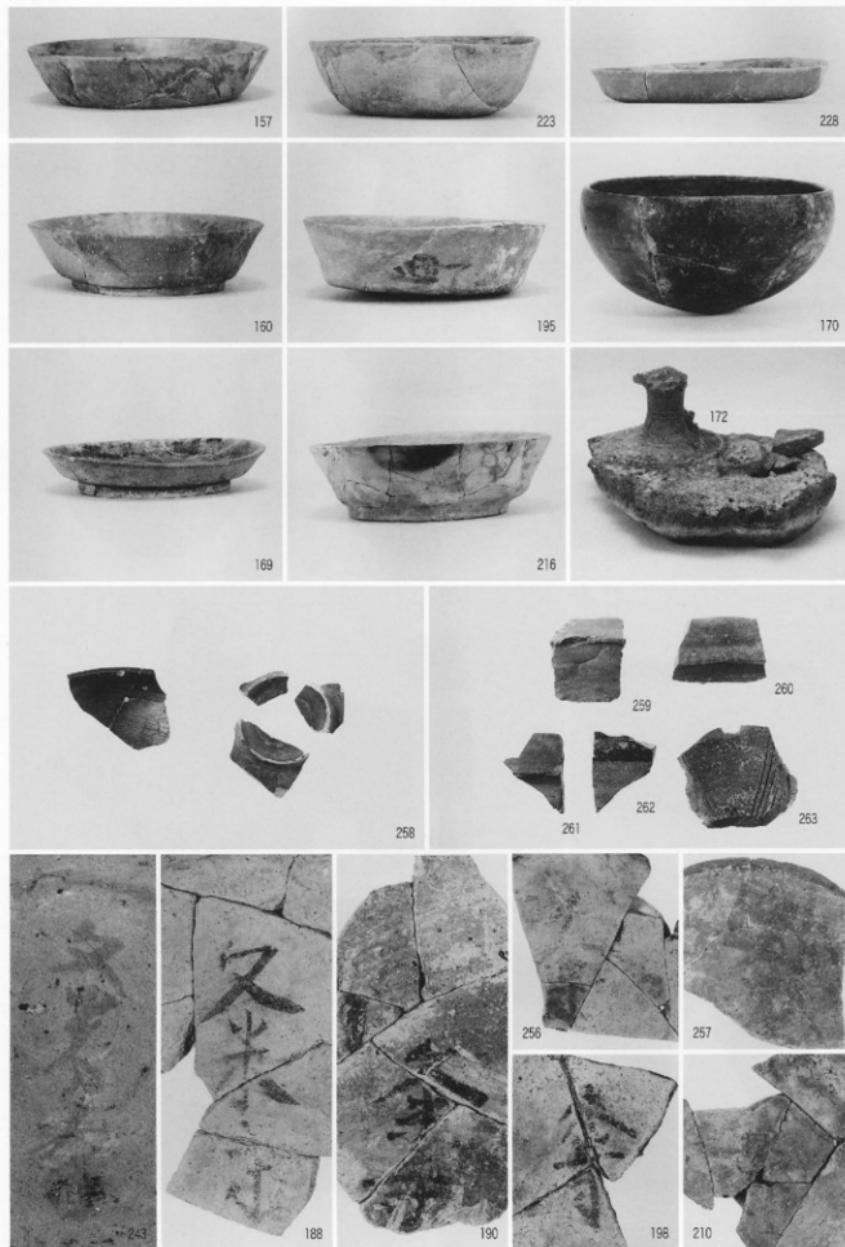
(1 : 3)

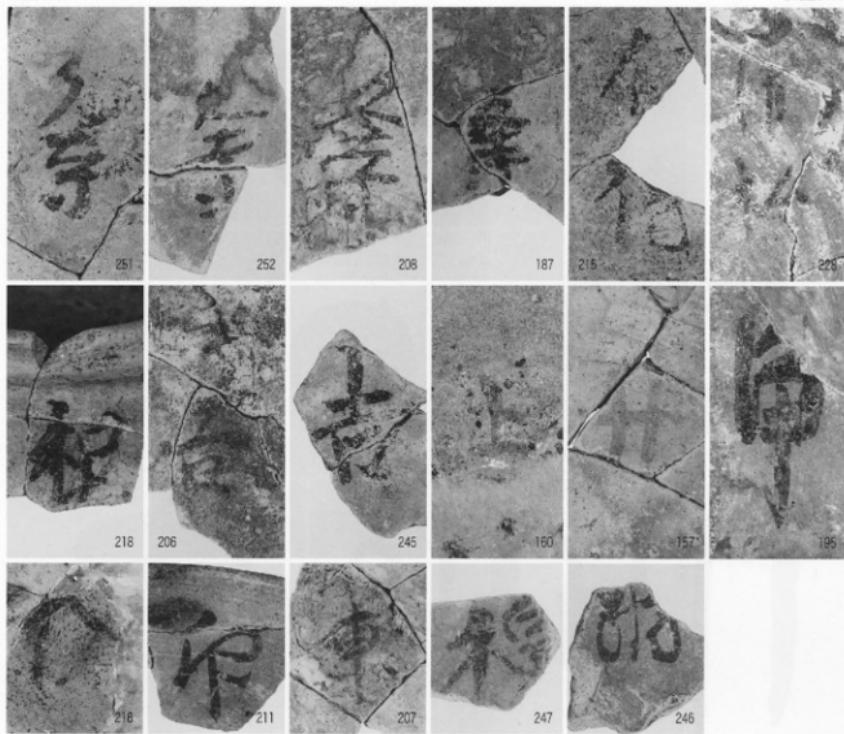
30

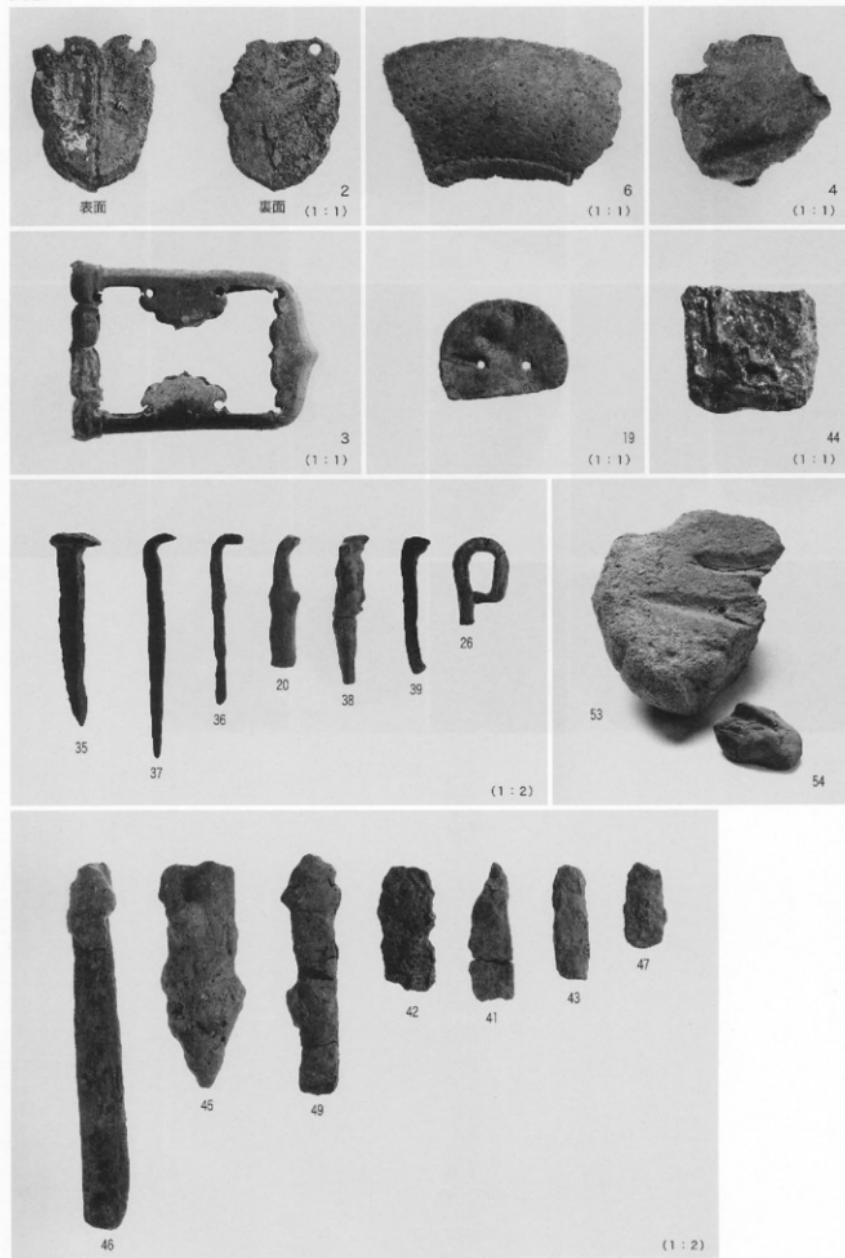


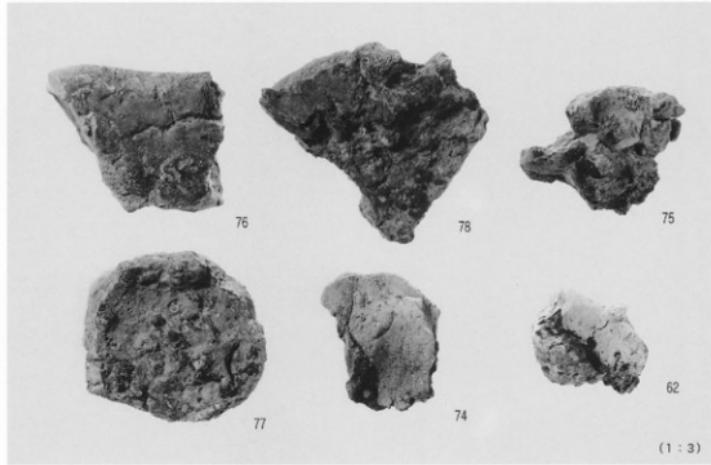
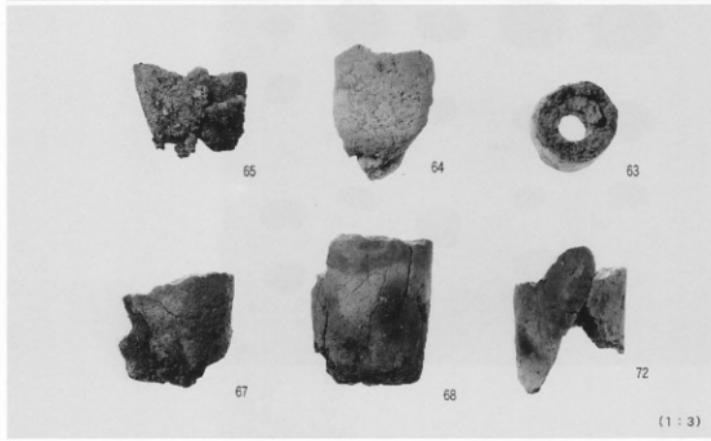
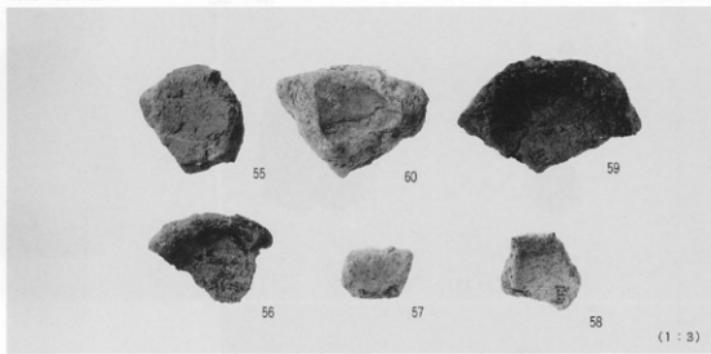






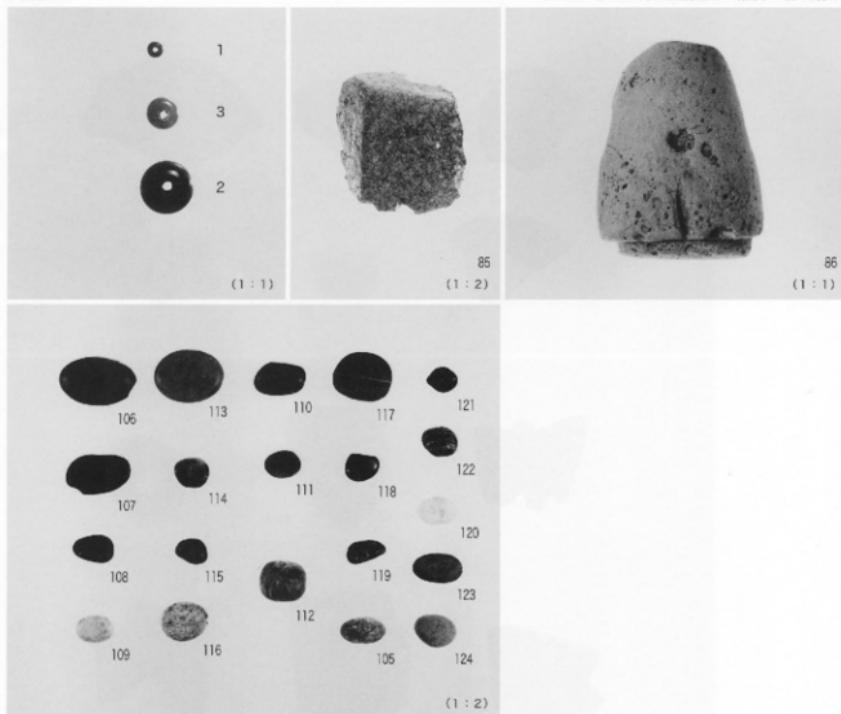


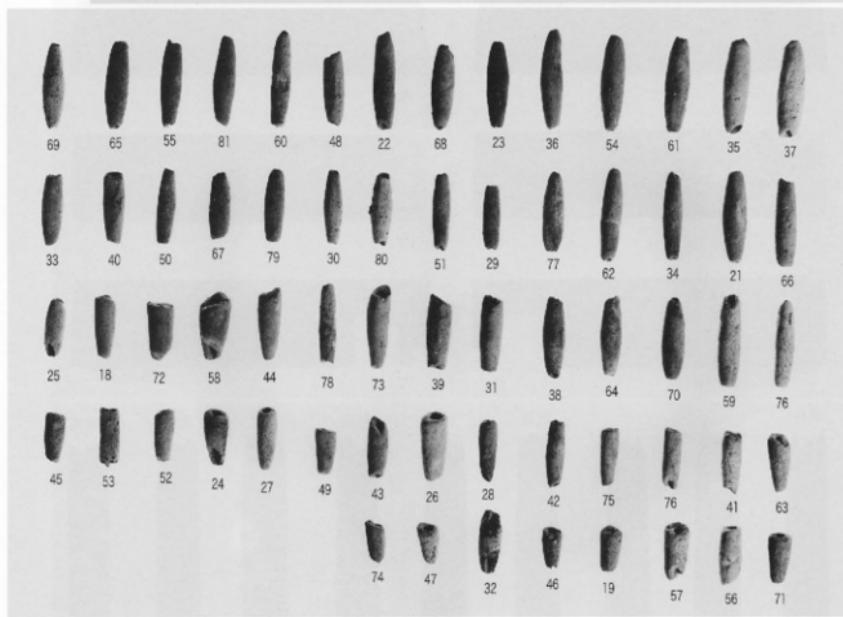
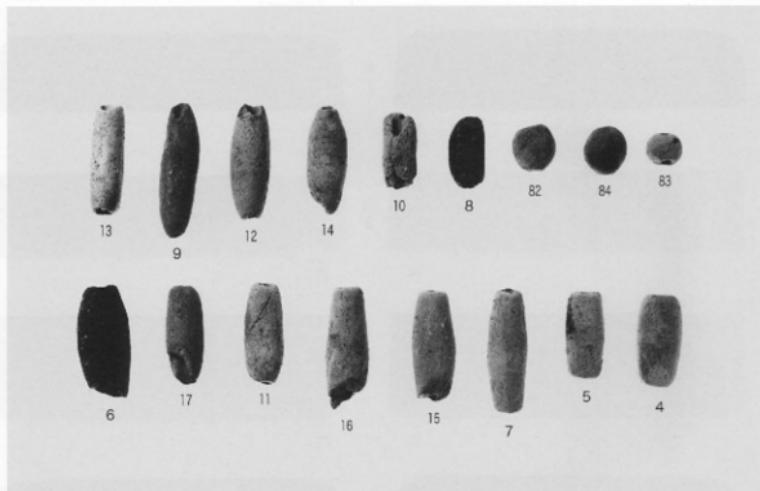




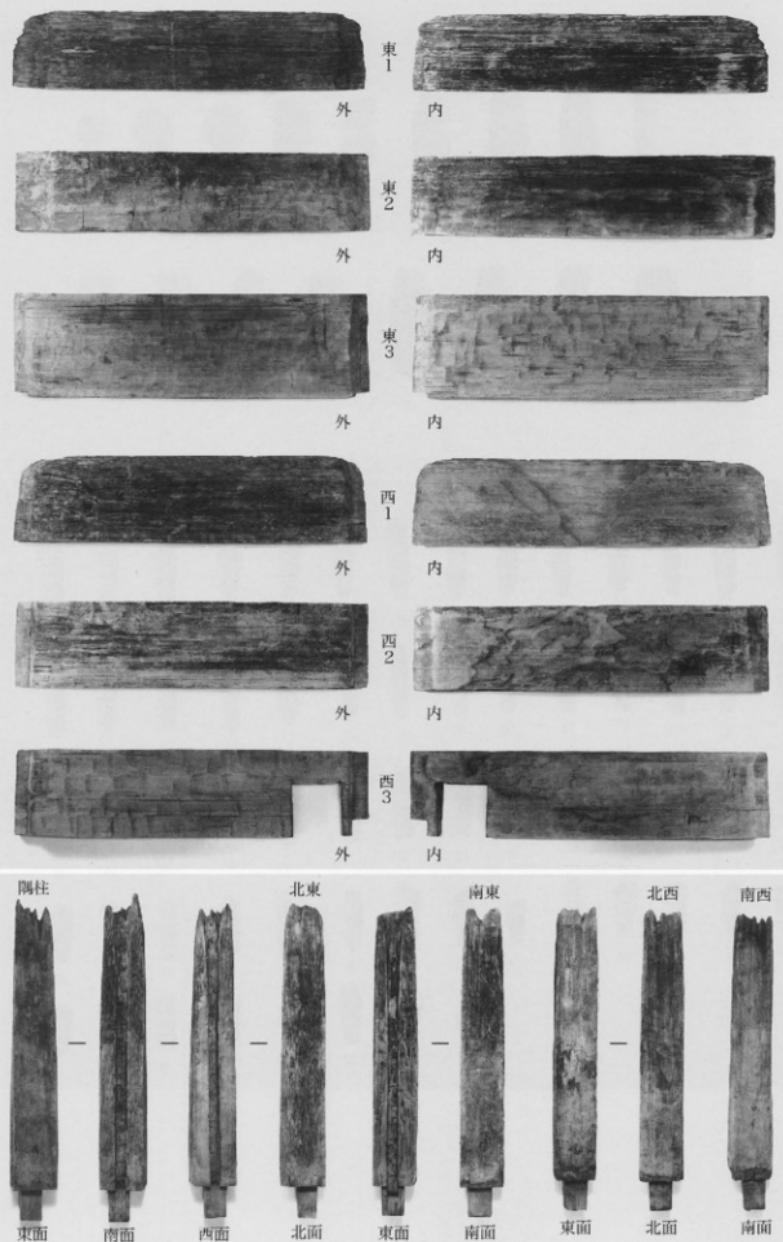
図版22

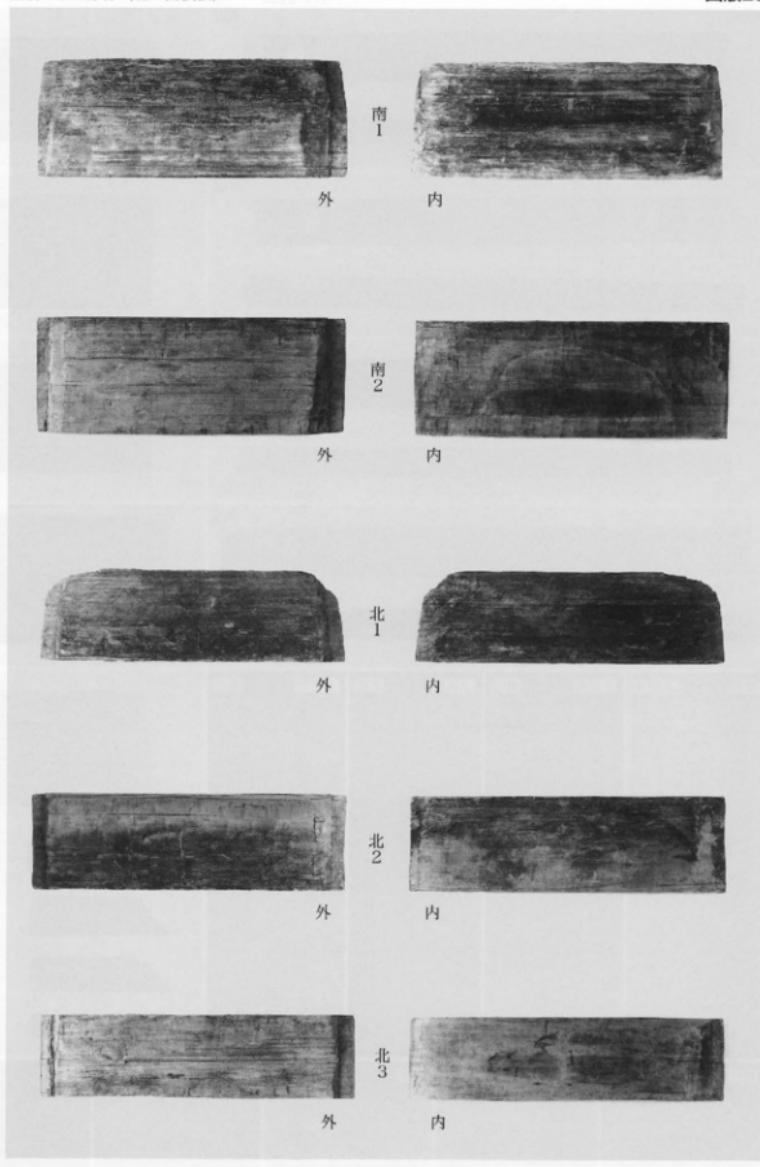
ガラス小玉・不明土製品・椎衡・碁石様石





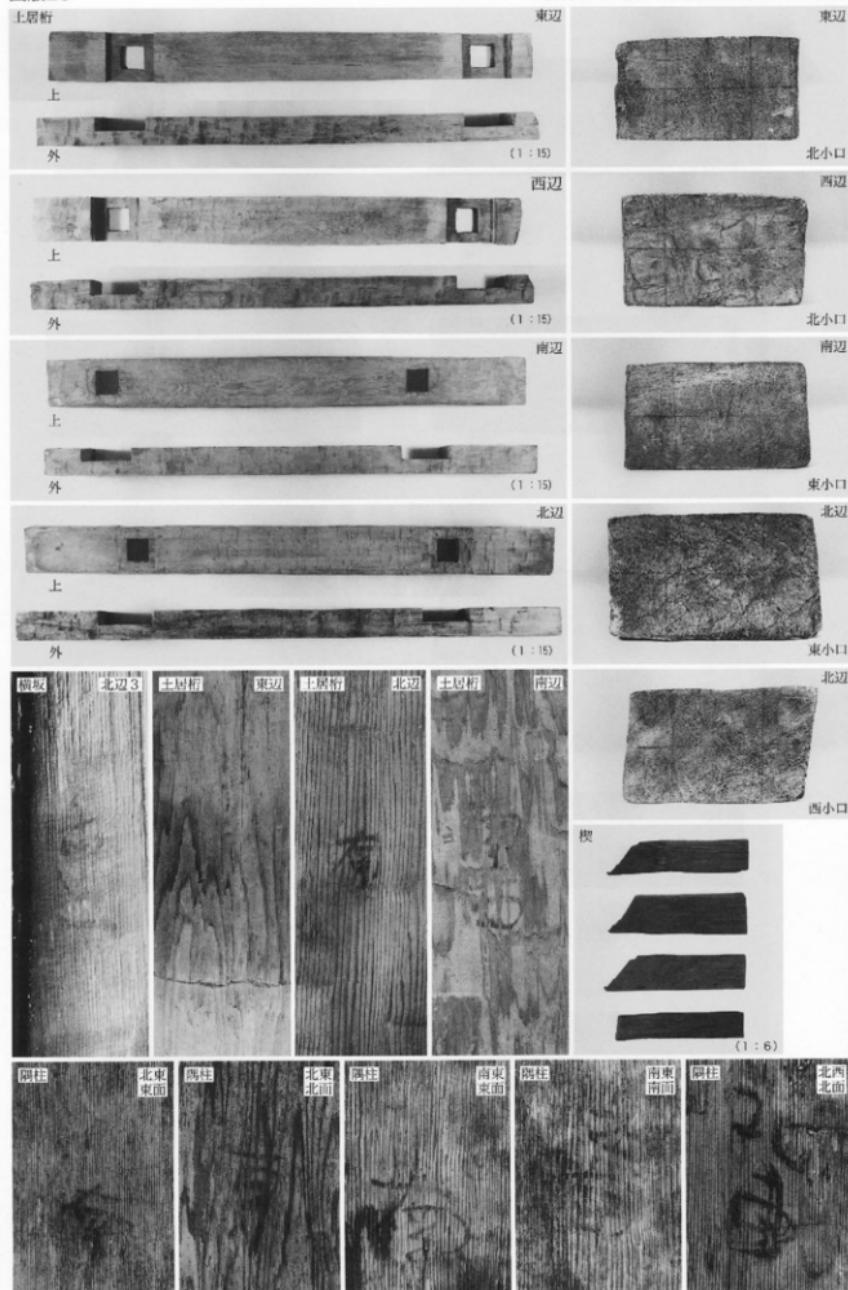
(1 : 2)

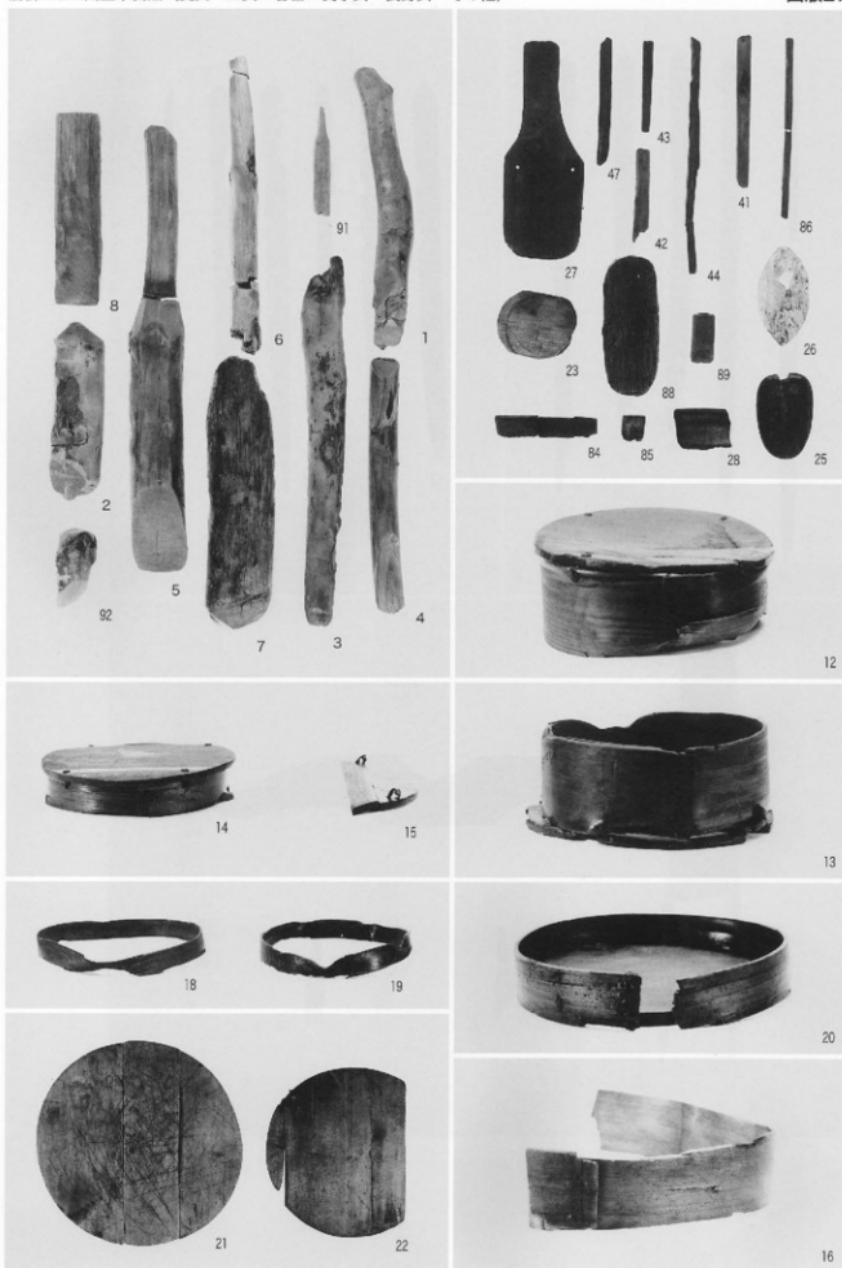




図版26

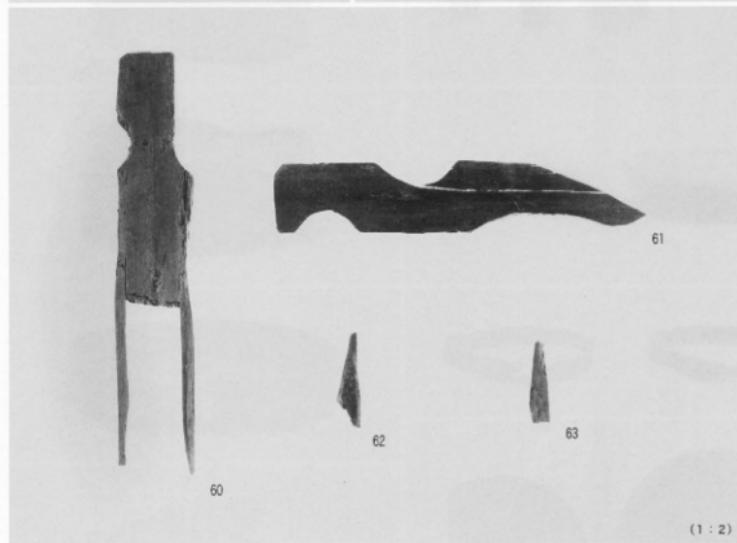
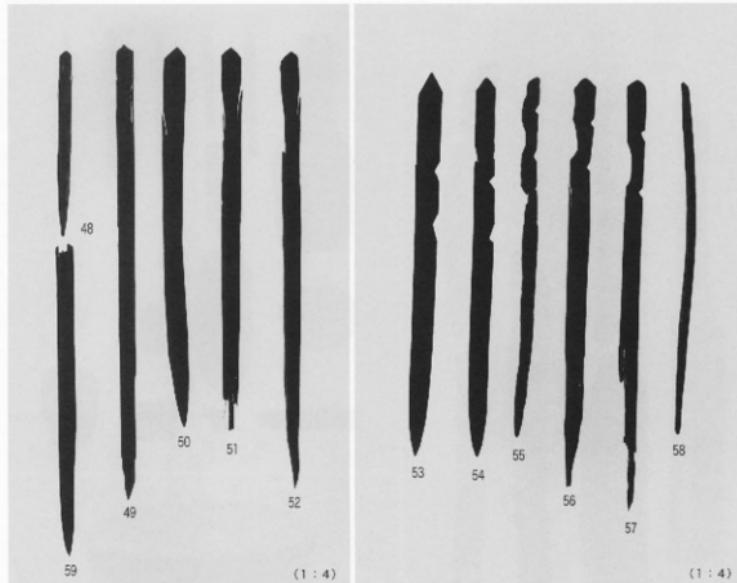
溜橋S E01部材(土居桁・楔)、番付・墨付

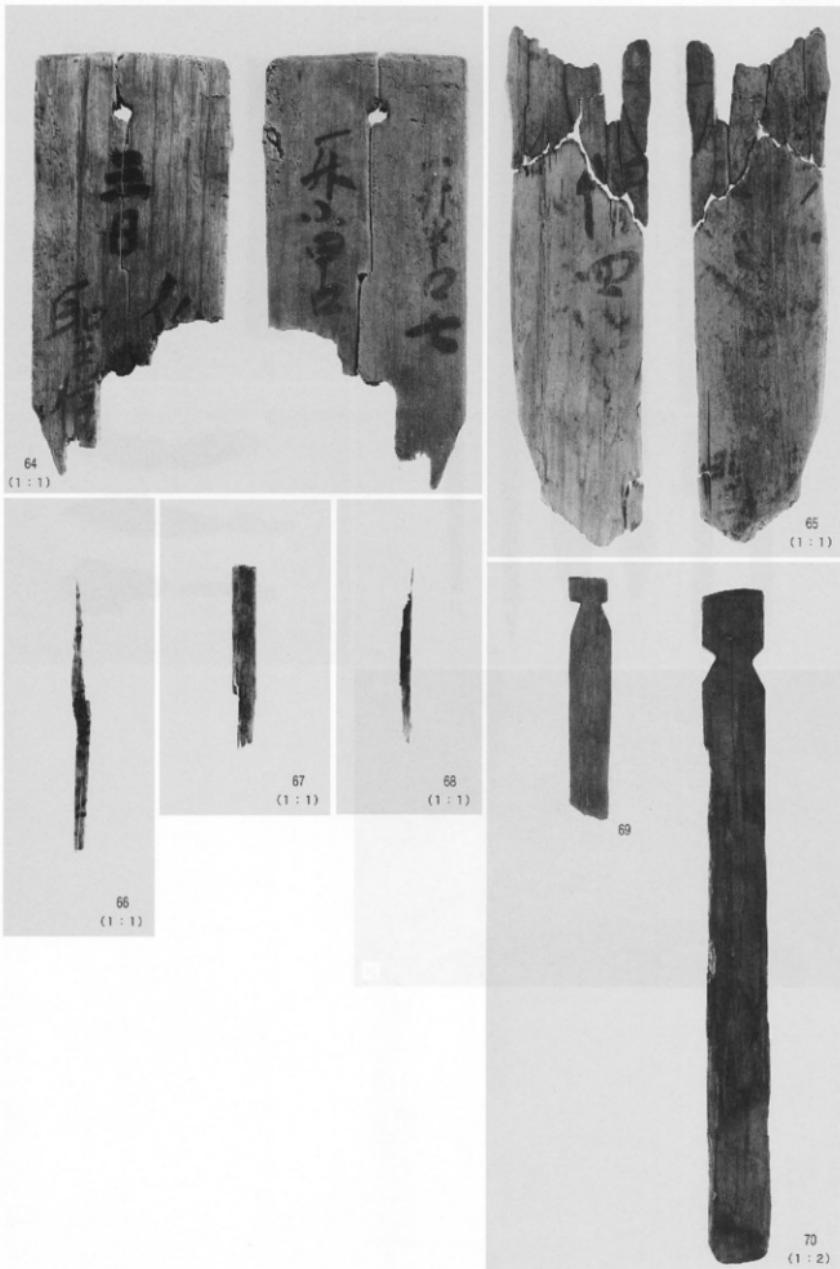


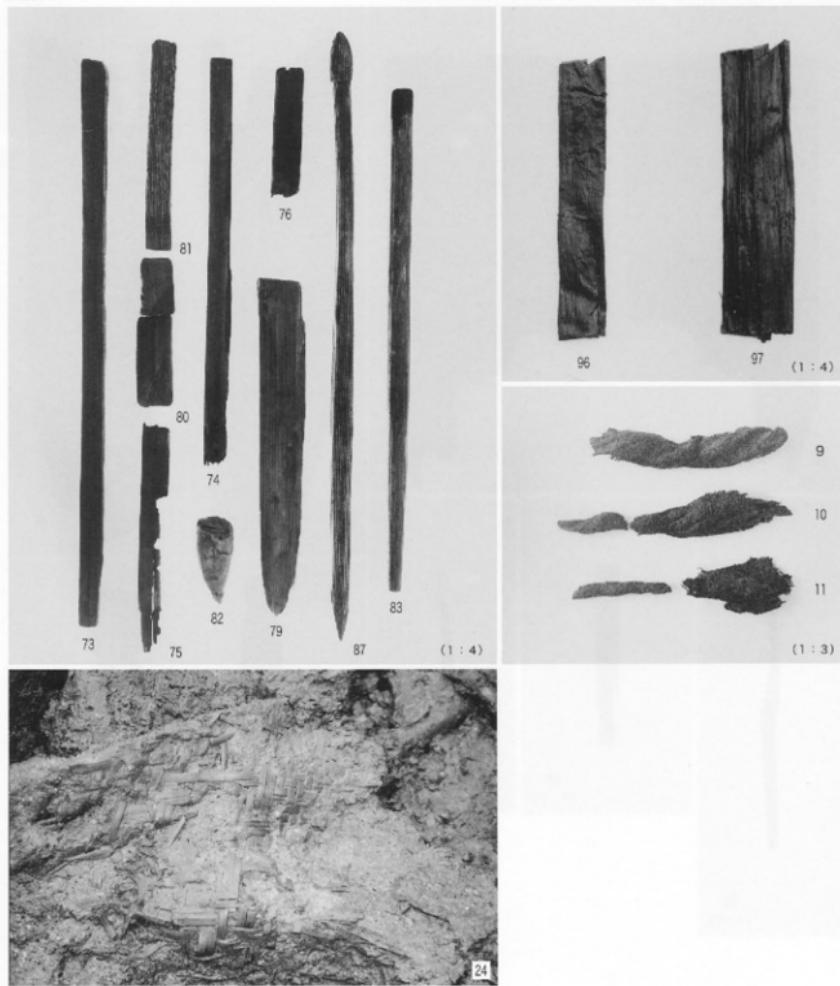


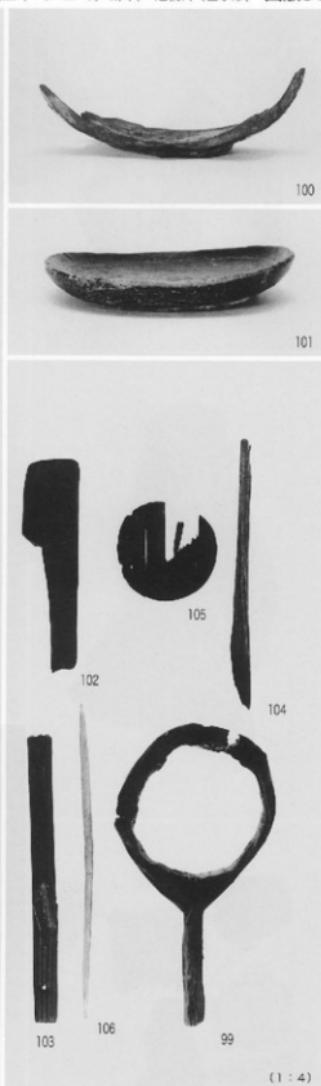
図版28

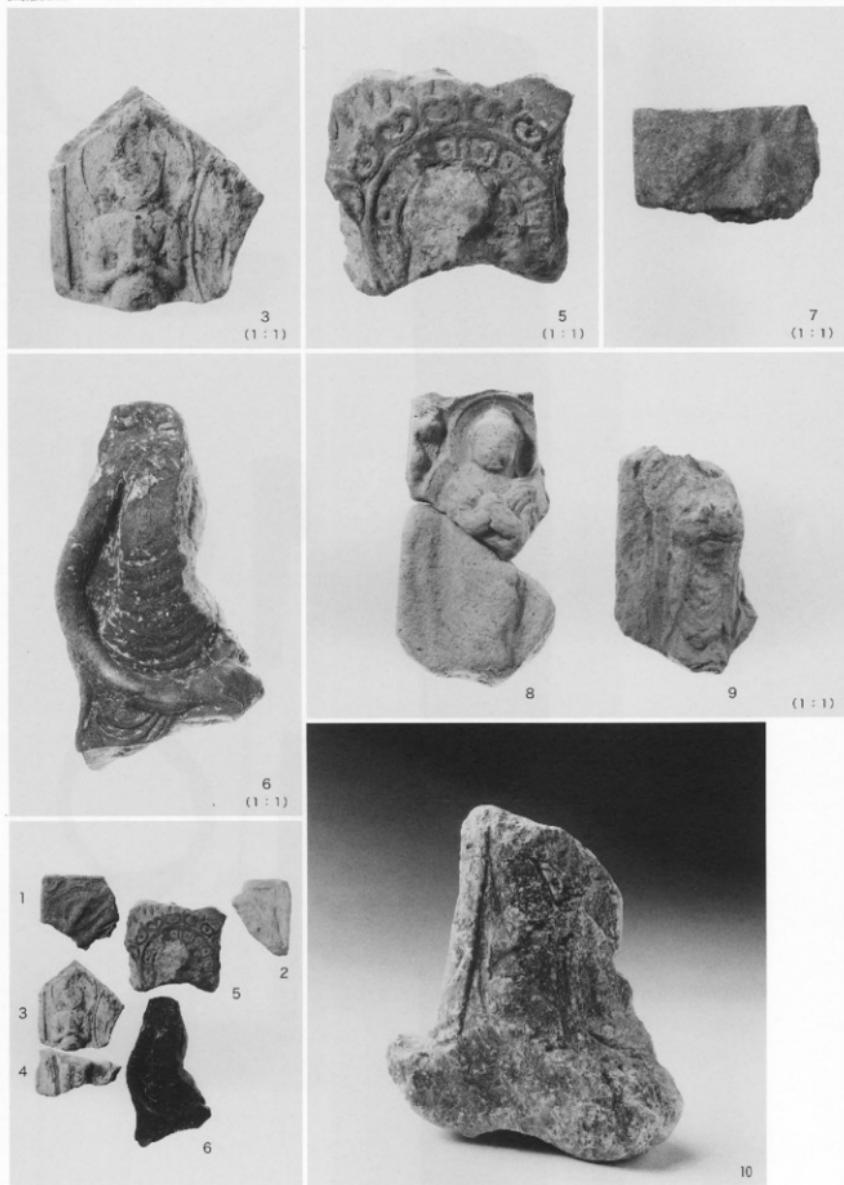
溜柵 S E01出土木製品（祭祀具）

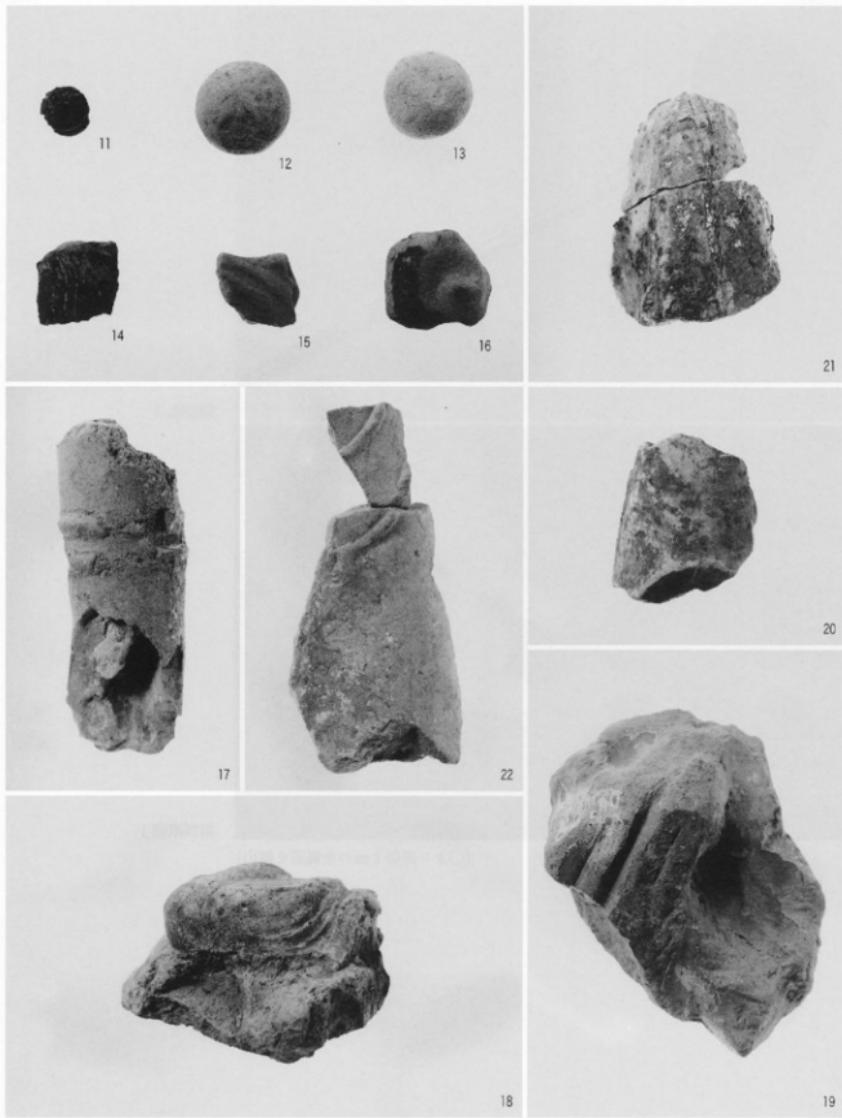




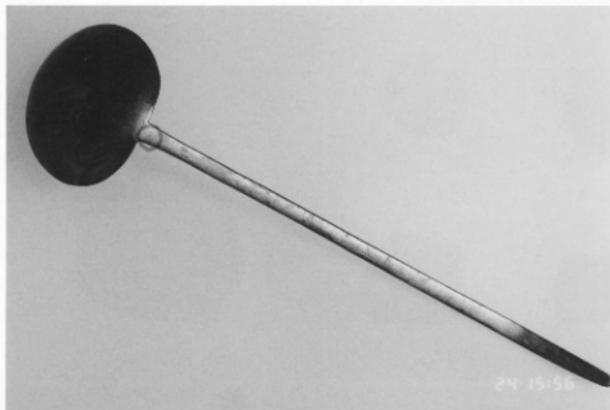








(2 : 3)

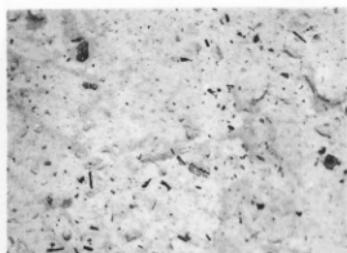


銅製匙5

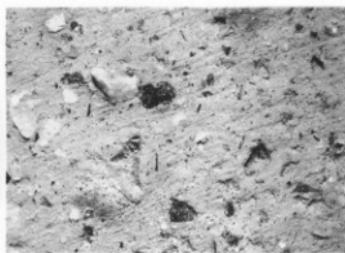


銅製獸頭1

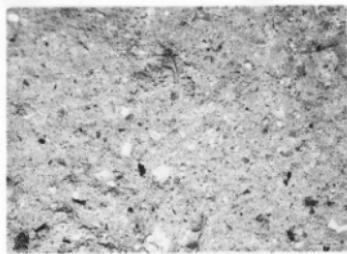
(○より直径 1 mm の金属面を露出)



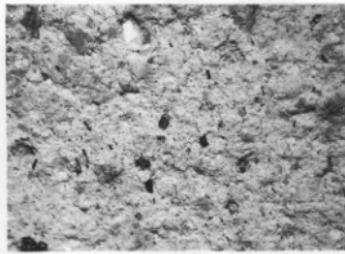
1. 試料Na30 軒丸VII類 (砂粒1類)



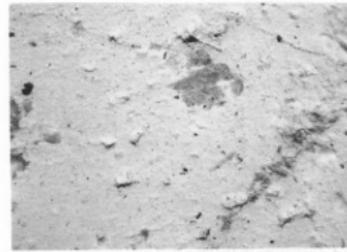
2. 試料Na62 軒平I類 (砂粒1類)



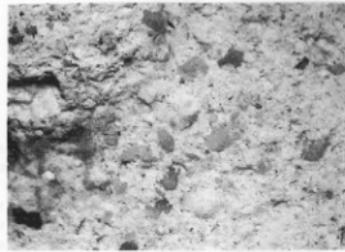
3. 試料Na42 軒丸XIa類 (砂粒2類)



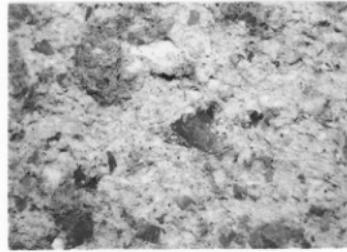
4. 試料Na73 軒平IV類 (砂粒2類)



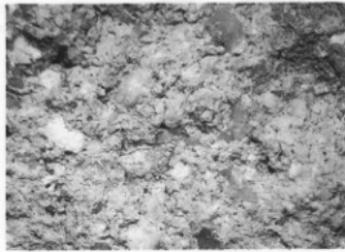
5. 試料Na10 軒丸III類 (砂粒3類)



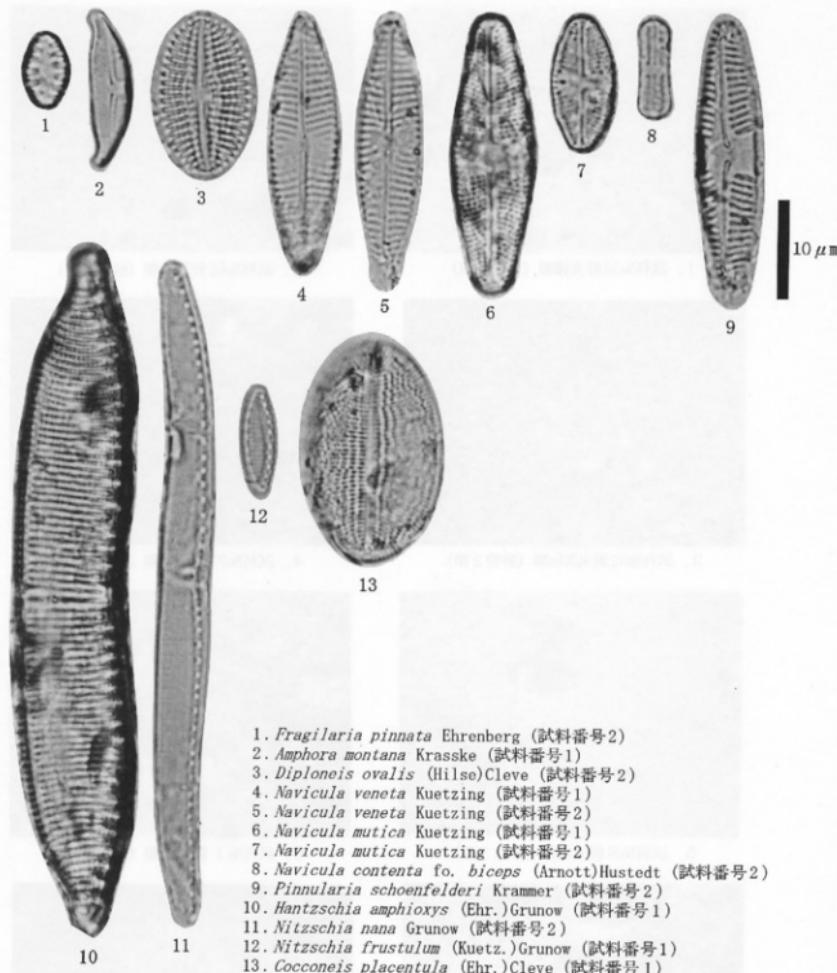
6. 試料Na1 軒平I類 (砂粒4類)



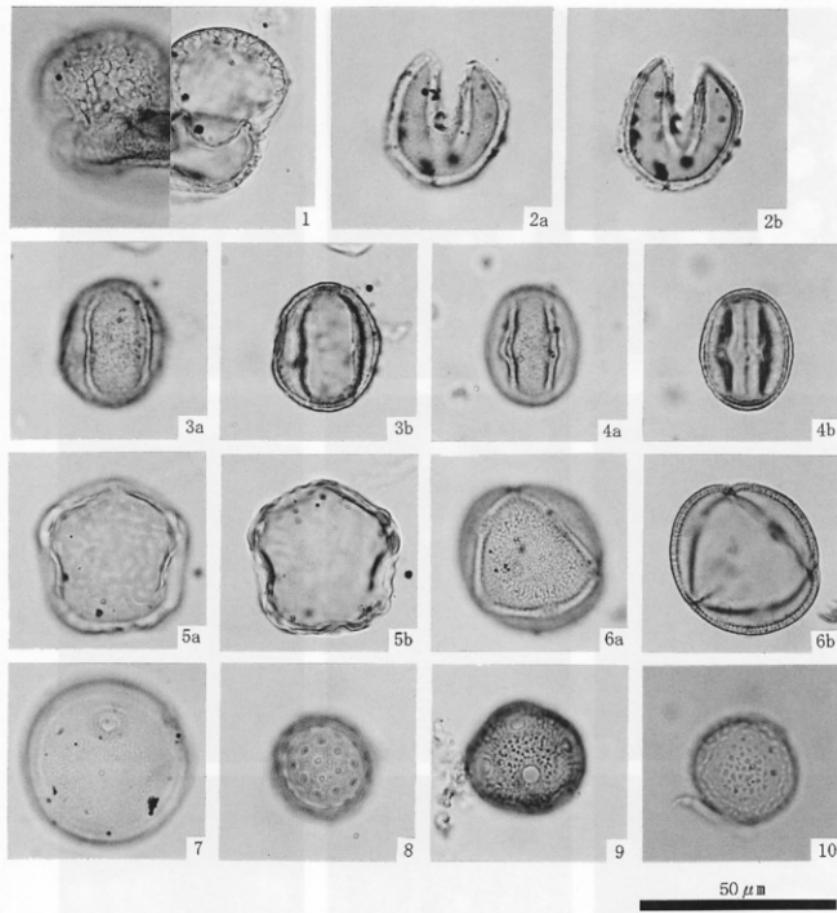
7. 試料Na94 平瓦 (砂粒4類)



8. 試料Na85 平瓦 (砂粒5類)

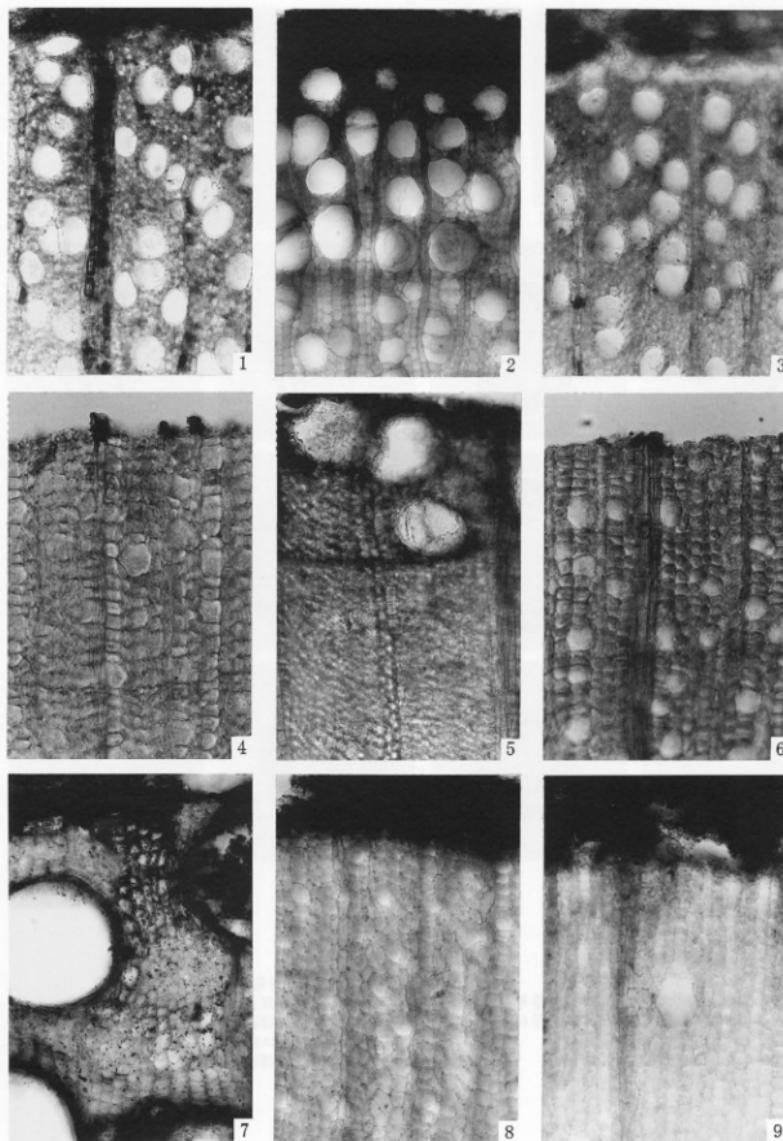


1. *Fragilaria pinnata* Ehrenberg (試料番号2)
2. *Amphora montana* Krasske (試料番号1)
3. *Diploneis ovalis* (Hilse) Cleve (試料番号2)
4. *Navicula veneta* Kuetzing (試料番号1)
5. *Navicula veneta* Kuetzing (試料番号2)
6. *Navicula mutica* Kuetzing (試料番号1)
7. *Navicula mutica* Kuetzing (試料番号2)
8. *Navicula contenta* fo. *biceps* (Arnold) Hustedt (試料番号2)
9. *Pinnularia schoenfelderi* Krammer (試料番号2)
10. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (試料番号1)
11. *Nitzschia nana* Grunow (試料番号2)
12. *Nitzschia frustulum* (Kuetz.) Grunow (試料番号1)
13. *Cocconeis placentula* (Ehr.) Cleve (試料番号1)



1. マツ属(試料番号 6)
3. コナラ属コナラ亜属(試料番号 6)
5. ニレ属一ケヤキ属(試料番号 6)
7. イネ科(試料番号 6)
9. ナデシコ属(試料番号 6)

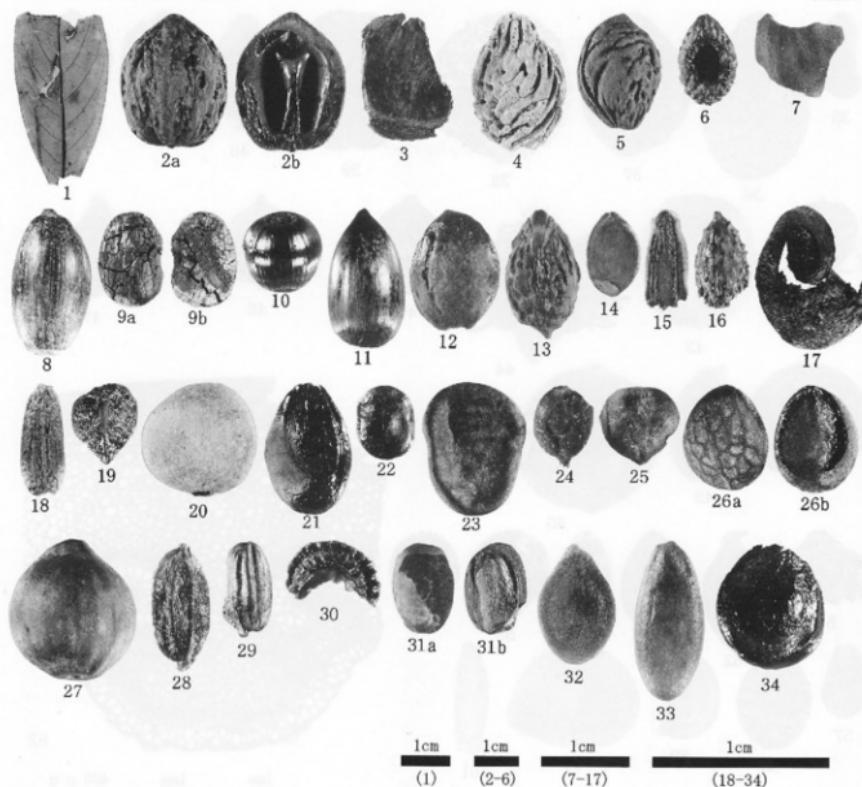
2. スギ属(試料番号 6)
4. コナラ属アカガシ亜属(試料番号 6)
6. ギンギン属(試料番号 6)
8. アカザ科—ヒュ科(試料番号 6)
10. オオバコ属(試料番号 6)

100 μm

1. サクラ属 (試料番号11)
4. サカキ (試料番号21)
7. フジ (試料番号32)

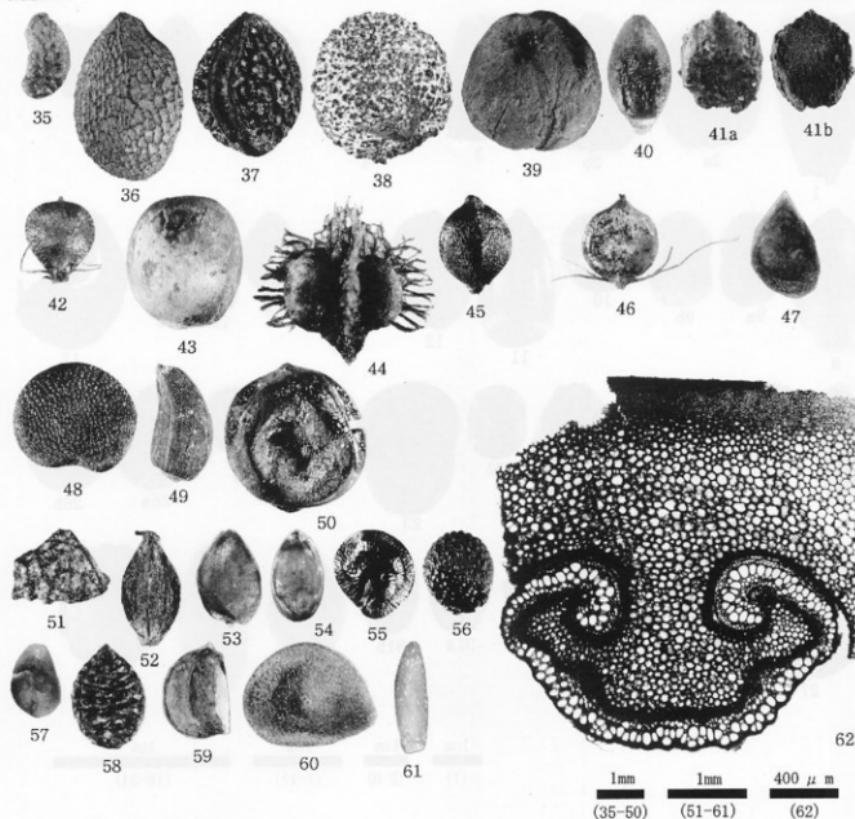
2. ヤナギ属 (試料番号13)
5. ヤマグワ (試料番号24)
8. サカキ (試料番号35)

3. サクラ属 (試料番号16)
6. ヒサカキ (試料番号25)
9. クスノキ科 (試料番号46)



1. プナ科(葉)(試料番号 602)
3. クリ(試料番号 482)
5. モモ(試料番号 137)
7. イヌガヤ(試料番号 453~456)
9. コナラ属(子葉)(試料番号 582・583)
11. スグジイ(試料番号 434~450)
13. ナツメ(試料番号 400~433)
15. ヒヨウタン(試料番号 568)
17. シグ頬(試料番号 591)
19. ケヤキ(試料番号 607)
21. アケビ属(試料番号 607)
23. ハゼノキ?(試料番号 607)
25. ノブドウ(試料番号 606)
27. ジュズダマ(試料番号 370~372)
29. イネ(試料番号 606)
31. マメ類(試料番号 606)
33. メロン類(試料番号 492~523)

2. オニグルミ(試料番号 380~383)
4. モモ(試料番号 51)
6. モモ(食痕あり)(試料番号 90)
8. コナラ属(試料番号 585・586)
10. アガシ亞属(試料番号 452)
12. スモモ(試料番号 203~252)
14. エゴノキ属(試料番号 375~377)
16. オナモミ属(試料番号 397・398)
18. クマシデ(試料番号 606)
20. ムクノキ(試料番号 378)
22. ウルシ属(試料番号 606)
24. ブドウ属(試料番号 606)
26. クサギ(試料番号 606)
28. イネ(試料番号 573~578)
30. ツヅラフジ(試料番号 606)
32. スズメウリ(試料番号 606)
34. 不明 A(試料番号 374)



35. キイチゴ属(試料番号1)
 37. カラスザンショウウ属(試料番号606)
 39. クマノミズキ(試料番号606)
 41. アワヒエ(試料番号604)
 43. アサ(試料番号606)
 45. タデ属(試料番号1)
 47. ウマノアシガタ近似種(試料番号1)
 49. メナモミ属(試料番号606)
 51. ミカン科(試料番号1)
 53. スグ属(試料番号1)
 55. アカザ科-ヒニ科(試料番号1)
 57. キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属(試料番号1)
 59. チドメグサ属(試料番号1)
 61. キク科(試料番号606)

36. サンショウウ(試料番号606)
 38. アカメガシワ(試料番号606)
 40. イネ科(試料番号606)
 42. ホタルイ属(試料番号606)
 44. ギシギシ属(試料番号606)
 46. サナエタデ近似種(試料番号606)
 48. ナス科(試料番号606)
 50. 不明B(試料番号604)
 52. カヤツリグサ科(試料番号1)
 54. コナギ(試料番号1)
 56. ナデシコ科(試料番号1)
 58. カタバミ属(試料番号1)
 60. ナス科(試料番号1)
 62. ウラジロ?(試料番号594~601)

史跡 大御堂廃寺跡発掘調査報告書

平成13年3月19日 印刷

平成13年3月19日 発行

編集 倉吉市教育委員会
発行

印刷 製本 山本印刷株式会社
